

〒371 前橋市上泉町664-4  
前橋市教育委員会管理部文化財保護室  
TEL 0272-31-9531

昭和59年度調査概要

# 柳久保遺跡群 I

59E1

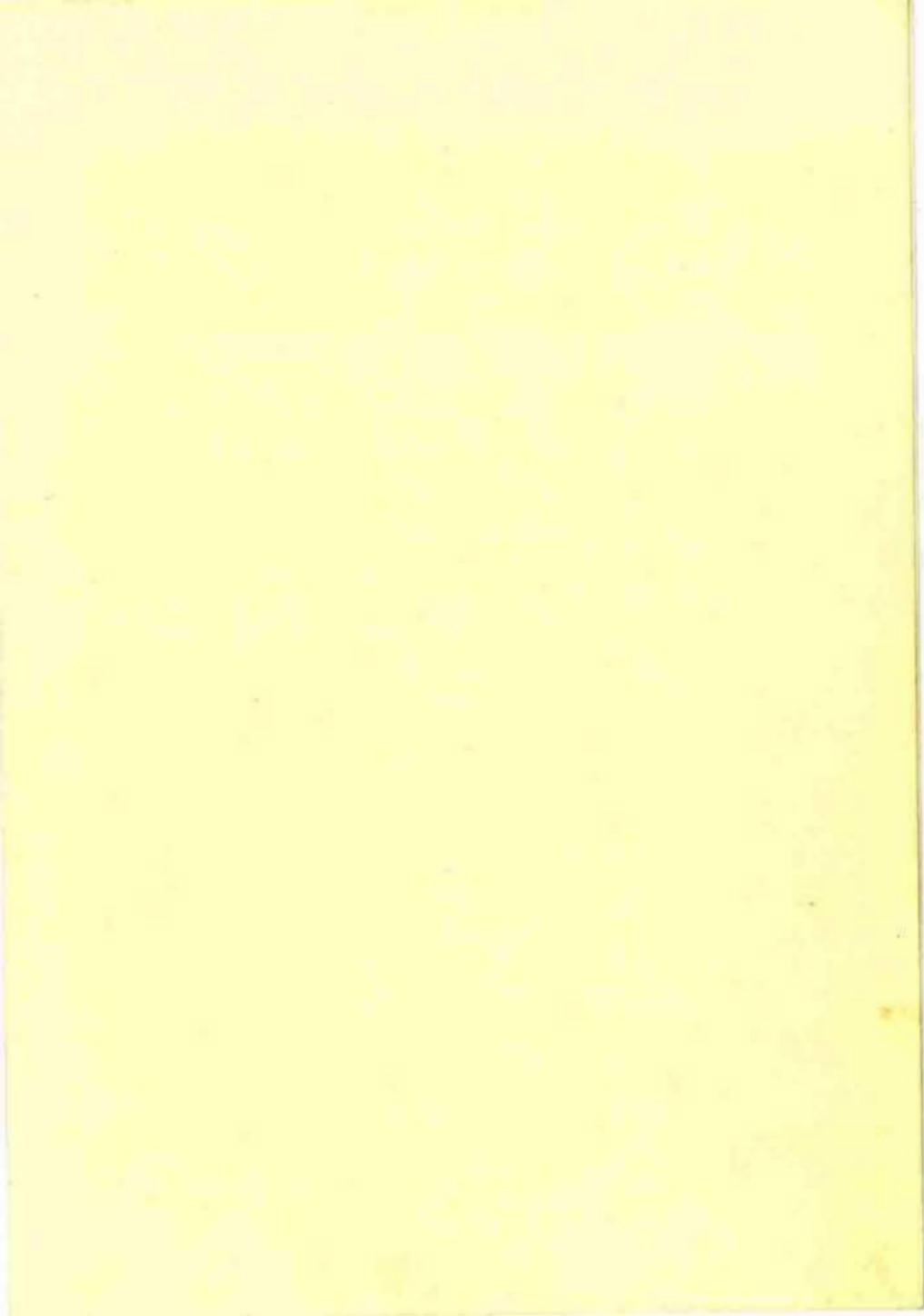
59E2

59E3

1985

前橋市埋蔵文化財発掘調査団









1. 赤城山と柳久保遺跡群



2. 柳久保水田址出土の漆器椀



## はじめに

前橋市は群馬県のほぼ中央に位置し、関東平野を一望できる雄大な赤城山を背に、坂東太郎で名高い利根川の恵みに接した豊かな自然と古の人々が織りなした特色ある歴史文化を形づくってまいりました。

遠い古墳文化の時代には東日本の中心とも言える文化を築き、続く律令政治の時代に入ると、元總社に上野国府が置かれ、山王庵寺、国分二寺が立ち並び一大政治文化圏が形づくられ、中・近世には、家康に「関東の華」と言われた前橋城とその城下町、近代以後には生糸の一大生産地として繁栄を生み出しました。

市の東部にある城南地区は、特に文化財の多い地域であり、大室を中心とした地域は市内でも最大規模の古墳群が分布しています。この中で古くから著名な前二子、中二子、後二子の三前方後円墳は、学問研究上からも貴重なほか、保存状態も極めて良好なため、今後、十分に検討をし整備、活用していく必要があります。

このたび前橋工業団地造成組合が、城南地区の開発計画に係る協議を教育委員会に申し入れ、関係諸方面的御協力により発掘調査の運びとなりました。調査の結果、今から二万年前の先土器時代の人々が生活の場としており、縄文時代や古墳時代には多くの人々の生活が営なまれていた事が明らかになりました。また、平安時代の墨画のある土器は、往時の生活を知る上で極めて貴重な事例となりました。

現状のまでの遺跡保存は無理でしたが、今後、調査にともなう幾多の遺物等や記録資料をもとに検討を加え、展示活動を中心にして、社会教育、学校教育の場に充分活用していく所存であります。

最後に発掘調査・遺物整理を円滑に進められたのは、前橋工業団地造成組合をはじめとする多くの関係機関や各方面的御配慮の結果といえます。また、本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、考古学研究の参考になればさいわいと存じます。

1985年3月20日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

團長 奈良三郎

## 例　　言

- この報告書は、前橋工業団地造成組合（管理者 清水一郎）が造成する城南住宅団地予定地（前橋市荒子・荒口町）における発掘調査に関するものである。
- 調査主体は前橋市埋蔵文化財発掘調査団であり、前原照子、浜田博一、前原 豊が担当した。また、調査の実施にあたっては前橋工業団地造成組合に費用及び協力を得た。
- 本書の作成は、調査担当者三名があたり、全体の討議をもとに分担執筆し、文責を文末に記した。なお土器観察表は福田瑞穂が作成した。
- 本書の編集は上記の三名があたった。また遺構・遺物の挿図作成にあたっては株式会社測設の協力を得た。遺構写真は担当があたった他、航空写真は武田 勉氏によるものである。遺物写真是浜田博一が担当した。
- V章については元興寺文化財研究所 北野信彦氏、国立群馬工業高等専門学校 吳屋充庸氏、奈良大学 水野正好氏、群馬県立前橋第二高等学校 宮崎重雄氏から玉稿を賜わった。
- 発掘から報告書作成にいたる過程で、次の方々から御教示をいただきました。ここにお礼を申しあげます。（敬称略）

相川之英	荒川浩和	石川正之助	井上唯雄	岩本圭介	大江正行
大塚昌彦	加藤 優	川島雅人	北野信彦	吳屋充庸	小島敦子
小島純一	古郡正志	坂爪久純	新保一美	菅原正明	大工原 豊
土肥 孝	中東耕志	平川 南	松村和男	間庭 稔	水田 稔
水野正好	宮崎重雄	森山公一	村山好文	安田龍太郎	山下歳信

## 凡　　例

- 本遺跡の略称は次の通りである。  
E 1…下鶴谷遺跡・E 2…柳久保遺跡・E 6…柳久保水田址遺跡
- 各遺構の略称は次の通りである。  
H…土師器使用の住居址・D…土坑・W…溝跡・X…地割れ
- 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。  
遺構 住居址・土坑… $\frac{1}{50}$ 、炉址… $\frac{1}{50}$ 、溝・地割れ… $\frac{1}{50}$ 、全体図… $\frac{1}{50}$ 、 $\frac{1}{40}$   
遺物 土器・石器… $\frac{1}{5}$ 、一部の石器… $\frac{1}{5}$ 、一部の土器… $\frac{1}{5}$
- スクリーントーンの使用は次の通りである。  
遺構平面図 焼土…点、炭化物…斑  
遺物実測図 須恵器断面…黒塗、内墨処理…細かい斑、繊維含有土器断面…点

## 目 次

### はじめに

I 調査に至る経緯	1
-----------	---

### II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	4

### III 調査の経過

1 調査方針	8
2 調査経過	9

### IV 遺跡の調査

1 下鶴谷遺跡	12
2 柳久保遺跡	45
3 柳久保水田址遺跡	82

### V 自然科学的研究及び墨画土器の考察

1 柳久保水田址出土のブタの焼骨と馬歯	92
2 柳久保水田址出土墨画土器の周辺	94
3 柳久保水田址出土墨画土器の 赤外線テレビカメラによる観察	96
4 柳久保水田址出土の漆器椀の樹種について	99

### VI まとめ

1 下鶴谷遺跡	100
2 柳久保遺跡	103
3 柳久保水田址	105

## 図 版

口絵 1 赤城山と柳久保遺跡群	口絵 2 柳久保水田址出土の漆器椀
PL. 1 調査前の柳久保遺跡群近景	PL. 2 下鶴谷遺跡
3 下鶴谷遺跡	4 柳久保遺跡
5 柳久保遺跡	6 柳久保遺跡 H-1号住居址
7 柳久保遺跡 H-2号住居址	8 柳久保遺跡 H-3号住居址
9 柳久保遺跡 H-4号住居址	10 柳久保遺跡 H-5号住居址
11 柳久保遺跡	12 柳久保水田址
13 柳久保水田址	14 柳久保水田址
15 下鶴谷遺跡縄文土器	16 下鶴谷遺跡縄文土器
17 下鶴谷遺跡石器	18 下鶴谷遺跡石器
19 柳久保遺跡住居遺物	20 柳久保遺跡住居遺物
21 柳久保遺跡住居遺物	22 柳久保遺跡住居・集中区遺物
23 柳久保水田址遺物	24 柳久保水田址遺物

## 挿 図

挿図	頁	挿図	頁
fig. 1 柳久保遺跡群の位置	VI	fig. 2 前橋市域の地形的区分	1
3 柳久保遺跡群の周辺地形図	2・3	4 柳久保遺跡群と周辺遺跡	6
5 グリッド設定図	9	6 下鶴谷遺跡全体図	13
7 尖頭器	14	8 集石	14
9 1・2群土器	16	10 2群土器	18
11 3群土器	19	12 4群・その他の土器	20
13 4群土器	22	14 4群土器	23
15 縄文時代の石器	24	16 縄文時代の石器	25
17 縄文時代の石器	26	18 縄文時代の石器	28
19 縄文時代の石器	29	20 縄文時代の石器	30
21 縄文時代の石器	32	22 縄文時代の石器	33
23 縄文時代の石器	34	24 縄文時代の石器	36
25 包含層の地形と遺物分布図	37	26 縄文土器の時期別分布図	38
27 縄文土器の時期別分布図	39	28 縄文土器の時期別分布図	40
29 器種別分布図	41	30 器種別分布図	42
31 器種別分布図	43	32 石器接合図	44

fig. 33 柳久保遺跡全体図	46	fig. 34 先土器時代の剝片と出土地点	47
35 押型文土器	47	36 三角錐形石器と石鐵	47
37 H-1号住居址	48	38 H-1号住居址炉址	49
39 H-1号住居址土器接合図	50	40 H-1号住居址土器接合図	51
41 H-1号住居址出土遺物	52	42 H-2号住居址	53
43 H-2号住居址炉址	54	44 H-2号住居址土器接合図	54
45 H-2号住居址出土遺物	55	46 H-3号住居址	56
47 H-3号住居址	57	48 H-3号住居址土器接合図	58
49 H-3号住居址出土遺物	59	50 H-3号住居址出土遺物	60
51 H-4号住居址炉址	61	52 H-4号住居址	62
53 H-4号住居址土器接合図	64	54 H-4号住居址土器接合図	65
55 H-4号住居址出土遺物	66	56 H-4号住居址出土遺物	67
57 H-5号住居址炉址	68	58 H-5号住居址	69
59 H-5号住居址土器接合図	70	60 H-5号住居址土器接合図	71
61 H-5号住居址出土遺物	73	62 H-5号住居址出土遺物	74
63 遺物集中区	75	64 集中区出土遺物	76
65 集中区出土遺物	77	66 土坑	78
67 D-3号土坑出土鉄器	79	68 W-1・2号溝	80
69 地割れ	81	70 柳久保水田址全体図	83
71 W-1・2号溝の土層断面	84	72 水田址出土の石器	85
73 平安水田址特殊遺物の分布	87	74 墨画土器	88
75 水田址出土遺物	89	76 水田址出土遺物	91
77 占地の変遷	100	78 土器と石器の変遷	101

付図 1 柳久保遺跡群（柳久保遺跡・柳久保水田址・下鶴谷遺跡）全体図

- 2 柳久保遺跡群（柳久保水田址）全体図
- 3 柳久保遺跡群（柳久保水田址）全体図

## 表

	頁		頁
tab. 1 周辺遺跡一覧表	6～8	tab. 2 発掘調査経過表	11
3 繩文土器一覧	15	4 石器一覧	24
5 H-1号住居址ピット計測表	49	6 H-5号住居址ピット計測表	68
7 住居址一覧	103	8 器種構成一覧	105
9 石器計測表	108・109	10 土器観察表	110～115

柳久保遺跡群の位置（九印）



1: 200,000

0 5 10 15 20 千メートル

## I 調査に至る経緯

本遺跡群の名称は、城南住宅団地造成予定地（約20ha）の大部分を占める旧城南村大字荒子小字柳久保の小字名を採用し、柳久保遺跡群とした。したがって、遺跡群の名称は便宜的な造成事業区域に限定して用いているため、今後名称の検討を必要とする。

発掘調査は前橋工業団地造成組合から依頼をされた城南住宅団地予定地の約20haを対象とし昭和57年度に立案、59年度から現地での発掘を開始した。昭和58年1月末日に分布調査を実施した結果、約50%の110,000m<sup>2</sup>が遺跡地と考えられた。昭和58年度は用地買収の関係で航空測量による現況平面図の作成と20mグリッドの設定を委託事業で実施した。59年度は、広範囲な面積を調査する職員体制や公共事業に伴う多くの発掘調査依頼が提出されていたため、調査を遂行する組織づくりが問題となり、協議がもたれた。打開策として、発掘担当職員の増員があげられたが、本遺跡群の調査範囲に不確定要素があるため、試掘調査結果により再度検討をする事となった。

しかし、59年度の調査要望は発掘調査がすでにあげられていたため、試掘調査を実施する職員を用意できないという状態であった。そこで、調査の民間委託という、県教育委員会等すでに実績を有する方法が用いられる事となった。その結果、発掘調査を市教育委員会の内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団が担当し、試掘を山武考古学研究所に発注する運びとなった。

（前原 豊）

## II 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の立地

柳久保遺跡群は前橋市荒子町字源訪、荒口町字柳久保・頭無・大久保・下鶴谷・中鶴谷に所在し、市街地から東へ約8kmの位置にある。国道50号線を東に向かい、二之宮十字路を北へ進むと市道10号線と交わる。ここを左折してまもなく左手に荒砥中学校、右手に本遺跡群をみる。

関東平野の北西部突端にある前橋市は、利根川を挟んで北東の赤城山、北西の榛名山の裾野がそれぞれ緩やかに拡がる所に位置する。

本遺跡群はfig.2で示されるように地形・地質上、赤城火山斜面と呼ぶ地域にあり、第四紀洪積世に活動を始めたと考えられている赤城火山の火山碎屑物・火山碎屑岩が斜面の主たる構成要素である。二重式円錐火山である赤城火山の南斜面は二次的堆積物によって特に緩やかな裾野をもつ

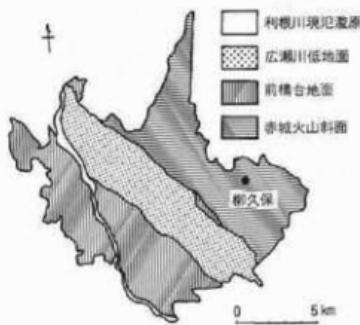


fig.2 前橋市域の地形的区分

## II 遺跡の位置と環境



fig.3 柳久保遺跡群

が、北・西・東の各斜面は片品川・利根川・渡良瀬川にそれぞれ切られるため比較的傾斜が急である。そして、これらの斜面は赤城・榛名・浅間等諸火山の火山灰層が風化したローム層に厚くおおわれており、本遺跡内の台地では黒土層の下に、板鼻黄色軽石・板鼻褐色軽石・暗色帶・始良丹沢火山灰・八崎軽石等が順を追って認められた。

また、この火山斜面上は多数の中小河川が南下しているため、河川の開析によって発達する舌状台地、土砂の流下による沖積地、裾野扇状地を発達させる。本遺跡群の西0.7km、荒砥扇状地を

## I 遺跡の立地



周辺地形図 (1/5,000)

形成する荒砥川は、宮城村荒山南麓を水源として本市の泉沢・荒口・下増田を下り広瀬川に合流する。逆に東へ1.5km地点の神沢川は、宮城村三夜沢で荒砥川から分水し大胡町・大室を経て下増田で荒砥川と合流する。さらに、荒砥・神沢川から分水した有名無名の小河川や、周辺に見られる溜池・沼を水源とした河川も含め数多くの流路が存在する。柳久保遺跡の東側谷地を蛇行する宮川は大正用水の北、千貫沼を水源とし、西側谷地を南下して宮川に合流する「深っ堀」の水源は北西1kmの北原沼をさらにさかのばる。

## II 遺跡の位置と環境

こうして南斜面を流れ最終的には利根川に注ぐ諸河川は、無数の輻射谷を形づくり裾野一帯の灌漑用水として水田耕作に重要な役割を果してきた。水田開発はこの輻射谷に沿って標高400m～500mまで可能とし、谷奥では棚田として土地利用がなされている。また斜面を被る黒土層が沖積する低地では、本遺跡周辺を含め広く水田が開かれている。特に火山斜面の標高が100mをきる一帯には地形の変換線があり、傾斜も一段と緩やかになって水田地帯として南へ広がる。しかし全般的には河川の流量、自然の流水が比較的少なく流速も速いため、昭和初期に着工した大正用水に見られるような人工の用水路、溜池等の灌漑施設は古くから発達していたと考えられる。なお上記、低地を除いて火山斜面の土地利用は畑作を中心であり、現況では桑園が高い割合で分布し一大養蚕地となっている。

柳久保遺跡の所在する台地は、東西の河川が端部で合流し等高線がU字状を描く典型的な舌状を呈し、上位中央部で標高114m、末端低部は106mを測る。検出された住居址はこの台地上111m～112mに集中して見られた。「深っ堀」の西は荒砥川河岸に続く台地で、上位部110mを測る下鶴谷遺跡からは縄文時代の遺物を検出した。また、宮川の沖積地である柳久保水田址は北側が標高107m、南側は101mで厚い浅間B軽石に被われた平安時代の水田址が全面に検出された。2次河川である「深っ堀」は諏訪遺跡の東、標高114mから流下するが、谷地が狭いため、水田址は谷奥まで入りこまない。

(浜田博一)

## 2 歴史的環境

柳久保遺跡群がある赤城南麓の荒砥地区は、古墳の多い群馬県下でも、最も密な分布が見られた地域の一つとして有名である。一方、近年、土地改良事業や大規模な開発事業が極めて急速にしかも広範囲に行われ、それらに伴う発掘調査によって検出された遺跡の数也非常に多い。ここでは、荒砥地区及び隣接する大胡町、柏川村、赤堀村の各一部を含めた地域を、本遺跡群で調査された先土器時代から奈良・平安時代の遺跡を中心に概観してみたい。

先土器時代では、三屋遺跡、北三木堂遺跡、牛伏遺跡、石山遺跡で、尖頭器を中心とした石器が出土している。今後の調査によても遺跡の数が増加する可能性は大きい。

縄文時代草創期の遺物を伴う住居跡、包含層、または散布地は、北山遺跡、荒砥北原遺跡、北三木堂遺跡に見られる。縄文早期は、上繩引遺跡、荒砥北原遺跡に、前期は上繩引遺跡、鶴谷遺跡、天神風呂遺跡、荒砥諏訪遺跡、荒砥宮田遺跡、荒砥北原遺跡、荒砥上ノ坊遺跡、荒砥東原遺跡、荒砥上諏訪遺跡、洞山遺跡、今井南原遺跡に、中期は上繩引遺跡、二本松遺跡、荒砥諏訪遺跡、荒砥北原遺跡、二之堀遺跡、洞山遺跡に、後期は上繩引遺跡、島原遺跡、荒砥上川久保遺跡に見られる。晩期の遺跡はまだ発見されない。

弥生時代は荒口前原遺跡で中期から後期初頭の住居跡が、島原遺跡及び頭無遺跡では中期の住居跡が調査されている。後期は、北山遺跡、下繩引遺跡、宮下遺跡、西原遺跡で住居跡がそれぞれ1～3軒検出された。また七ツ石遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭への過渡期を見

られる住居跡が十数軒調査されている。なお、この時期に属する遺構として、上縄引遺跡、北山遺跡、荒砥諏訪遺跡で、周溝墓が調査されている。

古墳時代と言えば、荒砥地区では、昭和10年の調査による「上毛古墳綜覧」では、365基の古墳の記載があり、その後記載漏れとして調査されているものもあるので、当初はかなりの数にのぼったと考えられる。これらの古墳は、大きく見れば、荒砥川流域、神沢川流域、桂川から柏川流域にかけての南北に連なる流れがつかめる。これらの古墳の築造時期を発掘調査を経たもの、横穴式石室で開口しているもので合わせて考えれば、古いと思われる古墳に赤堀茶臼山古墳があげられる。外形は帆立貝式、内部施設は木炭櫛で石製模造品等が出土している。家形埴輪が出土したことでも有名なこの古墳は、5世紀中葉から後葉と推定される。<sup>注1</sup> 柳久保遺跡群から北方およそ2.5kmの地にある山ノ上・茂木岡古墳群は箱式棺状石室を持ち6世紀初頭と見られている。<sup>注2</sup> 西南2kmの地にある今井神社古墳は、凝灰岩製の石棺を持つが、古墳の形としては横穴式石室出現期の前方後円墳の様相を成しているので5世紀後葉のものと考えられる。国指定史跡となっている西大室の3二子古墳のうち、前二子古墳は、横穴式石室初期の様相を持ち、6世紀中葉を下らないとされている。<sup>注3</sup> 七ツ石古墳群では、巨石巨室を持つ古墳も二基検出され7世紀中葉と考えられている。<sup>注4</sup> 截石を使用した終末期の古墳はほとんど見あたらない。<sup>注5</sup> 一方、古墳時代の集落は、前時代までの遺跡数に比べるとかなり急激な増加が見られる。しかも、前、中、後期ともかなりの広がりと密度をもって分布する。出土する甌の大きさからも言えるように、食糧の急激な増加が考えられる。前、中、後期を通じ連続と人々の生活した遺跡は、鶴谷遺跡、荒砥宮田遺跡、島原遺跡、荒砥東原遺跡があげられる。柳久保遺跡と共に中期の遺構を持つ遺跡は、この四遺跡の他、荒砥荒子遺跡、渋沢遺跡、前田遺跡、天神風呂遺跡があげられ、これらも後期の集落へと人々の生活が続いたと見られる。前期の遺構の検出された遺跡は、先の四遺跡の他、梅の木遺跡、荒砥諏訪西遺跡、荒砥北三木堂遺跡、荒砥東原遺跡、二之堰遺跡、荒砥五反田遺跡、川上遺跡、及び久保皆戸、荒砥上ノ坊、大室小学校々庭の各遺跡があり、後の三遺跡を除き後期の集落が見られる。なお後期の集落は、以上で述べた他に、北山遺跡、天神風呂遺跡、荒砥大日塚遺跡、今井南原遺跡、向井土師遺跡、荒砥上諏訪遺跡、牛伏遺跡に見られる。

奈良・平安時代の集落もまた多くの遺跡で調査されているが、古墳後期の集落を持つ遺跡のいくつかを除いたほとんどの遺跡で見つかっている。その他、青柳遺跡、大久保遺跡、川龍皆戸遺跡、堤東遺跡で調査されている。

古墳時代以降、急激に増加した集落での人々の生活を支えた水田耕作は、赤城南斜面の開拓谷で行われたことは想像に難くない。それを裏付ける遺構として浅間B軽石によって埋没した水田跡が、特に柳久保水田址の検出された宮川流域下流で多く調査されている。荒砥大日塚遺跡b・c区、荒砥洗橋遺跡、宮川遺跡、荒砥天之宮遺跡である。荒砥川流域では、荒砥諏訪西遺跡、荒砥宮田遺跡があげられる。

(前原照子)

<sup>注1</sup> 1. 2. 3. 群馬県史 資料編3 <sup>注2</sup> 前橋市史 第1巻、第二編古代上 <sup>注3</sup> 4 54年度、西大室遺跡群発掘調査概要

## II 遺跡の位置と環境



fig. 4 柳久保遺跡群と周辺遺跡 (1/50,000)

tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡の概要	調査年度	調査主体	報告書
1	柳久保遺跡群		59	市	59
1 a	柳久保遺跡	先土器、縩文早中期包含層、古墳中期集落			
1 b	下鶴谷遺跡	先土器、縩文早・中期包含層			
1 c	柳久保水田址	B輕石下水田			
2	西大河遺跡群				
2 a	上横山遺跡	縩文早後半～後期Ⅱ期、弥生中期墓	55	市	概観 55
2 b	北山遺跡	縩文早中期、前湖底層、古墳後期集落、弥生後期集落、弥生中期墓、奈良・平安集落	55, 56	市	# 55, 56
2 c	七ヶ石遺跡	弥生後期集落	56	#	# 56
2 d	梅の木遺跡	古墳前期～後期集落	#	#	56

2 e	下郷引道跡	弥生後期住居	57	#	#	57	
2 f	久保皆戸道跡	縄文中期包含層、弥生後期住居、古墳前期住居、奈良集落	58	#	#	57	
3	富田道跡群						
3 a	東原道跡	縄文前期住居、古墳後期集落、奈良・平安住居	54	市	概観	54	
3 b	宮下道跡	弥生後期住居、古墳後期集落、奈良・平安集落	55	#	#		
4	鶴谷道跡群	縄文前期散在地、古墳中期・後期集落、奈良・平安集落	55, 56	#	概観	55, 56	
5	天神風呂道跡	縄文前期住居、古墳後期集落、奈良・平安集落	55	町		55	
6	八ヶ峰・須志宮跡		58	#			
7	夷姫難防西道跡	古墳前期・後期集落、奈良・平安住居、C軽石に係わる品、B軽石下水田	59	港	概観	58	
8	夷姫源流道跡	縄文中期包含層、古墳時代遺構	59	#	概観	58	
9	荒城宮道跡	縄文前期住居、古墳前期・中期・後期集落、奈良・平安集落、B軽石下水田	59	#			
10	夷姫前田道跡	B軽石下水田。その下荒城川の洪水面下の水田	58	#			
11	更口前原道跡	弥生中期・後期初期住居、平安住居	44	群	大	まだあし14	
12	東祇北原道跡	縄文前期・中期の住居、縄文中期散在地、奈良・平安集落	56	港			
13	荒城北三木区道跡	先土器・縄文中期散在地、弥生住居、古墳前期・後期集落	59	#			
14	荒城大日原道跡	14 A、古墳後期集落、奈良・平安集落 14 B、B軽石下水田	59	#			
15	荒城浅瀬道跡	古墳後期集落、奈良・平安住居、B軽石下水田	55	港			
16	宮川道跡	古墳前期・後期集落、奈良・平安集落、B軽石下水田	59	#			
17	貢原道跡	古墳の初期集落					
18	島原道跡	縄文後期散在地、弥生中期住居、古墳前期・中期・後期集落、奈良・平安集落	55	黒		59	
19	荒城天之吉道跡	古墳後期集落、奈良・平安集落、B軽石下水田	59	#			
20	青柳道跡	奈良・平安集落	56	港			
21	荒城上 2坊道跡	縄文前期住居、弥生後期住居、古墳後期集落、奈良・平安集落、B軽石下水田	57	#			
22	荒城瓦子道跡	古墳中期の煙を伴う住居、後期集落、奈良・平安集落	57, 58	#			
23	荒城保布明道跡	古墳後期散在地	43	前	工	概観	44
24	荒城中堅敷道跡	古墳後期集落、平安集落	57	港			
25	荒城下押切道跡	古墳後期集落、奈良・平安集落	57	#			
26	御所道跡	衛生中期住居、古墳後期集落、平安集落	59	黒 (民)	概観	59	
27	柳久保道跡	古墳後期集落、奈良集落	58	#	概観	58	
28	荒小学校々庭道跡	古墳後期集落、奈良集落、須志宿跡	38, 39	群	大		
29	大久保道跡	奈良・平安集落	39	黒 (民)	概観	59	
30	川端皆戸道跡	奈良・平安住居	57	#	#	58	
31	御山道跡	奈良集落	58	港	#	58	
32	荒城東浦道跡	縄文前期包含層、古墳前期・中期・後期集落、奈良・平安時代住居	53	#	#	59	
33	牛伏道跡	先土器、縄文前期住居、古墳後期集落	57	#			
34	二之瓶道跡	縄文前期・中期・後期住居、古墳後期・後期集落	55	#			
35	二本庄道跡	縄文中期住居、古墳後期集落、奈良・平安集落	56	東		59	
36	開山道跡	縄文中期・前期・中期住居					
37	川上道跡	古墳前期・後期住居、平安時代集落、寺院址					
38	今井南面道跡	縄文中期住居、古墳後期集落、平安集落					
39	向井南面道跡	古墳後期集落、平安集落					
40	大室小学校々庭道跡	古墳後期住居、奈良・平安住居	27	群	大	概観	44
41	荒城上瀬防道跡	縄文中期住居、縄文早期・中期・中期包含層、古墳後期集落	53	黒		54	
42	荒城云反田道跡	古墳前期・後期集落、平安集落	53	港		53	
43	稻荷山道跡	縄文前期住居	54	村		56	
44	西原道跡	先土器、弥生後期住居	54	村			
45	若沢道跡	古墳中期・後期集落					
46	前田道跡	古墳中期・後期集落	55	村		58	
47	荒城上川久保道跡	弥生後期住居、古墳後期集落					
48	三星道跡	先土器					
49	石山道跡	先土器					

### III 調査の経過

記号	古墳群名	記号	古墳群名	記号	古墳群名	記号	古墳群名
A	山ノ上古墳群	G	中島古墳群	M	丸山古墳群	S	内井古墳群
B	上横須古墳群	H	下横須古墳群	N	八王子古墳群	T	南原古墳群
C	七ヶ石古墳群	I	北三木室古墳群	O	宿原古墳群	U	関山古墳群
D	東原古墳群	J	大日古墳群	P	二之瀬古墳群	V	飛龍山古墳群
E	阿久山古墳群	K	今井神社古墳群	Q	石山田古墳群	W	蟹道東古墳群
F	伊勢山古墳群	L	立野古墳群	R	多田山・向井古墳群	X	今井神社古墳
Y	前・中・後二子古墳	Z	赤堀茶臼山古墳				

### III 調査の経過

#### 1 調査方針

荒砥地域は県下でも調査された遺跡数、面積の多い所である。それは大規模な土地改良によつてもたらされた結果といえる。それらの調査は期間が圧迫され、広範囲の面積を実施しなければならないことや調査実施に多数の団体があたっているため、遺跡呼称に混乱をきたしている。このため本遺跡群の調査では小字名を遺跡名とし、立地条件に注意を払って呼称方法を決定した。調査区の設定にあたっても、地形が入り組んでいること個の遺跡名を考える上で大グリッドの設定はしなかった。また柳久保遺跡群の名称は開発事業地内を便宜的に呼ぶものであるため、今後、各遺跡の検討によって然るべき名称を採用したいと考えている。

発掘調査を実施するにあたって、耕作土の掘削は、時間的制約があったため重機を用いた。59年度の調査範囲は造成地200,000m<sup>2</sup>のうち幹線道路（幅30m、延長約500m）と宮川河川改修（幅14m、延長約500m）の部分であり、総面積22,000m<sup>2</sup>を測る。調査区の設定は、58年度事業により座標に合わせて4m四方でなされ、西から東へX1、X2、X3…とし北から南へY1、Y2、Y3…と呼んでいる。起点が途中から始まるのは、X100、Y100区を国家座標第IX系の端数のない数値に合わせたためである。各グリッドの呼称は北西杭の名称で使用している。

また、水準についても58年度事業で25グリッド毎(100m)に設置した公共水準を使用している。各遺跡の名称及び略称は分布調査成果と地形からfig.3のように用いた。

調査は表土層の除去後、直ちにプラン確認に入り、並行して4mグリッド杭の設定、水準の移動を行った。その後、平板測量にて遺構の配置図を縮尺1/500で作成し、各遺跡・遺構の調査工程を検討した。

その結果、住居址等の調査は、

- 1 中央部でクロスするセクション・ベルトを設けて土層観察を行う。
- 2 出土遺物は10cm四方以上のものは図化、それ以下についてはドットにより縮尺1/50の遺物分布図に記録し、遺物台帳に諸属性を記入して取り上げる。
- 3 炉址については、原則として縮尺1/50で図化、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて作成。

## 1 調査方針

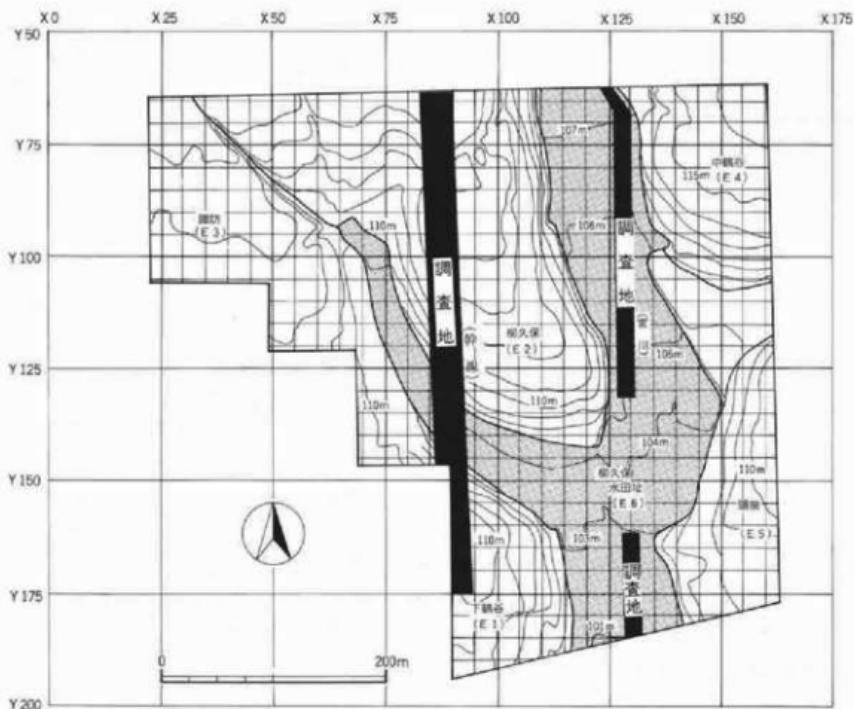


fig.5 グリッド設定図

また、縄文時代包含層の調査は、

- 1 分層発掘を実施し、出土遺物はグリッド毎に記録し取り上げを行なう。
- 2 調査の後半には時間的制約から4mグリッドを四分割し、層位毎に取り上げる。

水田址の調査は、

- 1 バックフォーによってB絆石上面まで掘削を行ない、水田・水路の検出を行なう。
- 2 図化については平面図を縮尺 $1/40$ 、等高線間隔5cm、セクション図は $1/20$ で作成する。
- 3 水田址下包含層については4mグリッドを四分割した単位で層位毎にとりあげ、溝跡については、4mグリッドにより層位毎にとりあげる。

先土器時代の文化層の調査は、数グリッド単位で試掘坑を設定し、出土した場合に拡張することとする。

調査後の調査区は河川改修が完了し、道路部分にも一部工事が実施されている。 (前原 豊)

### III 調査の経過

#### 2 調査経過

本調査は、昭和59年7月16日に着手、同年12月27日に終了した。7月16日、南ブレハブ作業所への引っ越し及び整理を行い、翌17日より重機を用いて下鶴谷遺跡（縄文包含層）、続いて柳久保遺跡の表土掘削を開始した。下鶴谷遺跡ではプラン確認の結果、土坑多数を検出し、多量の縄文土器片、フレイク、石斧等の散布が全面にみられた。灌漑用水路となっている宮川が南北に走る柳久保水田址は、付近一帯の田植終了にもとづく水量の減少を待って7月25日南から表土掘削、8月7日から発掘調査に入った。その結果、浅間B鉱石下より平安時代後期の水田址が畦を伴って全面に検出された。Y130～Y162グリッド間は擾乱が著しく検出不可能なため、8月17日からはY130以北の調査に入った。なお、8月10日にはハイライダーを用いて下鶴谷遺跡全景の撮影を行い、16日には作業の能率化をはかるため北ブレハブ作業所に移転を済ませた。8月末には伊勢崎三中一年生の体験発掘も行われ、作業員さんに混じった中学生の歓声が聞かれた。また、月末からは水田址の湧水が多く作業効率が下がるため、既に表土掘削を終えた台地上の柳久保遺跡の調査に入った。掘削後も全面に残る柔の根をジョレン、剪定バサミで処理し精査した結果、古墳時代の住居2軒、溝2条が検出された。さらに、並行して掘り下げをした深掘り（2m×2m×2m）10ヶ所の内、1ヶ所からは先土器時代の黒曜石の剝片を発掘することができた。9月上旬に入っても柳久保水田址の湧水は依然として続いたため、西壁に導水路を設け、排水ポンプを使用して北側部分の調査に入った。11月半ばまで続けられた調査の結果、水田址の他、南北に走る溝4条、東西に走る溝2条の検出をみた。また、遺物では10月16日、W-2より発掘した頁岩の尖頭器を始めとして墨書・墨画土器、獸骨、漆器等がみられた。

10月に入って、幹線道路部分の拡張要求が前工団側より提出され、これまでの14m幅に加えさらに東西7mずつ調査範囲を拡げることになった。該当する下鶴谷遺跡、柳久保遺跡、柳久保水田址の一部の発掘調査は10月22日より始められたが、山積みされた排土をさらに傍へ移す作業が当初の予定を超え、表土掘削に2週間を要した。この間、発掘調査の成果が新聞・広報で報じられたりともあって荒砥中一年生・大胡小五年生・荒子小六年生等、遺跡見学が相次いだ。幹線道路部分の柳久保水田址からは南北の台地に挟まれた形で、河川改修部分と同時期の水田址が検出された。10月26日からは水田址発掘と並行して柳久保遺跡、11月に入ってからは下鶴谷遺跡も加えて3班に分けての調査体制を作った。下鶴谷遺跡は遺物の散布が濃密に見られ、2m四方のメッシュからはそれぞれ、縄文早期後半から前期前に及ぶ縄文土器片、石器では片刃形の石器・特殊磨石器・スタンプ形石器等がとりあげられた。また柳久保遺跡からは、古墳時代の住居址3軒・土坑・地割れ等が検出された。住居址は、既に検出をしたものと合わせて1号から5号住居と名付け、調査の結果、高杯・壇・壺・甕等の他、鍬先等の鉄製品も見られた。そして柳久保遺跡群の概要が判ってきた12月上旬、ヘリコプターによる遺跡全景の写真撮影が行われた。

以上、例年ない酷暑、嚴寒の中で東西30m、南北500mに及ぶ幹線道路部分、東西15m、南北

tab.2 発掘調査経過表

年 月	下鶴谷遺跡 (E1)			柳久保遺跡 (E2)			柳久保水田址 (E6)			備考
	未調査	発掘実施	回復実施	未調査	発掘実施	回復実施	未調査	発掘実施	回復実施	
59年 7月	-	■	■	-	■	-	-	■	-	7/16 南プレハブ作業所にて作業開始。 7/20 「アラトタヨリ」1号発見。
8月	■	■	■	-	■	■	-	■	■	8/10 ハイライターによる描記。(E1全景) 8/16 北プレハブ作業所へ移転。 8/20 「アラトタヨリ」2号。 8/23 伊勢崎三中一年生35名、体験見学。
9月	-	-	-	-	■	■	-	■	■	9/12 五城中一年生150名、道耕見学。 9/20 「アラトタヨリ」3号。
10月	-	-	-	-	-	-	-	■	■	10/18 佐成郡坂町文化財教室。道耕見学。 10/20 「アラトタヨリ」4号。 10/22 鹿嶋遺跡に復帰し、作業開始。 10/23 佐成郡坂町文化財教室。道耕見学。(E6) 10/24 北プレハブ作業所増設。 10/24 大田小五年生180名、道耕見学。 10/27 鳥子小六年生・保護者180名、道耕見学。
11月	■	■	-	-	■	-	-	■	■	11/30 「アラトタヨリ」5号。
12月	■	■	■	-	■	■	-	■	■	12/7 ヘリコプターによる航空写真撮影。 12/20 「アラトタヨリ」6号。 12/25 発掘作業終了。
60年 1月	-	■	■	-	■	■	-	■	■	1/5 遺物整理作業開始。
2月	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2/12 墓画土器の赤外線による観察。 (国立群馬工場・呉屋充康氏)
3月	-	-	-	■	■	■	-	■	■	3/6 骸骨の鑑定。(前橋二高・宮崎重雄氏)

350mの宮川河川改修部分の調査は12月末に終了し、60年1月より整理作業に入った。1月に入つて、土器の洗浄・注記・接合・実測をプレハブ作業所にて開始し、2月からは文化財保護係分室にて同作業を続けた。2月上旬には、墨画土器の赤外線による観察を国立群馬工場・呉屋充康氏に依頼し、肉眼で識別不能な部位の画像が得られた。また3月上旬、奈良県元興寺文化財研究所に鉄製品・漆器等の保存処理の方法を伺い、奈良大学・水野正好氏に墨画土器の観察を依頼した。獸骨については、前橋二高・宮崎重雄氏に観察を頼った。こうした特殊遺物の他、濃密に出土した繩文土器片、石器、住居址内の遺物の接合、実測は当初の予定を超えて3月末にずれこんだ。

(浜田博一)

## IV 遺跡の調査

### 遺跡の概観

赤城山南麓は赤城山体の広大な裾野地形上に位置しており、標高200m以下の地域は比高差の少ない低台地を形づくっている。荒砥地区は南麓の端部にあたる。地形は山麓を南下する河川、あるいは低台地から湧出する小支流によって樹枝状に開析が進み複雑な谷地形が形成される。

本遺跡群は宮川と湧出する小支流によって開析された台地と沖積地によって形成されている。大きく台地上にある遺跡として西から諏訪遺跡（E3）、下鶴谷遺跡（E1）、中央部の舌状台地に占地する柳久保遺跡（E2）、東側の舌状台地と低台地の中鶴谷遺跡（E4）、頭無遺跡（E5）と沖積地に広がる浅間B軽石埋没水田である柳久保水田址遺跡（E6）によって構成されている。

それぞれ各遺跡の有機的関連は今後の発掘調査に委ねる内容であるが、今年度の発掘調査と分布調査、確認調査の成果から、時代を追って占地や利用のあり方をみてみたい。

**先土器時代** 柳久保で剝片が1点検出されている。出土層位は中部ローム層暗色帶中の検出である。また先土器時代終末の植刃・尖頭器が下鶴谷、柳久保水田址から各1点ずつ出土している。柳久保水田址出土のものは中鶴谷に存在していたと考えられる。

**縄文時代** 下鶴谷から早期後半の石器製作址のほか早期から前期の包含層。柳久保、中鶴谷、頭無からも、早期から後期に至る遺物、遺構が検出されている。

**古墳時代** 柳久保に古墳と和泉期の大規模な集落が予想され、中鶴谷に古墳が存在する。

**奈良・平安時代** 柳久保の南側と中鶴谷に大集落が存在し、頭無にも集落が見られた。また、沖積地の柳久保水田址にはB軽石埋没水田と水田祭祀遺構が検出されている。

### 1 下鶴谷遺跡

本遺跡は住宅団地予定地の南西にあたる台地上に立地している。大きく東へ向かって張り出した台地の突端部分に占地する。沖積地との比高差は6～7mであり、遺跡地は107～109mの標高を測る。遺跡地は、今回の幹線道路部分に隣接して昭和58年度県教育委員会による調査が実施されているが、遺物等の報告がないため東側へ延びるものと予想される。その範囲は80m四方、約6,000m<sup>2</sup>に及ぶものと推定される。

今回の調査は本遺跡の西側部分を幅18mで延長90m、面積1,200m<sup>2</sup>を実施した。調査グリッドはX88～93、Y160～181グリッドの部分である。Y160グリッド以北についても調査を実施したが遺物の検出はほとんどなく、Y181グリッド以南についても包含層が農道により削平を受けており、確認できなかった。

検出された遺構は縄文時代の集石2基、近世以降と考えられる土坑60～70基である。土坑の調

## 1 下鶴谷遺跡

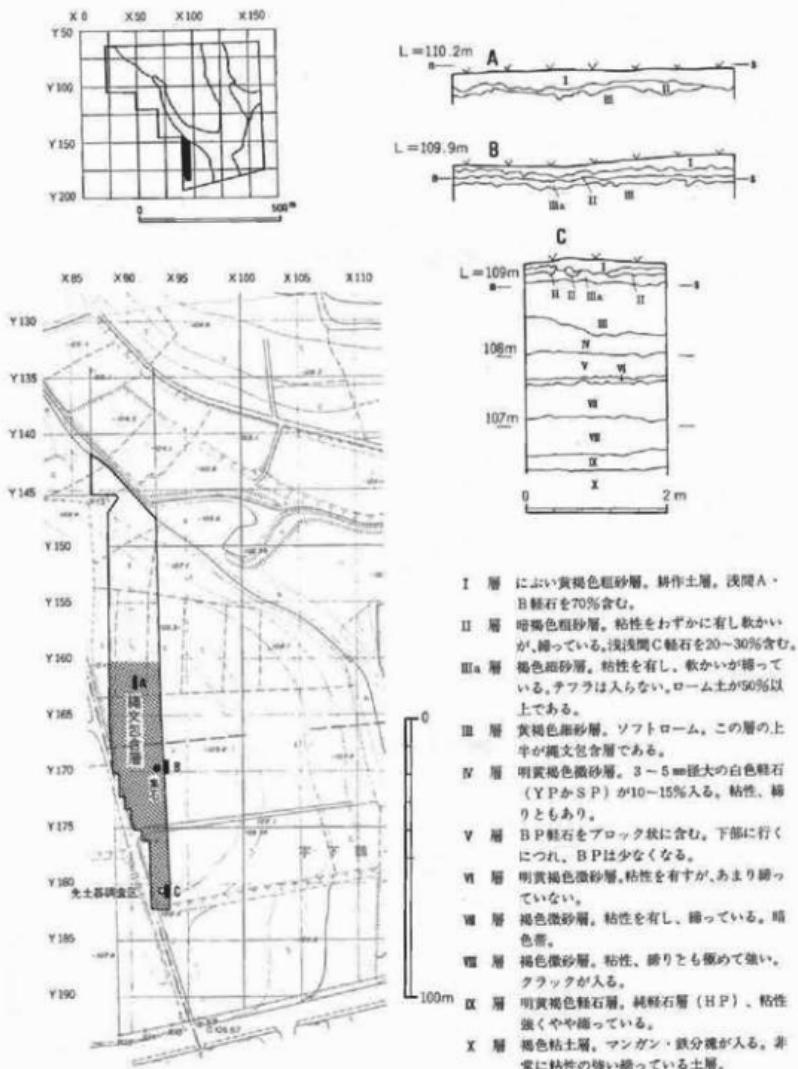


fig.6 下鶴谷遺跡全体図 (1/2,000)

#### IV 遺跡の調査

査方法は、当初約30基について、セクションを作成しながら調査を進めたが、遺物が全くなく覆土に耕作土層が入ることから調査方法を切り替え、土層については、既掘のデータに基づく分類を記入するのみにとどめ丸掘りを実施した。平面図とレベリングについては作成してあるが、本報告では差し控えた。

縄文包含層は早期後半から前期前半の土器が1,370片、石器類が929点出土した。出土層位は全体層序III層面からの出土である。また、同一層位から先土器時代終末期の石器1点が見られた。

#### (1) 先土器時代

本遺跡から出土した石器は、fig. 7 の植刃だけである。柳久保水田址遺跡出土の尖頭器と形態、材質の面で共通性を有する。

植刃 (fig. 7、PL.17)

X92、Y174区のIII層より出土した。柳久保水田址例の如く幅の狭い尖頭器を横割りにして作出したものと考えられる。両端の折断面はともに水平に同一方向から折られている。同時期の資料としては赤堀村石山遺跡、千葉県南大畠袋遺跡、弥三郎第2遺跡、両国沖III遺跡、新潟県本ノ木遺跡等に類例が求められる。石山遺跡とは層位的にも共通するが、本例が硬質頁岩を用いている事から、材質の点で相違が見られる。

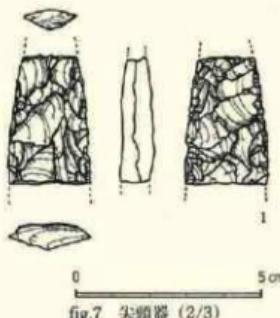


fig.7 尖頭器 (2/3)

#### (2) 縄文時代

調査の結果、本遺跡からは縄文時代早期から前期のいわゆる包含層が検出された。その中に検出された唯一の遺構が集石である。

集石 (fig. 8、PL. 3)

本集石は、X92、Y169区のIII層中に確認された。縄の集中は2ヶ所にまとまり、北側に4石、南側に9石配されている。総重量約26kgで1個あたりの平均重量は2 kgとなる。石材は全て赤城山産出の安山岩であり、赤化・ヒビ割れを生じてい

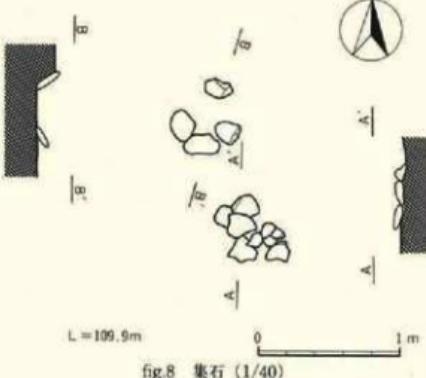


fig.8 集石 (1/40)

た。集石造構として注意をはらったのは fig. 8 だけであるが、礫の分布図 (fig. 31) に示したように、板状を呈する安山岩角礫の分布は、X89~92、Y166~171区の160m<sup>2</sup>に見られる。石質、大きさとも共通する事や重複した分布から集石と時期、用途面で同一のものと考えられる。

本集石の所産時期は、遺物分布と照合の結果、縄文時代早期後半の条痕文系土器群の時期といえる。なお、集石の下部について掘り込みの検出を行ったが、わずかに南の集石に黒味を帯びた土が見られたにすぎず、切開の結果、何も得られなかった。

#### 出土遺物

##### 土器 (fig. 9 ~14、PL. 15・16)

本遺跡から出土した縄文土器は総数1,370点であり、他に土師器・須恵器が數片出土している。この中で数量的に最も多いのは4群であり65%を占めている。次いで2群が29%であり、本包含層の形成時期は大きく2時期に分かれ、それぞれ1群、3群が先駆をなし2群、4群で発展を遂げる。また2群と3群は型式的な隔りを有する事から二者に有機的関連は求められない。

##### 1群 沈線文系土器 (1~10)

本群は24点出土しており、全て同一個体に帰属する。全破片とも明黄褐色で、外面がやや赤味を帯びており、胎土は少砂量を含み、ややザラついた感じである。器厚は4mm前後で薄く仕上げられている。器形、文様構成は不詳な部分が多いが、施文具は半截竹管によっている。上部に平行沈線が4条引かれる。そのうち、一つの平行沈線間が他に比べやや盛り上がっている。その下に2組の平行沈線が引かれ、三角形の区画をつくっている。区画内には半截竹管が蛇行して作出した貝殻腹縁文的な沈線で充填される。二種の平行沈線の交点には円形の盲孔が付される。下部には縦位を基本とする平行沈線が描出されるが、ゆるやかなカーブをもつておらず、終点でより強調されている。施文具や文様構成から田戸上層式に比定できると思われるが盲孔を有する点がやや異質である。

##### 2群 条痕文系土器 (11~48)

本群としてとらえたものは393点とかなりまとまった資料である。しかし、細片が多く、同一個体に帰属するものがほとんどわからない。2群として扱かった理由は遺物分布の成果によるためであるが、内容的には、無文73点、擦痕6点、条痕文314点である。しかしこの三者も別な観点—纖維の包含とその量、砂粒の種類と量、調整、色調—で観察すると、それぞれの属性が錯走した結びつきをもつ。ここでは器面調整、文様を第一義的に考慮し、次に胎土、色調、纖維の包含で分類を試みた。

##### 1類 無文土器 (11~17)

tab. 3 縄文土器一覧

分類	点数	%
1群 沈線文	24	1.8
2群 条痕文系	393	28.7
無文	(73)	(5.3)
擦痕	(6)	(0.4)
条痕	(314)	(23.0)
3群 繊維縁文	33	2.4
4群 竹管文	893	65.2
附隨a	(45)	(3.3)
b	(19)	(1.4)
繩文・結節	(829)	(60.5)
その他	2	0.1
不明	25	1.8
合計	1,370	100

IV 遺跡の調査

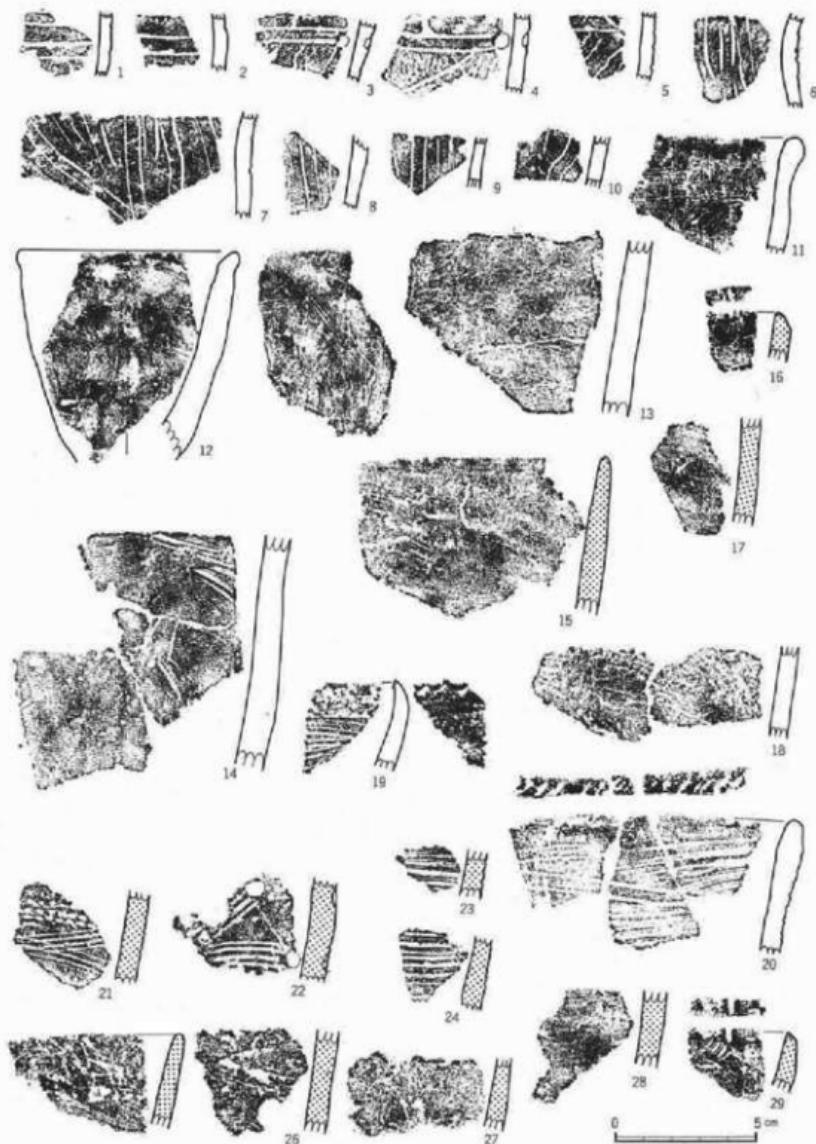


fig.9 1・2群土器 (1/2)

無文土器としたものには纖維を含まないA種(11~14)と含むB種(15~17)に分けられる。

A種 11の口辺は、指オサエにより丸棒状に肥厚したものである。外面は横方向の擦痕がわずかに観られ、赤褐色を呈し胎土には結晶片岩砂粒を含んでいる。12は尖底の小形の深鉢である。口辺はやや丸棒状に作出され、外面は縦方向のナデが見られる。内面には条痕状の調整が入る。赤褐色を呈し、硬い焼きである。13・14は同一個体であり、12と色調、砂粒をはじめとして外面調整が似る。内面は平滑化がゆき届いている。14の右上には半截竹管による条痕が施されている。

B種 15は平縁で口辺は半円状を呈する。纖維は微量であるが砂粒の量は多くD<sub>1</sub>種と共に共通した暗赤褐色の砂粒である。器面調整は内外ともナデであるが、外面にわずかな条痕が認められる。16・17は同一個体であり、わずかに纖維を有し、黒雲母を含む軟かい焼きの土器である。色調は明赤褐色を呈し、外面はナデによって平滑にされるが、内面の剥落が著しい。16は口辺部片で外削ぎ状になっており、口唇に刻み状のものが見られる。外面に爪状の刻みが施される。

#### 2類 擦痕土器(18)

本類は6点と極めて少ない。18の外面は横方向の擦痕が見られるが、内面は丁寧なミガキによって仕上げられている。胎土に少砂量を含んで赤褐色を呈し、比較的硬い焼きである。

#### 3類 条痕文土器(19~48)

纖維を含まないA種(19・20)と纖維を含むB種(21~24)と更に纖維を含み胎土の悪いC種(25~28)、纖維と多量の砂粒を含むD種に分けられる。D種は砂粒の違いによってD<sub>1</sub>種(29~36)と結晶片岩砂粒を主体に含むD<sub>2</sub>種(37~48)に分離できる。

A種 19は口辺部片であり、外削ぎ状を呈する。胎土は砂粒をやや含み黄褐色をなす。尖った口唇は5~6mm幅の指による押圧によって小波状に作出される。その際に内側に粘土が肥厚して隆起をなしている。外面には半截竹管による条痕が横走し、口縁直下の平行沈線間に2列に爪形の刺突が施される。20も口辺部片であり、19と似た胎土・色調をとる。口縁は半円形であり、口唇に範による斜めの刻みが施される。内面は剥落が著しい。

B種 21~24は同一個体片である。纖維の量は極めて少なく、暗赤褐色を呈する。21は浅い沈線状の条痕が4条横走し、それに沿って4個一単位の刺突が施文される。22は条痕によって幾何学的な文様を作出し、その交点には円形の盲孔が付される。やはり条痕に沿った刺突が存在する。

C種 25~28は多量の纖維を含むため、胎土がザラついている。砂粒の量も多く、黒雲母、結晶片岩、石英、白色砂粒が見られる。25は口辺部片であり、口縁は半円形を呈し、ゆるい波状をなしている。外面には細かな条痕が認められる。

D<sub>1</sub>種 29~36は胎土・色調とも極めて似ているが、29~31と口辺が存在することから、数種類の個体が存在するものと思われる。胎土に暗赤褐色の砂粒を多量に混入する事を特色とする。外面はわずかに条痕を施した後に纖維の束によって撫でつけた痕跡がみられる。29は口辺部であ

IV 遺跡の調査

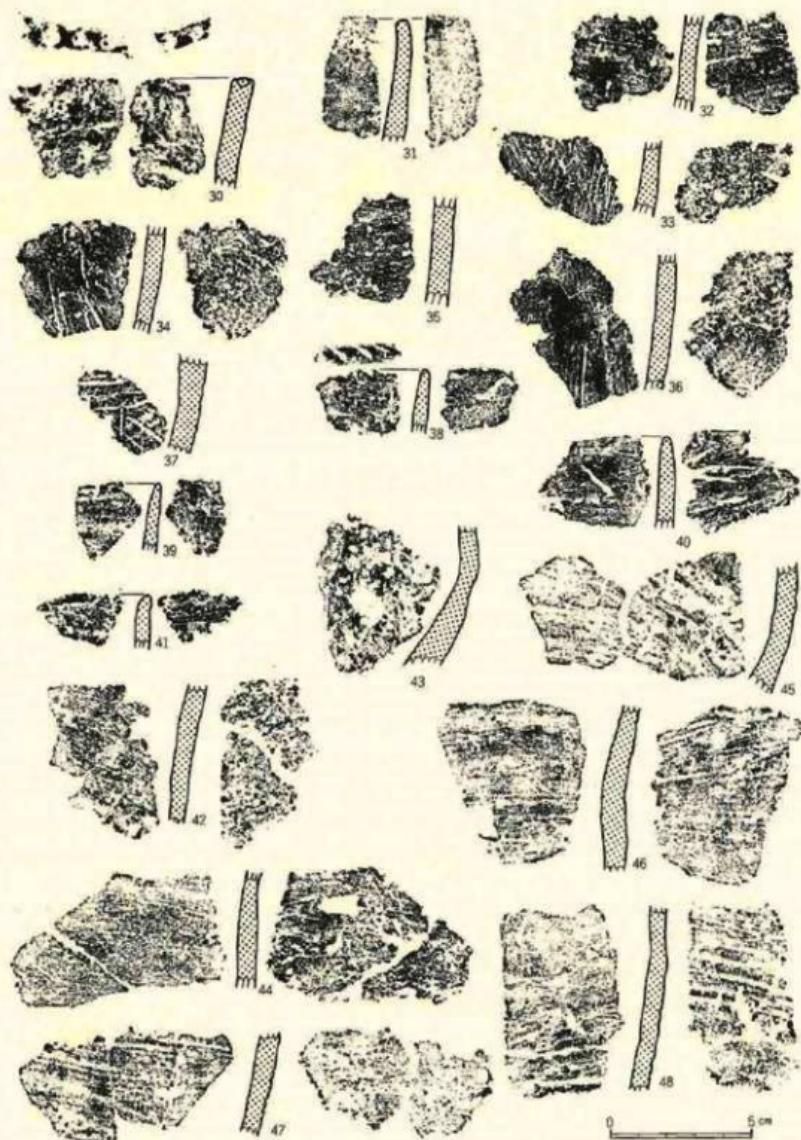


fig.10 2群土器 (1/2)

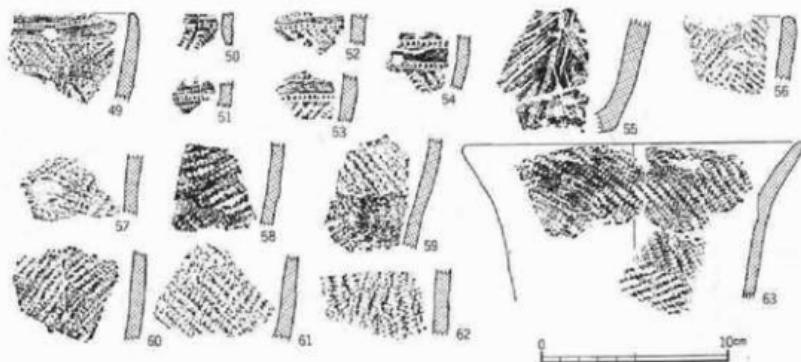


fig.11 3群土器 (1/3)

り、口縁が外削ぎ状を呈し、口唇には竪による刻みが間隔をあけて入る。外面の口縁部に爪形状の三条の条痕が認められる。30も口辺部である。口縁はやや角頭状であるが丸味を帯び、口唇に斜め方向から竹管による円形刺突が施されている。31はやや先細りの口縁であるが半円形を呈する。32~36とも外面には纖維の束による撫でつけが見られ、内面は砂粒が浮いた状態である。砂粒が多いのにもかかわらず、硬い焼きの土器である。なお34には半截竹管による条痕が2条付きである。

D<sub>1</sub>種 37~48は結晶片岩砂粒（2~5mm大）を多量に含む事が特徴である。しかし、D<sub>1</sub>種と同様に砂粒を多く含むにかかわらず焼きの硬い土器で、外面はこすると光沢が見られ、滑れる感じである。調整は内外面とも横方向の条痕が施されるが、外面は纖維の束による撫でつけが横方向になされ、条痕が消されている。纖維の含有は明瞭に認められる。37は本種の中で唯一の文様を持つものである。条痕の後に纖維の束で撫でた面に浅細線でもって平行線と斜格子文が付される。平行線の間には貝殻模様文が一条施文される。38~41は口辺部片であり、いずれもやや先細りの半円状の断面を有する。38の口唇には竪による斜め方向の刻みがみられる。41はゆるやかな波状を呈している。

### 3群 繊維繩文土器 (49~63)

本群は33片と数は少ない。有節沈線を有する1類（49~54）と助骨文を持つ2類（55）と繩文施文の3類に分けられる。1~3類とも胎土に纖維を入れている。

1類 49~54は同一個体片と思われ、地文に繩文RLを羽状に施している。口縁に有節平行線を二条横走させ、その間を磨り消している。さらに有節平行線を垂下させ、それらに斜行させた有節平行線がユニオン・ジャックのように施文される。平行線が交差する所には円形の盲孔が付される。胎土は暗褐色を呈し硬い焼きである。

2類 55は平行沈線を垂下させ、それから半截竹管による斜行沈線を施し助骨文を構成して

IV 遺跡の調査

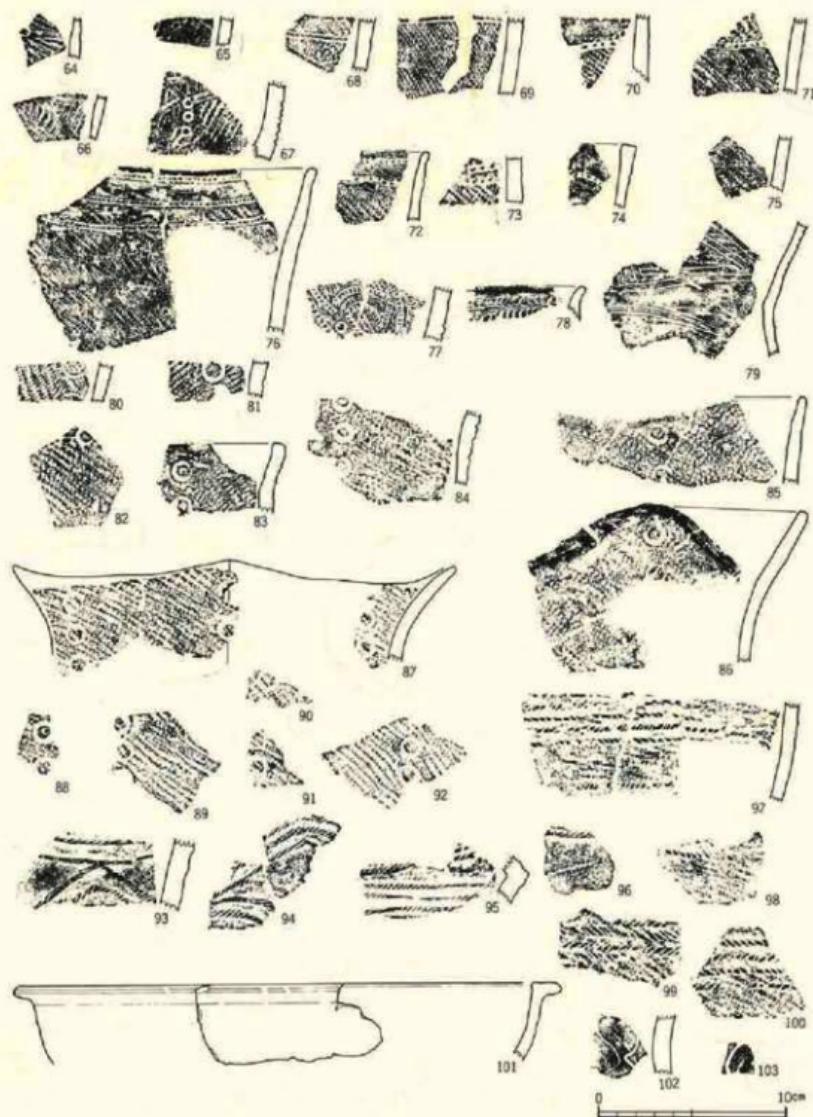


fig.12 4群・その他の土器

いる。黄褐色の色調を示す胎土はやや脆弱である。

3類 56～63は縄文施文の土器である。56は縄文 LR と RL による羽状構成をとる。57も不規則であるが縄文 RL による羽状構成である。58は縄文 LR、59は縄文 RL による羽状縄文。60は単節斜行縄文 RL、61は0段多条による縄文 RL と LR による羽状構成、62は0段多条による縄文 LR である。63は縄文 RL と LR による羽状構成である。いづれも暗褐色を呈し、焼成良好な土器である。

以上、1～3類の土器はいづれも黒浜式土器でも新しい段階に位置づけられるものであり、続く諸磯 a 式との関係を有するものである。

#### 4群 竹管文系土器 (64～101、104～135)

本群は包含層の主体をなすもので総数893点出土している。これらは施文された文様から1類～9類に分類される。このうち1類から7類までは意匠文を持つ装飾的な深鉢であり、8類は浅鉢で9類は意匠文を持たない縄文施文の深鉢で出土量の大部分を占め、本群の93%に該当する。

1類 64～67は同一個体と思われ、地文に縄文 LR を施した後、幅5mmの織維質の扁平施文具で引きずるような平行線文が水平や垂直、斜行して施文される。直径約5mmの円管文が縦列に配される。

2類 68、69は幅狭半截竹管による平行沈線が施文される。地文には縄文 RL を施しておらず、文様構成は1類と同様にモチーフが想定できる。

3類 70～76は幅狭半截竹管による連続爪形文を有する。いづれも予め平行沈線をめぐらし、爪形刺突を連続的に施文している。諸磯 a 式である。

4類 77・78は幅広半截竹管による連続爪形文土器。連続爪形文は平行沈線によって予めモチーフを下書きしておいてから、爪形を充填しており、刺突間隔に粗密の差がある。77に比べると78は幅が広い。75は諸磯 a 式であり、76は b 式であろう。

5類 79は幅広の半截竹管を用いて粗い区画文が構成される。諸磯 b 式。

6類 80～92は大きく開いた段状の口辺が山形波状をなし、その頂部と低部には直径約1.2cmの粗大な円管文が縦列に施文される。87のように、縦列の円管文の上部に同径の円孔が穿たれる場合もある。地文に縄文 RL を施している。

7類 いわゆる浮線文土器で、浮線上に縄をこころがしたもの(93～96)と斜めに刻み目(97～100)を施したものがある。93～96は無筋縄文 L が施され、97～100は隣り合う浮線の刻み目をかえて矢羽状にしている。いづれも同一個体と見られる。諸磯 b 式である。

8類 101は浅鉢形土器である。他に同様の破片が數点みられた。

9類 意匠文を持たない縄文施文の深鉢形で総数829点出土している。これらを原体別に分類すると単節斜行縄文 RL…514点(62%)、同 LR…231点(28%)、綾絡文…82点(10%)、0段多条…2点(1%未満)と圧倒的に RL が多い。これらは1～7類の胴部破片も含まれており、その他の各期の粗製土器と見られる。特に104～110に見るよう平線のもの(104、105、107、110)

IV 遺跡の調査



fig.I3 4群土器 (1/3)

良

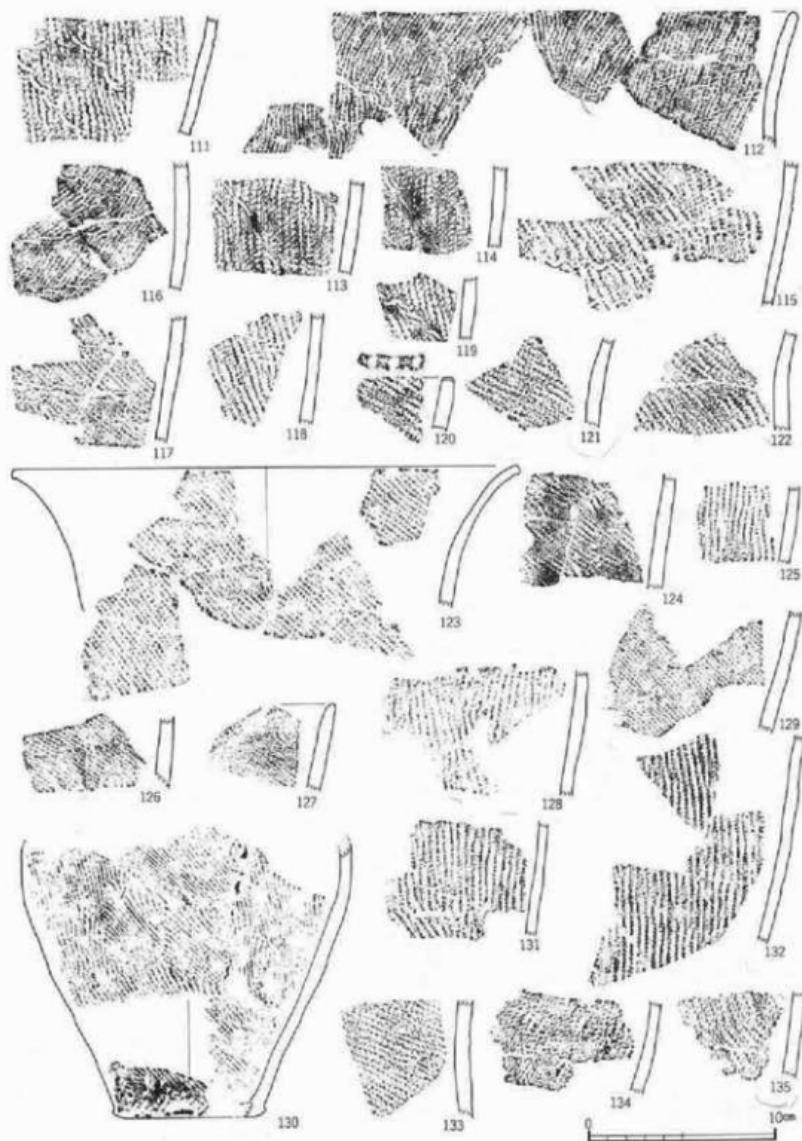


fig.14 4群土器 (1/3)

#### IV 遺跡の調査

と波状線（108、109）があり口唇には突起や刻みが加えられる。

以上、本群は諸種a式を主体としb式までの土器を含んでいる。ここで1類、2類、6類の土器は小山田No26遺跡の報告で安孫子昭二氏によって竹管文系直前の土器として扱われたものと共に通する。県内では中棚遺跡が該当し、本遺跡の3群と4群1、2、6類が共存した状態で確認されている。

その他（102、103）

縄文時代後期前半である称名寺2式が2片出土している。102、103がそれである。沈線による曲線のモチーフが施されている。

石器（fig. 15～24、PL. 17・18）

包含層から出土した石器は自然砾を含め総数929点を数える。各器種毎の分布は後述するが、少なくともこれらの石器は1～4群に帰属するものである。遺物分布の分析により大方の石器の所産時期が判明した。ここでは分析から得られた時期は簡単に記載するに留め、詳細は後述の遺物分布で行ないたい。また石器の材料は圧倒的に頁岩が占めており、わずかにハリ質安山岩、安山岩、チャート、流紋岩が見られ、黒曜石は全く見られなかった。

石器（1～13）

大きく、無茎石器と有茎石器に分けられ、それぞれ凹基、平基、凸基の基部を有している。材質は頁岩5、チャート4、安山岩4、流紋岩1の構成である。チャートが多いのは器種による選定をした結果といえる。

1類 平基無茎器（1～4、8、11）図示しなかったものを含め総数7点出土している。大きく主要剥離面を器面に残すことに特徴がある。

2類 凹基無茎器（5～7、10）総数4点出土。5はこの中でも細部調整が入念になされる。9は流紋岩製であり、押型文土器に伴出するトロトロ石器に形態が類似。

3類 有茎器（9、12、13）3点出土しており、平基（9、13）と凸基（12）の2形式に分けられる。12、13は有舌尖頭器の可能性も考えられるが、形態、法量、遺物分布から石器とした。

石器未製品（14）

4点出土しており、いずれも剥片の一部に調整が見られる。

削器（15～24、26、27、30～34、40～42、45～53、55～59、61、85、90）

削器は59点と石器の中でも多い数である。素材、調整、

tab. 4 石器一覧

器種	数量	%
石器	14	1.5
石器未製品	4	0.4
削器	59	6.4
研磨器	2	0.2
調整・使用痕のある剥片	39	4.2
片刃形の石器	22	2.4
片刃形の石器未製品	15	1.6
打製石斧	10	1.1
研磨器	1	0.1
凹石	7	0.7
凹石と磨石	5	0.5
磨石	14	1.5
スタンプ形石器	5	0.5
特殊磨石	8	0.9
鱗の巣石	1	0.1
石皿	1	0.1
大形の磨石	1	0.1
石核	4	0.4
剥片	591	63.8
安山岩角礫	68	7.3
安山岩小円礫	53	5.7
結晶片岩	5	0.5
合計	929	100

1. 下轄谷遺跡

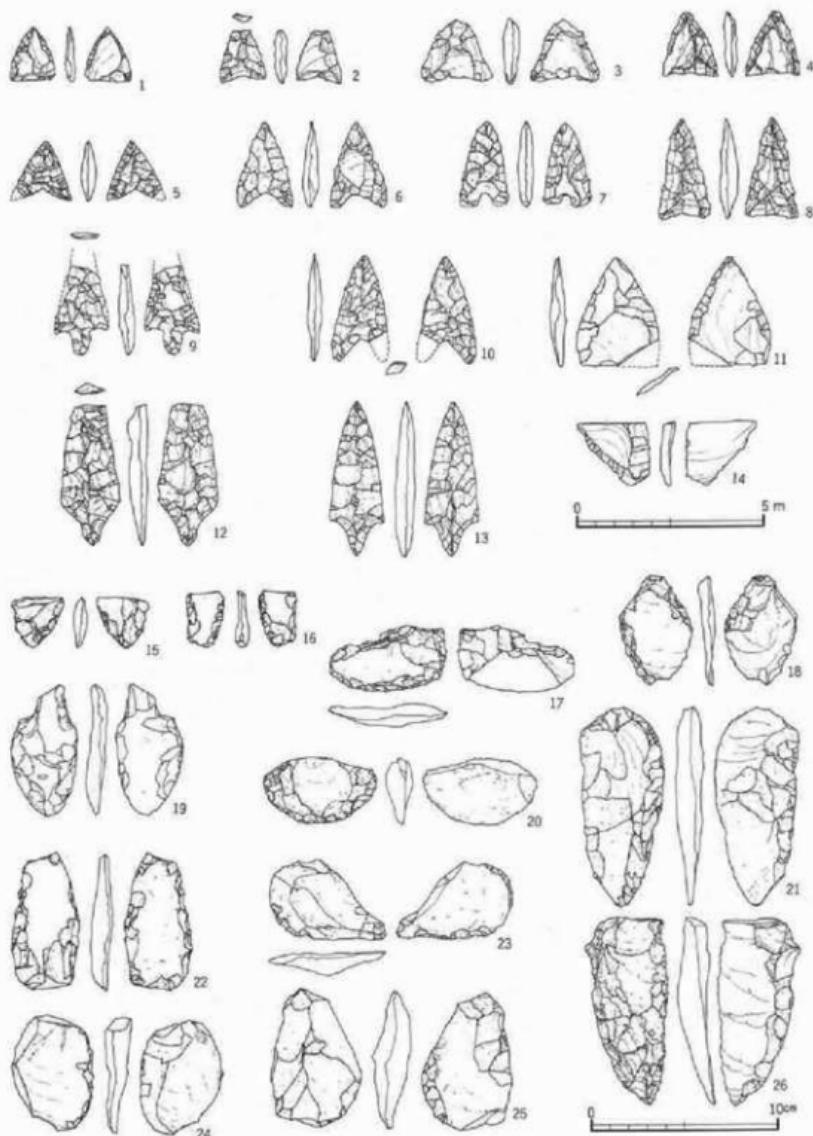


fig.15 縄文時代の石器 (1/3) 1~14まで 2/3

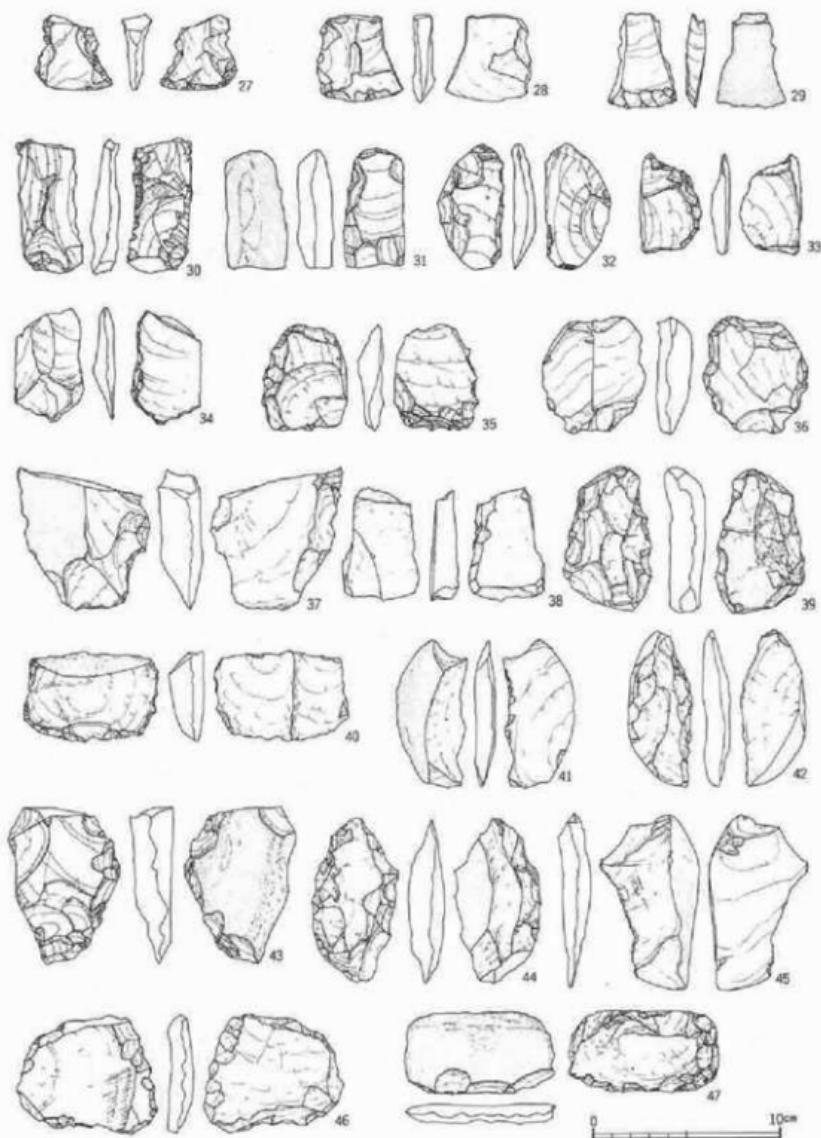


fig.16 縄文時代の石器 (1/3)

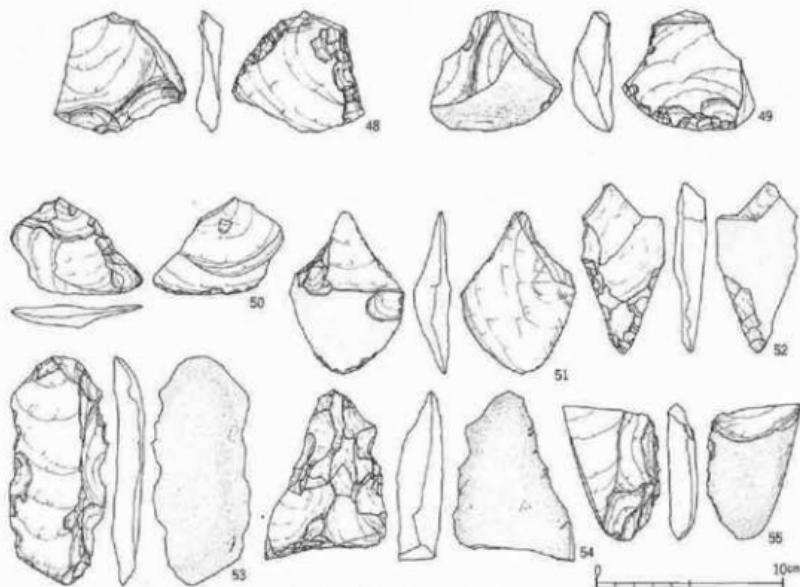


fig.17 縄文時代の石器 (1/3)

形態等の違いから3類に分類したが、片刃形の石器や打製石斧の未製品との区別は不十分である。

1類 周辺調整が十分になされ、刃部の作出も入念に行なわれ、定形をなすもの。

A種 (16~20, 27) 石匙とそれに類する形態を有するものである。つまみが作出されるものには17、19、27がある。

B種 (15, 21, 22, 26) 端部の一端が尖り、縦形の石匙状に作出されている。15は端部の欠損した部分、22は端部を欠損している。21だけが流紋岩製で他は頁岩である。

C種 (40, 47) 長方形に作出されており、横刃形石器と称されるものと共通する。

D種 (23, 50, 52, 85) 端部の一つを尖らすように作出し、調整も入念に施される。

2類 1群と同様に自然面を残すものが多い。刃部の作出のみなされ、定形化はなされず素材の形態を残している。(24, 30~34, 41, 42, 45, 46, 48, 49, 57, 90)

3類 半削もしくはそれに近い大形素材の主要剥離面の周辺に調整を加えている。一侧縁に蝶番剥離が見られる。(53, 55, 56, 58, 59)また、平坦な剥離で作出されているものも存在する。

(61) いずれも大きく礫面を残している。

搔器 (28, 29)

搔器とされるものは2点だけである。しかし、次の片刃形の石器と刃部作出方法等が共通するため今後検討を必要としよう。

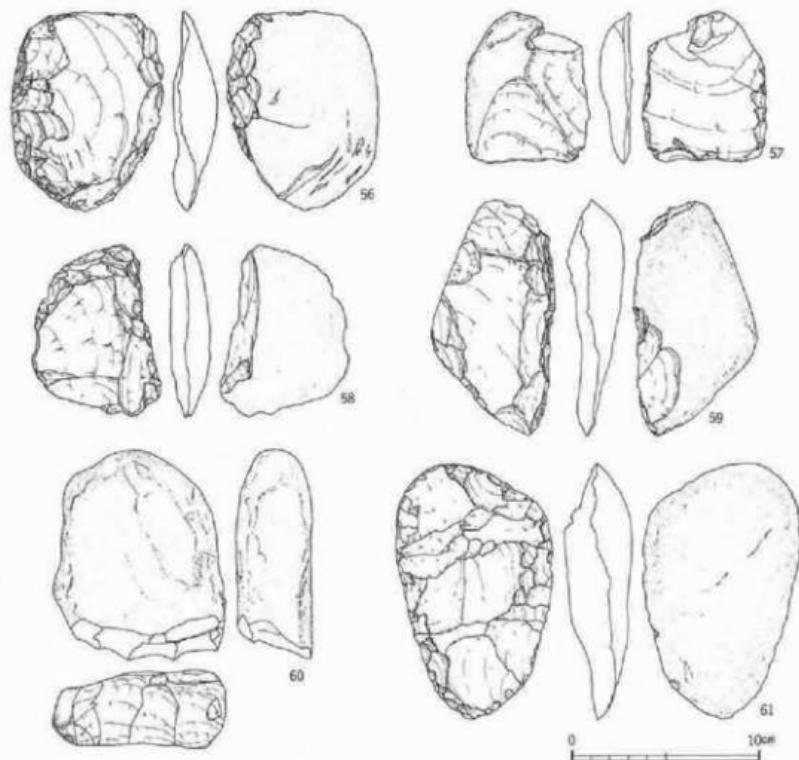


fig.18 縄文時代の石器 (1/3)

## 片刃形の石器 (35、38、62~69、73~82)

片側に大きく自然面や主要剝離面を残し、その面から刃部を作出し、舟底形石器の形態に類似する石器が22点発見された。遺物分布の分析を通して条痕文系土器との共伴が判明し、多くの調整剝片が出土しており、石器との接合もみられた。打製石斧や撲器と形態的に類似するが、極めて肉厚に仕上げられるものも存在する事から、それらとの対比は一時保留としておき、ひとまず「片刃形の石器」と呼んで説明しておきたい。名称については、十分な検討を踏まえて決定すべきと考えている。

本石器は22点で石器としては削器に次いで多い。さらに未製品も15点を数えることから、一つの独立した器種であるといえる。大きく厚さが3cm前後の肉厚なものと2cm弱の薄いものに分けられ、厚さによって平面形態が異なる。

1類 (63、68、74~80) 平面形態は長円形で側面観が舟底状を呈し、断面がカマボコ形

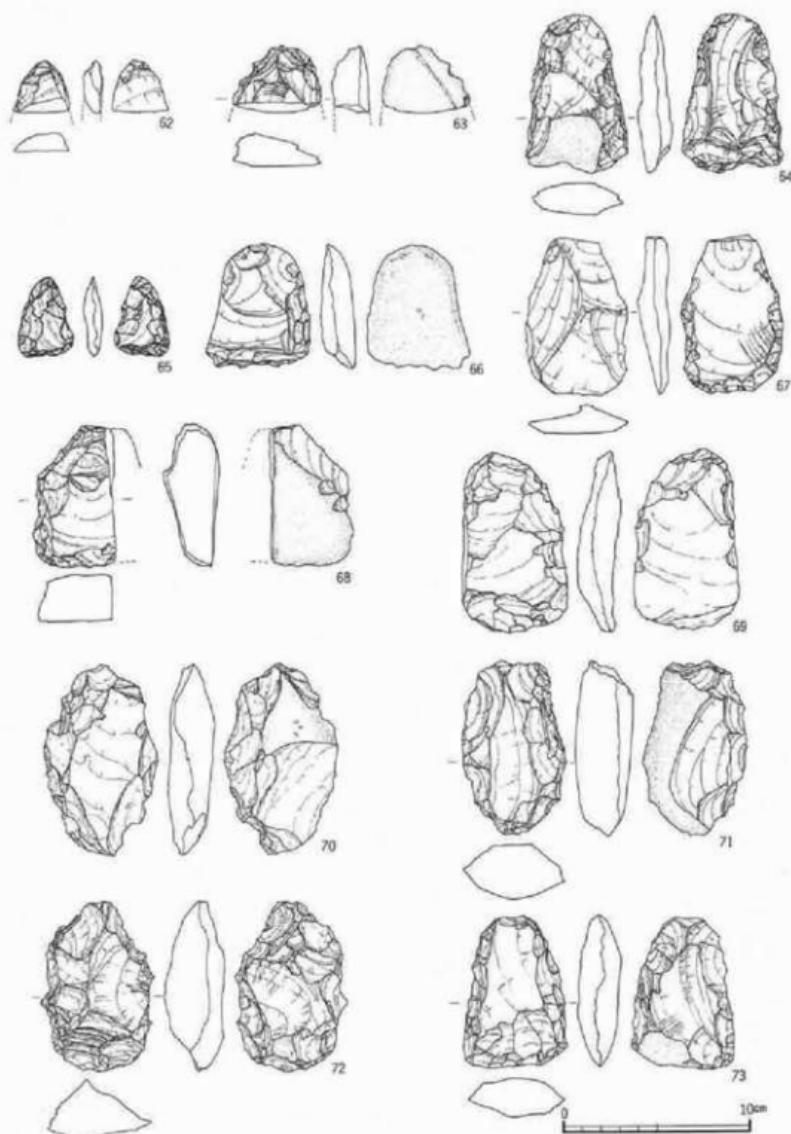


fig.19 縄文時代の石器 (1/3)

IV 遺跡の調査

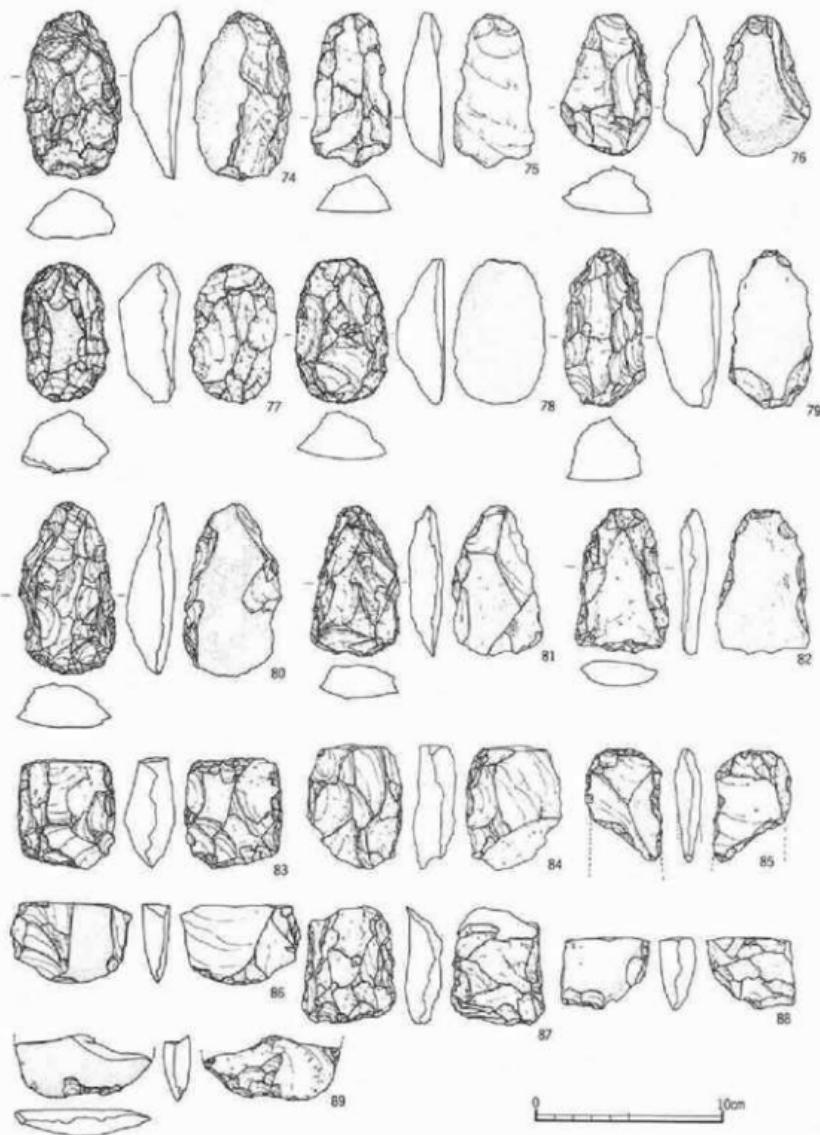


fig.20 縄文時代の石器 (1/3)

をなしている。腹面にあたる甲板は自然面で構成される78、一回の打撃で形成された剥離面の75、自然面にわずかな剥離を加えた74、76、79、80と全く自然面を残さない77の4つが存在する。いずれも側面調整は甲板側から施される。

**2類 (64、65、67、69、73、81、85)** 平面形は三角形状であり刃部も直線的に作出され側縁調整も両面加工である。断面はレンズ状を呈するが、刃部の作出は自然面側から片刃になされている。65は小形品であるが、本群の特徴を備えている。

**3類 (35、66)** ややざんぐりとしており、礫面を一部残している。形態的には不整である。しかし、刃部の作出や側縁調整のあり方は一方向からなされたため本石器の特徴を具備している。背面には自然面を残している。

**その他 (38+62)** 図示しなかったものを含め4点出土している。いずれも欠損した部分である。38と68は接合をみせる。

#### 片刃形の石器未製品 (25、36、37、39、43、44、54、70~72、84、89、95、96)

15点出土している。1、2類の片刃形の未製品は摘出できたが、3類は削器との分類が困難なため、点数は15点を上まわると見える。71、95は側縁調整がほぼ完了し、特に95は刃部と基部の作出に入る段階のものである。95から素材の大きさを推測すると長さ17~18cm、幅10cm前後の円盤を用いていると考えられる。

#### 打製石斧 (83、86~88、91~94、97、98)

10点出土している。大きく早期の所産である1類と前期のものである2類に分けられる。

**1類 (97)** 矽面を下部に残し、片面から刃部の作出が行なわれる。片刃形の石器と形態的にも刃部作出方法も共通する。

**2類 (91~93、98)** 基部は直線的に形成され、刃部はやや丸味を持って作出されている。91、93、98は両面から丁寧に調整がなされる。98には使用痕が顕著に見られる。

**その他 (83、86、87、88、94)** いずれも欠損部分である。83は再調整が見られ、円盤状石器に転用している事も考えられる。86は刃部に使用痕が見られる。

#### 礫器 (60) 不定形な扁平礫の一端に片刃を作出し、刃部を形成している。

**石核** 4点出土したが図示はしなかった。總て頁岩を用いているが、やや粗い質の材質である調整・使用痕のある剝片 39点出土している。図示はしなかった。

**剝片** 碎片を含めると更に数は増える。目的剝片は全体量のわずかであり、大多数は片刃形の石器等の調整剝片である。総数591点の石質は、頁岩577点、ハリ質安山岩12点、チャート2点である。

#### 磨石類 (99~107、117~120)

凹み、磨痕、敲打痕を単独で、あるいは組み合わせで有するもの。それぞれのあり方で凹石、磨石、敲石として記述をしてゆきたい。26点出土している。

**凹石 (99~105)** 両面に凹みを持つもの99~104、片面に持つもの105があり、104は中央の

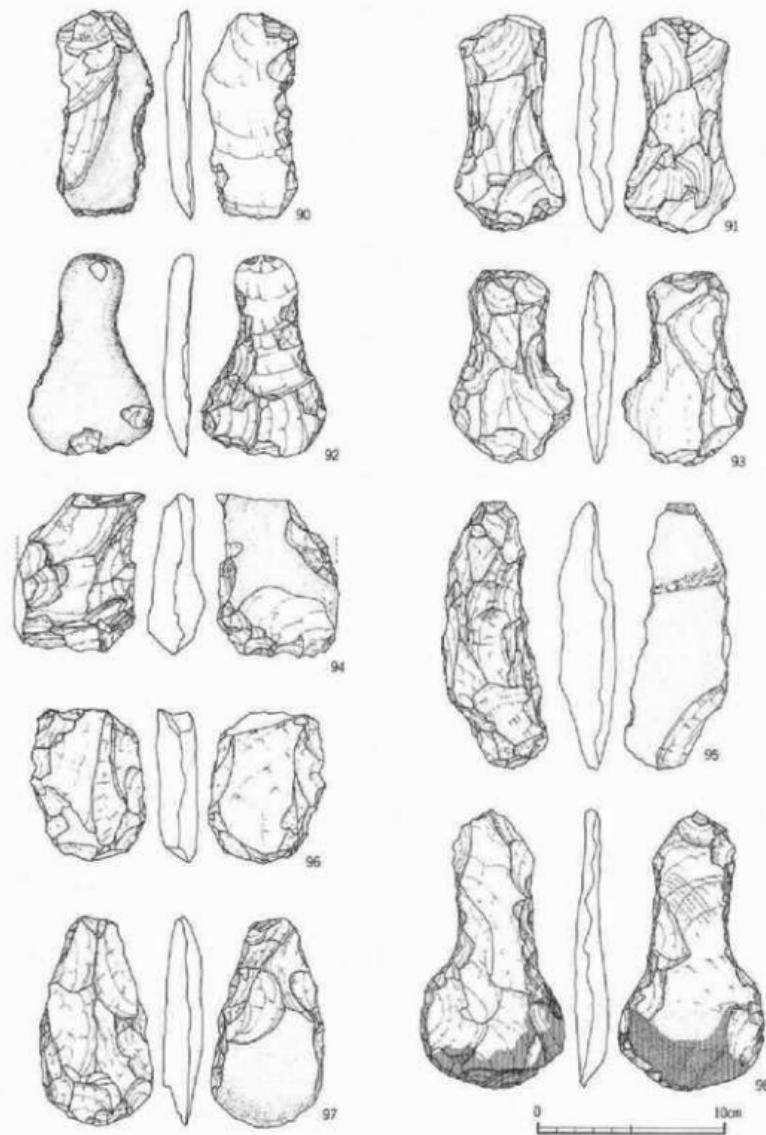


fig.21 犬走時代の石器 (1/3)

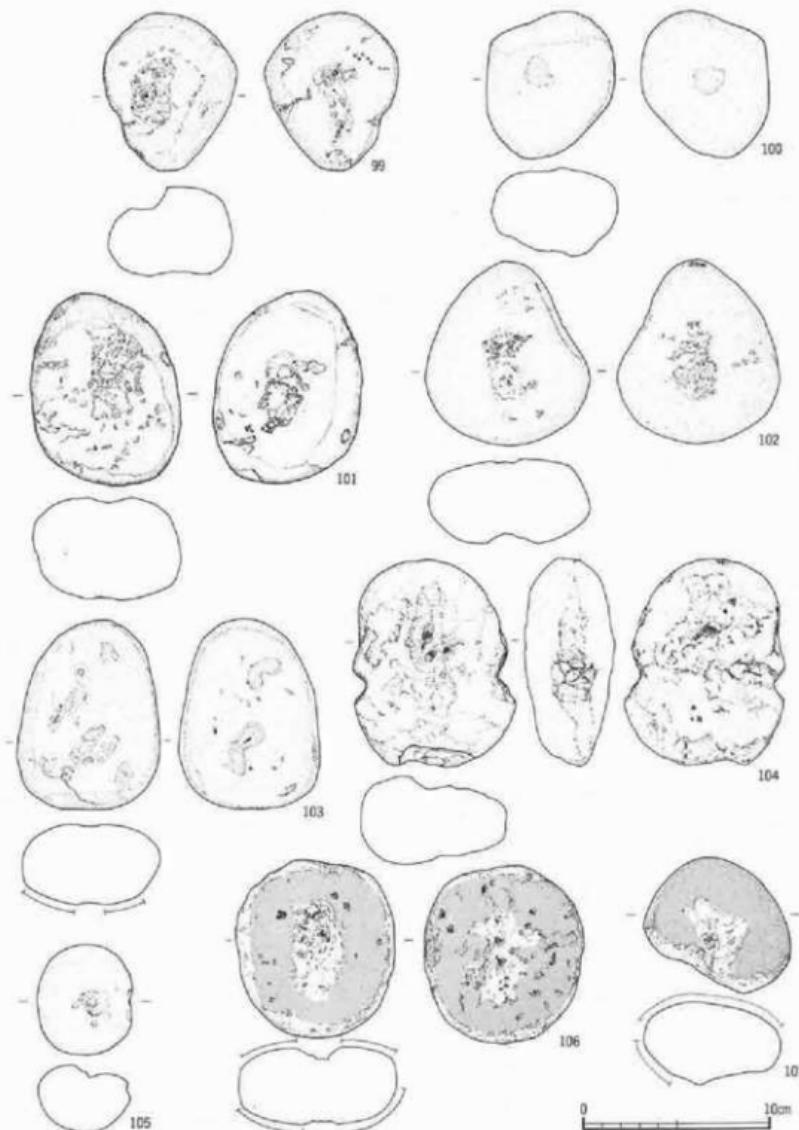


fig.22 縄文時代の石器 (1/3)

IV 遺跡の調査

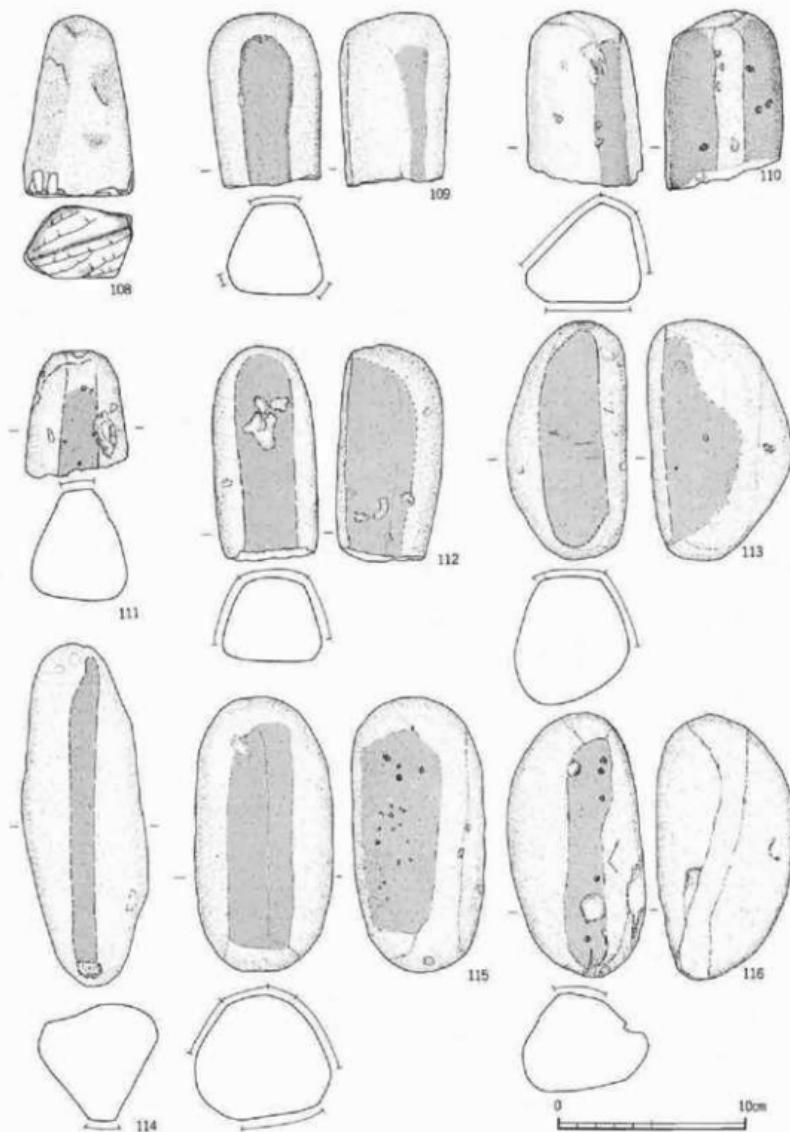


fig.23 純文時代の石器 (1/3)

側縁が打ち欠いてあり分銅形をなしている。

凹石と磨石（106、107、117） 117は一端に敲打痕を残している。

磨石（118～120） 120は4面とも使用されている。

スタンプ形石器（108） 5点出土した。棒状の円錐を分割し、その分割面に磨耗痕を残している。5点のうち108を含め3点に極めて明瞭な磨耗痕がみられる。素材は安山岩4、頁岩1である。

特殊磨石（109～116） 8点出土し、総て図示した。断面が三角形をなす、細長い円錐を素材として用いており、一稜に顕著な磨耗痕が観察される。109～111は半割れの礫となっており、欠損面はエッジが立っており、使用に際して分割したものではない。ただ、112の場合は分割面とその全周の稜に磨耗がみられることから、スタンプ形石器として転用されたか、両者の機能を併せもったものと考えられる。完存する113～116が存在することから、本来は円錐を分割しないで用いたと思われる。磨耗した面が三稜に見られるもの、一稜とその側縁にみられるもの、一稜だけにみられるものが存在するが、いずれの場合も一稜が顕著に使用されている。

蜂の巣石（121） 安山岩製である。表面に単孔が存在しており、径2.6cm、深さ1.6cmを測る。多くを欠損しているため、全体は不明である。

石皿（122） 安山岩を用いている。全面とも研磨による整形が行き届いている。欠損をしているが優品といえる。内面は使用による磨耗が著しく2.2cmほどすり減っている。遺物分布から前期の所産といえよう。

ストーン・リタッチャー 2点出土したが、図示はしなかった。2点出土し、1つは長さ8.7cm、幅4.4cm、厚さ2.9cmの礫面を残す調整痕のある剝片である。自然面に長さ3～5mm、幅0.5mmのねずみの歯形のような刻みが認められる。もう1つは長さ4.2cm、幅3.3cmの剝片であり、礫面に同様な痕跡を数多く残している。頁岩製である。

ハンマーストーン 長さ9.7cm、幅4.6cm、厚さ5.9cmのやや梢円形の河原石を用いている。上、下端に敲打痕を残しており、一端は加撃により大きく欠損している。

大形磨石 安山岩製で長さ38cm、幅18.5cm、厚さ9.2cmで直方体の円錐である。上面に磨耗痕を有し、稜線上に敲打痕を残している。

自然礫 人為的な調整は見られなかったが、集石、もしくは礫群を構成していた安山岩角礫が68個出土した。大きさは30cm大のものから5cm位までである。小さなものは加熱等により剥落したものと考えられる。多くの礫が赤化や割れが生じている。この他に径約5cmの安山岩小円錐が58個出土している。いずれも加工痕は見られない。

多野山地原産である結晶片岩円錐も大小含めると5点出土しており、注意を要する。

IV 遺跡の調査

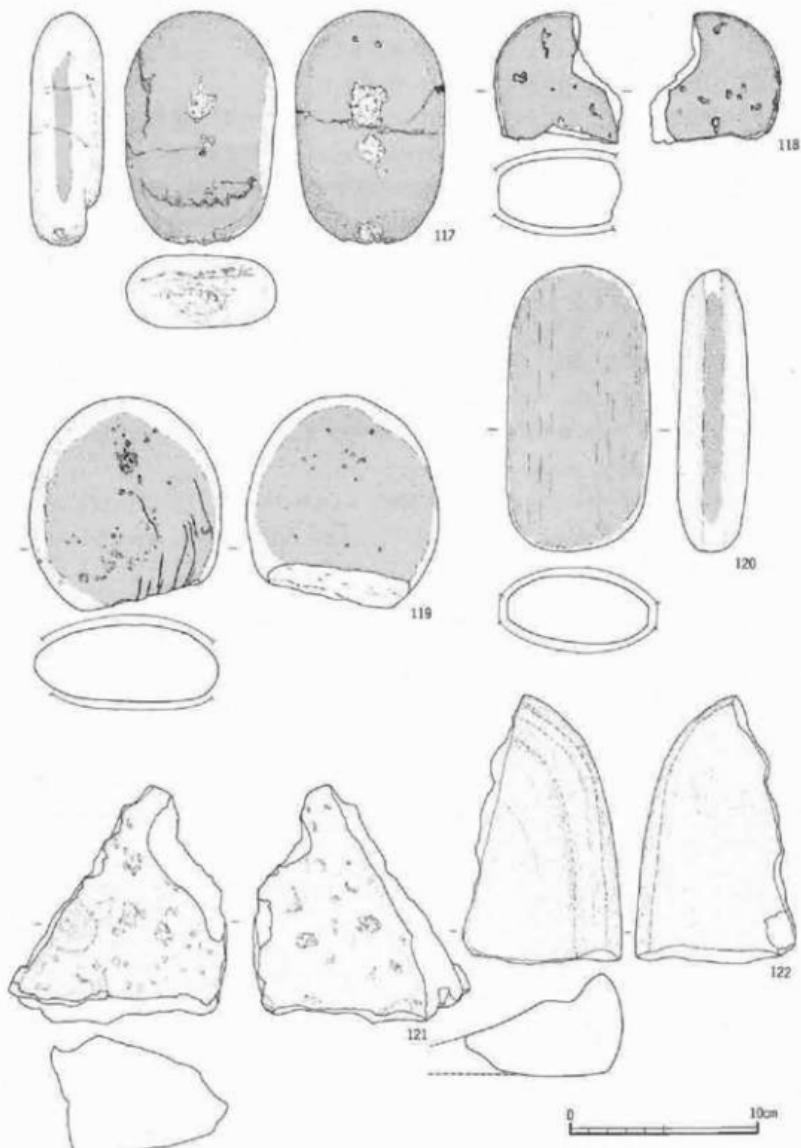


fig.24 縄文時代の石器 (1/3)

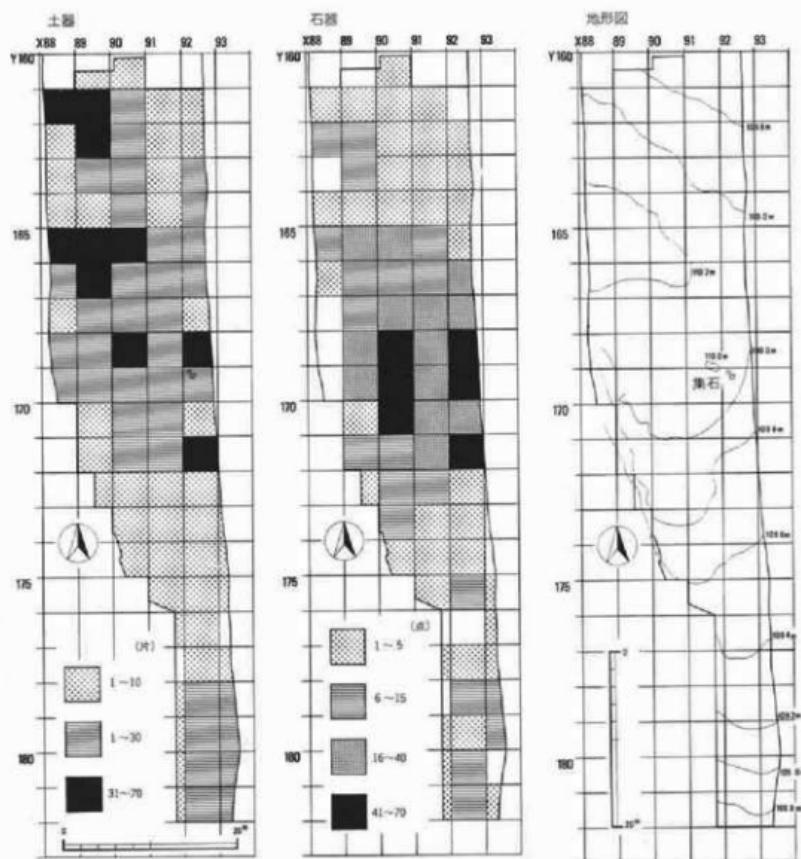


fig.25 包含層の地形と遺物分布図

## 遺物分布 (fig. 25~32、PL. 2・3)

**出土層位** 遺物は全体層序III層上部から出土しており、III層ソフトローム上面から30cm下に及んでいた。各土器群の垂直分布は、いずれも渾然として層位的区分は不可能であった。

**地形と遺物分布** 包含層の地形は8mで20cmと東へ極めて緩やかな傾斜であり、遺物分布には影響は及ばないものである。全土器分布は4ヶ所に著しい集中を見せるが、全石器分布はほぼ1ヶ所にまとまっている。全土器分布はこれからの分析によって時期的な違いである事が判明し、石器分布と重複する分布は時期が一致するものである。

#### IV 遺跡の調査

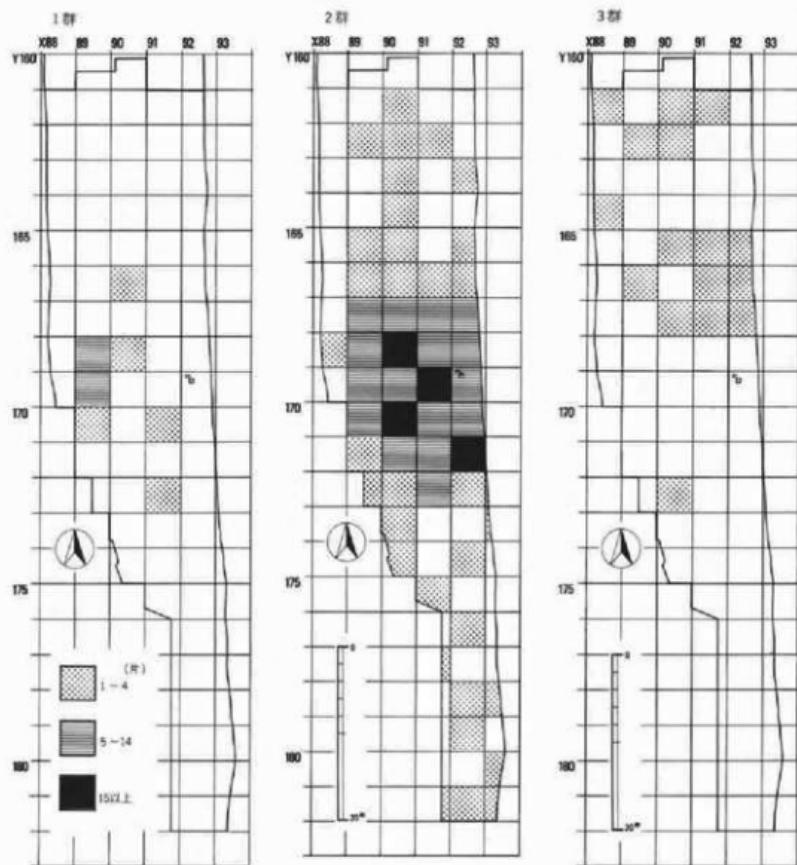


fig.26 縄文土器の時期別分布図

**土器群の分布** 1群土器である沈線文系土器群は調査区中央の西側に分布を見せる。続く2群の土器分布は1群の分布と重複しながら東へ拡大を見せる。型式学的に1群と2群に分類をしたが、土器分布を見ると重複をする事や2群1類A種の分布は1群とかなり共通する。2群1類A種は纖維を含まない無文土器である事から一層興味深い。2群の中でも2群2種ととらえた擦痕文土器は4群土器と共通する分布を見せる事から、4群土器との関係も考えられる。しかし、2群3類B種である条痕と連続刺突の土器も4群の南の分布域にある事から、検討の余地を残している。2群3類D<sub>1</sub>種、D<sub>2</sub>種は本群の圧倒数を占めるものであり、2群の土器分布を表出させてい

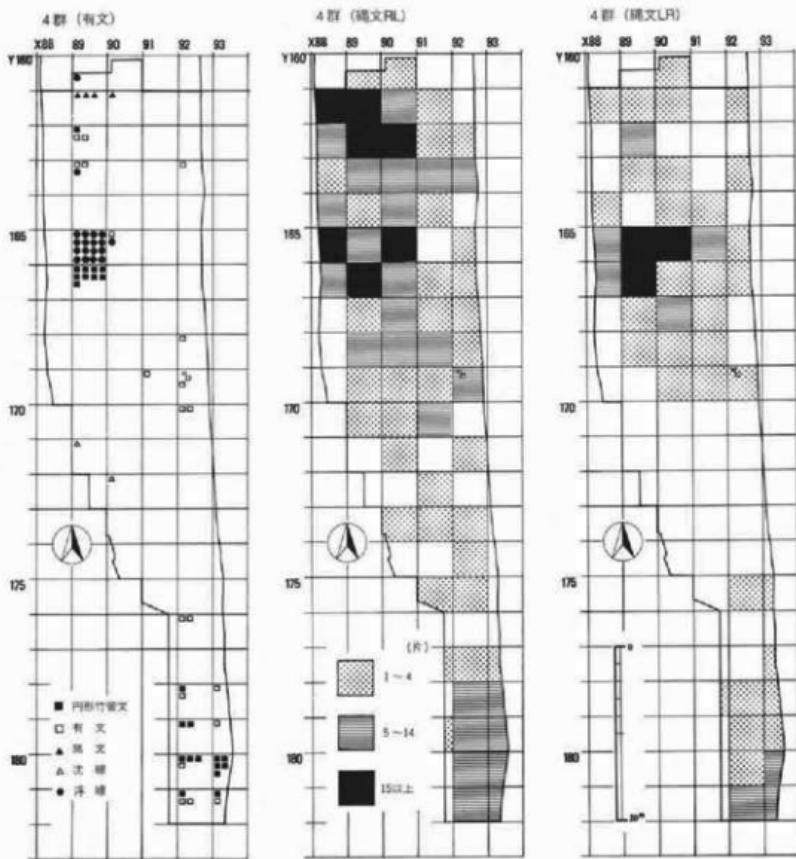


fig.27 縦文土器の時期別分布図

るものである。

3群土器は量的に少ないが、調査区の北半分にまとまって分布する。続く4群土器もややそれに似た分布を示すが、西への移動が見られる。4群土器は量的に多いため、文様別に分布図を作成した。まず意匠文を有する土器のうち円管文は、X89・Y166区の北側に集中し、更に南にも分布がみられる。こういった傾向は諸磯a式直前とされる一群に見られる事から、この時期から南と北の2ヶ所に分かれた占地が始まったといえる。諸磯b式である浮線文は北にまとまる事から、3～4群の占地は北→北・南→北への変遷も考えられる。

#### IV 道路の調査

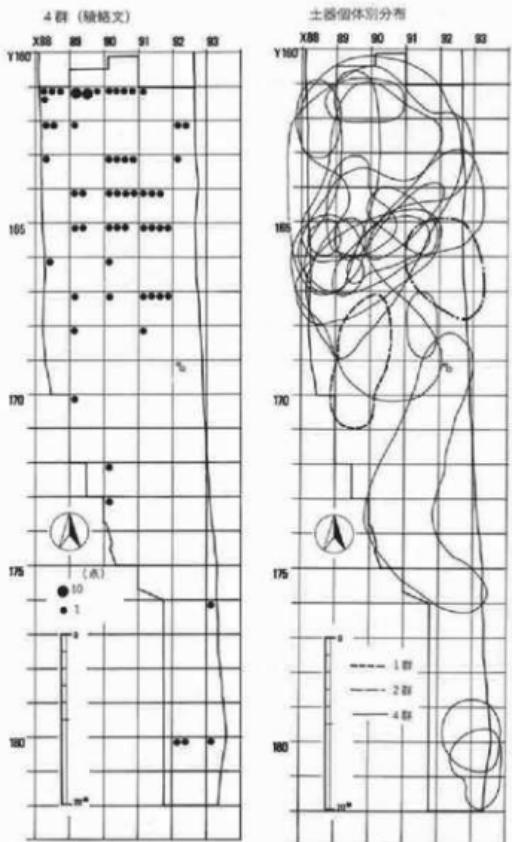


fig.28 縄文土器の時期別分布図

れ、調整に際して大きく主要剥離面を残している。4群土器のものは、形態が豊富といえ、全面に及ぶ調整剥離が見られる。この中で、有茎石錐の共伴は今後の検討課題である。

石錐未製品の分布は、2群土器と共に分布する事から、石錐の製作を示唆するものである。

打製石斧の分布は、1類が2群土器と一致した分布を見せ、2類は4群土器と一致している。1類は刃部の作出方法や側縁調整に「片刃形の石器」と類似した手法をとっている。2類の形態的特徴は4例とも共通しており、4群土器である諸磯a、b式期の指標となる打製石斧の形といえ、1類とは刃部作出方法に大きな相違が見られる。

縄文施文の土器をそれぞれ原体別に単節縄文 RL、LR、と綾縞文に分けて分布を見た。縄文 RL と LR の分布は集中する量がやや異なるが、同様な分布を見せ、綾縞文も共通している。

以上のように4群土器は文様別に分けたが、4図とも同様の分布が見られた。

**個体別分布** 土器の点数が1,370点と数が少なかったため極力同一個体の識別に努めた。その結果、数多くの同一個体が確認できた。土器群の分布と個体別分布を重複する事により、分布の実態がとらえられる。

**石錐の分布** 石錐の分布は中央から北にかけて見られ、このうち1類と2類は2群土器と重複をみせる。3類の有茎石錐は4群土器と一致をする。これらの特徴をとらえると2群土器に共伴する石錐は平基の無茎石錐が主体をなし凹基の無茎石錐で構成さ

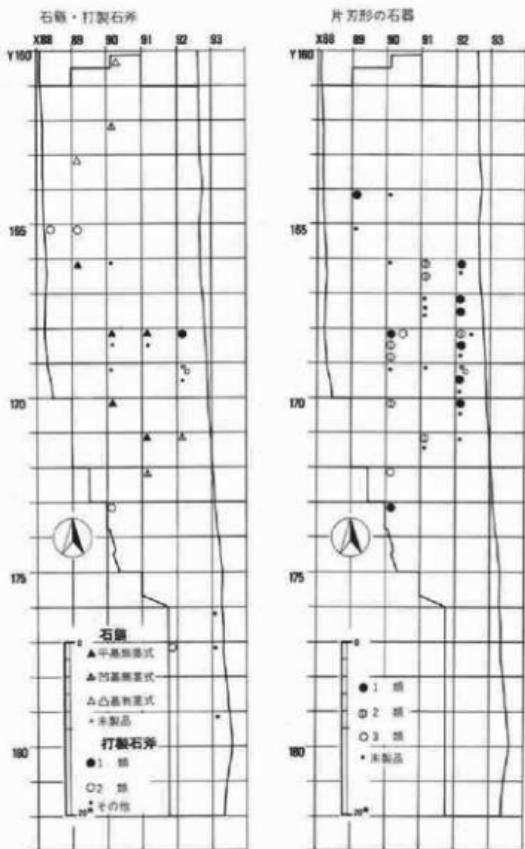


fig.29 器種別分布図

や何らかの理由により、それ自体が小さく軽いため移動した事が考えられ、石器製作は2群土器の時期と限定できるため、これらの拡がりを持つ剝片等の分布も、總て2群土器である条痕文系土器の時期といえる。

特殊磨石の分布は1群土器との重複が見られるが、それは2群土器分布の外縁部にも相当している。特に2群土器とした中の2群1類A種との係わりは他の2群土器より強いものと思われる。

スタンプ形石器の分布が特殊磨石と同じ分布を示す事は両器種の関連が第一に考えられる。時期的な共通もさることながら、用途・機能的にも関連している事が窺える。1群土器との共伴が

「片刃形の石器」は2群土器の分布と重複を示している。未製品についても同様の事が言える。2群土器の中でも、とりわけ2群3類D<sub>1</sub>、D<sub>3</sub>種の分布に共通した点が見られる。

削器の分布も2群土器分布と強い共通性が見られる。石器製作の際、数種類の器種が作出された結果といえる。

調整・使用痕のある剝片はやや北への広がりを見せるが、剝片の分布と共通する傾向を持っている。集中分布は2群土器との分布と一致を見せるが、周辺にも拡がりが認められる。剝片の分布は石材毎の分布の違いは認められない。剝片の集中範囲であるX89～X92、Y168～Y171区の12～16mの区域が製作の場として利用されていたと思われる。

先の使用・調整痕のある剝片と剝片が広範囲に分布する事は製作の際、飛び散った事

#### IV 連続の調査

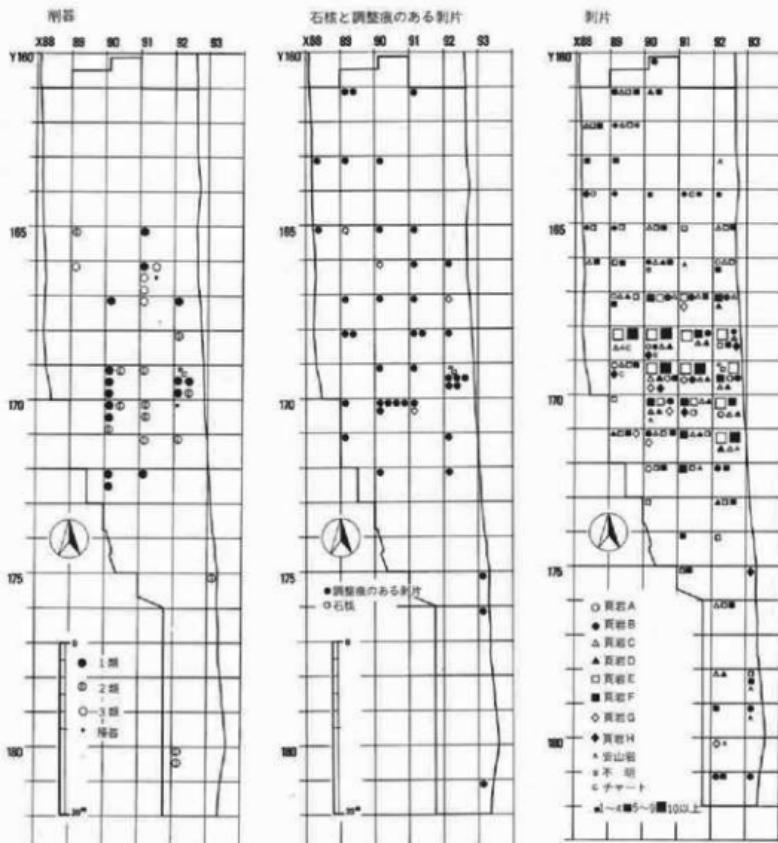


fig.30 器種別分布図

考えられるものであるが、1群土器と2群土器の分布範囲の関係、利器と礫を素材とする石器にそれぞれ分かれる。こういった関係にある事は、相互の器種構成が補填されれば1群と2群の同時期性が立証され、されなければ生業のあり方の違いに帰結されよう。

凹石、凹石・磨石は4群土器である諸磯a、b式の分布と共通する。この他にハンマーストーン、蜂の巣石、石皿も同様に4群土器と関連が考えられる。ストーンリッチャードは、X89・Y165区とX91・Y170区からそれぞれ1点ずつ出土しているが、石器製作用具であるため、2群土器との関連が考えられる。また大形の磨石も集石の近くであり、2群土器と関連を有し、場の中

## 1 下鶴谷遺跡

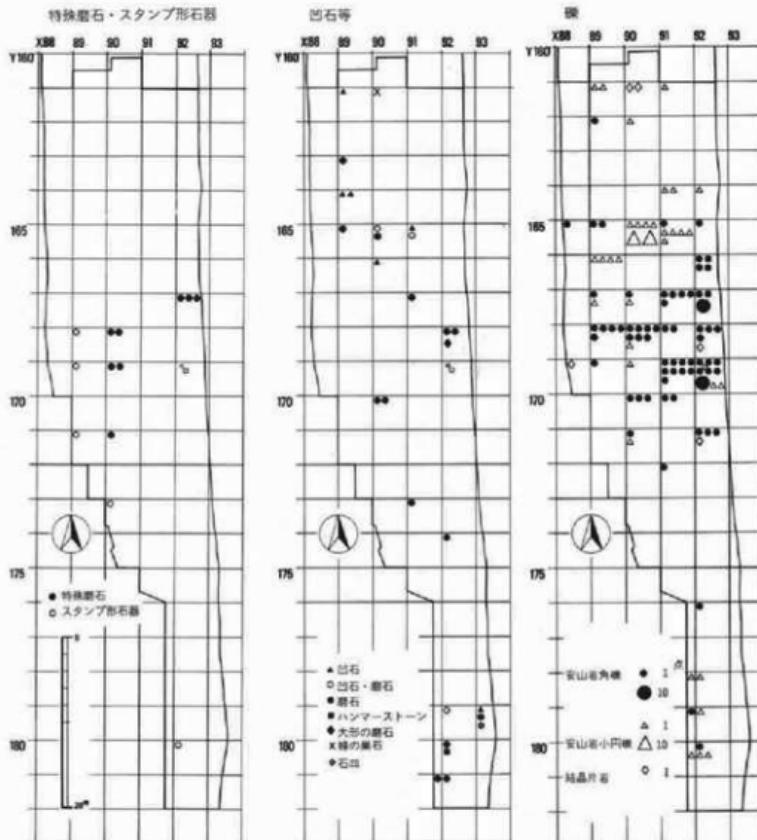


fig.31 器種別分布図

核ともいう所に位置している。磨石はほぼ全域に点在しており、所属する時期が決定できないが、先の凹石・磨石との関連から4群土器との関係を想定できる。

**自然礫の分布** 安山岩の角礫は集石との関連が見い出せ、その分布も2群土器と共通する事から、2群土器の時期に使用されたものと言える。安山岩の卵大の円礫は用途不明であるものの4群土器の分布と一致している。結晶片岩は2群土器の胎土に混入される事から原材料として搬入された事も十分に考えられるが、石器時代の全般に渡って、結晶片岩の移動が見られる。

**石器の接合** 整理期間に制約があったため、接合は完全にはできていない。最終的には石器と

IV 道路の調査

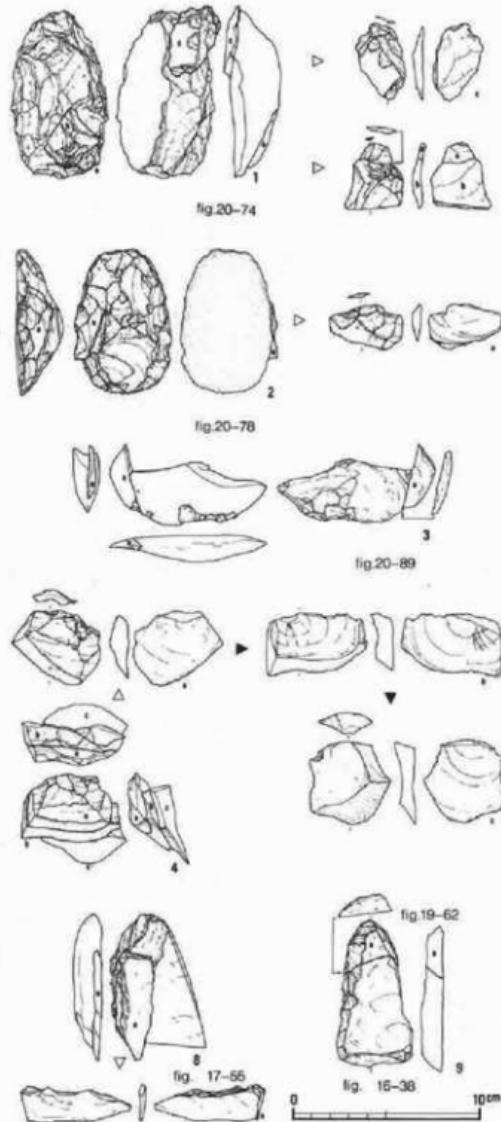
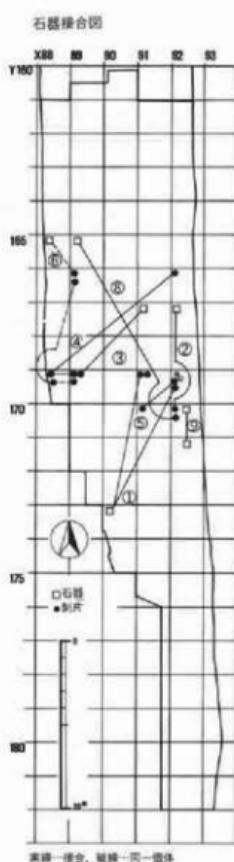


fig.32 石器接合図

剝片の分布図が接合線で接続されるものと想定できるが、接合によって、石器製作空間を決定でき、石器と剝片の関係が立証された。接合できた9例は石器と剝片、剝片と剝片がある。剝片剝離技術の点については今後の整理を進めて言及しなければならないが、接合資料のあり方から石器製作の範囲が確定でき、特に集石周辺を含め数ヶ所で石器の製作が行なわれていた。1、2、5、9が集石周辺の製作を示すもので、3、4、6～8は別の地点といえる。

ここで、接合図と関連して1群土器、特殊磨石、スタンプ形石器の分布図を重複させると、重なる事が再び問題点として浮かび上がってくるのである。

以上、土器と石器の分布から共伴関係についての検討を行った。しかし、両者の機能・用途は異なるため、利用する場の違いが分布に示される事も考えられるが、本遺跡の場合には、分布のあり方から土器と石器の空間利用は共通するものと理解できた。また、2群土器である条痕文系土器の時期には石器製作がなされており、予想以上の分析結果を得られた。

今回の分析した範囲は全体の2割にも満たない面積であるため、今後残された部分の調査の実施と分析により、空間の利用方法や占地の変遷、土器と石器の伴出関係をより明らかにする事が可能となり、遺跡の実態を把握できるものと考えている。

(前原 豊)

## 2 柳久保遺跡

今年度調査した幹線道路予定地のうち、通称「深堀」と宮川に挟まれ南々東に延びる舌状台地の部分にある。東西幅30mで、台地の西寄りに掛かるため西側240m、東側280mの南北に長い帯状の先端が斜めに切り取られた形をしている。柳久保遺跡群の概ねX83～92、Y64～135グリッドの範囲にある。標高は最北で114.2m、全長のおよそ6分の5南の110mの等高線までは緩やかな傾斜であるが、そこから南は、遺跡の形状に沿った南西向きの急坂となり、最南端は、標高105mの等高線が通っている。

本柳久保遺跡で検出された遺構は、古墳時代中期の住居址5軒、同時代と考えられる土坑2及び遺物集中区1か所、縄文時代土坑1、平安後期の溝2条、その他自然現象の跡としての古墳時代の地割れがあげられる。その他遺構は伴わないが、縄文時代早期の土器片、先土器時代の剝片及び石材と考えられる礫が検出されている。

5軒の住居址は遺跡の中間点よりやや南からさらに南へ40mの範囲に散在している。5軒とも等高線111mから112mのラインの中に入る。土坑1基もまた、この範囲であり、他の1基は、遺跡の最北端東端、遺物集中区は住居範囲から北へ30m程のこれも遺跡の東端にあり、この時代の遺構が東へ広がる可能性を窺わせる。縄文時代の土坑は、住居範囲南側、急坂の始まりよりやや内側に、溝2条は遺跡の南端の急坂にかかっている。地割れは、遺跡の北端から3分の1程南の東寄りに集中している。縄文時代早期の土器片は住居址の覆土から、先土器時代剝片は南の急坂にかかる地点、礫はそれよりやや北寄りと地割れ付近のいずれもVII層暗色帶からの出土である。

(前原照子)

#### IV 遺跡の調査

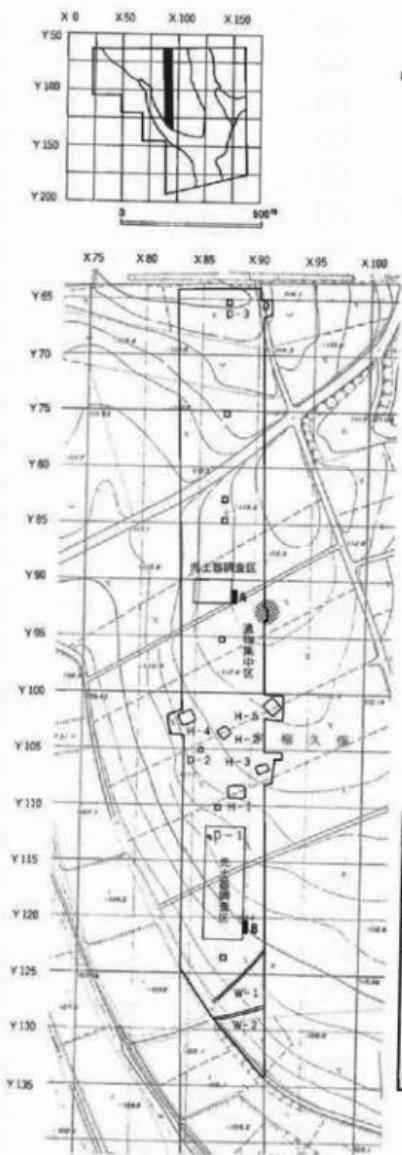
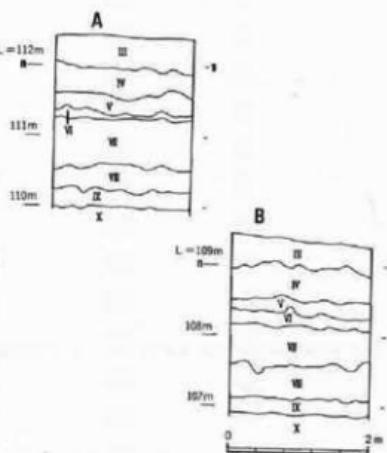


fig.33 柳久保遺跡全体図 (1/2,000)



- III 層 黄褐色細砂層。縦文包含層。
- IV 層 明褐色葉砂層。
- V 層 明黄褐色微砂層。BPの主体層。
- VI 層 明黄褐色微砂層。
- VII 層 暗色微砂層。暗色帶。
- VIII 層 暗色微砂層。下部にHPを含む。
- IX 層 明黄褐色礫質石層。HP純層。
- X 層 暗色粘土層。VII層とは整合面をなす。

#### (1) 先土器時代

本時代の調査は、X87ラインに沿って約20m置きに2mの細グリッドを12ヶ所に設定しVII層(暗色帶)下部まで掘り下げた。

その結果、X87、Y117区のVII層上部から黒曜石製の剝片が1点出土した (fig.34)。周囲を616m<sup>2</sup>拡張したが、X86、Y120区VII層上面から結晶片岩自然疊1点の出土にとどまった。

また、X87、Y90区のVII層上面からチャート自然疊2点が検出されたため、96m<sup>2</sup>の拡張を実施したが、遺物は全く検出されなかった。

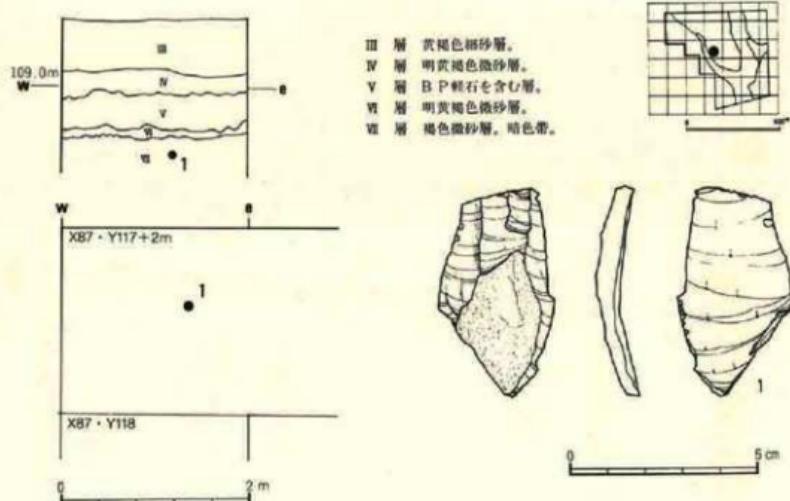


fig.34 先土器時代の剝片 (2/3) と出土地点 (1/60)

## (2) 繩文時代

遺構は検出されなかつたが、遺跡全域に早期から前期にかけての遺物が散見された。fig.35はX87、Y109区から出土した山形押型文である。文様は縦位に施文されており、赤褐色を呈する砂粒の少ない良好な胎土である。fig.36の1は頁岩製の三角錐形石器である。断面は四角形を呈し、一面に疊面を残している。疊面は下端を欠損している。2はチャート製の石鏃であり、先端と基部を欠損している。但し、2は柳久保水田址からの出土である。

(前原 豊)

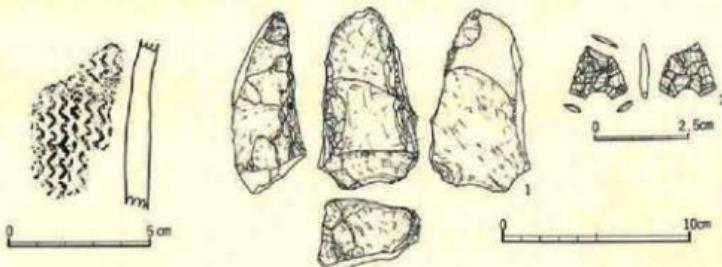


fig.35 押型文土器 (1/2)

fig.36 三角錐形石器と石鏃 (1/3, 2/3)

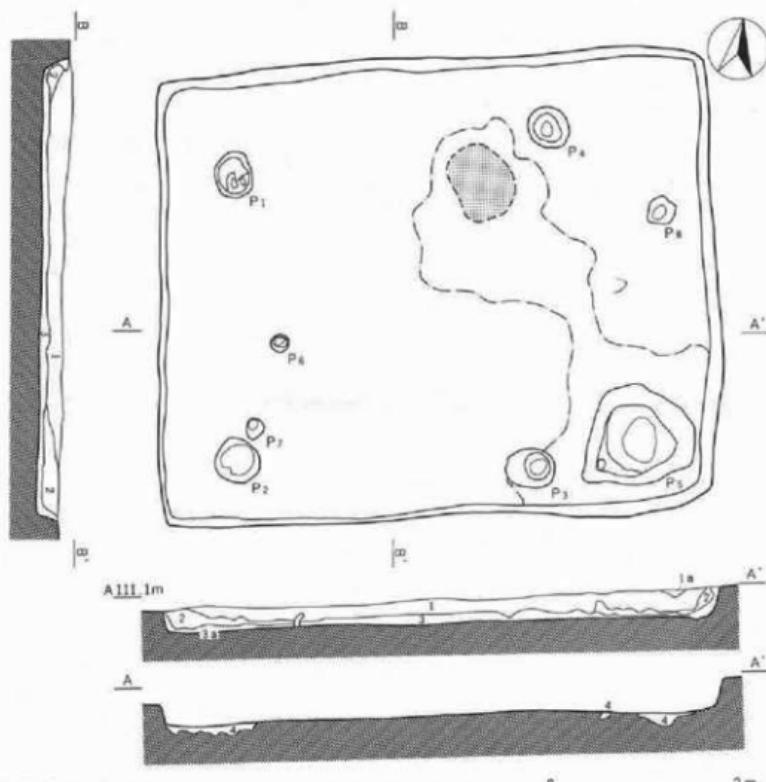
#### IV 遺跡の調査

##### (3) 古墳時代

###### H-1号住居址

遺構 (fig.37、PL. 6)

南北に延びる御久保遺跡は、標高110mラインから、南西に向かって急速に落ち込む。そのライ



- 1 層 黒褐色粗砂層。C軽石（φ1～2mm前後）を30%程含む。粘性、繊りともに欠ける。
- 1a 層 黒色粗砂層。C軽石（φ1～2mm前後）を20%程含む。粘性、繊りともに欠ける。
- 2 層 暗褐色細砂層。C軽石（φ1mm前後）を5%程含む。粘性、繊りともにある。
- 3 層 オリーブ褐色細砂層。ローム土を主体とする。粘性、繊りともにある。
- 3a 層 オリーブ褐色細砂層。3層に似るが色調の違いをやや見る。
- 4 層 黒褐色粗砂層。軽石（φ3mm前後）を3%程含む。ソフトローム中に黒褐色土が不均一に混じる。

fig.37 H-1号住居址 (1/60)

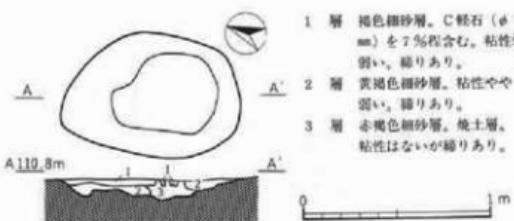


fig.38 H-1号住居跡 (1/30)

遺跡の中央よりわずか東に寄っている。所在グリッドは、X88~90、Y108~110、全体層序の第III層、よがれたソフトローム上面で検出された。平面は、短軸5.04m、長軸6.08mで、短軸と長軸の比が1:1.2となるわずか平行四辺形気味の長方形である。面積は、29.10m<sup>2</sup>、主軸方向は、N-6°-Wである。確認面からの壁高は、北東角が最大で35.5cm、南西角が最小で16cm、平均24.9cmとなる。ソフトロームを切り込んだ竪穴住居のため、堅い壁ではなく、特に南と西壁は確認しにくかった。壁の立ち上がりは、55°~82°で平均66°の傾きを持つ。床面の状況は、炉址周辺と貯蔵穴と考えられるP<sub>5</sub>周辺に堅緻な床が検出されたが、他は、覆土と床の区別もかなりむずかしかった。ピットはP<sub>5</sub>を含め7個検出された。計測値は下表の通りである。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、一見主柱穴とも見えるが、位置的に疑問が残る上、深さも主柱穴にしては浅いので何とも言えない。貼り床は認められなかった。

tab.5 H-1号住居跡ピット一覧表

番号	形 状	大きさ	深さ
P <sub>1</sub>	不整橢円形	51 × 40	24
P <sub>2</sub>	不整円形	50 × 46	13
P <sub>3</sub>	不整橢円形	53 × 43	29
P <sub>4</sub>	不整円形	46 × 42	19
P <sub>5</sub>	不整円形	119 × 108	73
P <sub>6</sub>	#	20 × 18	28
P <sub>7</sub>	#	22 × 17	
P <sub>8</sub>	#	33 × 29	21

遺物の出土状態 (fig. 39・40、PL. 6)

遺物は、住居内北東の炉址と東壁の間、P<sub>5</sub>の内部とその北側、P<sub>2</sub>から南壁の間の三か所で集中が見られた。大きく見れば、2個体分の遺物を除いては、東壁寄りに集中していた。垂直分布は床面に着いての出土が多い。塙1は、北東隅の床直上に破片が集中、1片だけ南壁中央やや東寄りに床上12cmで検出された。塙2は、P<sub>5</sub>内とその周辺で、直径3m前後の範囲に比較的拡散した出土であり、1片は住居壁外にあった。塙3は、P<sub>5</sub>に接した北側の床直上に集中し、一部は、P<sub>5</sub>内に流れ込んだ状態だった。高杯4は、住居北西隅の集中箇所にほとんどまとめて出土。高杯5は、西壁近くのやや南寄り、床上10cm前後で検出。高杯脚6は、住居南東隅からP<sub>5</sub>の縁に懸った状態で出土。高杯脚7は、住居北東寄りP<sub>4</sub>直上に、北壁に平行で据部を東に向か、横転していた。

ンから台地の内側に、およそ20mの間隔を置いて住居址の分布が始まる。本遺構は、5軒の住居址のうちの最南にあり、H-3を北東方向6.8mに、H-2を北々西16mに望む。南西に向く緩傾斜が他の住居址に比べ急な地点であり

焼土の堆積は、住居の北東部やや中央寄りに検出された。炉址は、長軸がN-33°-Wの傾きを持つ不整橢円形で、規模は191cm×136cmを測る。底部は凹凸のある舟底形で、最深部は床面から11cmで、中央よりやや南にある。最深部分を中心に径30cmの範囲によく焼けた焼土の堆積が見られた。

IV 遺跡の調査

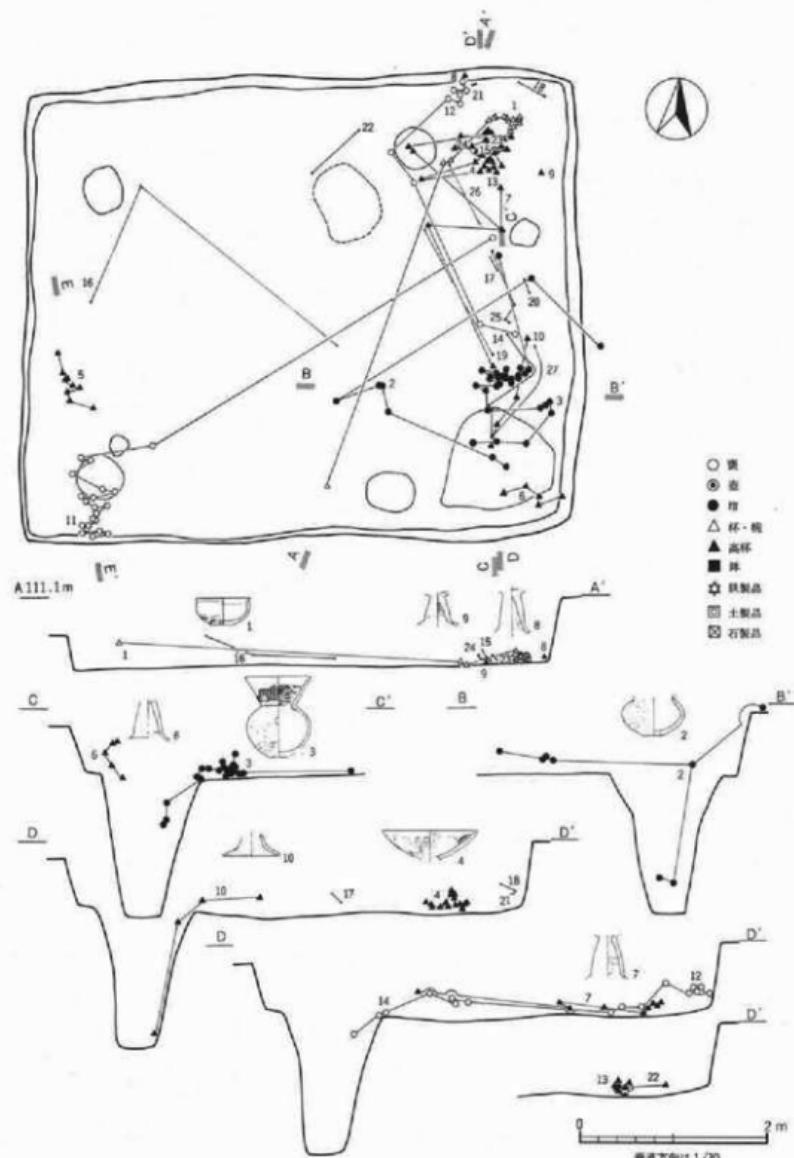


fig.39 H-1号住居址土器接合図 (1/60)

高杯脚8は、北東角より1m程西に寄った北壁の落ち込み際に、壠部を上にして逆転した状態で出土。高杯脚9は東壁から35cm、北壁から110cmの位置に壠を南に向け床直上に横転していた。高杯脚10は、P<sub>2</sub>の底近くから北縁を伝うように床上までの散らばりを見せる。壠11は、口縁部を上にし、北西方向20°の傾きで出土した。器種別に出土地点を見れば、北東隅近くの集中は、高杯と杯であり、壠は住居南東側にまとまる。その他、高杯は全般的に、住居の壁際に散らばっている。なお、ほとんど破損のない状態で出土した遺物は見られなかった。

#### 出土遺物 (fig. 41, PL. 19)

本住居からの出土遺物総数は、260片である。数点の流れ込みと見られる石器類を除けば、すべて土器器である。復元の結果、杯1個、壠3個体分、高杯9個体分以上、壠3個体分以上が数えられる。ほとんどがかなりの破片数からの復元であったが、1個体の破片の散らばりは、割合少なく、位置も床面近くにまとまりが見られ、たまたま遠い破片の場合も1~2個の破片が、集中部から離れている場合が多い。なお、接合できた破片数は、175片で土器片全体の67%にあたる。

一番出土数の多い高杯のうち実測できた7個体を比較すれば、杯部残存の4・5の場合、稜がなく、脚との接合部からやや膨らみを持って一気に口縁部に統くやや深い皿形の4は、胎土、焼成とも、いったん横に開き、鈍い稜を持って斜めに直線的に開く5より、粗く不良であり、暗文は、表裏とも幅が広く、間隔が結まっている。高杯の脚6~9では、9が他の3個体に比べ、丈も短く器面調整も松の木の皮のような肌であり、胎土に軽石粒が多く混じる。6・7・8は、器形高さ、太さに差はあるが、胎土、焼成、器面調整は、共に良好である。壠2~3は、胎土、焼成、調整とも3の方が良好であり、特に外面調整は丁寧にできている。

#### まとめ

本住居址は5軒の住居址の中で一番南にあり、二番目の規模を持つ。短軸と長軸の比が1:1.2となる長方形で、長軸を出入口の方向と考えれば、ほぼ南に向いている。炉址と貯蔵穴を持ち、主柱穴と思われるピットはない。貼床もない。出土遺物は、すべて土器器で、器種は高杯が過半数を占め、次は壠である。遺構、遺物から古墳時代中期和泉期の住居と考えられる。

(前原照子)

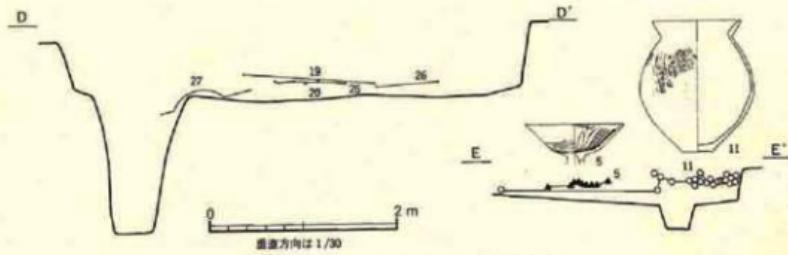


fig 40 H-1号住居址土器接合図 (1/60)

IV 遺跡の調査

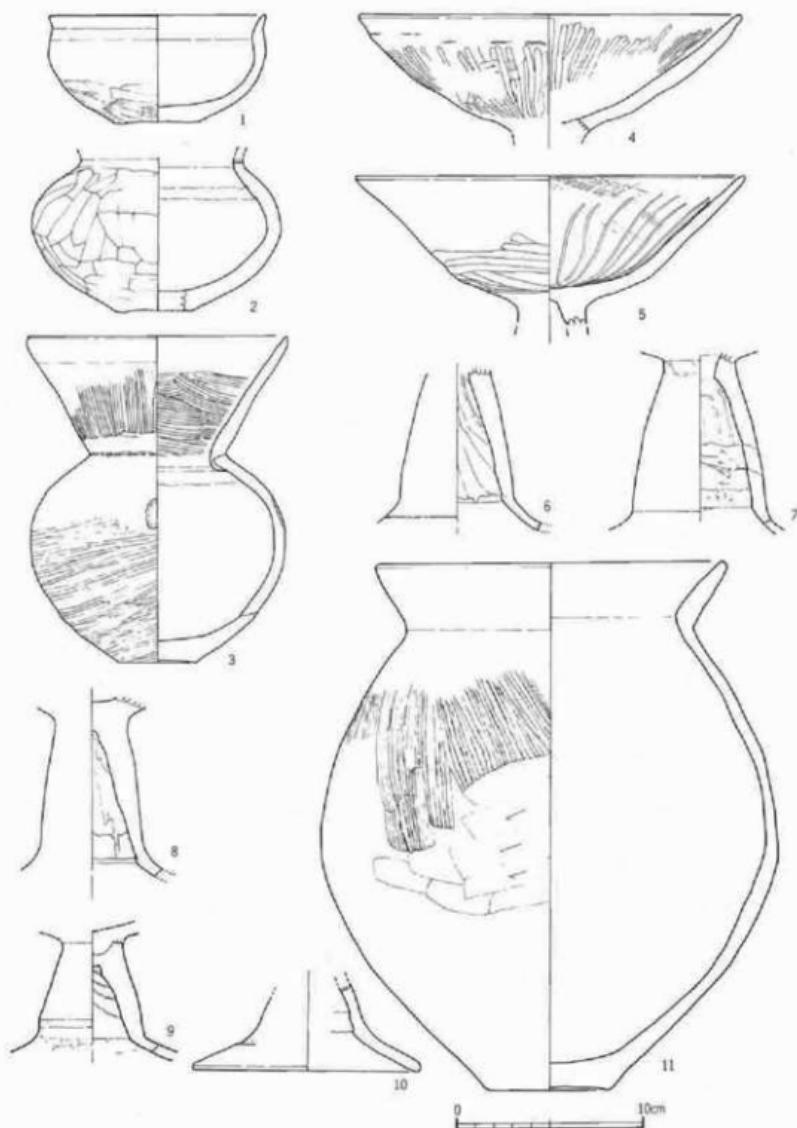


fig.41 H-1号住居址出土遺物 (1/3)

## H-2号住居址

## 遺構 (fig. 42・43、PL. 7)

本住居址はX87・88、Y104・105グリッドに所在し、標高でみるとH-4・H-3号住居と並ぶレベルで南西にゆるく傾斜する位置にある。耕作土を30cm程下げる全体層序II層下面からの検出である。住居の形状は東西4.04m、南北3.60m、短軸を1とすると長軸1.12の台形に近い不整な正方形で面積は13.48m<sup>2</sup>を測る。短軸方位はN-44°-Wを示す。

確認面は地形に沿って北東から南西にかけ10~15cm下がる。覆土は暗褐色・オリーブ褐色のローム漸移土が主体をなし、2次堆積のφ1~3mmのC軽石を20~25%を含む。壁高は最大25.5cm、最小13.5cm、平均20.1cmで西壁が東壁と比べ低い。壁はソフトローム土で、覆土との違いは軽石の有無によって明確に検出できた。壁の立ち上がり角は平均75.0°である。床面の構築層位はソフトローム土で形成されやや軟質であるが住居中央部に踏み固められた面を確認できた。東壁際の床

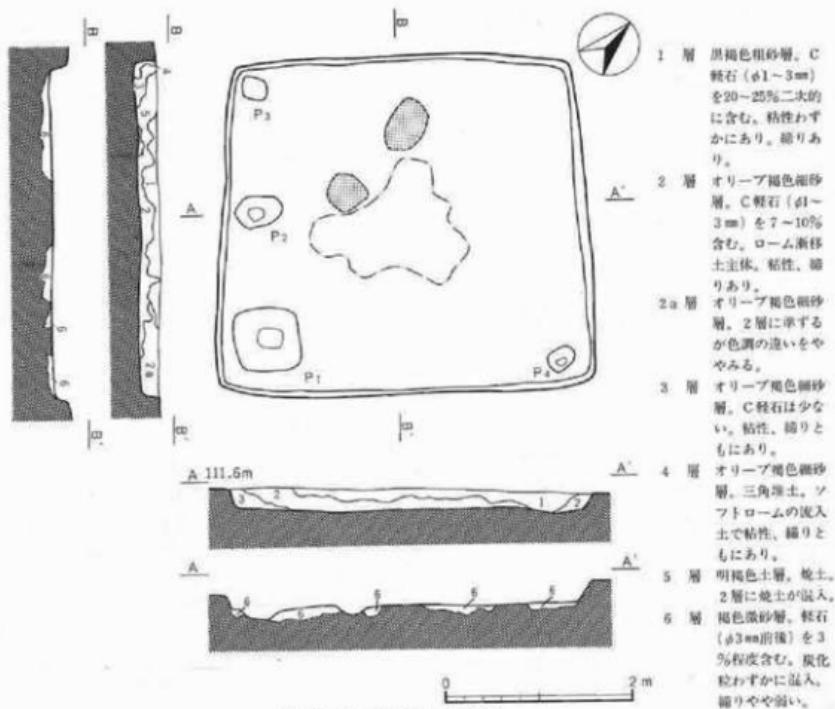


fig 42 H-2号住居址 (1/60)

#### IV 遺跡の調査

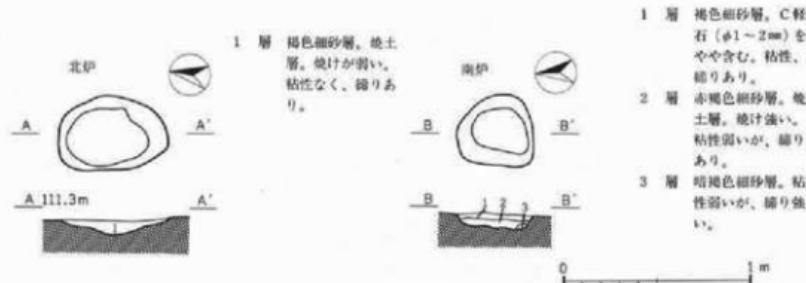


fig.43 H-2号住居炉址 (1/30)

面の平均レベルは111.28m、同じく西は111.24mで東から西にかけ4~5cm下がる。ピットは4個検出された。 $P_1$ は南西隅に所在し $72 \times 68\text{cm}$ 、深さ33.3cmの貯蔵穴。 $P_2$ は西壁に沿って中央部に所在し $50 \times 34\text{cm}$ 、深さ13.3cm。 $P_3$ は北西隅に所在し $24 \times 20\text{cm}$ 、深さ6.05cm。 $P_4$ は南東隅に所在し $30 \times 22\text{cm}$ 、深さ13.5cmを測る。床面の掘り方は凹凸が少なく軟質であった。炉址は中央部堅緻面の西で2個検出した。北の1号炉址は $52 \times 36\text{cm}$ 、深さ8cm、南の2号炉址は $38 \times 36\text{cm}$ 、深さ9cmを測る。ともに焼土層の検出で確認したが炭化物は見られない。

#### 遺物の出土状態 (fig. 45, PL. 7)

平面上から分布をみると、住居中央部および $P_1$ 周辺に集中し他はまばらな散布である。垂直分布上では床面直上もしくはやや浮いた層位での出土が中心となる。

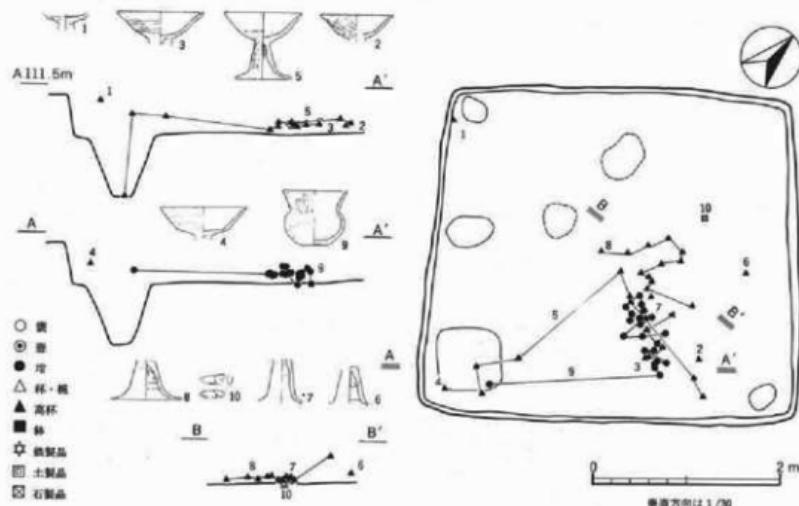


fig.44 H-2号住居址土器接合図 (1/60)

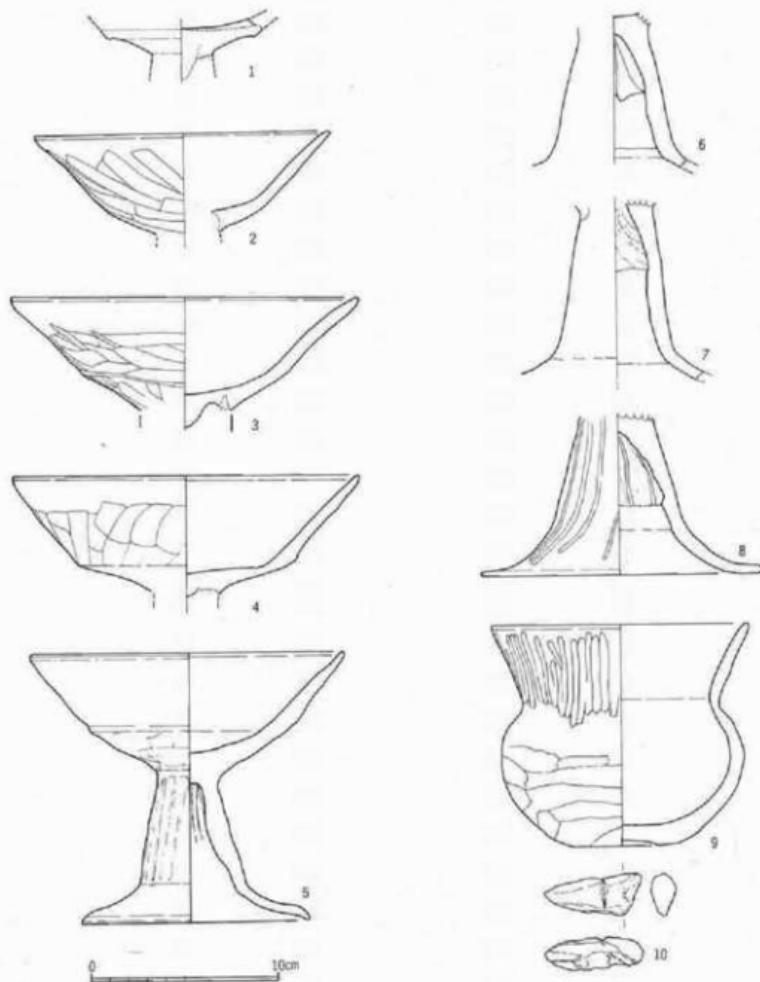


fig.45 H-2号住居址出土遺物 (1/3)

高杯1は西壁に接して北へ10°の傾きをもって出土。高杯2は口縁を下に伏せた形でやや浮いて出土。高杯3は南壁に近く0.4×0.6mの範囲で高杯5の下位に浮いて出土。高杯4は南西隅に口縁から底部に向け南へ50°の傾きをもって杯部完形で出土。高杯5はP<sub>1</sub>から東にかけ1.4×2.4mの範囲で9片に散って出土し、うち1片はP<sub>1</sub>内底部直上で出土。高杯脚で復元実測可能な個体は3つ

#### IV 遺跡の調査

あり、6は東壁に近く、7・8は中央寄りで出土した。塙9は南側に1×2mの範囲で22点の接合片をもって出土した。以上出土状態を見ると、5・8が出土レベルに顕著な高低をもち、他はほぼ水平に近いレベルでの出土である。

##### 出土遺物 (fig. 44, PL. 19)

総数90点で他の住居と比べ最も少ない。内訳は土師87点、礫2点、土製品1点である。実測可能な個体9個のうち塙9を除いて他は高杯である。高杯は杯部洞下半に全て弱い縦をもち1・2・4の内面底面は平坦に作出されている。塙9の底部は掲げ底である。

##### まとめ

本住居址の出土土器片は90片のうちの73%の66点が接合関係を有する。接合率が高い事や器種は塙、高杯でほぼ占められる傾向がある。住居の所産時期は住居構造、遺物から和泉期と考えられる。

(浜田博一)

#### H-3号住居址

##### 遺構 (fig. 46・47, PL. 8)

本住居址は柳久保遺跡が占地する舌状台地のほぼ中央の鞍部西側に位置する。地形は南々西に向かっており、約45度の緩傾斜面ではほぼ平坦といえよう。現況での標高112m付近であり、検出面では、111.4mを測る。南西7mにH-1住、北15mにH-5号住、北西15mにH-2住、最も離れたH-4住は北西27mと分散して存在している。集落構成は標高111mから113mにかけて見られ、東西100m、南北80mに亘って展開するものと推定される。

所在するグリッドはX90・91、Y106・107区であり、東西4.11m、南北3.40mの面積13.5m<sup>2</sup>のやや南壁がはり出す長方形の平面形をなしている。南北軸を1とすると東西軸が1.2となる長方形である。短軸(主軸)方向はN-22°-Wと西へ傾いている。確認は全体層序II層下面からIII層にかけて検出された。確認面からの高さは北壁で27.0cm、南壁で16.5cmを測り、平均22.0cmであった。壁の検出は、東壁付近にローム土が流れ込んでいたため検出が困難であったが、他は明白であった。覆土は他の4軒と同様に1・2層が再堆積のC輕石を含む黒ボク的な土層であり、それ以下に黄褐色のローム土を多量に含んでいる。床面は南部分に踏みしめた堅緻面が存在し、ほぼ平坦であった。

床面上には炭化物が7ヶ所に見られた他P<sub>1</sub>(長径69.0cm×短径56.0cm×深さ27.0cm)とP<sub>2</sub>(長径60.0

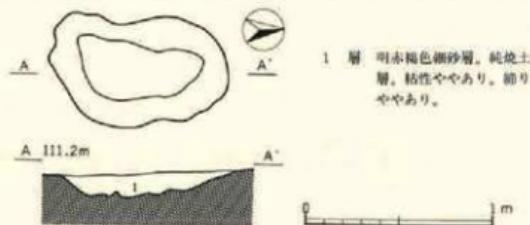


fig.46 H-3号住居址 (1/30)

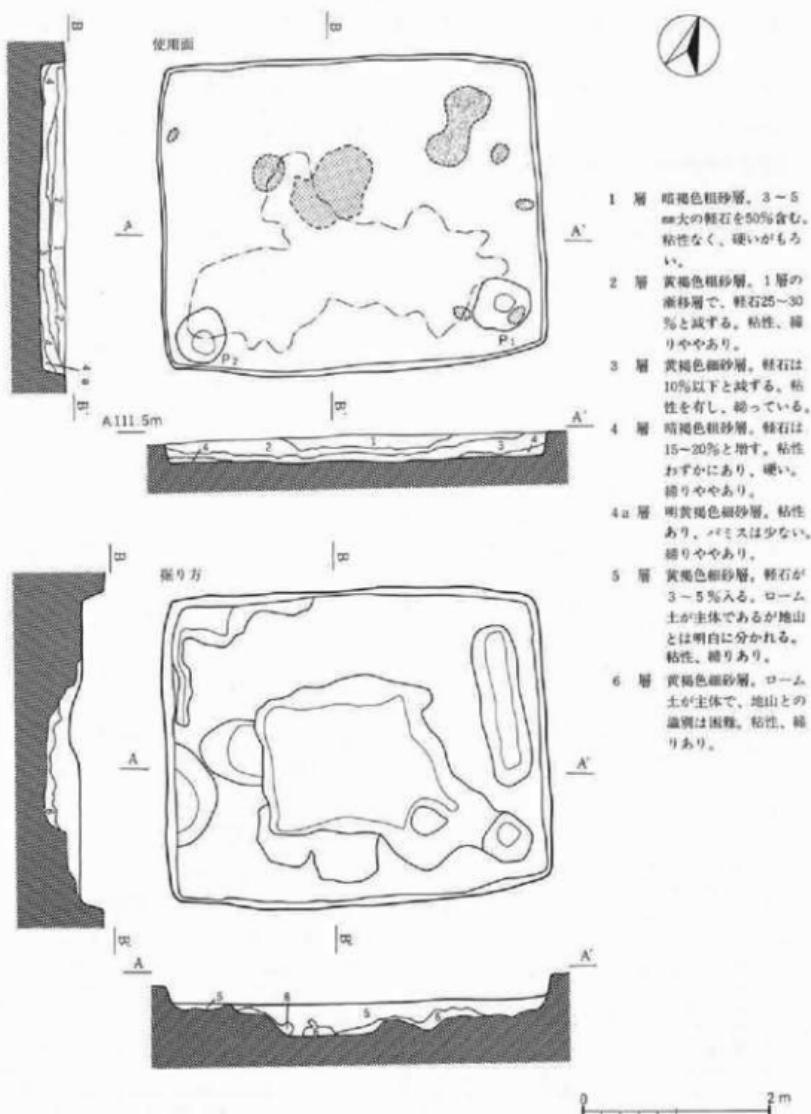


fig.47 H-3号住居址 (1/60)

#### IV 遺跡の調査

cm×短径53.0cm×深さ59.0cm)が南西、南東隅に確認された。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>とも貯蔵穴といえる。床面の形成土は黒褐色土とローム土を用い、住居中央にはほぼ矩形(南北160cm×東西190cm×深さ30cm)の掘り方が存在していた。

炉址は中央北壁寄りに検出された地床炉であり、底面は火を受け赤化し、部分的に焼土ブロックが検出された。平面形はほぼ橢円形をなし長径102cm、短径60.0cm、深さ10cmであった。

#### 遺物の出土状態 (fig. 48, PL. 8)

本住居址から出土した遺物は土器210点、鐵器2点、土製品1点、輕石製品2点と種類に富んでいる。遺物分布は中央から東壁にかけて集中している。土器の接合は18個体83片がなされ、土器

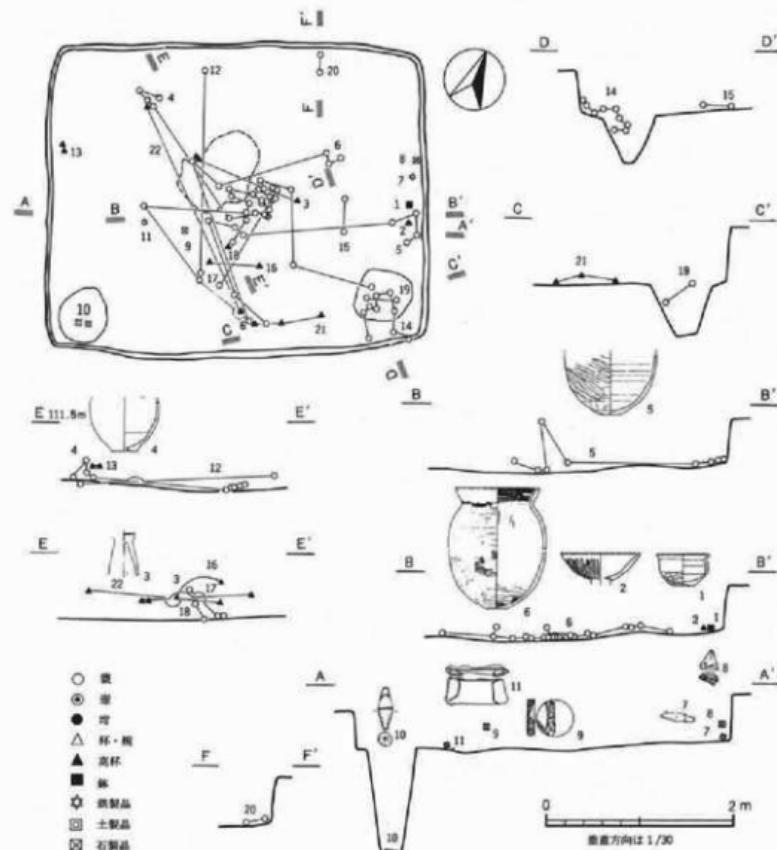


fig.48 H-3号住居址土器接合図 (1 / 60)

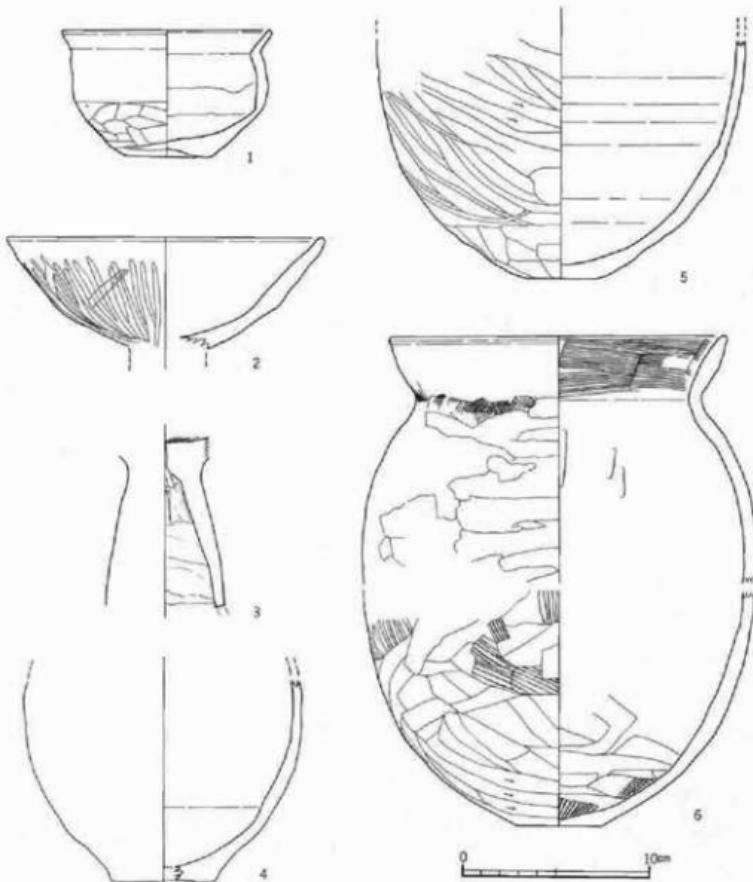


fig. 49 H-3号居住址出土遺物 (3%)

片全体の40%と高比率を占めている。特に平面分布に表われた接合線は錯走している。またその範囲も広く6は2m四方に及んでいる。このことと垂直分布が床面に接して多く認められるという事を併せて考えると、接合する資料の多くは、同時間内の所産といえそうである。また下部層である3層中に多いことから住居廃絶直後に割れた可能性が大きい。完存もしくは半完存状態の1・2も東壁に接して出土をしている。壁に接する所は住居埋没が最も早い段階で進行すると言えるため、廃絶時に放置されたものと受けとれる。また多くの特殊遺物も偏在して分布している。7・8と9・11がそれぞれまとまっている。鉄器鐵は当時としては貴重品であると思われる。



fig.50 H-3号住居址出土遺物 (1/3)

ものが床面直上から出土している。また10の土製品はP<sub>1</sub>の底面に接して出土している事から、住居との関連が見い出せよう。

以上の出土状態から推察すると本住居址の遺物のほとんどは、住居との関連性が考えられそうである。そうした視点で散てて遺物分布を追うと、住居南東部に多く、接合資料のうちカメが、炉址の東側とP<sub>1</sub>に集中する事は、その付近が厨房に係わる機能を有する空間として利用されていた事が想定される。

#### 出土遺物 (fig. 49・50、PL. 20)

小規模な住居址ながら多種多様の遺物が検出された。土器器のうち復原され器形の知り得るものは壺3、高杯2、鉢1である。調整手法にハケメ（1、3、5、6）を有するものが多く該期の特徴である。1の底部に凹みを有する事もそうである。

鉄器は7、11である。7は刀子の刃先と考えられ鋳化のため膨張し空洞となっている。11は鉄製の鍔先である。完存しており優品である。管見する限りで東国では、埼玉県番清水遺跡に住居址出土例があり、古墳出土では千葉県新皇塚古墳、河原塚古墳と類例は数少ないものである。

8、9は軽石製品である。おそらく大胡火碎流中の軽石を用いたものと思われる。8は三角形状に形成されたものである。側辺は両側から研磨がなされ稜をなしている。9は円盤状に研磨されており、半分を欠損している。仮に紡錘車だとすれば、中央に孔が穿たれても良さそうであるが痕跡も見られない。ひとまず、三角状軽石製品、円盤状軽石製品と呼んでおきたい。

10は土製品である。2点出土したため、推定して図示した。中空であり、内面はナデが施され

る。紡錘状土錐形中空土製品と仮に呼んで置きたい。

### まとめ

以上、本住居址は出土遺物が多種多様であった。出土遺物は住居址の所産時期との隔たりはないと思われる。そうした事から古墳時代中期和泉期に位置づけられる。  
(前原 豊)

### H-4号住居址

#### 遺構 (fig. 51・52, PL. 9)

本住居址は、舌状台地上、南西に緩やかに傾斜するX83~85、Y101~103に位置する。本遺跡内の住居址のうち最も西側にある。調査地外にプランが一部かかるため幹線道路西側拡張部をさらに西へ数メートル掘削し、全体層序II層下面で検出した。住居の形状は東西5.59m、南北4.08m、短軸を1とすると長軸1.37の長方形で面積22m<sup>2</sup>を測る。短軸方位はN-32°-Wを示す。

確認面は地形に沿って23~26cm南西が低い。遺構の遺存状態は良く、覆土は暗・灰褐色で2次堆積のC経石を含む。壁高は最大36cm、最小19cm、平均25.3cmで東壁に比べ西壁が低い。ソフトローム面を壁とするが軟質で検出は困難であった。壁の立ち上がり角は平均66°である。床面は軽石を含む部分的な貼床で、踏み固められた面を南東部に検出したが他は軟質であった。東壁際の床面の平均レベルは、111.13m、同じく西は111.03mで地形の傾斜を修正するべく掘られてはいるが、なお北東から南西にかけ10cm程のレベル差が認められる。また床面でピットを2個検出した。南東隅に所在するP<sub>1</sub>は74×64cm、深さ99cmの楕円形の貯蔵穴。南西隅に所在するP<sub>2</sub>は44×40cm、深さ34cmで、覆土中から脚部を欠いた高杯の出土をみた。床面の掘り方は凹凸が多数みられP<sub>1</sub>を検出したが概ね軟質である。南壁から西壁に沿って「L」字状に幅60~80cm、床面からの深さ20~40

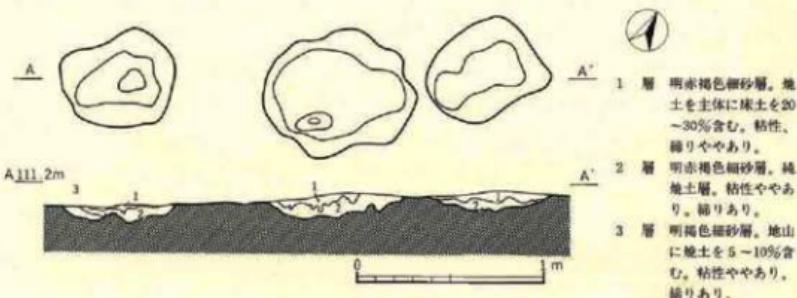


fig.51 H-4号住居址 (1/3)

IV 道路の調査

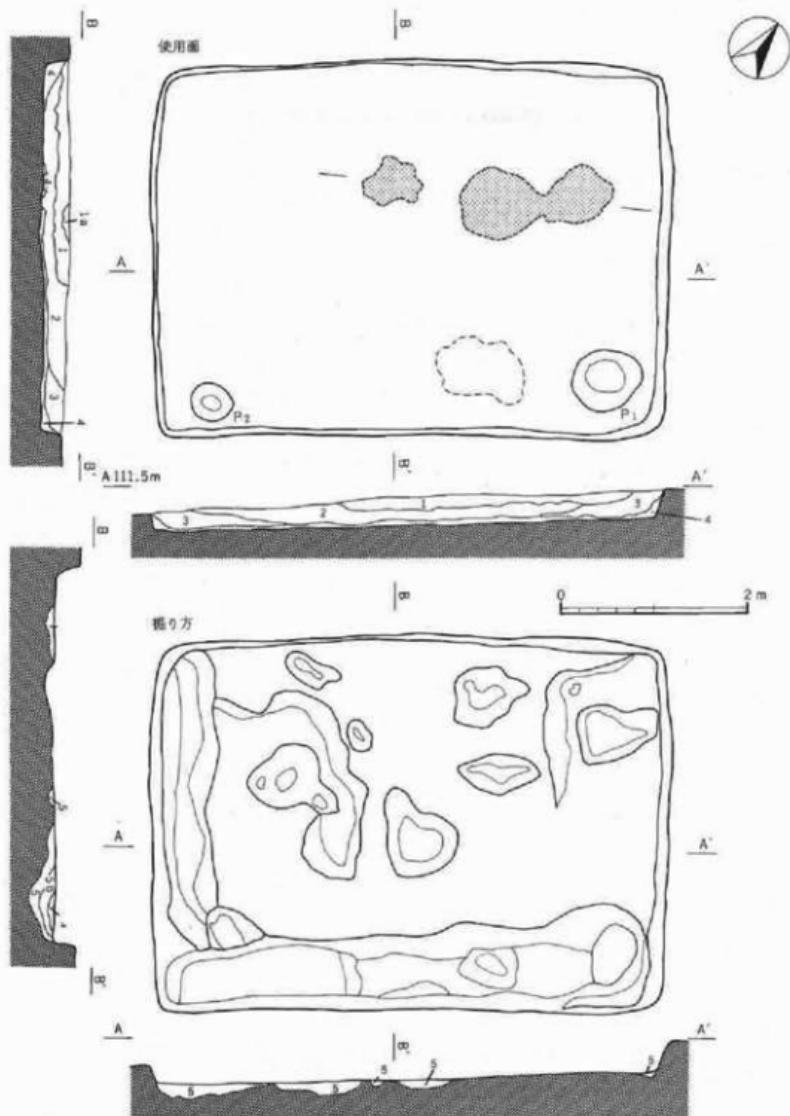


fig.52 H-4号住居址 (1/60)

cmの帶状の堀り方がみられた。また、中央部から東にかけて床面と同レベルで明赤褐色の焼土をもつ炉址を3個検出した。1号炉址は60×56cm、床面からの最深部11cm。最大の2号炉址は80×72cm、深さ14cm。3号炉址は62×46cm、深さ11cmを測る。床面のレベルでは2・3号炉址はヒヨウタン形に焼土が連結していたが、堀り下げの段階で別個のものとして検出できた。

#### 遺物の出土状態 (fig. 53・54, PL. 9)

平面分布上、遺物は住居址全体に散らばるが西側に比べ東側にやや集中の傾向がみられる。垂直分布でみると、床面直上の遺物は少なく10~20cm浮いて出土するものが多い。

塙11は北壁西寄りから南へ50°の傾きをもって完形で出土、塙7はP<sub>1</sub>の西、短軸に沿って3×1mの範囲で出土した。

北壁から東壁にかけL字形に3×4m四方で塙8が29片に散って出土、うち2片はP<sub>1</sub>内中段からの出土である。塙9は住居中央部を中心として全面に71の破片として出土、垂直分布は、床面からやや浮きぎみのものを主に床面下5cmから床面上30cmまでの厚い範囲にかかっている。北壁に沿って西よりから小塙13が0.5×2mの範囲で9片に散って出土し、北西壁際の出土レベルが東に比べ高い。

P<sub>1</sub>の西側を中心に底部の一部を欠く楕12が出土し、南壁際から北に2mの範囲で散布が見られた。なお、垂直分布では南から北へ向け、19の破片の出土レベルが徐々に下がるため遺物流入の過程を示すと考えられる。

住居北西部に高杯1が脚部を欠き20cm四方に壊れた状態で集中して出土した。高杯2は、2号炉址の上面よりやや浮いたレベルで30cm四方に東へ傾いて壊れた状態で出土、接合できた11片のうち4片は南壁上面・住居周辺表層であることから周辺からの流入であると考えられる。高杯3は、P<sub>1</sub>内上端より25cm程下がったレベルで東に傾きをもって杯部の一部を欠いて出土した。高杯4は、中央部3×4m四方で25片に散布、垂直分布上では床面から10cm程浮いたレベルに集中するが、南壁際上面・P<sub>1</sub>内下部に各1点づつ出土し流入の過程を示す。高杯5は、P<sub>1</sub>内底部から20cm浮いたレベルで杯部を欠いて出土した。高杯6は、1・2号炉址の北側に0.8×2.4mの範囲で出土し、接合した13片のうち北壁よりの3片はレベルが高い。

鉄製品10は住居中央部西寄りに出土した。

以上、出土状態を

#### H-4号住居址土層説明

- |      |  |            |
|------|--|------------|
| 1 層  | 灰褐色粗砂層。C軽石(φ2~5mm)を5~6%含む。繊りややあり。粘性なし。   | みると完形出土は増  |
| 1a 層 | 暗褐色粗砂層。C軽石(φ2~3mm)を2~3%含む。粘性なし。          | 11のみで、接合復元 |
| 2 層  | 黒褐色粗砂層。C軽石(φ2~5mm)を10~15%含む。粘性なし。繊りややあり。 | が可能であった12個 |
| 3 層  | 褐色粗砂層。C軽石(φ2~5mm)を2~3%含む。粘性、繊りともにややあり。   | 体のうち7個体は10 |
| 4 層  | 明褐色粗砂層。C軽石を含まない。ソフトロームを混入。粘性、繊りともにややあり。  | 片以上の接合によ   |
| 5 層  | 褐色粗砂層。極小の軽石を2~3%含む。粘性、繊りともにややあり。         | る。平面分布上から  |
| 5a 層 | に近い黄褐色粗砂層。極小の軽石を4~5%含む。粘性、繊りともにややあり。     | 見ると、住居全体に  |
| 5b 層 | 暗褐色粗砂層。                                  |            |

IV 遺跡の調査

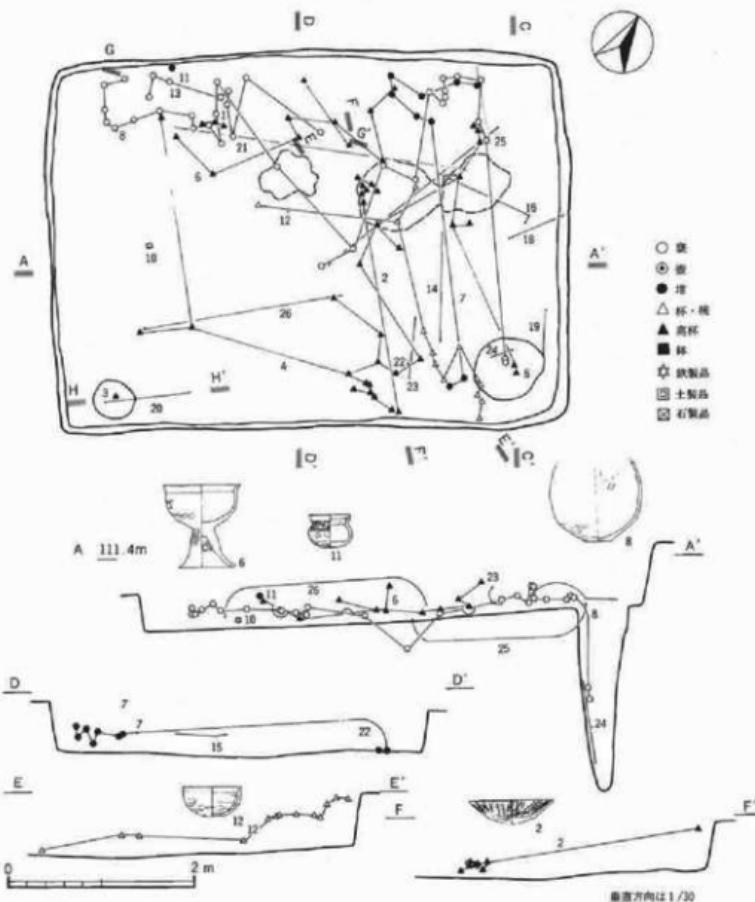


fig.53 H-4号住居址土器接合図 (1/60)

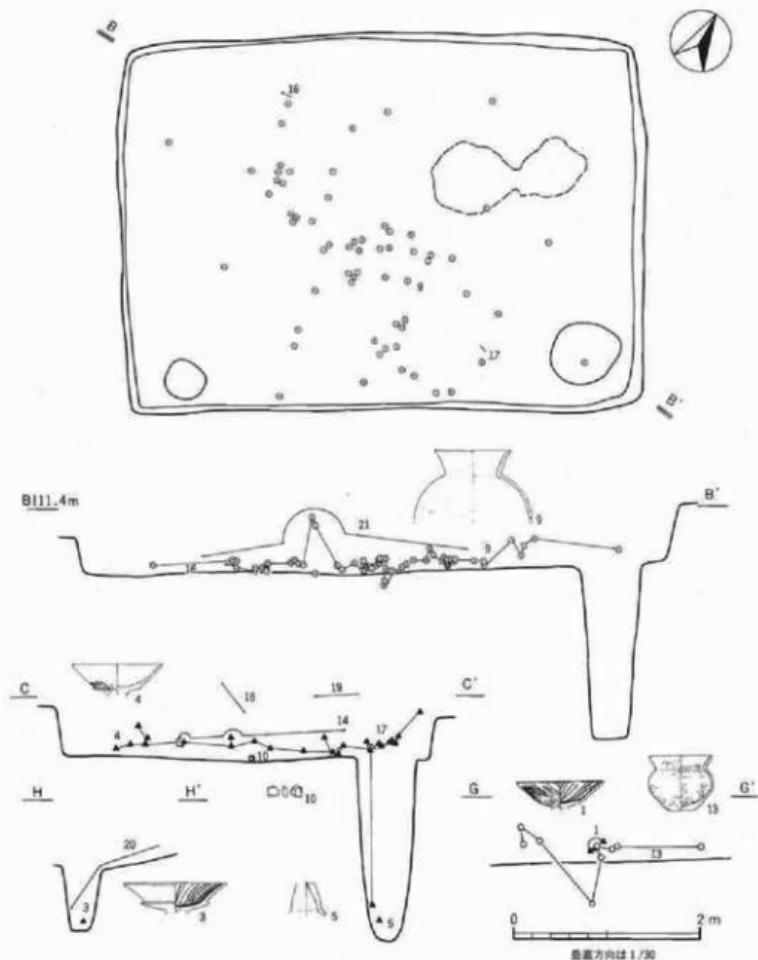


fig.54 H-4号住居址土器接合図 (1/60)

散布が広がるものには 4・8・9 があり、比較的集中の傾向がみられるものに 2・7・13 がある。垂直分布上からみると、水平に近いレベルで接合するものは 15・16・19・21・25・26 があり、出土レベルからみて方向性のある角度をもつものに 2・4・12・18・20・24 がある。また、4・8・20 は貯蔵穴内出土のものと接合し、24は貯蔵穴内のみで接合する。全般的に住居中央部での出土レベルは低く、北・南壁に近いものはレベルが高い。

IV 進跡の調査

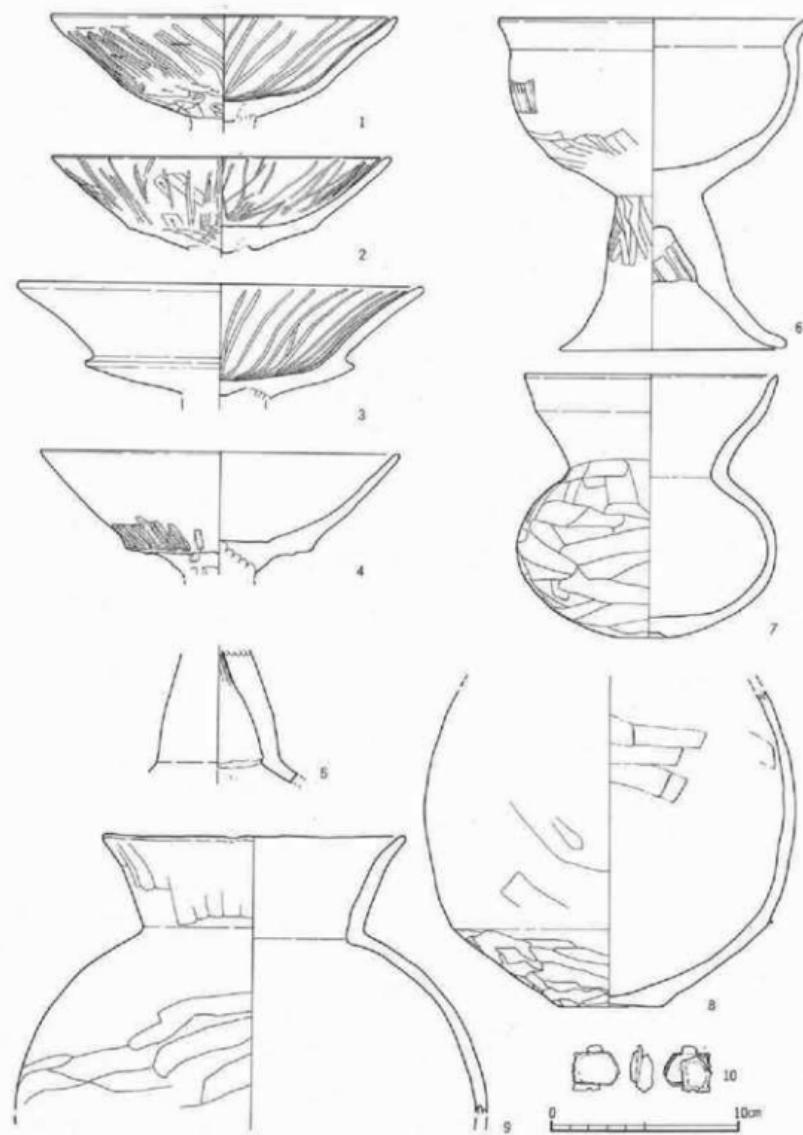


fig.55 H-4号住居址出土遺物 (1/3)

## 出土遺物 (fig. 55・56)

本住居からの出土遺物は378点でH-5号住居に次いで多い。内訳は土師器片375点、鉄製品1点、石製品1点、軽石1点である。土師器片2片以上の接合個体数は25個体、このうち実測可能なものは12個体である。12個体の器種内訳は高杯6、壺2、甕2、壺1、椀1個体である。

高杯は杯部のみが4個体、脚部のみが1個体、杯・脚を伴っているものは1個体である。6を除いて杯胸部に稜をもち、3は段を強くもつ。1・2・3は内面に暗文を有する。5・6の脚はややふくらみ気味の柱状を呈し、内面に絞り目をもつ。1・3・4には煤の付着がみられる。全体的に作りは精緻で、胎土・焼成とも良好である。

壺7は指による突きあげをもつ丸底で扁平の胴部に強く外反する口縁をもつが、壺11は突きあげ痕が大きく平底化して口縁は小さく外反も弱い。

甕8は底部が平底で小さく、胴部は張りのある丸味をおび部分的に煤の付着をみる。甕13は平底で肩部が強く張り、外反する口縁部が小さい。

壺9は球形の胴部を有し、肩部から「く」の字状に外反する比較的長い口辺部をもつ。

椀12は小さめの平底から胴部が内湾して立ちあがり、口縁部は小さく外反する。

## まとめ

本住居址は他の4軒と同様に土器片の接合率が378点のうち198点、52%と高い事が指摘できる。また貯蔵穴が大きく深いことや3基の炉址を持つという住居構造を有する。所産時期は、諸属性から推して和泉期と考えられる。

(浜田博一)

## H-5号住居址

## 遺構 (fig. 57・58、PL. 21・22)

本住居址は、5軒の堅穴住居址の中の北東部にあり、舌状台地の一番内側で、他の住居址を東西にわずかに見下す位置にある。南方向13mでH-3が、南西方向14mでH-2が隣接する。所在グリッドは、X91~93、Y100~102である。全体層序第III層よごれたソフトローム層上面で確認された。平面の形状は、南東の壁がわずかに長く、台形に近い不整な正方形であり、主軸は6.26

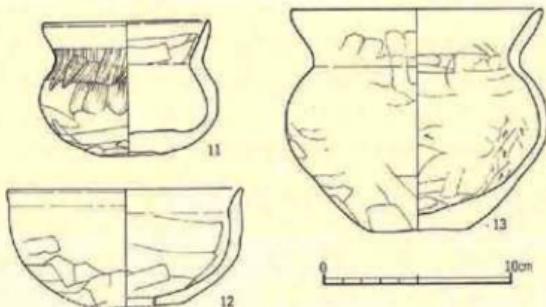


fig.56 H-4号住居址出土遺物 (1/3)

#### IV 造跡の調査

mを測る。面積は38.34m<sup>2</sup>。主軸(短軸)方向はN-43°-Wである。確認面からの壁高は、平均19.31cmで最大壁高は北の角で25.5cm、最小は南角で11.5cmを測る。壁の立ち上がり角度は、明瞭に壁が検出された北の角で83°、やや不明瞭な南の角は59°、平均は71°であった。汚れたソフトローム中に掘り込まれた住居であるため、軽石粒が混入する土を住居内として検出の目安としたが、北西壁と南西壁の西隅寄りは比較的明瞭に判別できた一方南東壁及び、南東壁寄りの南西壁、北東壁は検出の判別が難しかった。床面は、全体的に割合堅く平坦であったが、南東壁に接し、貯蔵穴と考えられるP<sub>2</sub>寄り、東西1.7m前後、南北0.7m前後の不整長方形の範囲に、他の部分より堅緻で平均3cm程の高まりが認められた。この部分は、床面に軽石粒(Φ1~3mm)を含む褐色土が盛られ、上部程堅緻さが増す傾向が見られた。出入口部分と考えたい。床面で検出されたビットは7を数えその状況は次表の通りである。貼り床は認められなかったが、出入口部分と考えられる

tab. 6 H-5号住居址ビット一覧表

番号	形状	大きさ	深さ	備考
P <sub>1</sub>	楕円形	44cm × 34cm	70cm	主柱穴、底部は床面に垂直。
P <sub>2</sub>	〃	45 × 40	67	主柱穴、底部は住居中心部を向く。
P <sub>3</sub>	〃	49 × 40	51	主柱穴、底部は住居中心部を向く。
P <sub>4</sub>	〃	45 × 40	54	主柱穴、底部はP <sub>1</sub> 方向に向く。
P <sub>5</sub>	〃	133 × 103	21	貯蔵穴、底部は平坦に近い。
P <sub>6</sub>	不整形	90 × 76	12	底部は平坦に近い。
P <sub>7</sub>	楕円形	43 × 36	25	

高まりの盛り土を除いた西寄りの部分に、径40cm前後の円形で住居床面からの深さ30cmの丸底のビットが検出された。

炉址は北西壁寄りの主柱穴P<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>間や

やP<sub>4</sub>寄りに検出され、長軸1.08m、短軸0.74mの楕円形で、周辺の床面より2~6cmの高まりを持つ焼土の堆積が見られた。掘り方は、長軸がN-29°30'Wの傾きを持つ不整楕円形で、1.02m × 0.69mの規模を持つ舟底型で、焼土は最深部で18cmの堆積が見られた。

#### 遺物の出土状態 (fig. 59~60, PL. 10)

遺物の平面的な分布は、炉址西側周辺、主柱穴P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間、貯蔵穴P<sub>5</sub>上に特に濃密で、さらにそれらの集中部を結ぶ線と北西の壁際に広がる。逆に、南西と北東の壁側床面の遺物分布は希薄であり、完形遺物も、

接合関係の見られる遺物も検出されなかつた。個々の遺物の出土

状況を見れば、高杯1は、炉址直上に、高杯2は、炉址北西部から

貯蔵穴P<sub>5</sub>内部にかけて住居を縦断するよう

に破片が散布している。高杯3は炉址の西方60cm程の位置に杯部を北西に向かって床面直上に横転し、

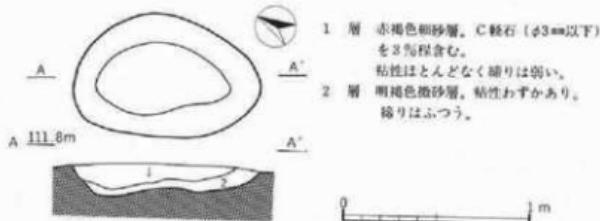
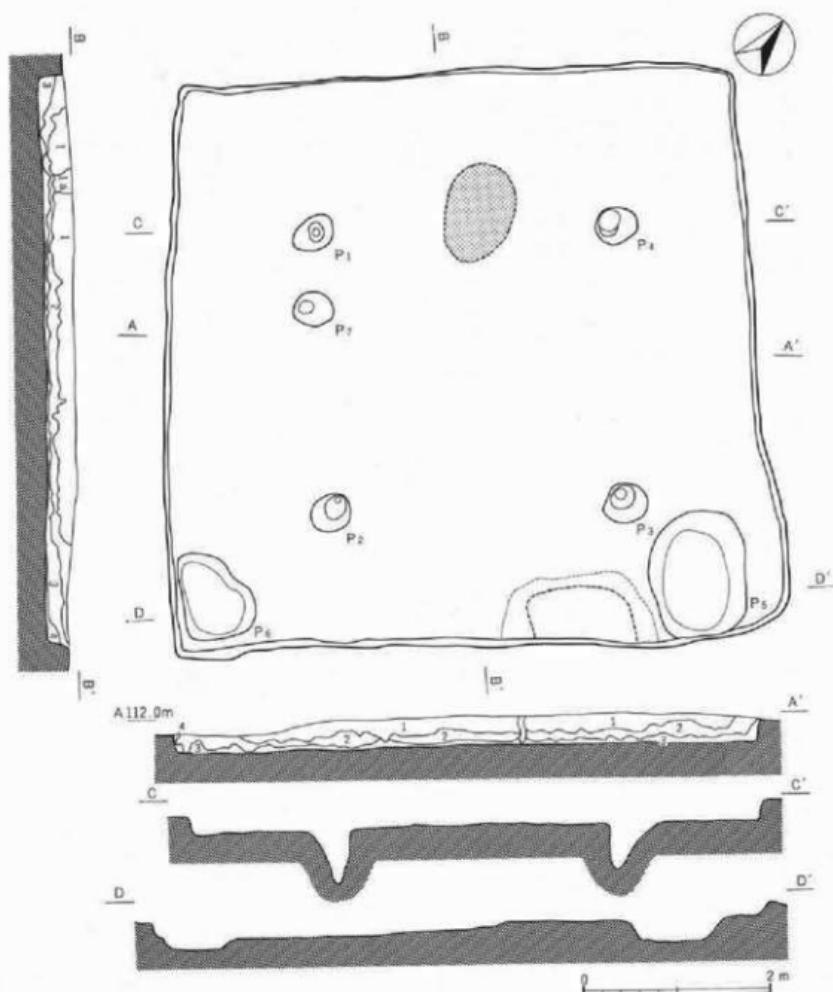


fig. 57 H-5号住居炉址 (1/30)



- 1 層 黒色粗砂層。縫りあり。粘性はとんどなし。C軸石30%混入。上部にB軸石を含む。
- 1a 層 黒褐色粗砂層。縫りあり。粘性はとんどなし。C軸石30%混入。
- 2 層 黒褐色粗砂層。やや縫りあり。粘性わずかにあり。C軸石20%混入。
- 3 層 にごい黄褐色微砂層。やや縫りあり。ソフトローム50%、C軸石5%、炭化物1%以下。
- 4 層 にごい黄褐色微砂層。縫りあり。ソフトローム70%、C軸石3%混入。

fig.58 H-5号住居址 (1/60)

IV 進跡の調査

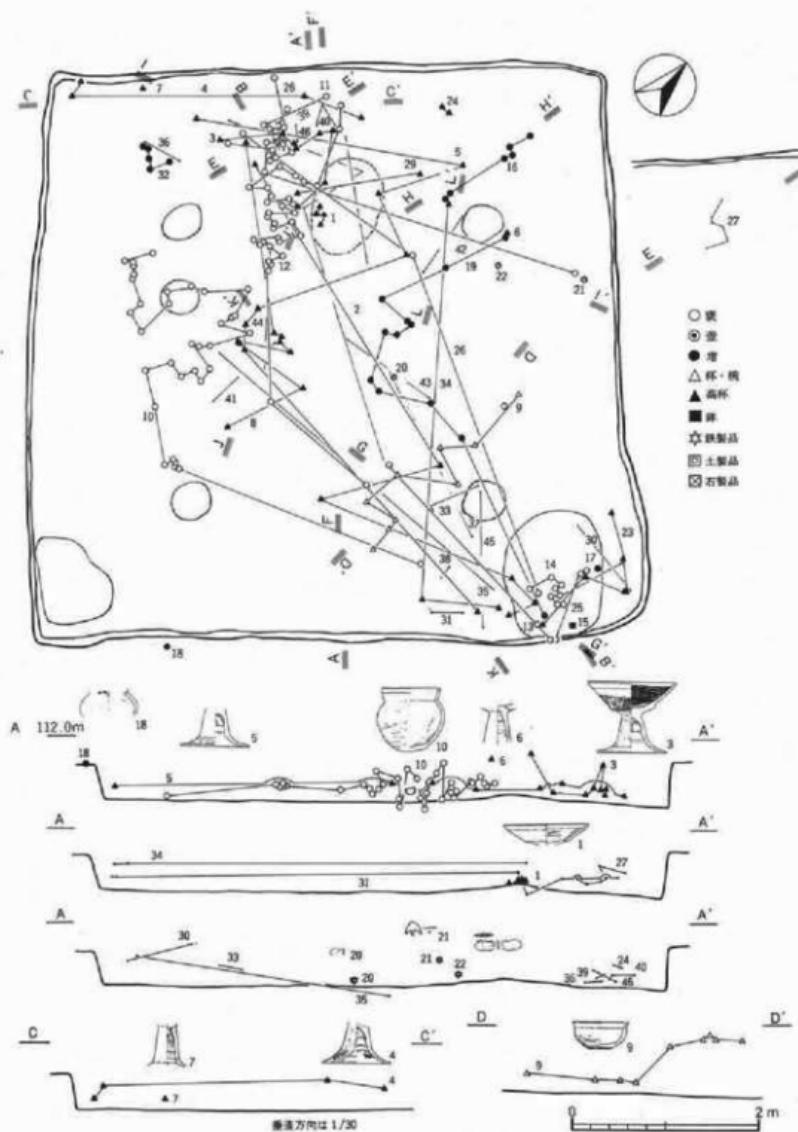


fig.59 H-5号住居址土器接合図 (1/60)

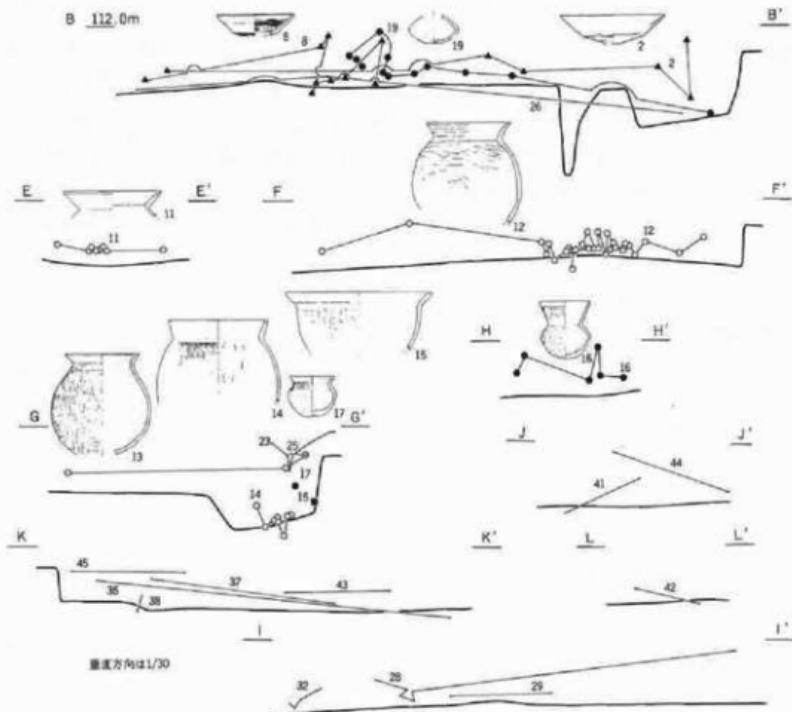


fig.60 H-5号住居址土器接合図 (1/30)

そのまま潰れた状態で検出された。高杯4は住居西隅の床上5cmに裾部を上に北方40°の傾きに転落した形で主体部があり、細かい破片が北西壁寄りに床上10~15cmの位置に散布。高杯5は、主体部がP<sub>3</sub>寄りの南東壁近くに裾部を住居中心部に向けた形で横転、破片は主柱穴P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>間、P<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>間を通り北西壁近くまで広がっている。床面との距離は、ほとんど10cm以内である。高杯6は、主柱穴P<sub>4</sub>の東床面から20cm程の壁の確認面近い位置に裾部を住居内に向け横転した状態で検出。高杯7は、西の角から1m程壁に添って北の角寄りに裾部を住居内に向け、南方30°の傾きで、床上5cmの位置で検出。高杯8は、住居中央P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>寄りに、南西壁にはほぼ平行に、長さ3m、幅50cm程の範囲に散布し、垂直分布では、床面下から床上27cm程の間に散布。壺9は、P<sub>3</sub>の西側に南北2m程の長さに広がり、垂直分布では南北半分が床上10cm以内、東西半分が30cm内外と2つに分かれ。壺10は、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>間いっぱいに50cm前後の幅を持って散布し、垂直分布は床面下から床上20cmの間に見られる。壺11は、炉址北西の遺物の集中する部分の床上10cm内外に散布していた。壺12は、炉址のP<sub>1</sub>側に接し口縁部が円のまま検出された。破片もほとんど床面直上に集中する。壺13

#### IV 遺跡の調査

は、貯蔵穴P<sub>3</sub>の南東壁際に口縁を上に向け、北方40°の傾きで立てかけられたように検出された。甕14は、P<sub>5</sub>の底部に密着して、鉢15もP<sub>3</sub>の南東壁際の底部に貼り付いた状態で検出された。甕16は、主体部がP<sub>4</sub>の北側に、口縁を上にして、西方20°の傾きで、床面から8cmの位置で出土した。破片は、垂直分布では、ばらつきがある。甕17は、P<sub>6</sub>の東の際に口縁を上にし、北東45°の傾きで、甕18は、南東の壁より壁外に10cm程の住居検出面にあった。甕19は、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>間の住居中心寄りからP<sub>5</sub>中に、P<sub>3</sub>底部密着から住居検出面までの垂直分布を持って検出された。鉄製品20は、住居中心部や南寄り、床面から2cm程の位置で、鉄錠21は、北東壁から35cm内側に、南東に向いた先是、北方20°の傾きを持ち、床面から20cmの高さで、鉄製品22は、P<sub>4</sub>の南東40cmの位置に床面から20cmの高さで、それぞれ検出された。

##### 出土遺物 (fig. 61・62, PL. 21・22)

本住居からの出土遺物总数は、577片を数える。大部分が土師器であるが、その他鉄製品3個と大胡火碎流起源と考えられる軽石の礫50個が含まれる。なお、これらの軽石は、大は大人の拳大から、小はドングリの実程の大きさで、土器の分布とはやや異り、南東壁際やや南寄りからP<sub>1</sub>の北東部に多く、さらに炉址周辺から北西壁際へ散布していた。垂直分布は、床面直上から住居検出面までの広がりを持つが、床面10cm前後に集中が見られる。出土遺物個体数の割に完形で出土した遺物は、甕17、1個と少なく、他は潰れた状態か、かなりの破片数となって広い範囲、特に住居を東西方向に縦断するような散布が見られた。なお、接合関係の見られる土器片は257片で、出土した土器片519片の50%にあたる。一番数の多い高杯は、実測できた8個中、1、2、3、8の坏部を比較すれば、すべて稜線から口縁に向かう線が直線的に延び、調整では、3、8の内面に横方向のハケ目が見られる。脚部3、4、5は、裾部径が13.8cmに近く、裾の開きも似る。6、7は、脚柱部が、脚部3、4、5より細長い。甕も5個体を比べれば、11、14は口辺部の調整が丁寧で、14は、さらに肩部にハケ目、内部も横位のヘラナデが成されている。一方10、13は、口辺に積み上げ痕が残り、10、12は胸部の器面調整が難。なお、13は、底部の欠け口に焼成後意図的に穿孔した様子が窺われ、転用も考えられる。甕4個体は、器形、胎土、器面調整ともまちまちで、18、19はかなり丁寧な調整。17の胸下部は、ヘラ削りの痕跡の残る雑な調整。碗9は、本住居出土の土師器の中で一番鮮かな橙色であるが雑な調整。鉢14は、内面に比較的丁寧な調整である一方、外面は、ヘラ削りの際の粘土粒、積み上げ痕の残る雑な調整。鉄製品20は、長軸2.5cmで扁平、一方の厚みが削いだ状態にも見えるので刀子の断片とも考えられる。鉄錠21は、有茎で底辺が長く、内曲した三角形である。鉄製品22は、長軸4cm、短軸2.2cmの長方形の短い一辺が突出し、鋸のため中空になっている。

##### まとめ

本住居址は、5軒の竪穴住居の中の最北、最東に位置し、最大の規模を持つ。出土遺物片数も最多で、土師器と鉄製品が検出された。土師器では、高杯が一番多く、甕、甕と続く。鉄製品では、鉄錠の出土が特筆される。遺構、遺物から、古墳時代中期和泉期の住居と考えられる。(前原照子)

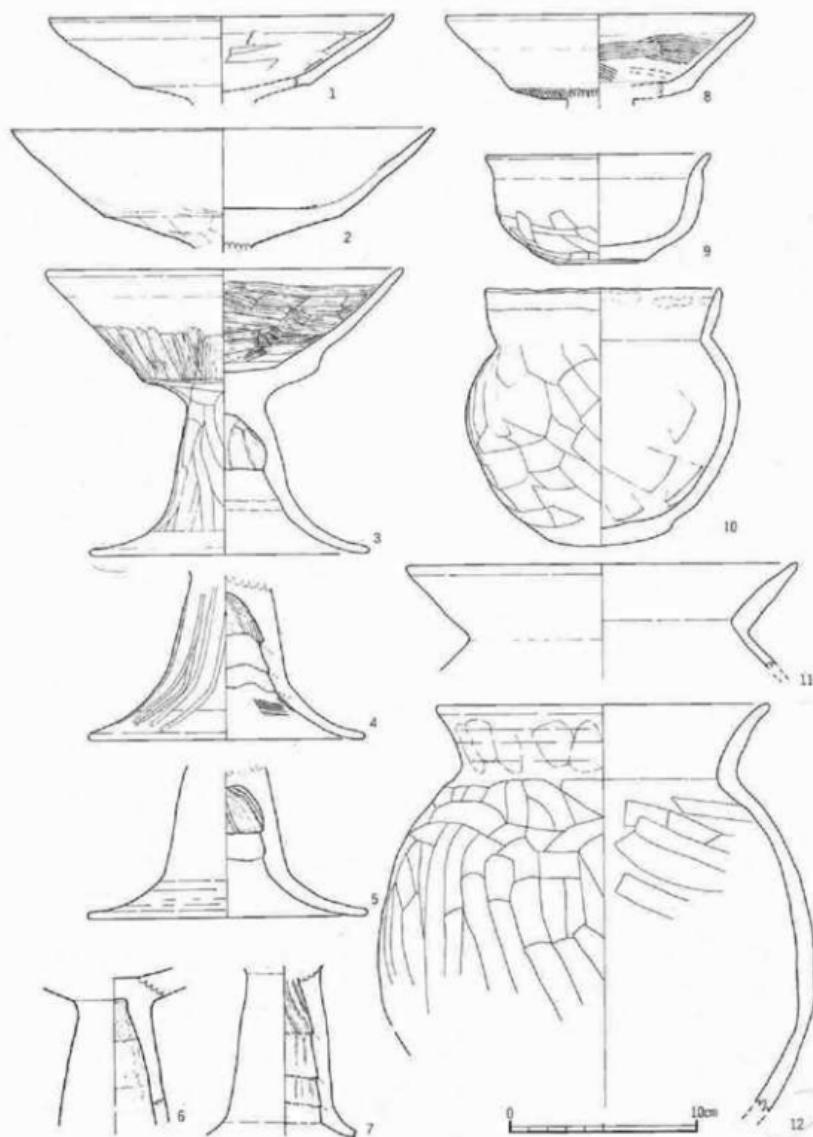


fig.61 H-5号住居址出土遺物 (1/3)

IV 遺跡の調査

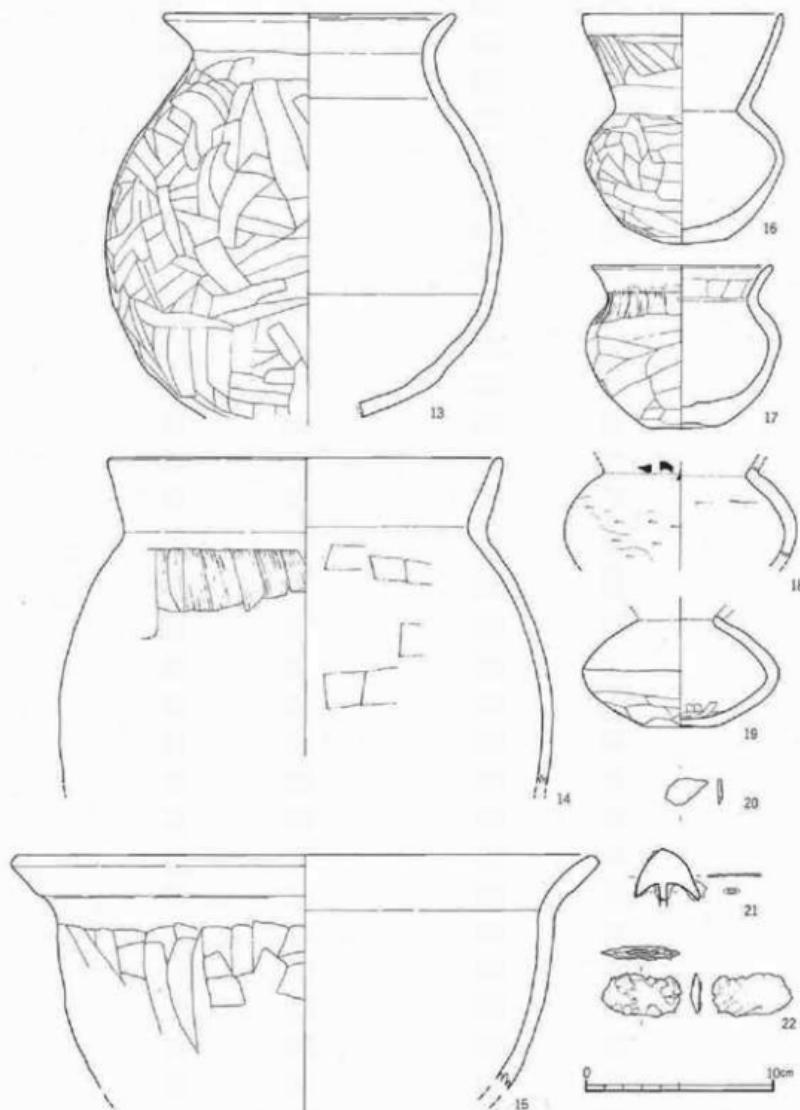


fig.62 H-5号住居址出土遺物 (1/3)

## 遺物集中区

## 所在 (fig. 63, PL. 11)

柳久保遺跡の東側ライン上、北限からおよそ115m南に土師器が集中して出土する地点がある。X91・Y93、X91・Y92グリッドに係る。特にX91ラインから東へ1.2m、Y93ラインから南へ0.8mの地点を中心半径20cm前後の円内には、90点程の土師器片が集中して出土した。垂直分布は、全体層序の第II層上部を中心として耕作土である第I層下部に及ぶ垂直差30cmの範囲である。この遺物集中区は、南東に張り出す幅およそ170mの舌状台地の中央部近い標高113mの地点で、南東に下る緩傾斜の始まる場所にあたる。H-5から北へ30mの地点である。

## 出土遺物 (fig. 64・65, PL. 22)

表土から8cm程の位置から遺物の出土が始まったが、遺構として捉えられるものは検出されな

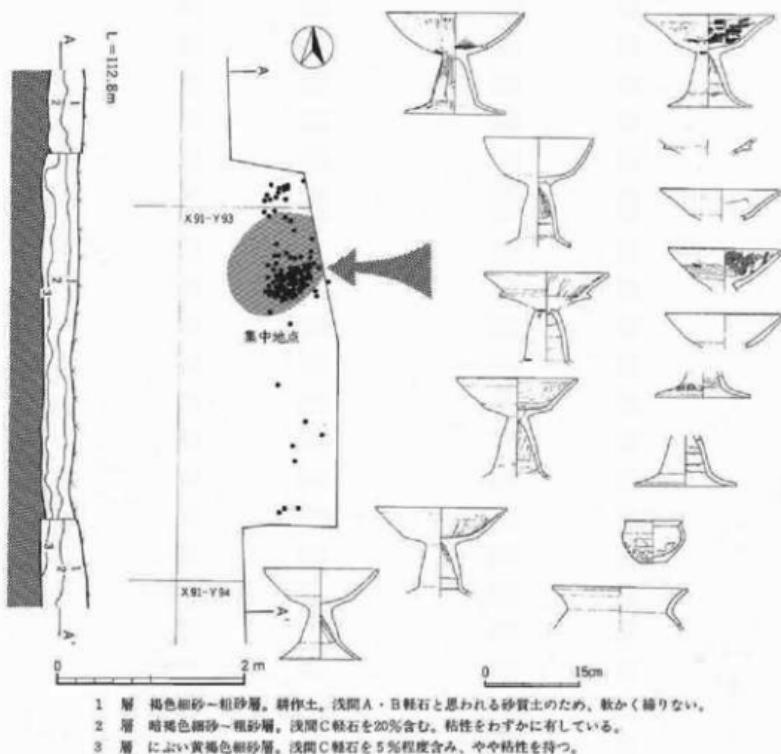


fig. 63 遺物集中区 (1/60)

IV 遺跡の調査

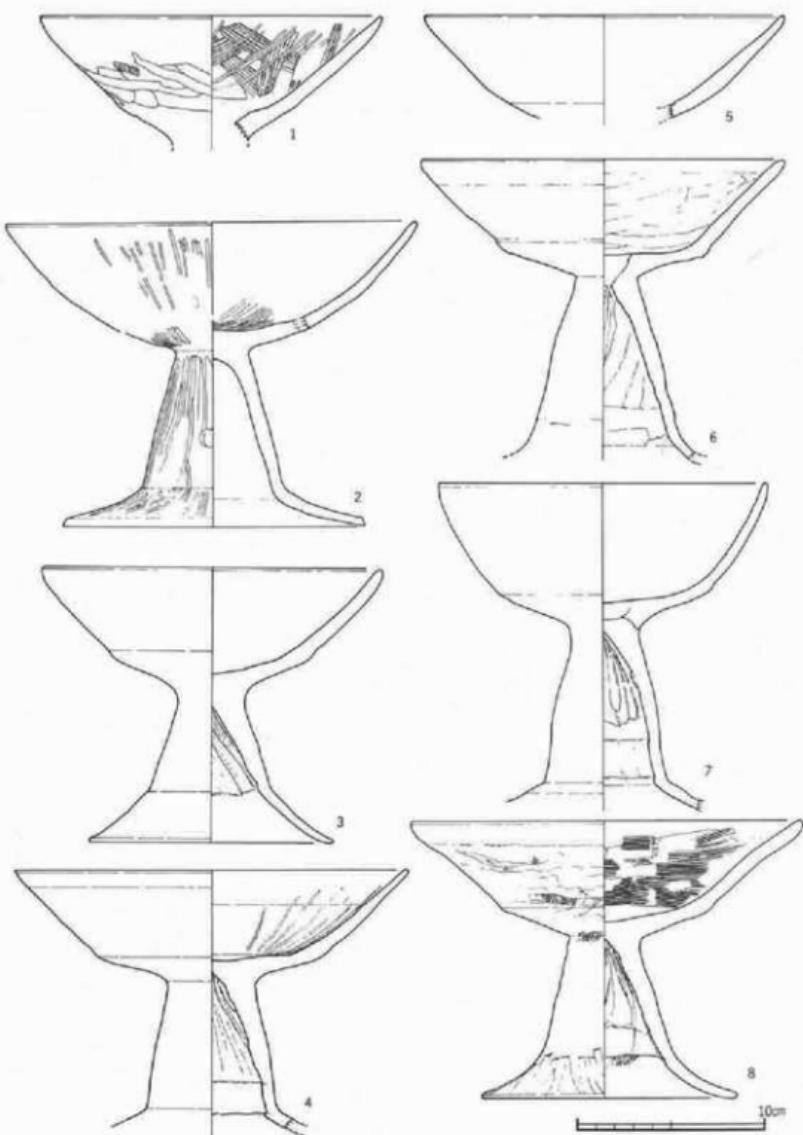


fig.64 集中区出土遺物 (1/3)

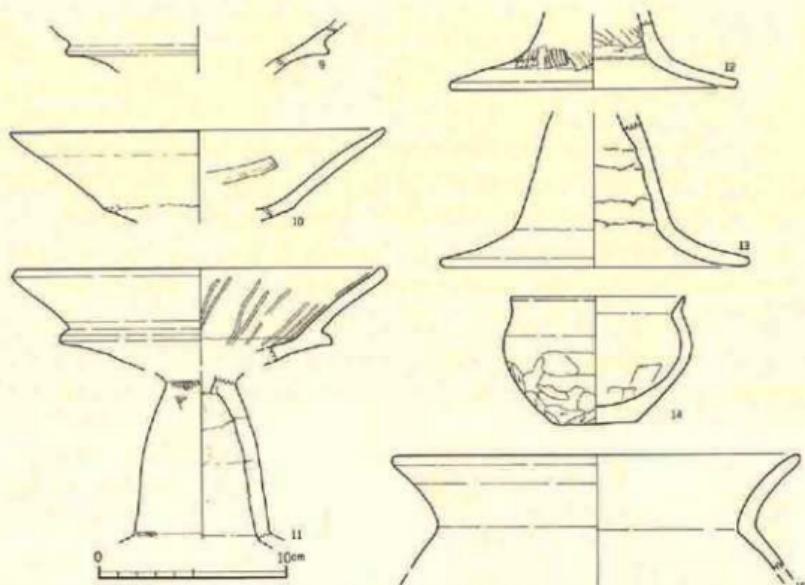


fig.65 集中区出土遺物 (1/3)

かった。土師器はすべて破片の状態の出土であったが、その分布状態は、個体別にまとまりがあるので、完形であった位置をほとんど移動することなく検出されたと言える。実測できた個体は高杯13、壺1、甕1である。

出土遺物総数は129片すべて土師器である。そのほか耕作土表面から浅い分布であったため重機によって動いた土師器片もかなりの数にのぼった。13個の高杯を形態で比較すれば、杯部が脚との接合部から直線的に開くものに1・5、縦の部分で開く角度が変わるものに3・4・6・9・10・20、縦がなく、接合部から内側して立上がるるものに2、稜で角度を変え、内側して立ち上がるものに7、極めて明瞭に縦の部分が段となって突出し、再び直線的に斜めに立上がる9、11に分かれる。脚柱部から裾部への開きは、2、12では、低い位置で急に開き、3は脚の3分の1程上がった位置から外反するよう広がる。調整は、内面にハケ目のあるもの1・6・8・20、暗文が施されるもの2・4・11、内外共調整痕の見えないものに5・3・7があげられる。小鉢14は、器面がよく研かれた丁寧な調整である。

#### まとめ

遺物集中区では、土器が異常に集中して出土し、ほとんど高壙であり、時期的には5軒の住居址と同じ古墳時代中期に属すること、住居と離れていたながらどの住居も見わたせる台地の頂上に位置することから、集落に係わる祭祀的な場所の可能性が考えられる。

(前原照子)

## (4) その他の

## 土 坑

D-1 柳久保遺跡の舌状台地が南西に下り込む標高110mのラインのわずか北、先土器調査区内北西寄り、X86、Y122グリッドの南西隅にあたる。全体層序第IV層ハードローム上面で確認された。長軸175cmのひょうたん形で、くびれ部幅60cm、両側張出し部幅84cmで、長軸N-58°-Wの向きは、舌状台地の斜面にほぼ平行である。壁は70度前後で立ち上がり、底は平坦である。確認面からの深さは30cm前後。なお、南東側、北東壁寄りに直径15cmの正円、深さ10cmの丸底のビットがある。遺物はない。ロームを主体とする埋土から縄文時代の遺構と考えられる。

D-2 柳久保遺跡の中央やや南に位置する住居址群のH-2号住居址を北東6.8mに、H-4号住居址を北西9.3mに望む標高111.2mラインのすぐ北側、X85、Y104、105グリッドに位置する。

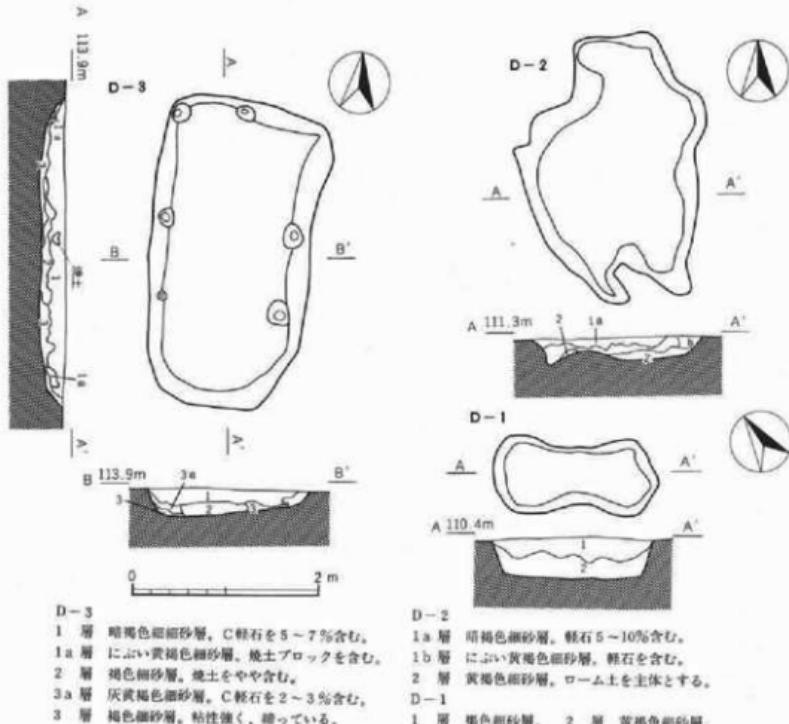


fig.66 土坑 (1/60)

長軸2.85m、短軸1.9mの不定形で、長軸はほぼ南北を向いている。内側も凹凸が島状に残り、深さはかなり不規則で10cm前後が最も多く、最も深い北壁中央部では31cmを測る。出土遺物は、住居址と同時期の和泉期の高杯と壺の小破片15片である。埋土からもその頃の時期のものと見られる。

## D-3 遺跡の最北端東側、標高114m

~113.8m間、X90、Y65グリッドに位置する。5軒の住居址と同じ第III層のよごれたソフトローム上面で検出された。埋土も住居址と同じC軽石を含む暗褐色土である。長軸3.30m、短軸中央部で1.73mのやや不整な長方形で長軸はN-3°-Eを向く。深さは壁際で16cm~27cm、中央部はやや深く32cmを測る。40°~45°のゆるい傾斜の壁の中にはほとんど入るようにピットが6個検出された。一番深い北西角のピットは床面から17cmを測る。西壁南側のピットは、1番浅くわずか1cmではあるが壁に統くのでそれと解る。床面には焼土が中央に近い部分で9cmの厚さに堆積し、炭化物も多く散布していた。出土遺物は一番深い北西角ピット中に先の彎曲した刀子が検出された他、奈良、平安期の土師、須恵破片が1片ずつ見られたが出土レベルから遺構と結びつくものは刀子のみと考えられる。その他大胡火碎流起源と考えられる怪3cm前後の軽石が30個あまり出土した。遺構の埋土から住居址群と同じ和泉期と同時期の遺構と考えたい。

(前原照子)

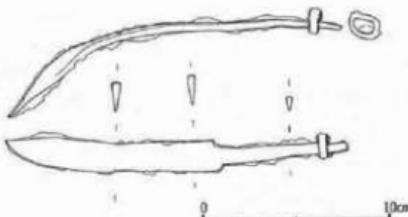


fig.67 D-3号土坑出土鉄器 (1/3)

## 溝

本遺跡内で溝は2条検出された。W-1は舌状台地の南裾部X87~92、Y127~129の位置にN-70°-Wの方向に走る。X=92ラインの上位部は標高108.2m、低位部は105.4mを測る。溝の長さは約20m、幅は最大2.5m、最小1m弱で西へ下るに従って狭くなる。検出面からの深さは最大で約20cmであり、現況の表土の厚さ約10cmを加えても30cm前後の浅い溝である。地断の状況は明確でなく、遺物もみられなかった。また低位部は柳久保水田址のW-1に切られる形で消失する。W-2は、W-1の北X87~92、Y122~127の範囲に概ねN-45°-Wの方向でほぼ直線的に走る。上位部は標高109.5m、下位部は同106mを測る。長さは30m弱で高低差3.5mの急傾斜を呈する。幅は約1.2mで一定しており深さは検出面下10~20cmを最大としW-1と同様浅い溝である。特にX90~92にかけては検出面との差がほとんど認められない。壁はW-1と同じくソフトローム土で、第3層からは浅間B軽石の純層、第4層からは2次堆積のC軽石が20~30%見られた。下位はX87ラインで消失する。W-1、2とも上位部はさらに北東ないし北へのび、下位は台地の西を流下する「深っ堀」に流れこむと考えられる。また、W-2は台地斜面上、等高線にはほぼ直交する形で走り、最も傾斜角が大きく、W-1はやや緩やかであると言える。2条とも遺物が

#### IV 遺跡の調査

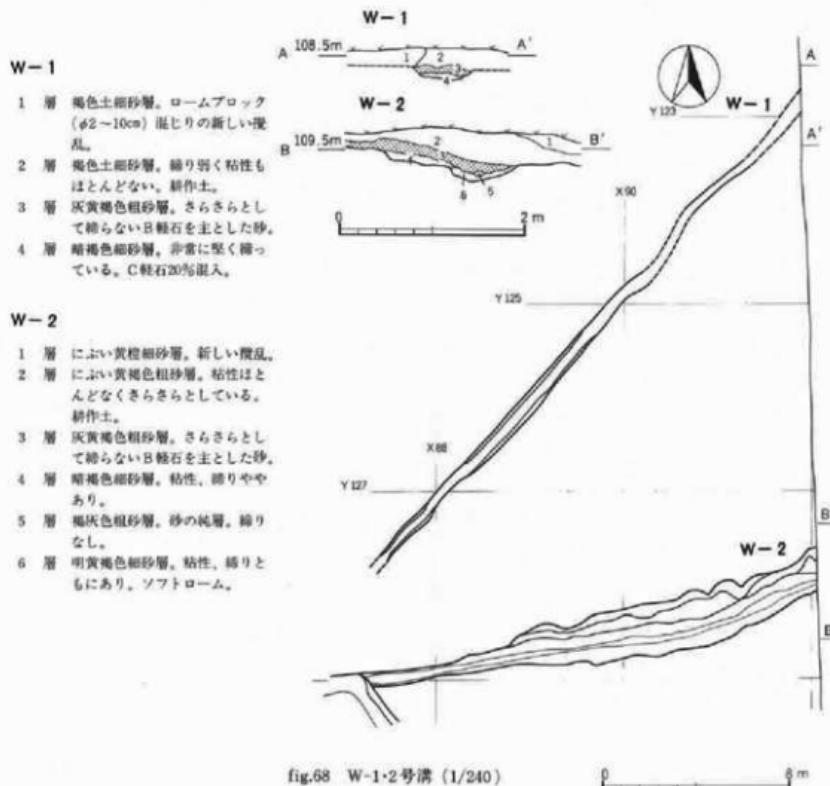


fig.68 W-1・2号溝 (1/240)

認められなかったが、W-2については地断の堆積状況から12世紀初頭の溝と考えられ、壁面・形状からW-1もそれに準ずると考えられようか。本遺跡検出の住居址は和泉期と考えられる事から、溝との関連はないと言える。

#### 地割れ

地割れは本遺跡の北側、標高113mに前後して東西40m、南北8mの範囲で4条検出されX 1～4とした。X-1はX88、Y81～84に「く」の字状で南北に走り、長さ5m、最大幅1.5m、深さは最深部で1.2mを超える。X-2はX-1の北、X88・89、Y79～81にN-10°～Wの方向に走り長さ11m、最大幅2.5m、最深部は1.6mを超える。X-3はX88・89、Y75～77に南北に走り長さ9m、最大幅2.4m、最深部は1.2mを超える。X-4はX 8 9、Y74～76に南北に走り長さ7m、

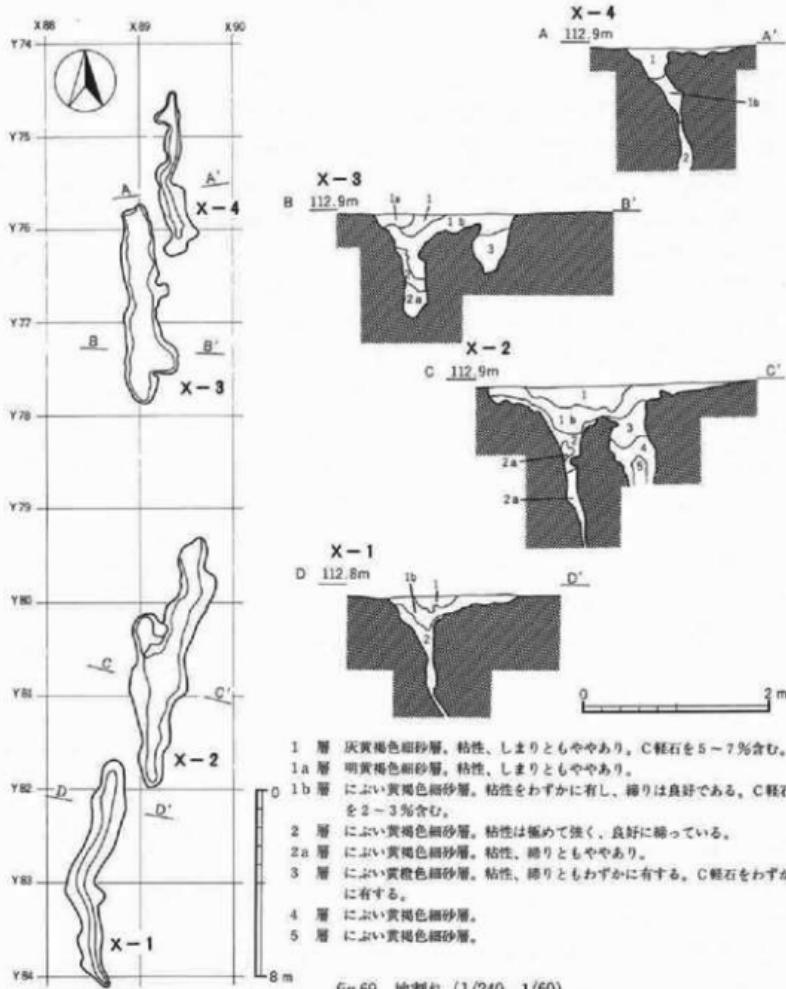


fig.69 地割れ (1/240, 1/60)

最大幅1m、最深部は1.4mを超える。4条とも遺物の流れ込みは見られず、形状・方向・き裂の入り込み方が似ており地震等による地割れであると推定した。X-1・2の先端は幅5cm以下でさらに深く切り込むことから人工によるものとは考えにくい。また、地断の1b層・3層が2次堆積の浅間C軽石をわずかに含み、2・2a層が黒土をやや含んだ黄褐色土の流れ込みであることから時期的には古墳時代と考えられようか。

(浜田博一)

### 3 柳久保水田址

遺構 (fig. 70・71、付図 2・3、PL. 12~14)

柳久保水田址の調査は X124~131、Y64~130区（宮川河川改修部分）の約7000m<sup>2</sup>と X84~92、Y129~145区（幹線道路谷地部分）の約1400m<sup>2</sup>である総計8400m<sup>2</sup>が当初の調査対象であった。しかし、宮川部分の約7000m<sup>2</sup>のうち2500m<sup>2</sup>の部分は58年度県営土地改良事業地へ供給する土取りのため掘削を受け、遺構下までダンプやブルドーザーの轍が存在し調査不可能であった。

検出された遺構は浅間B軽石によって直接覆われた平安時代の水田址と水田址下から発見された水田祭祀遺構である。また、浅間C軽石もB軽石下面から30cm下にブロック状をなして検出されたが、水田址の識別は不可能であった。

(1) X124~131、Y64~130区（宮川河川改修北部分）

調査面積は3500m<sup>2</sup>を測り、このうち平安時代の水田址が2960m<sup>2</sup>を占めている。本水田址の地形は北から南へ緩やかな傾斜を有しており、台地に挟まれた東西方向は、ほぼ平らといえる。

水田面の精査によっても明白な畦はとらえられなかった。しかし、水田面の段差、高さの違いは明瞭にとらえられた。特にY105ライン以南では南北100mにわたり段差が認められた。その高低差は最も大きい所で14cmである。Y72~105区にかけては、調査区が狭かった事と水路が検出されたため段差も明瞭ではなかった。また一方と直交する状態の段差もほとんど検出できなかった。

本調査区から9条の水路が検出された（付図3）。このうちW-4号溝は旧宮川の流路といえ水田址より一段高い低台地に流路をとっている。この低台地はかつての台地の先端部分であり、削平された事を物語っている。然るに、W-4号溝は台地削平後の流路といえる。台地削平の時代決定の資料は得られなかつたが、今後の調査により、耕地拡大の歴史を解明できるといえる。

次に各水路を時代順に追うと、平安時代水田址下から確認できたものにW-8、9号溝がある。特にW-8号溝の存在は、大方の流路をW-1号溝と共有している事から、水田の存続期間を示すものといえる。つまり、W-8、9号溝はC軽石層を切って流路をとる事から、本水田址はC軽石降下以後からB軽石降下までの期間に營なれたものといえる。またW-8号溝はW-1号溝の旧流路といえ、その後W-1号溝はW-2号溝へ引きつがれ、現代のW-3号溝へと引き継がれて行くものと考えられる。W-1号溝は覆土上部にB軽石純層を堆積することから、本水田址の水路と考えられ、平安時代の所産といえよう。W-2号溝は、W-1号溝を切って流路をとる事と出土遺物から中～近世のものといえ、W-7号溝も同様の事が指摘できる。

最後に近年まで用いられた水路がW-3、5、6、10号溝である。

本調査区からは先土器時代の尖頭器、縄文時代の遺物を始めとして、古墳時代から平安時代の土器類、須恵器片が混入品として出土している。この中でW-1号溝から出土した漆器碗や墨書き土器と水田址下から出土した墨書き土器や動物遺存体は平安時代の社会構造を解明する上で極めて貴重な資料といえる。

### 3 柳久保水田址

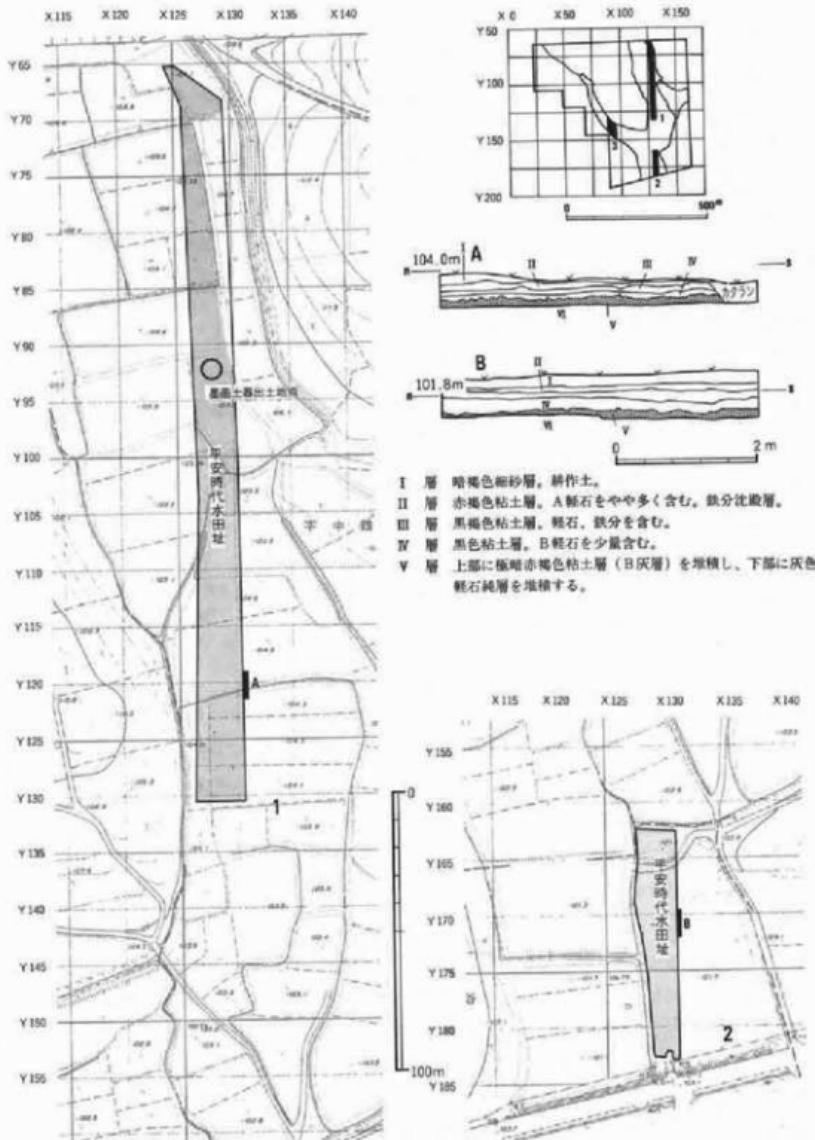


fig.70 柳久保水田址全体図 (1/2,000)

#### IV 遺跡の調査

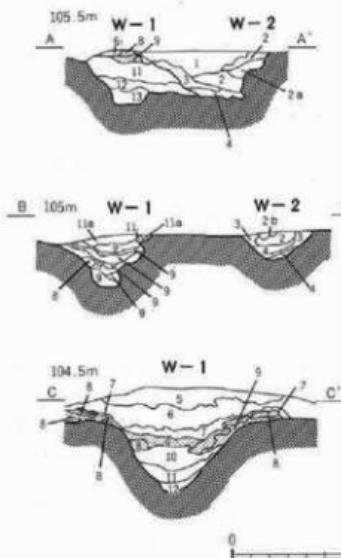


fig.71 W-1、2号溝の土層断面 (1/60)

##### (2) X127~131、Y162~182区 (宮川河川改修南部分)

調査区全域から平安時代水田址が検出され、面積900m<sup>2</sup>を測る。本水田址の地形は北から南へ傾斜を有しており、約13面の水田が検出された。水田址の状態は調査区南半で地形に沿った明瞭な畦が存在し、北半分では段差として把えられた。畦幅は40~60cmを測り、水田面との比高差5cmであった。1枚の水田面は東西に長い長方形であり、幅7~10m程度の規模を有する。

また水田面上には多くの凹みが見られたが、何であるか判別はできなかった。出土遺物は、わずかな土師器、須恵器片が見られたが、時期判定はできなかった。

##### (3) X84~92、Y129~145区 (幹線道路谷地部分)

本調査区は両側の台地に挟まれた狭い谷地部分であり、調査面積1400m<sup>2</sup>である。ほぼ全域からB軽石下の水田が検出された。水田を画する明瞭な畦は検出できなかったが、中央付近に段差を有している部分が存在していた。(1)、(2)と同様に段差でもって水田を画するものと思われる。

水路は8条検出されたが、いずれも本水田址より新しいものといえる。また、水田面には無数の凹みが検出された。(1)、(2)と同様、判別できなかった。

出土遺物は縄文時代の遺物や土師器、須恵器が数点見られた。

(前原 豊)

##### 水田址出土の先土器・縄文時代の遺物 (fig. 72, PL. 24)

- 1 層 黒褐色粗砂層。B軽石の二次土を含む。粘性、しまりともあり。
- 2 層 黒褐色微砂層。植物の根高比率。B軽石7~8%含む。粘性、しまりともあり。
- 2a 層 暗緑褐色粗砂層。B軽石の二次土20~30%、Bアッシュのブロック ( $\phi 1\text{cm}$ ) 5%含む。
- 3 層 灰色砂層。軽石 ( $\phi 0.5\text{~}3\text{cm}$ ) と砂が互層をなす。植物根あり。硬くしまっている。
- 4 層 單赤灰色粗砂層。B軽石の二次土40%を含む。粘性、しまりともあり。
- 6 層 黑褐色微砂層。植物の根高比率で含む。粘性、しまりともあり。
- 7 層 灰色シルト層。粗砂が不均一に混じる。粘性わざかあり。
- 8 層 Bアッシュ層。
- 9 層 B軽石純層。
- 10 層 灰オリーブ粗砂層。植物の根が高比率で混じる。しまりなし。
- 11 層 黑褐色微砂層。植物の根多い。粘性、しまりともあり。
- 11a 層 黑褐色粗砂層。11層と類似であるがBアッシュが20~30%含む。
- 12 層 赤灰色粗砂層。B軽石が80%以上を占める。粘性はなく硬くしまる。
- 13 層 黑褐色微砂層。下部にバシス、砂層が入る。粘性、しまりともあり。

土層断面図の基点は付図を参照

平安時代水田址や溝を始めとして、他の遺構からも石器時代の遺物が散見された。混入品である事は言うに及ばないが、資料的な価値が大きいため紹介しておきたい。

1はX127・Y90区、W-2底面直上から出土した硬質頁岩製の尖頭器である。全長13.9cm、幅2cm、厚さ1.1cmを測り、整美な柳葉形を呈する。下鶴谷遺跡出土の植刃と原材、形態、調整の面で類似する事から「本ノ木技法」の素材であるかもしれない。類例は群馬県石山遺跡をはじめ新潟県本ノ木遺跡、中林遺跡、千葉県南大浦袋遺跡、弥三郎第二遺跡などに求められる事から先土器時代終末期の所産と考えられる。

2はW-1から出土した頁岩製の打製石斧である。背面に大きく自然面を残しており、腹面の調整も粗雑であり、刃部も非常に厚いものである。

3は北側のX125、Y70区から出土した頁岩製の三角錐形石器である。

側面に自然面を残しており本器種の特徴を備えている。

また上端は欠損している。県内の和田、中標、北通遺跡例から繩文早～前期の所産といえる。

(前原 豊)

遺物の出  
土状態(fig.  
73, PL. 14)

漆器枕21

は、W-1

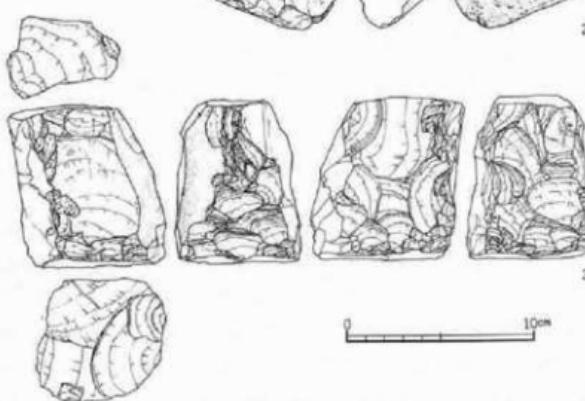
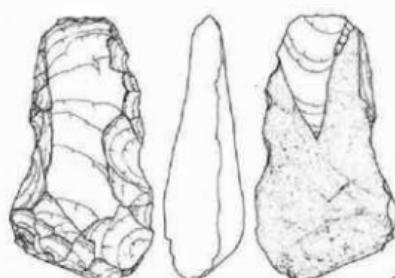
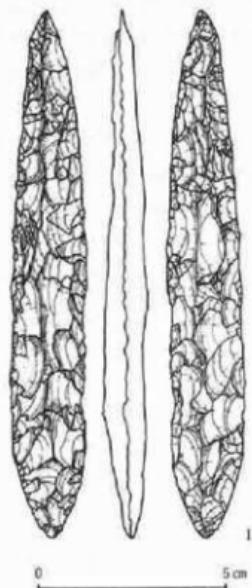


fig.72 水田址出土の石器 (2/3,1/3)

#### IV 遺跡の調査

がW-5に切られる4m程北側左岸上部で検出された。X127、Y84グリッドの南西部分にあたる浅間B軽石を20~30%含む土の下からの出土と見られる。

「下内」または「下内」の文字の見える杯IIは、W-1がW-5に切られた地点から南へ15mの地点、X127、Y88グリッド内の流れが東に回り込み、中州となった東斜面に口辺を上に安定した状態で出土した。流れに沿って倒れた状態の長さ220cm、径およそ30cmの流木と見られる自然木の南端の下部にあたる。この自然木の周辺には、川岸の土止めと考えられる杭、長さ10~100cm幅10cm程の扁平な木片が検出された。

土師器杯10・9・8・1・7は、W-1がW-6に切られた位置からおよそ8m南のX128ラインより1.15m東でY93ラインにかかる地点の平安水田址下より、10を最上、7を最下とし口辺を上にして重なった状態で発見された。浅間B軽石で埋まった水田の上面より10~17cm下の粘性の強い黒色の耕作土中である。標高は、下部で104.53m。なお、10の上部に灰釉1片が載っていた。

豚の椎骨(宮崎重雄氏鑑定)28は、5枚重ねの杯から南西3m程、標高104.45mの地点からの出土である。馬歯29は、28よりやや南東寄り、5枚重ねの杯からは同じく3m程の距離がある標高104.29mの地点で検出された。2者ともX127、Y93グリッド内の出土である。

墨画土器6は、X127、Y93グリッド内で9片、X128、Y94グリッドで1片検出された。5枚重ねの土師杯、豚の椎骨及び馬歯が出土したB軽石下水田耕作土中に散らばった状態であった。土師杯2の1片は、5枚重ねの最上杯10に載り、他は同グリッド内に散布。土師杯3は5枚重ねから40cm南西。土師杯4・5は5枚重ねのそれぞれ北グリッドの近接と南西140cmに出土。

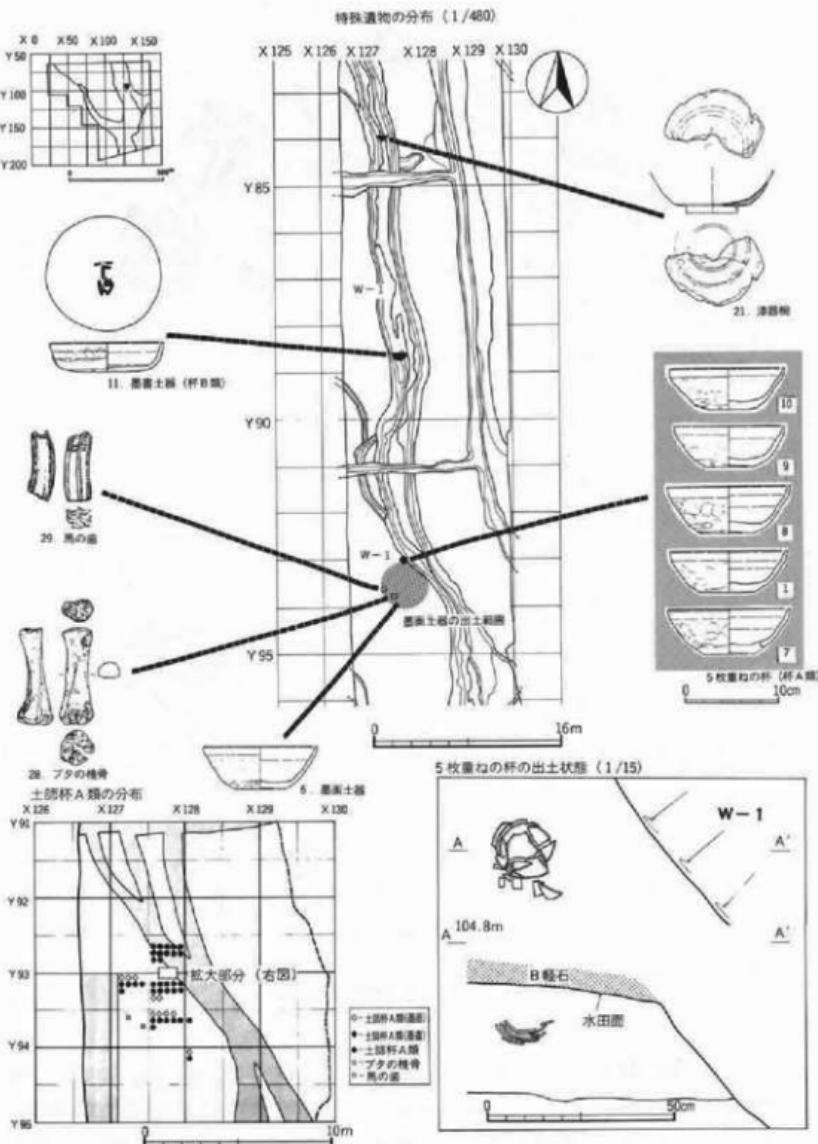
土師杯12・13はX127、Y89グリッド中より、須恵杯14はX127、Y89グリッド北西部、須恵杯15はX127、Y88南西部、須恵杯16は、X127、Y88グリッド南西部とW-8中、須恵杯底部17はX127、Y92グリッド北西部とW-8覆土、須恵杯18、19はW-1覆土より、須恵杯底部20はX126、Y91グリッド内とW-1か2の覆土よりそれぞれ出土した。

墨書の残る土器破片22は、土師器杯底部でX127、Y88グリッド北西部、同じく25、26はW-1か2の覆土、27はX127、Y89グリッド中のW-8覆土から出土。墨書の残る須恵杯片23はW-6出土、24はX127、Y89南西部からのそれぞれ出土である。

##### 墨画土器 (fig. 74, PL. 24)

土師器杯6は、水田址から出土した5枚重ねの杯と形態、調整共に同じであるが、内外面共に墨による絵が描かれている。完形にならないので細部は不明であるが、外面は、5体の人物と一頭の動物である。5体の人間のうち1体は、群馬工専の赤外線テレビカメラによる観察では、その馬とも牛とも見える動物に乗っていると思われる表現である。左手を斜め後方に挙げている。

顔は、引き目、鉤鼻、眉は太くつり上がり、頭部は表現されていない。身体は裸体と見える。他の4体の人物も、動物上の人物と裸体であること、頭が表現されず、つり上がった太い眉を持つこと、片手を挙げていることの4点で共通している。異なる点は、顔の向きと目、鼻、口を構成する線の太さと向きで、僅かな違いが異なる表情を作り出している。なお頭部の表現はないが、



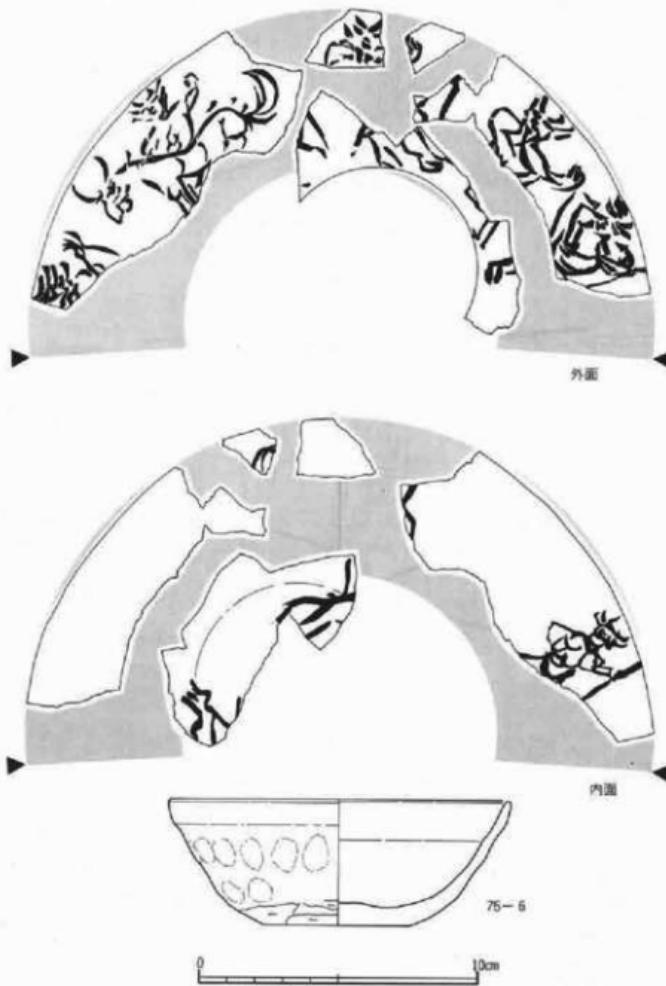


fig.74 墨画土器 (1/2)

見方によれば怒髪天を突く様子とも見える。髭を表現したと見られる人物もいる。動物は、はね上げたしつぽと太く大きい角と思える線、たて髪のような表現が目につく。中間が欠損し人物の下半身の表現は不明であるが下部は蹴り上げた動物の足の様に見える。裏面は牛の頭をし、皮の鎧様のものを身につけた何者かが左手に棒を持って立つ図と見える。春日権現記第六巻、北野

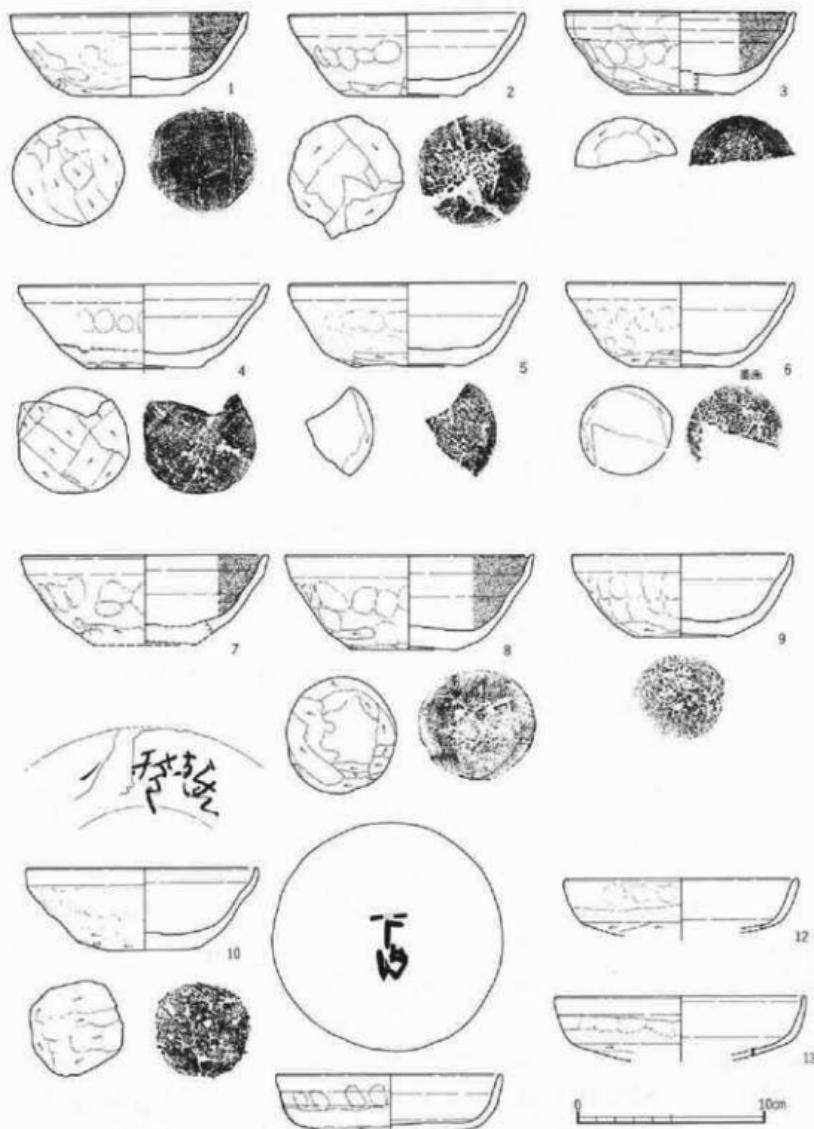


fig.75 水田址出土遺物 (1/3)

#### IV 遺跡の調査

天神絵巻第七巻の地獄の諸相、牛頭、馬頭の図に似ている。牛頭天王を表現したものであろうか。

##### 出土遺物 (fig. 75・76, PL. 23・24)

5枚重なって出土した土師器杯10・9・8・1・7と、極めて近い範囲から出土している同2・3・4・5・6は、厚い粘土の円板を底部とし、体部は、やや内凹しながら斜めに立上がり口縁は直立に近い角度となる。器面調整は、内面ナデ、外面底部は未調整ものから周辺部のみ、または全面ヘラ削り、体部は指押さえて形を整えた後、口縁部横ナデ、下部ノリ程がヘラ削りを施してある。なお、1・3・7・8は内墨処理がなされ、10の内側には、解説不明であるが墨書きが見られる。この杯群は、現代の水路以外のW-1・2・8・9の覆土及び浅間B軽石純層に覆われた水田を30cm程掘り下げた位置で出されたW-8周辺で出土した土師片と様相を異とする。5枚に接近して破片が散布していたことから、墨書き土器を含め、10枚以上重なっていた可能性が強い。また豚の排骨、馬歯が検出されたことも含め、水田耕作に関係のある祭祀跡と見られる。人物を表現した土器の出土例として奈良県橿原市石川精舎跡付近出土の6枚のかわらけ、群馬県伊勢崎市流通団地遺跡絵皿、また平城宮址等で見られる人面土器があるが、本遺跡出土の墨書き土器は、筆使いが前二者よりもぎこちなく、後者より表現内容が多い。器形及び器面調整から周辺の遺跡を見れば、柳久保遺跡の東わずか800mの地点にある堤東遺跡8号住居出土の土師器杯にかなりの類似点が見られ、9世紀中葉に比定されている。また太田市賀茂遺跡11号住居、高崎市舞台遺跡1号住居、埼玉県本庄市下田遺跡38号住居、同じく大里郡寄居町沼下遺跡24号住居、東京都町田市川島谷遺跡4号住居、神奈川県向原遺跡38・46号住居からそれぞれ口径に比べ底径が小さく器高の高い土師器杯で器面調整は内面と口縁部ナデ、外面下部ヘラ削り、底部は調整なし全面ヘラ削りがなされているものが出土している。時期的言及しているものでは、9世紀後葉から10世紀後葉に及ぶ。従って当墨書き土器も9世紀中葉から10世紀後葉と考えられる。今後柳久保水田址を耕した人々の住居址の検出を見ればより限定された時期に比定できよう。

下内または下内の文字のある平底の浅い杯11は、前橋市芳賀東部遺跡の奈良・平安時代の土器の分類から見ると墨書き土器よりやや古く、9世紀前半と考えられる。土師杯12・13も同様である。

漆器椀21は、東京国立博物館漆工芸室長荒川浩和氏の鑑定により、器種は高台のある広椀のようなもので、塗りは両面に薄く施され中塗りはない。漆は朱漆かベンガラ漆である。底部が薄いところが平安時代の特徴を表わしている。但しこれほど薄い例はめずらしい。日本産であるとの見解を得た。なお群馬県内出土の平安時代と考えられる漆器は、藤岡市緑塚遺跡の溜井状構造より出土した椀がある。推定の底径8.2cm、口径16.7cm、器高6.3cmで、21よりひとまわり大きく、黒漆である。

須恵杯18・19・20は、底部が回転ヘラ削り調整で、口径と底径の差が少く、前橋市芳賀東部遺跡の分類によれば、8世紀中頃から後半の様相であり、須恵器杯15は回転ヘラ切りで8世紀後半と見られる。須恵器杯14・16・17は、底部回転糸切り未調整、小形で口縁部がやや肥厚気味であり、9世紀中頃の様相を示す。

(前原照子)

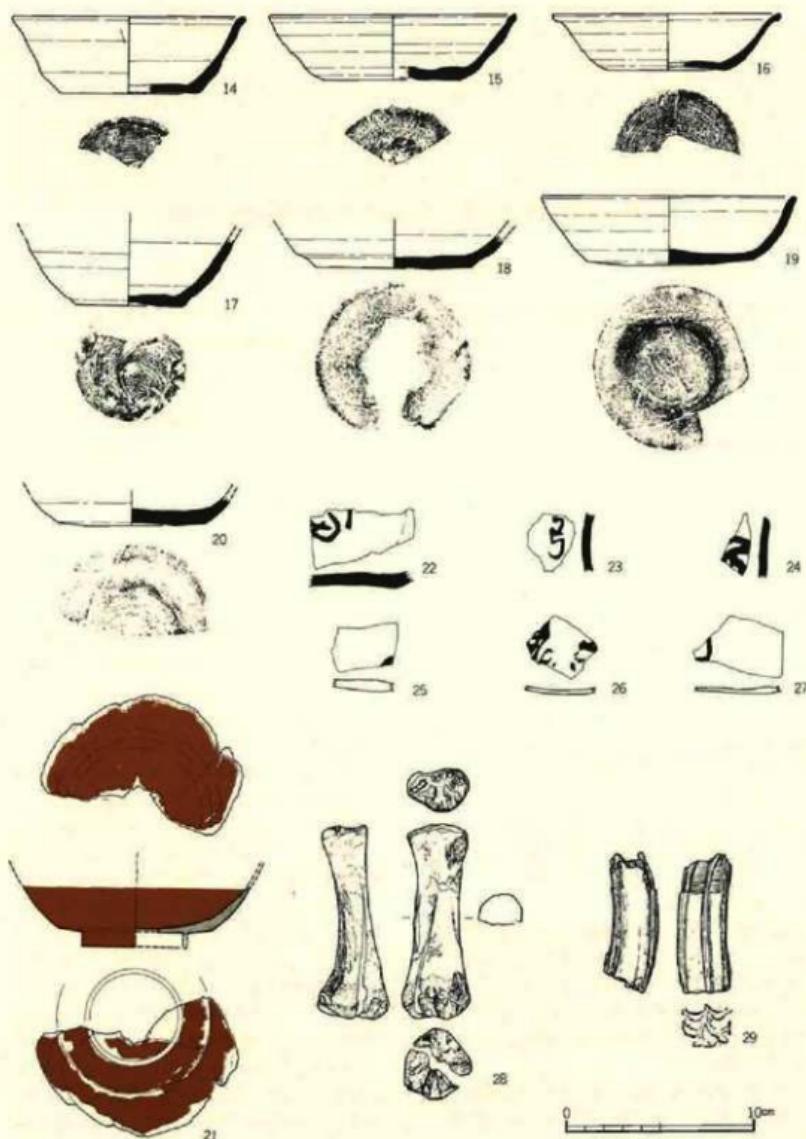


fig. 76 水田址出土遺物 (3)

## V 自然科学的研究及び墨画土器の研究

柳久保水田址から得られた特殊遺物は、考古学的資料としても貴重な発見であるが、考古学的側面だけでは解析できない情報を受けている。そのため関係分野の方々に分析を依頼したところ、貴重な論文や分析結果が寄せられた。特に赤外線の利用によって墨画土器の絵が判明できた事は、この方面的研究に今後、活用され有効性をもつものといえる。

### 1 柳久保水田址出土のブタの橈骨と馬歯

宮崎重雄\*

わが国におけるイノシシの飼養は、すでに讃岐時代に始っていた<sup>1)</sup>ともいわれるが、これには否定的な見解<sup>2)</sup>もあり、まだ解決を見ていません。しかし、遅くても3世紀の中葉には始っていたようだ。この頃におけるイノシシの飼養は、食料と祭祀に目的があり、主に農家の副業として盛んに行なわれた。ところが、6世紀に伝来した仏教の殺生禁断思想の波及で、急速に衰退したが、信仰心に乏しい農民が自分達の意志でやめようとしたわけではなかったから、その名残りは平安時代までも続いている<sup>3)</sup>。日本にブタがもたらされたのは、慶長14年(1609)にオランダ人が長崎に持ちこんだのが最初で<sup>4)</sup>、沖縄、奄美などの一部の島を除くと、それまで飼われていたのは、形質的にはあくまでイノシシであって、ブタではなかった<sup>5)</sup>とされている。

群馬県で、現在、イノシシの生息しているのは、西上州の山間部のみで<sup>6)</sup>、この他の地方では断片的な情報が2・3あるにすぎない。明治時代までは、県内各地に分布していたことが、遺跡からの出土例<sup>7)</sup>や各種の記録<sup>8)</sup>で明らかにされている。イノシシは30cm以上の積雪があると生息できなくなる<sup>9)</sup>。樹生市住民の古老によれば、明治時代の大雪以降姿を見なくなつたという。別に、豚コレラの流行でとも言われるが、確かにそこはわからない。

昭和59年(1979)10月、前橋市荒子町の柳久保水田址で、イノシシ類の橈骨と馬歯が各1個とウマなどの描かれた5枚重ねの土器器形土器が共存して出土した。包含層は、浅間B輕石層(1108または1281年)におおわれた水田のつくり土で、平安時代の中期から後期のものである。

平安時代前期(9世紀)に書かれた古語拾遺に御歳神が怒って蠍(イナゴ)を大発生させ、稻の苗を枯ら

してしまったため、白猪、白馬、白鳥を獻じてその怒りを解いた。五穀豊穣を祈る祈念祭はここから始った、とある。本水田址の一画が祭祀遺跡であることは、出土物の種類やその出土状況からみて、ほぼ間違いない。しかも、祈念祭に間違った祭祀である可能性も考えられる。とすれば、本遺跡でニワトリの骨を欠いているのは、鳥骨が含氣骨になっていて、さわめて軽く、弱い水流でも移動しやすくて流失したためではないかと考えられる。

古語拾遺にある白猪というのは、アルビノ個体のことだろうが、イノシシのアルビノはかなり珍らしく<sup>10)</sup>、それを祭祀のたびに調達するのは、困難だったと思われる。家畜には、ほぼ例外なく毛色多型現象が表われる<sup>11)</sup>から、それを家畜だとすれば白斑をもつものくらいなら案外なやすく入手できたのかも知れない。

この橈骨は、近位・遠位の両骨端が難脱していて、骨質は粗朶であり、年令は1才未満と推定される。性別は不明である。骨体を2分するような幅約4.3mmの亀裂が近位部の左前方から遠位部の左後方に走っているが、遠位端までは達していない。亀裂内は砂粒で充填されている。骨体部後面のほぼ中央に径2.0×1.2mmの楕円形の栄養孔がある。計測値は表1に示す。

骨体全員に対する左右径および後径の比率では、本標本は、骨体近位端、同中央、同遠位端のいずれにおいてもイノシシをしのいでいてブタに近似している。特に骨体中央での比率がNo.3のブタ以上であるのが注目される。その他の形態でもイノシシよりはブタに類似し、とりわけNo.2のブタにはそっくりである。いく世代にもわたるヒトの生息管理がなされなければ、極限まで家畜化されたといえる洋種のブタにこれほど近似した形態は表われないだろう。以上の点から、この橈骨はブタのものと判断している。

東南アジアの山地では、現在でもブタは放し飼いに

\* 群馬県立前橋第二高等学校

されていて、イノシシとの交雑は普通に行なわれている<sup>12)</sup>。本遺跡のブタは、このような放し飼いではなかつたのではないだろうか。交雑が普通に行なわれていたとは思えないほど椎骨の形態がブタ化しているからである。

次に馬歯について記す。左上顎の臼歯で表2でみると、歯冠高がたかく、咬耗があり進んでいたため、若年のウマである。部分的にセメント質が残存する。隣接面が近遠心の両面にあり、歯軸が遠心側にかなり傾いていること、咬合面の形などから、歯種としては第1または第2大臼歯が予想される。もしこの判断が正しいとすれば歯の大きさから、このウマは日本の中型在来馬<sup>13)</sup>（長野県の木曾ウマ、宮崎県の御崎ウマ）の小さめのものくらいの馬格が予測される。

椎骨と馬歯だけで、両獣類とともにごく一部分しか出土していないことについては、以下のように考えていい。土器部杯形土器が5枚重なったまま上向きに埋存していたことや、包含層の層相からは、出土地点付近に強い水流があったとは考えられず獸骨類が他所から流れ着いたものではないと推断される。農民にとって大切な財産であったはずのこれらの獸類を、いかに祭祀とはいえ、全身擲げてしまうわけにはいかず、一部のみにして残りは貴重な蛋白源としてみんなで食べてしまったのだろう。

結語 群馬県前橋市の平安時代中期から後期の水田址で、祭祀のさいの犠牲として用いられた可能性のつよいイノシシ類の椎骨と馬歯が出土した。椎骨はイ

ノシシの家畜化が高度に進んでいてすでにブタと呼んでよいほどの特徴をもっている。馬歯は左上顎の後臼歯で、齒の大きさから日本の在来馬の中型の小に相当する体高のウマが予想される。

本報告をまとめるにあたり、新潟県立小千谷西高校の堀川秀夫氏、前橋第二高校の清水恵三郎氏には、比較用の標本を貸与していただいた。前橋市教育委員会の前原豊氏、前原照子氏には実測図を描いていただきたり、出土状況など有益なご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表す次第である。

#### 引 用 文 獻

- 加藤晋平(1980)、國文人の動物同育一ぐくにイノシシの問題について—歴史公論』第45号、PP. 45~59
- 丹羽百合子(1983)、イノシシと人との交渉略史—「採集と同育」第45巻、1号、PP. 23~27
- 土肥 孝(1983)、日本古代における犠牲馬—「文化財論叢」震旦国立文化財研究所、PP. 383~400
- 鈴木直亮(1982)、改訂日本古代家畜史、有明書院
- 宇田川電男(1971)、「鹿島・家畜」—標準色図全集18
- 丹羽百合子(1983)、瓶出
- 環境庁(1979)、動物分布調査報告書(哺乳類)
- 巾 雄之(1979)、千駄木道路—特急・火山堆植物と遺跡I—「考古学ジャーナル」No.157、PP. 17~18、不動穴発掘調査団(1974)、不動穴第一調査概要、など
- 山田郡教育会(1925)、山田郡誌、など
- 朝日 徳也(1972)、イノシシの捕獲数の変動と気象条件「哺乳動物学雑誌」5、PP. 181~185
- 朝日 徳(1977)、日本の哺乳動物、玉川大学出版部
- 11)、12) 野村 謙信(1981)、家畜と人間、光文書店
- 13) 井田重幸(1974)、日本在来馬の源流「馬—森 浩一編」PP. 215~262

表1 イノシシ類椎骨骨体の計測値(単位 mm)

イノシシ	No 1 =群馬県上野村底 近位脊端癒着	平均 値 ブ タ			
		No 1	No 2	No 3	平均
全 長	104.7	118.9	120.0	106.1	112.7
近位最大横径	32.4 (0.309)	26.8 (0.244)	31.0 (0.300)	23.6 (0.238)	24.8 (0.220)
× 前後径	22.8 (0.218)	18.5 (0.186)	19.1 (0.187)	18.6 (0.187)	17.6 (0.186)
中央横径	24.3 (0.232)	17.2 (0.187)	19.1 (0.189)	15.8 (0.186)	17.4 (0.184)
× 前後徑	15.1 (0.144)	12.2 (0.111)	13.3 (0.111)	10.9 (0.101)	12.7 (0.107)
遠位最大横径	35.4 (0.338)	32.7 (0.300)	33.4 (0.278)	29.9 (0.277)	32.0 (0.264)
× 前後徑	33.5 (0.326)	26.2 (0.238)	27.9 (0.225)	24.4 (0.226)	25.9 (0.230)

( )内は全長に対する各計測値の比

表2 馬の上顎臼歯

#### の計測値

(単位 mm)

部 位	計測値
歯冠近位心経 (エナメル)	25.9
× 種 否 經 (エナメル)	23.3
× 齧 線	70.6

第1または第2大臼歯

## 2 柳久保水田址出土墨画土器の周辺

水野正好\*

土師器杯形土器の図様は、人物騎馬図と人物図から成り立っている。五片に損じ接合できないだけに本来の図様を復原することは難しい。仮に第1・2片を近接するものと見、その下に第3片を近接して配置するならば、内面は人物図など3図が等間隔で並置され、外側は3人物騎馬図を等間隔で並置しその間に2人物図を容れていく姿が復原される。また、第1・2片を左右に入れ替えた場合には、2人物騎馬図を上下に配置しその間に2人物図を左右に配置する姿が復原されるであろう。

いずれにせよ、交互に人物騎馬、人物図が連なる形をもっており、1つの意図をもって墨描されたものであることを示している。

この図様の性格を考える上で重要な役割を果たすのは人物図の人物の表現である。第1片の左側、第2片の右側の人物は騎馬人物図の人物とは表現が異なり、太く複雑な線描で絶じて異様感が深い。強氣の横溢する表現をとる。内面の人物図の人物も同様であり一見牛頭を想わせる表現をとっている。その表現するとこら人身上にして人に非ず、鬼を想起させる表現である。3人物図が共に右手に一本を握る姿態も異様であり、これまた強力な鬼神に仕える眷属一鬼のシンボルであることは言うまでもない。奈良市元興寺極楽坊藏白毫寺経の末に見られる鬼図、北野天神絵巻に見られる鬼の姿に共通する他、各種の呪法書に見える「鬼」の図様にも通ずる所が多い。人物騎馬図の人物の表現もまた興味を惹く。第1片の人物図は逆立つ髪の表現をもつ。第2片の人物もつり上がる眉の表現があり逆髪、放髪といった鬼神の髪の特色をよく示している。従って人の姿を借りた鬼の表現を見てよい。

柱を持ち立つ眷属たる鬼、騎馬し手を擧げて魅せる鬼神、そうした「鬼」の世界を語るものとしてこの土師器杯形土器が存在するのである。こうした2種の鬼は文献に明確を見る。騎馬する鬼の姿は「大日本国法華經疏記」卷下第128、「紀伊國美奈倍郡道祖神」と題して行疫神・道祖神が騎馬し群をなして夜行する様子

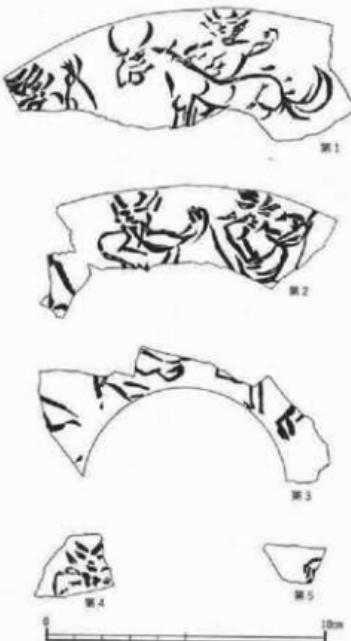


図1 墨画土器

を伝えた記事に鮮やかに語られている。災異・流行する疫疾を斬らすものとしての鬼であり、その急速な疫疾の流行の根源が騎馬の速度に重ねられ、その強勢な災異の根源が騎馬する貴人の権勢に重ねられているのである。柱立ち立つ鬼の姿は「紙團感神院縁起」などに、牛頭天王の眷属八万四千六百五十四神王が巨塔得来を襲う記事にも見え鬼の執物一象徴であった。従って、この土師器杯形土器に墨描された人物図と人物騎馬図は、災疫神の動きを伝えるものであり鬼の世界に息づく眷属神一眷属鬼の表現を見てよいのである。

この土師器杯形土器は、発掘調査中発見されたもの

\* 奈良大学文学部

であるだけに出土状況が窺える重要な資料となった。水田址、それも水口近くに据え置かれた5枚の同形の土器器杯形土器と共にあったものとされる。5枚重ねの最上に鬼を墨描したこの杯が戴せられていた可能性もあるという。馬骨・猪骨が近接して見られ注目を惹いたとのことであり、その在り方が興味を呼ぶ。こうした状況によく吻合する史料がある。「古語拾遺」の記事がそれである。そこには、御歳神の崇りである蝗害が発生し苗葉が枯損するといった事態が生じたのに對し、牛・猪・押草・鳥扇で崇りを送却する方法、牛穴を溝口に置き男茎形を作りそえ、葱豆子・蜀椒・吳桃葉、塩をその畔に置いて崇りを厭する方法で御歳神を祀った結果、苗葉がまた茂り年穀豊穣であったと記している。御歳神といった崇りなす神はそれ自体災疫神、鬼神であり、その眷属の跋扈が蝗害を生み出すのである。

「古語拾遺」が語る溝畔に牛穴を置き男茎形をそえ、葱豆子・蜀椒・吳桃葉、塩を置くといった厭法は直ちに本道跡に係り合うところとなる。鬼神・災疫神・崇り神を墨描した一土師器杯形土器は「崇り」の象徴、追却される「鬼神」の表現であり、牛穴など鬼神眷属の好物を盛る「祭祀中核」の器である。他の杯も各種の品一葱豆子以下の品を容れる器であったと見てよいであろう。男茎形や馬・牛など腐朽し去る祭物の存在もまた予測して置く要があり、水田溝畔一水口近くといった在り方も「古語拾遺」の祭場と見事に重なり合うのである。從って、蝗害・旱災など年穀の不順をもたらす「鬼神」一崇り神の動きを封するための祭祀実修の場であり、祀り果てた後を片付けた状況が本道構であったと見てよいであろう。

鬼神騎馬図、鬼神図は崇り神を語る数少ない描図である。騎馬・持棒といった姿態、群行なす動きはともに崇り神とその眷属の性格を語る重要な特性であると言えよう。多くの崇りなす神の中で農に係わり合う御歳神とその眷属のイメージに鮮やかに重なる鬼神の図様ということが出来るのである。

## 古語拾遺

訓文

著者 広成 横

### 御歳神

一いは、昔上古代に、大地主神、田を貢する日に、牛の糞を以て田人に食はしめき。時に、御歳神の子、其の田に至りて、糞に蟲きて還り、糞を以て父に召しき。御歳神を光して、糞を以て其の田に放ちき。田の萬葉に佑れ頃はれて御行に似たり。是に、大地主神、片足【志止々島】・足【今の俗の羅敷及米占なり】をして其の田を召しめしむるに、「御歳神 神を為す白猪・白馬・白鷦を厭りて、其の惡を解くべし」とまをしき。教に依りて嘗み奉る。御歳神答へ曰しき、「実に吾が意ぞ。麻病を以て神に仰りて之を神ひ、乃ち其の葉を以て之を拂ひ、天押草を以て之を押し、鳥扇を以て之を扇ぐべし。若し此の如くして出で去らば、牛の糞を以て溝の口に置きて、男茎形を作りて之に加へ。(是、其の心を厭ふ所なり。)葱子・蜀椒・吳桃葉の葉及塩を以て、其の畔に班ち置くべし。古語に、葱玉は都頭玉といふなり。」とのりたまひき。仍りて、其の敷に從ひしかば、苗の葉復茂りて、年穀豐稔なり。是、今の神祇官、白猪・白馬・白鷦を以て、御歳神を祭る縁なり。

西宮一民校注 岩波文庫版「古語拾遺」より

### 3 柳久保水田址出土墨書き土器の赤外線テレビカメラによる観察

呉屋充庸\*

実施期日 昭和59年12月3日(月) 13時~17時  
実施場所 群馬工業高等専門学校 前橋市鳥羽町580

#### 1 はじめに

絵具層の下に描かれている下絵や、汚れた位牌のように、見えなくなってしまった文字が赤外線用写真フィルムに撮影され、下絵や文字が明瞭になることは以前から知られていた。

しかし、赤外線フィルムのよく感じる800nm付近（例えば、サクラ赤外750フィルムは、波長域640~820nmに感光し、感光極大は750nmである。）では、墨も岩縁青、岩群青等も赤外線をよく吸収し、墨も顔料も黒く写って文字などが読みとりにくいという欠点があつた。

東京国立文化財研究所の三浦定俊氏は、墨が赤外領域でも光をよく吸収するのに対し、岩縁青等は2000nm付近の赤外線をよく透過させ、吸収が少ないことに着目し、2200nm付近まで感度をもつ $P_2O_5-P_2S$ ビジコンを使用した赤外線テレビカメラによる壁面調査等を実施し、古代・中世絵画の研究に貴重な資料を提供している。

柳久保水田址遺跡から発掘された約20点の墨書き土器は平安時代後期の水田跡の耕作土下から出土しているので、ほぼ平安時代中~後期の所産と考えられる。この中で墨による絵画の土器は県内においても稀有なものであり、当時の文化を研究する上で極めて貴重なものである。

赤外線テレビカメラにより、その判読がより明確になされれば古代史の資料としての価値も多いに高まる。

#### 2 赤外線テレビカメラシステムについて

本システムの構成は図1に示される。CH：赤外ビ

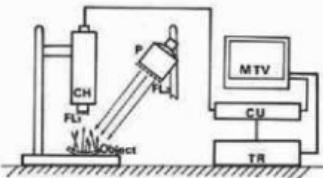


図1 赤外線テレビカメラシステムの構成

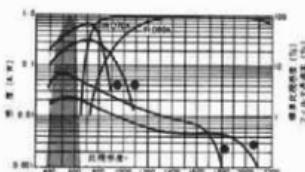


図2 分光感度特性

ジコン(C158、分光感度曲線図、図2の①)、浜松ホトニクス、CU：カメラコントロールユニット、MTV：モニタテレビ、TR：テープレコーダー(Victor MODEL CR-6300)、P：赤外線投光器C1385、FL<sub>1</sub>、FL<sub>2</sub>：赤外線フィルタ IR-D80A (フィルタ透過率は1200nm~2100nm間で80%以上の値を示している。図2参照)

#### 3 原理

土器の表面に文字や絵が墨で書かれるということは、墨が土器の表面層にも浸みこんでいることである。古代の土器は表面がすべて傷んだり、有機物が土壤中で微生物の作用を受け餘々に分解してできた黒褐色の腐植土等によって汚れている。したがってそれらは、

\* 国立群馬工業高等専門学校応用物理学教室

### 3 柳久保水田址出土墨書き土器の赤外線テレビカメラによる観察

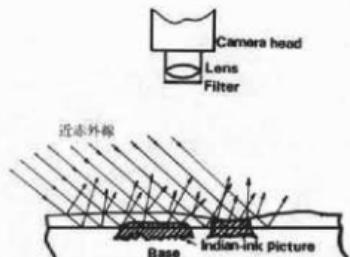


図3 近赤外線の投射とテレビカメラへの入射

図3に示されるような層をなしている。そこに投射される近赤外線(本システムでは、850nm.以上)をよく吸収する墨の部分と、この波長域では光を比較的よく透過する汚れの層が重かったり、隣接している。光が汚れの層を透過して墨の層に達し、そこで墨に吸収された残りの光が基底層である土器の表面から反射してテレビカメラのレンズに入射して結像する。墨の層を

経た光によって結像した部分と、墨の層以外からの反射光によって結像した部分では画像の明るさが違う。すなわちコントラストに差が生ずる。その結果、不明瞭な絵がはっきりと見えるようになったり、読みとれなかった文字が読めるようになたりする。

### 4 赤外線テレビカメラによる写真

図4-1は文字の書かれている部分の普通写真(ネオパンSS使用)、同じ部分の赤外線フィルム(サクラ赤外750、フィルターSR-60使用)による写真が図4-2、図4-3はその同じ部分を赤外線テレビカメラによってモニタテレビ上に写し出されたものである。これらを比較すると赤外線テレビカメラによる写真が一番よい。また図5・図6は、出土した土器に画かれている絵や文字の赤外線テレビカメラによる写真である。



1 普通フィルム(ネオパンSSによる)



2 赤外線フィルム(サクラ赤外750による)



3 赤外線テレビカメラによる

図4 各種写真による比較



1 狩形土器の内面裏面



2 内外面裏面

図5 赤外線テレビカメラによる写真



1 杯形土器の外面墨画 (図5と同一個体)



2 杯形土器の内面墨画

図6 赤外線テレビカメラによる写真

## 4 柳久保水田址出土の漆器椀の樹種について

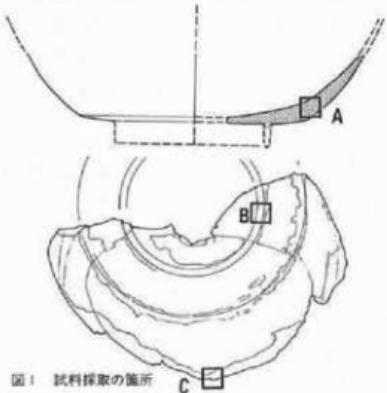
北野信彦\*

## 1 鑑定方法

樹種の同定作業は、出土材の内部形態の特徴を顯微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。

試料は遺物のオリジナル面でない箇所、つまり遺物の破損したような部分から、木口、柾目、板目の三方に向の切片をカミソリの刃を用いて切り取り作成した。

ただ今回の資料の場合、遺物の破損した部分の方向



が不規則で切片の作成がやや困難であった。切片はサフラニンで染色後、エチルアルコール、ワープチュアルコール、キシレンを用いて常法に従い脱水し、永久プレパラートに仕上げた。

なおプレパラートの倍率は、30倍、100倍、400倍とそのつど試料の状態に応じて倍率を変えて行った。

## 2 鑑定結果

ブナ *Fagus crenata Blume* (ブナ科 FAGACEAE)

## 3 鑑定理由

材は散孔材で道管はほぼ平等に散在する。道管に接

して纖維状仮道管および軸方向柔細胞が存在する。本来は年輪の始めと終わりにおける道管の大きさと数の相違のため、年輪界は明瞭であるはずであるが、今回はそこまでの確認はできなかった。

放射組織は、単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類に分けられ、ブナ材に特徴的紡錘形の広放射組織がよく認められた。

以上の同定内容から、ブナ科ブナ材と本試料を鑑定した。

## 4 木取り方法

本試料の漆椀は、3片の破片より成る半割部分のみの遺物であり、切片は3箇所より作成した。

A箇所(図1参照)の切片は板目方向を、B箇所の切片は柾目方向を、C箇所の切片は木口方向を示していた。

以上の結果より推定される木取り方法は、横木取り柾目取りである。なお、参考資料として近世以降の木取り方法(図2)を掲載する。

しかし、柾目取りの内「二ツ割」「追取」などのいずれの方法であるかはわからなかった。

## (1) 横木地

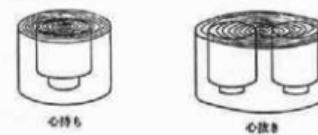


図2

横木地と柾木地の要領

(木表裏一括に施す)

## (2) 査木地



\* 財团法人 元興寺文化財研究所

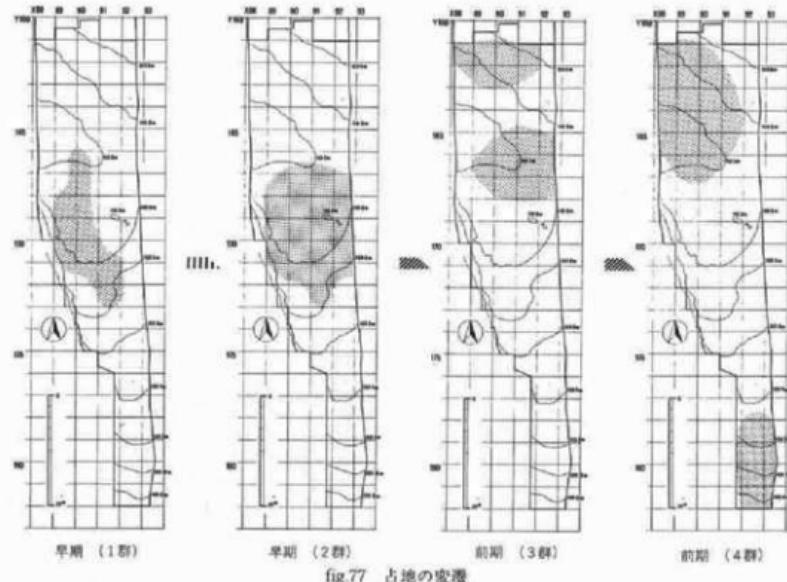
## VI ま と め

今回の柳久保遺跡群の調査によって、各遺跡とも多くの成果を得る事ができた。下鶴谷遺跡では、縄文時代遺物包含層の遺物分布から各時期の占地変遷や道具の組み合わせについての情報を得ることができた。柳久保遺跡からは古墳時代中期、和泉期の集落と遺物組成を把握でき、柳久保水田址からは、墨画土器、5枚重ねの杯、馬歯、豚の傍骨が特異な状態で検出された。どれをとっても、文化、社会を解明する上で貴重なデータといえる。まとめでは、そういう成果に検討を加えながら各遺跡毎にみて行きたい。

## 1 下鶴谷遺跡

本遺跡は從来の遺跡分類に従えば、遺物包含層に包括されるものである。遺物の出土状態を大きく分けた場合、「人為的行為」と「自然的行為」に分けられ、包含層の概念はこの二者を分別することなく用いられているといえる。

先土器時代の遺物分布には包含層という用語は用いられない。それは、遺構の検出が皆無といつていい程ありえないことと細分された層位に遺物を決定できるため、「文化層」としてとらえられている。それと比較して縄文時代以降にあっては、遺構とそれに伴出する遺物に分析の重点を置



いている事や貝塚、洞穴等を除いた場合、土層細分が不可能なため『包含層』として扱ってきていると思われる。こういった意味から本遺跡の例も、縄文早期から前期の資料がIII層中から出土しており、まさに遺物包含層であった。

縄文時代早期の資料は遺構数はもとより遺物の報告例も少ない状態である。特に本県の位置する北関東は、南関東のように貝塚がほとんど存在しないため、層位的に良好な調査も望めない。こういった状況であるがゆえに、本遺跡の包含層の分析と検討は意義の多いところである。

#### 土器群の占地変遷

各時期毎の占地のあり

方は1群土器が頂部から南へ28mの分布を見せ、続く2群土器は1群の範囲を東に拡大し、集石を中心とした占地を見せる。

2群と隔離する3群土器の分布は頂部、北東の二ヶ所に見られ、継続する

4群土器は恰かも1・2

群土器の分布空間を避け

るよう南北二ヶ所に離れた占地が見られる。以上のように土器群の平面分布から各時期の占地変遷が捉えられた他に、土器の分布と石器との重複から伴出関係がとらえられた。

#### 土器と石器の組み合わせ

遺物分布から得られた伴出関係は今後、他遺跡の資料との検証を必要とするものであるが、ひとまず成果としてまとめておきたい。

1群土器…特殊磨石、スタンプ形石器

2群土器…片刃形の石器、片刃形の石器未製品、削器、石鏃(1類)、打製石斧(1類)、剝片、

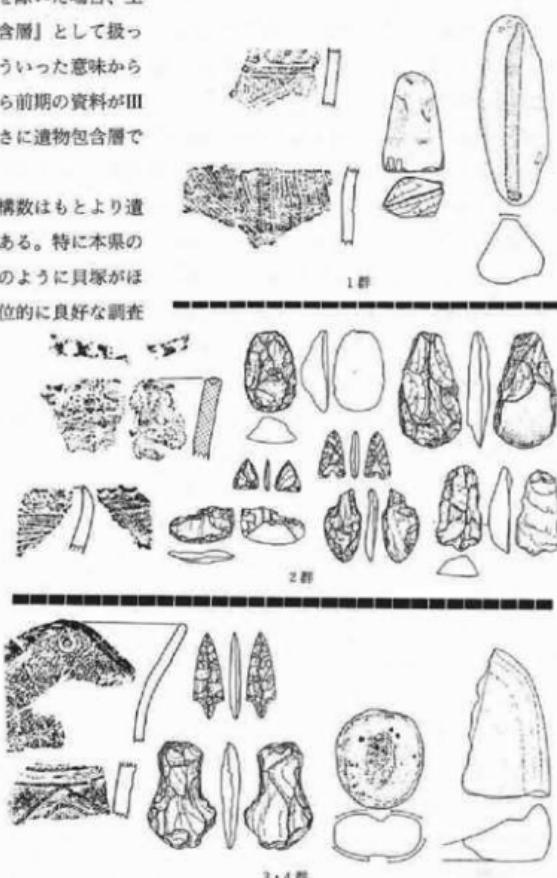


fig.78 土器と石器の変遷

ストーン・リタッチャー、大形磨石、安山岩角砾、集石

3・4群土器…石錐（3類）、打製石斧（2類）、石皿、凹石等、蜂ノ巣石、安山岩小円砾などがあげられる。3・4群土器との共伴は、4群との関係が強いものと考えられる。

#### 土器群の検討

1群土器は施文工具に半截竹管を用いて文様を作出し、交点に円形盲孔、平行沈線間の一つがわずかに盛り上がっている。類例を求めるに竹之内遺跡の田戸上層式があげられ、盲孔は常世式のそれとの関連が伺える。

2群土器は無文、条痕、擦痕を有する土器が平面分布で分離できなかったことから、一時期のバラエティーとして考えておきたい。特に口縁が外削ぎ状を呈するものが各類に目立ったが、この種の口縁は城ノ台貝塚、戸場遺跡の田戸上層式や子母口式に見られるものと類似する。また、わずかであるが有文の条痕でそれに沿う連続刺突文は県内では空沢遺跡に同様の文様が存在する。空沢例を含めて東北南部の常世式土器との関係を有する土器といえる。前記の竹之内遺跡や出流原小学校内遺跡例が好例であり、本例や空沢例では幾分、文様構成が異なる。また本例の円形盲孔は室谷洞窟や竹之内遺跡における常世式の盲孔と関係が見い出せる。

D類とした条痕文の唯一の有文である浅細沈線と貝殻模様文の施文された土器も竹之内遺跡の土器の中に同様の文様がみられる。

以上、本群の文様構成に子母口式の指標とされる絡条体圧痕文が全く見当らないことは、より田戸上層式に近い時期の所産とされ、東北南部の常世式と強い関連を有するものといえよう。

本群の多くに結晶片岩を多量に混和するものがある。このことについて、多摩ニュータウンNo269遺跡や小山田遺跡群No 8、24遺跡の子母口式に存在する事が報告されている。群馬県内において、空沢、田ノ上、大胡バイパス、北通遺跡などに認められ、土器の顔付き～色調、調整、胎土～が本群に極似している。また、押型文土器に金雲母が多く混和される事はすでに指摘されているが、それ以上に結晶片岩の混入を押型文に見る事ができる。結晶片岩を胎土に好んで用いる時期があると推測でき、おそらく押型文の周辺数式に限定できると考えられる。そして、原材である結晶片岩の供給先は多野山地であり、県下全域に渡る分布から土器そのものの搬入を考えるより、原材の搬入を考えておきたい。\*大胡町所在、直接資料。\*\*山下彦氏の御教示による。

#### 石器群の検討

1群土器との共伴関係にある特殊磨石は、中部地方で押型文土器群を中心にして確認されている。スタンプ形石器については南関東で撫糸文土器群と関連が認められるものである。しかし、本遺跡では沈線文土器群に伴出している事から、石器の組成や時空的分布を追求する上で意義が多い。

ところで、本石器の組成には直接的生産用具である剥片石器や石核石器を欠落している。2群土器に伴う石器群を組み入れると両群が補完される関係にある事を考慮しておきたい。

2群土器と共にとらえられた「片刃形の石器」は、北関東の色彩の強い石器といえそうであ

る。埼玉県ト伝遺跡、緑山遺跡、東山遺跡、栃木県出流原小学校内遺跡、群馬県和田遺跡、空沢遺跡、東吹上遺跡等に見られ早期後半から前期前半にかけて存在するものといえる。各遺跡の報告文では「小形の打製石斧」、「撫器」、「ヘラ状石器」等の名称で呼ばれており、今後、用途・機能面の検討を踏まえ、名称を決定しなければならない。

3・4 磁土器と伴出関係にある石器の中で、有茎石鐵 3 点の存在は注意を要する。従来、関東地方における有茎石鐵の存在は中期後半に至る時期とされており、前期には存在が考えられていなかったため、今後検討を要する。また、打製石斧の形態は基部が直線的に作出され、刃部が幅広くなるといった特徴を有している。

(前原 豊)

## 2 柳久保遺跡

今回の調査によって、柳久保遺跡では、次のような時代の様相が把握された。

今からおよそ 2 万年前の地層から黒曜石の剝片及び石器の材料と考えられるチャートと結晶片岩の礫が検出されたことにより、この柳久保の台地で最初に人々の活動が始まったのは、先土器時代からと見られる。

縄文時代も、遺構は土坑 1 のみであり、他に早期及び前期の土器片と石器が散布していたことから、その頃、柳久保の台地上に人々の活動があったと考えられる。

その後長い間人々の活動の痕跡が絶えて後、古墳時代中期と泉期に集落としての生活が営まれるようになる。検出された住居址は 5 軒、それに係る遺物集中区と土坑 2 である。今後の調査により、この集落は台地の中央部から東側に広がる様相が見える。その後の遺構としては平安時代と考えられる溝 2 条が検出されたが、柳久保の台地の先端部に広がると考えられる同時期の集落及び柳久保水田址との係わりを持つ可能性もある。

### 住居址の様相

tab. 7 住居址一覧

	形態	短軸	長軸	比	主軸	面積	柱穴	竪窓穴	引	開口方	特殊遺物
H-1	長方形	3.04	6.08	1:1.2	N-6°-W	29.16	なし	1	1	なし	
H-2	台形に近い正方形	3.60	4.04	1:1.12	N-44°-W	13.48	なし	1	2	なし	上製品
H-3	長方形	3.40	4.11	1:1.2	N-22°-W	13.44	なし	2	1	中央部方形 西南壁際	円錐状鉄石製品、三角状鉄石製品、鉄器、切妻状円錐形中空土器製品
H-4	長方形	4.08	5.59	1:1.37	N-23°-W	21.96	なし	1	3	西南壁際 全体に小ビット	鉄製品
H-5	台形に近い正方形	6.26	6.64	1:1.06	N-43°-W	38.34	4	1	1	なし	鉄器・鉄製品

上の表のように、住居の形態は、H-1・3・4、が長方形であり、H-1・3 は、短、長軸の比が同じ値を示す。H-2・5 は台形に近い不整正方形であり、主軸もほぼ同じ傾きを持つ。面積は、H-5 がとびぬけて大きく、次いで H-1・4 と続く。H-2・3 は、形態は違うがほとんど同じ大きさである。しっかりした柱穴が検出されたものは、H-5 のみであった。出土した特殊遺物では、5 軒の住居のうち 3 軒鉄製品を持っている。和泉期の住居址からの出土例は極

めて少い。栃木県赤羽根遺跡25号住居から鉄斧、同じく6号住居から柳葉式と思われる有茎鐵、同じく18号住居から不明鉄製品の出土が見られるが調査された同時期の住居址の数から見れば、鉄製品の出土の割合は極めて少い。なお、埼玉県倉林後遺跡I号住から刀子が2個、同後張遺跡184号住で鎌と熊が出土している。柳久保近辺の和泉期の住居からも鉄製品の出土は見られないことからも、本遺跡の鉄製品出土の割合は極めて特異なものと言えよう。

#### 周辺の和泉期の住居との前後関係

本遺跡の各住居出土の土師器については、時期的な差違は極めて少ないと考えられるので本遺跡近辺の遺跡出土の和泉期の土師器と比較してみたい。まず、本遺跡より古いと思われる遺構は、荒砥島原遺跡E3住で、有段口縁の壺を持つこと、段を持つ高杯が、本遺跡H-4及び集中区出土のそれよりシャープな作りであること、どの器種も硬質な焼成で整形が丁寧であることをその根拠と考える。次に本遺跡とほぼ同時期と思われる遺構を掲げれば、昭和57年度調査（以下数字のみ。）着帳遺跡2号住、58西田遺跡13号住居がある。本遺跡H-4号の単口縁壺9に類似の壺が着帳2号住で検出されている。本遺跡H-2の高杯2と着帳2号住の2個の高杯が、それぞれ形態が類似している他2遺構の土師器全般の成形と器面調整がかなり難な印象を受ける点でも、本遺跡出土の土師器と共通している。本遺跡より明らかに後出する遺構に前田遺跡第1号住、天神風呂遺跡11号住、南田ノ口遺跡1号住が掲げられる。3遺構とも竈を持つ住居であり（前田遺跡の報告書では竈状遺構という表現をしている。）出土遺物は、器形とその組合せ及び器面調整に和泉期の特徴を持つ。天神風呂遺跡報告書の編年試案では、11号住は、和泉期から鬼高期への過渡期で、6世紀初頭と考えられると述べられている。なお、これら3遺構より古く、本遺跡より新しいと見られる遺構に、荒砥東原遺跡21号住、荒砥島原遺跡B11号住があげられる。この2遺構出土の土師器は、お互いにいく組かの類似する器形が見られることから、同時存在も考えられる。後者は後世の遺構に切られ、完全な形で残存していないので断定はできないが、前者は竈を持たず、炉を持つ住居である。また2住居とも天神風呂遺跡、前田遺跡で検出されている和泉期終末から鬼高初頭に見られる平底を持つ鉢型をした杯を持つ。

#### 器種構成について

本遺跡出土と近辺遺跡出土の土師器の器種構成を見ればtab.8のようになる。

本遺跡出土の土師器の器種構成の特色は、第一に高杯の出土の割合が多く、5軒の住居址の平均出土率54.4%で半分以上高杯と言える。その一方杯、碗類が少なく平均一住居一個体に満たない。また壺の出土が全くなく、壺も全体で一個体しか出土していない。近辺の遺構では、着帳遺跡2号住に本遺跡と同傾向が見られ、この点からも同時期であることが裏づけられよう。なお、前田1号住についても、高杯の比率は高いが、壺、杯碗類も出土している点では違いがある。遺物の形態と整形から本遺跡より古いとした荒砥島原E3住は、出土点数が少なく良好なセットとは言えないで除いて考察すれば、その他本遺跡より新しいと考える遺跡では、高杯出土の比率は低く杯、碗類が多く、壺も半数の住居で検出されている。従って表からは、柳久保遺跡の住居

が営まれた頃とそれ以後では土師器の器種構成に変化が見られると言えよう。 (前原照子)

tab. 8 器種構成一覧

	直筒	壺形	小口筒	瓶形	円筒	錐形	杯形	楕円	高筒	手形	地盤
前田1号住	1(4.8)	2(9.5)		1(4.8)	4(19)	1(4.8)	2(9.5)	1(4.8)	9(42.9)		21
天神郷呂11号住	1(7.1)	1(7.1)	1(7.1)		4(28.6)		5(35.7)		2(14.3)		14
(鹿田ノ口1号住)	2(34.3)	2(14.3)	1(7.1)	1(7.1)	1(7.1)	1(7.1)	4(28.6)	1(7.1)	1(7.1)		14
東坂東道21号住	3(10.7)	3(10.7)	2(7.1)	4(14.3)	1(3.6)	4(14.3)	4(14.3)	4(14.3)	3(10.7)	1(13.6)	28
(荒砥島原B11号住)		3(15)	1(5)		3(25)	3(15)	1(5)	2(10)	5(25)		20
157着帳2号住	1(9.1)	5(45.5)							5(45.5)		11
156篠谷116号住	1(8.3)	1(8.3)	1(8.3)	3(25)			1(8.3)	1(8.3)	3(25)		32
(荒砥島原E3号住)	1(16.7)	3(10)							3(33.3)		6
H-1		1(8)			2(18.2)		1(9)		7(63.6)		11
H-2					1(11)				8(88.9)		9
H-3		3(58)				3(16.7)			2(33.3)		6
H-4	1(8.3)	1(8.3)	1(8.3)	2(16.7)				1(8.3)	6(50)		32
H-5	4(21.1)	1(5.3)	4(21.1)	1(5.3)				1(5.3)	8(42.1)		19
道物集中央区		1(8.7)			1(8.7)				13(86.7)		15

※遺構名の( )は、完層されていらない住居及び出土遺物の一部を示す。

### 3 柳久保水田址

浅間B軽石に厚くおおわれ、ほぼ全面に検出された柳久保水田址の所在する現況面は近年まで水田耕作が行なわれていた事実からも解るように平安時代後期、もしくはそれ以前から稻作に適していた地形であることを推測させる。赤城火山斜面端部に位置する河川改修部分の水田址は南北500mで標高差6mを有し、東西の台地に挟まれた形で南に広がる。この谷地は流下する河川の上流からの急な流速が徐々に弱まる位置にあり、それと付随して肥沃な土砂の堆積、また河道の氾濫・移動が見られる地形でもある。検出された多くの溝はこの事を物語ると考えられる。

また、この水田址からは散見する土師・須恵片の他に漆器碗、五枚重ねの土師杯、墨画土器、豚の焼骨、馬齒等が検出され祭祀遺構と考えられる。墨画土器、豚の焼骨・馬齒についての専門的判断は奈良大学・水野正好氏、前橋二高・宮崎重雄氏の玉稿を参照されたい。よってここでは民俗に見られる稻作儀礼、および年神の検討を通して本遺構の性格を考えてみたい。

稻作は元来、水の得やすい低湿地で行われ、湖沼や河川の水を人工の力による用水として利用するようになるには多大の時間を要した。また移植栽培である日本の稻作は苗代づくり・田植・除草・稻刈り等に労働を集中させる必要を生じさせ、生産過程での病虫害、日照り、風水害は収穫に決定的な打撃を与えた。豊穣は自然もしくは自然を超えるものに大きく左右されると考える必然がここに生じたと言える。農耕の進展とともにあらゆる農作物には神秘的な力が宿ると考えられ、とりわけ稻を代表とする穀物には稻靈という表現で示されるように様々な信仰儀礼を伴なう。民俗では一般的に稻作儀礼を次のように段階を追って考える。

1. 予祝 正月に関わる農事はじめの儀礼。稻作の開始に先立って鳥追い・惡靈送り等の習俗を含む。

2. 播種 苗代に種播をまき田植前までの儀礼。水口祭り、苗忌み等の儀礼を伴う。
3. 田植 田植に際し田の神を迎える儀礼。
4. 推移 稲の成長過程でそれを阻むものを除く儀礼。虫送り、風祭等の儀礼を伴う。
5. 収穫 収穫に伴う儀礼。穂掛け、刈り上げ等。

こうして稻作儀礼は一年をとおして行われるが稻作の豊かな実りを祈って祭る田の神の信仰は春と秋に顕著である。上記2の水口祭りは種播をまく日、水口に土を盛り木の枝や季節の花をさして農神・作神・亥神等とも呼ばれる田の神を迎えて祭るが、この木の枝を依り代とする田の神は稻作の進行に従って行ききすると考えられ春になると山や家から下って田の神となるという信仰を伴う。そして田植終了と同時にサノボリと称して田の神を送るが、収穫時に田の神を送るという伝承も多い。

年神について民俗では正月に祭る神として正月様・歳德様・ワカドシサマなどを言われるが、古事記上巻に大年神の系譜として須佐之男命の御子に大年神・宇迦之御魂神の名がみえ、大年神の子として御年神、孫に若年神の名がみえる。これらトシガミのトシは「稔」とも書かれたように穀物もしくは稻を意味する。言いかえるとトシガミは穀物神、稻の実りの神と考えられる。このトシガミは稻作の守護神として中世以降、田の神に複合していくと考えられる。古語拾遺(807年)に見える御歳神はすでに田の神としての力を持つことから平安初期の神観念の状況を物語る。また先の須佐之男命は退治した大蛇が水稻の生育をつかさどる水薙とも言われる事から水神として祭られ、さらには午頭天王に習合されて厄除神となっている。

さて古語拾遺には水口儀礼として犠牲獸が白猪・白馬・白鶴と三種あげられている。猪については食用に供した獸として鹿と共に先土器時代から一般的であるが、農作物によっては元来害をなす獸であった。口承文芸の「猪聲入」は「猿聲入」の類話として猪退治をテーマとしたものであり、猪の害を切実に伝える。言いかえると田畠の豊穣を左右するものとして害獸が神的存在と重なり、田の神的な觀念も包含していく。(地方によって山の神が白い猪となって現じ人間に怒りをなすことを伝える。)馬は農耕に使われただけでなく古くから神の乗り物のして神聖視され神事に欠かせないものとして扱われた。馬塚伝説に見られるように馬の靈力、荒ぶる神を祭り疫病等から免がれようとしたことが農耕儀礼とも重なっていったと考えられる。また馬は山の神や道祖神とも關係が深く、山の神祭りには馬がひきだされたという。鶴は古來より曉を告げる鳴鳥である事から闇と光明の世界を分ける靈鳥とされ、魂および農耕儀礼の犠牲鳥として考えられてきた。高崎市御布呂遺跡からは浅間C軽石に埋まった水田址が検出されているが、鶴の可能性が高い肉塊の出土が報告され稻作儀礼の犠牲鳥であろうと考えられている。(沖縄では田植の後、鶴を犠牲とする祭りが見られるといふ。)

以上、主に民俗の事例を参照として稻作儀礼等について見てきたが、もとよりこれを歴史の流れにあてはめることは困難であり、今後の例証に揃らなければ空白を埋めることはできない。同時に祭祀遺構についても、検出される例が今後増えていくことによって実証的に明確化されるで

であろう。

また今年度の調査で検出が困難であった畦の問題や水田の規模、性質に関しては来年度の柳久保の調査、さらには将来的に城南地区一帯の調査がなされる段階で明らかになるであろうし、その時点での人々の文化や生活が推定できよう。

(浜田博一)

### 主 要 参 考 文 献

- 安孫子昭二 1967 「No.269遺跡」「多摩ニュータウンIV」多摩ニュータウン遺跡調査会  
 安孫子昭二 1984 「No.8、24遺跡」「小山田遺跡群V」小山田遺跡群調査会  
 安孫子昭二 1984 「No.4遺跡」「小山田遺跡群III」小山田遺跡群調査会  
 相沢 忠洋 1967 「群馬県赤堀石山遺跡」考古学ジャーナル9号  
 井野 修二 1984 「小神明遺跡群II」前橋市教育委員会  
 伊東 秀吉ほか 1984 「川島谷遺跡群I」町田市小田急野津田・金井田地内遺跡調査团  
 市川 正史ほか 1982 「向原遺跡(第3分冊)」神奈川県教育委員会  
 鹿塚 恵子ほか 1983 「長原北部遺跡群 中居敷窓口・鍛田・清水口」舞台II遺跡』高崎市教育委員会  
 岩瀬 一夫ほか 1984 「赤羽根」栃木県教育委員会 栃木県文化振興事業団  
 乾田 雄一ほか 1984 「茨城東原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 石坂 茂ほか 1984 「要紙島遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 井上 唯雄ほか 1963 「前橋城南地区の土師便用遺跡」荒砥史談会 前橋市教育委員会  
 井上 唯雄ほか 1984 「要紙島遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 井上 唯雄ほか 1984 「足利遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 井上 唯雄ほか 1983 「茨城北部遺跡群発掘調査板橋」群馬県教育委員会  
 今野 宏ほか 1982 「越後遺跡」財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
 大塚 昌彦 1982 「空谷遺跡3次」群馬県前橋市教育委員会  
 唐沢 保之ほか 1984 「芳賀東部畠地遺跡群 第1巻」前橋市教育委員会  
 貴志 正造詣 1967 「神道集」東洋文庫94 凡人社  
 黒岩 文夫ほか 1985 「中相遺跡」群馬県昭和村教育委員会  
 小堀 一夫 1984 「戸塚遺跡」東京都町田市戸塚遺跡調査会  
 桐宮 史郎ほか 1981 「倉林後遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
 小島 純一 1982 「前田」群馬県柏川村教育委員会  
 収口 一ほか 1982 「伊勢崎東北遺跡」群馬県企業局  
 鈴木 秀雄ほか 1988 「ト伝」埼玉県教育委員会  
 田村 薩 1984 「房塚考古学ライブラリー 先上層時代」財團法人 千葉県文化財センター  
 外山 和夫 1973 「東吹上遺跡」群馬県立博物館  
 鶴山比呂志 1967 「農具鉄器化の二つの侧面」考古学研究51 考古学研究会  
 土井 義夫 1976 「歎製工具研究ノート」季刊どもん10 JICC 出版局  
 中村孝三郎 1964 「宝谷祠窟」新潟県長岡市立科学博物館  
 松村 親樹 1983 「噴氣遺跡群I」前橋市教育委員会  
 松村 一昭 1983 「西山古墳群及び北通、高船遺跡発掘調査概報」群馬県赤堀村教育委員会  
 馬目 順一 1988 「竹之内遺跡」福島県いわき市教育委員会  
 宮崎 朝雄ほか 1980 「甘柏山」埼玉県教育委員会  
 山中 草ほか 1984 「長岡京跡」乙訓文化財事務連絡協議会 向日市教育委員会  
 櫻田 国男 「櫻田國男集11、14、15」筑摩書房  
 矢島 俊雄 1984 「出土原小学校内遺跡発掘報告書」栃木県佐野市教育委員会  
 吉田 格 1955 「千葉県城ノ台貝塚」石器時代1号  
 横川 好富ほか 1988 「沼平、平原、新瓶、中山、お金塚、中井丘、鶴巻、永久保、猪久保遺跡」  
     埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
 横川 好富ほか 1979 「上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 下田、源訪」埼玉県教育委員会  
 横田 利平ほか 1977 「駒込北遺跡発掘調査報告」駒込北遺跡調査会  
 若月 香吾 1984 「笠懸村和田遺跡」群馬県笠懸村教育委員会  
 神戸 聖語 1980 「御布呂遺跡」高崎市教育委員会  
 萩原 浩男ほか 1973 「古事記」日本古典文学全集 小学館  
 井田 安雄ほか 1980 「群馬県史27」群馬県  
 西宮 一民教授 「古語拾遺」岩波文庫  
 京真国立文化財研究所 1983 「平城宮出土墨書き土器集成I」京真国立文化財研究所

tab. 9 石 器 計 測 表

No.	種類	石材	出土グリッド	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (mm)	重さ (g)	備考
1	石 鋸	チャート	X 90・Y 176	1.4	1.2	0.2	0.4	59E I
2	ガ	安山岩	西 領	1.5	1.2	0.3	0.5	ガ
3	ガ	頁岩	X 91・Y 171	1.7	1.9	0.4	1.0	ガ
4	ガ	安山岩	X 91・Y 168	1.7	1.5	0.3	0.8	ガ
5	ガ	チャート	X 90・Y 162	1.5	1.5	0.4	0.6	ガ
6	ガ	ガ	X 92・Y 171	2.3	1.5	0.5	1.1	ガ
7	ガ	流紋岩	X 91・Y 172	2.2	1.3	0.4	0.7	ガ
8	ガ	安山岩	X 89・Y 166	2.7	1.4	0.5	1.4	ガ
9	ガ	チャート	表 面	2.4	1.5	0.5	1.0	ガ
10	ガ	頁岩	表 面	2.8	1.4	0.5	1.4	ガ
11	ガ	安山岩	X 90・Y 168	2.9	2.2	0.4	2.2	ガ
12	ガ	頁岩	X 90・Y 160	3.7	1.6	0.6	2.9	ガ
13	ガ	ガ	X 89・Y 163	4.1	1.4	0.5	2.5	ガ
14	石 鋸 未 製 品	ガ	表 面	1.7	2.0	0.3	1.0	ガ
15	削	ガ	X 92・Y 169	2.6	2.7	0.7	3.8	ガ
16	ガ	ガ	X 90・Y 170	2.9	2.0	0.6	3.7	ガ
17	ガ	ガ	X 92・169	3.4	6.2	1.2	20.5	ガ
18	ガ	ガ	X 91・Y 165	5.8	3.9	0.7	14.8	ガ
19	ガ	ガ	X 92・Y 168	7.0	3.6	1.2	24.1	ガ
20	ガ	ガ	X 92・Y 169	3.5	6.0	1.3	29.1	ガ
21	削	ガ	X 90・Y 170	10.5	4.6	1.6	65.3	ガ
22	ガ	頁岩	X 90・Y 169	7.3	3.6	1.2	31.4	ガ
23	ガ	ガ	X 92・Y 160	4.2	6.2	1.3	19.1	ガ
24	ガ	ガ	X 91・Y 170	6.1	4.4	1.1	28.3	ガ
25	片刃形の石器未製品	ガ	X 90・Y 169	7.3	4.8	1.9	53.0	ガ
26	削	ガ	X 90・Y 172	10.1	4.4	1.9	66.0	ガ
27	ガ	ガ	X 90・Y 167	3.9	4.1	1.5	16.5	ガ
28	削	ガ	X 92・Y 170	4.7	4.6	1.1	26.5	ガ
29	ガ	ガ	X 91・Y 166	5.1	3.6	0.9	18.8	ガ
30	削	ガ	X 92・Y 181	7.1	3.3	1.4	34.2	ガ
31	ガ	ガ	X 92・Y 169	6.3	3.3	1.5	54.2	ガ
32	ガ	ガ	X 91・Y 171	6.7	3.4	1.2	23.6	ガ
33	ガ	ガ	X 90・Y 170	3.2	3.1	1.0	14.4	ガ
34	ガ	ハリ雲母安山岩	X 91・Y 171	3.7	6.0	1.1	20.6	ガ
35	片刃形の石器	ガ	X 90・Y 168	5.8	4.5	1.4	41.2	ガ
36	片刃形の石器未製品	ガ	X 89・Y 165	6.2	5.4	1.8	62.6	ガ
37	ガ	ガ	X 92・Y 166	7.3	7.2	2.2	113.1	ガ
38	片刃形の石器	ガ	X 90・Y 170	6.0	3.9	1.2	35.6	ガ
39	片刃形の石器未製品	ガ	X 92・Y 169	7.7	4.7	2.4	82.8	ガ
40	削	ガ	X 90・Y 172	4.8	7.3	1.6	52.7	ガ
41	ガ	ガ	X 92・Y 183	7.7	3.8	1.0	24.4	ガ
42	ガ	ガ	X 91・Y 170	8.9	3.5	1.4	43.6	ガ
43	片刃形の石器未製品	ガ	X 90・Y 164	8.4	5.9	2.3	109.4	ガ
44	ガ	ガ	X 91・Y 167	8.7	4.6	1.8	71.9	ガ
45	削	ガ	X 90・Y 170	9.3	5.1	1.9	60.6	ガ
46	ガ	ガ	X 89・Y 165	6.3	7.4	1.3	78.5	ガ
47	ガ	ガ	X 90・Y 169	4.3	8.0	1.0	54.2	ガ
48	ガ	ガ	X 91・Y 169	6.1	6.8	1.0	44.2	ガ
49	ガ	ガ	X 93・Y 175	6.4	6.8	2.0	72.8	ガ
50	ガ	ガ	X 90・Y 169	5.1	7.1	1.0	28.3	ガ
51	削	ガ	X 91・Y 167	8.7	6.0	1.8	72.7	ガ
52	ガ	ガ	X 91・Y 166	8.9	6.2	0.9	50.3	ガ
53	ガ	ガ	X 91・Y 166	12.2	5.0	1.6	125.1	ガ
54	片刃形の石器未製品	ガ	X 92・Y 168	8.9	6.5	2.5	126.1	ガ
55	削	ガ	X 89・Y 165	7.1	5.1	1.5	64.0	ガ
56	ガ	ガ	X 91・Y 166	10.7	8.1	2.5	220.0	ガ
57	ガ	ガ	X 90・Y 170	8.2	6.7	1.6	79.6	ガ
58	ガ	ガ	X 91・Y 167	9.2	6.8	2.1	141.8	ガ
59	ガ	ガ	X 91・Y 166	12.5	6.5	3.0	210.0	ガ
60	削	ガ	表 面	11.1	10.7	4.1	650.0	ガ
61	削	ガ	X 91・Y 169	10.4	8.3	3.7	350.0	ガ
62	片刃形の石器	ガ	X 92・Y 171	2.8	3.9	0.9	8.4	ガ
63	ガ	ガ	X 92・Y 169	3.5	4.6	1.9	34.1	ガ
64	ガ	ガ	X 90・Y 170	8.5	5.4	1.8	82.5	ガ

No.	器種	石材	出土グリッド	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (kg)	備考	
65	タ	タ	X 90・Y168	4.2	2.6	0.9	9.5	タ	
66	タ	タ	X 90・Y172	6.7	5.5	1.6	75.7	タ	
67	タ	タ	X 91・Y171	8.3	5.4	1.6	71.3	タ	
68	タ	タ	X 92・Y167	7.2	4.2	2.8	118.6	タ	
69	タ	タ	X 91・Y166	9.5	5.7	1.9	130.4	タ	
70	片刃形の石器未製品	タ	X 92・Y168	10.1	5.8	2.4	152.9	タ	
71	タ	タ	X 92・Y170	8.4	5.6	3.0	183.1	タ	
72	タ	タ	X 92・Y171	9.0	5.8	3.2	150.8	タ	
73	片刃形の石器	タ	X 92・Y168	7.9	5.6	2.4	116.1	タ	
74	タ	タ	X 90・Y173	9.0	5.1	2.6	116.2	タ	
75	タ	タ	X 90・Y168	8.2	4.3	2.0	75.2	タ	
76	片刃形の石器 貝	タ	X 92・Y166	7.6	4.9	2.7	93.0	タ	
77	タ	タ	X 92・Y168	7.4	4.6	3.2	117.6	タ	
78	タ	タ	X 92・Y167	7.7	5.1	2.4	94.3	タ	
79	タ	タ	X 92・Y170	8.5	4.4	3.4	140.8	タ	
80	タ	タ	X 89・Y164	9.1	5.1	2.4	108.3	タ	
81	タ	タ	X 91・Y166	8.0	4.8	2.0	71.7	タ	
82	タ	タ	X 90・Y168	7.5	5.0	1.4	57.3	タ	
83	打製石斧	タ	X 90・Y166	6.0	5.1	2.7	101.7	タ	
84	片刃形の石器未製品	タ	X 91・Y169	6.6	5.1	2.2	74.9	タ	
85	削器	タ	X 91・Y172	6.2	4.0	1.2	31.2	タ	
86	打製石斧	タ	X 93・Y179	4.1	6.3	1.3	42.6	タ	
87	タ	タ	X 91・Y168	6.3	5.0	1.8	68.2	タ	
88	タ	タ	X 93・Y176	3.8	4.6	1.8	44.1	タ	
89	片刃形の石器未製品	タ	X 91・Y167	3.4	7.3	1.4	37.6	タ	
90	削器	タ	X 92・Y168	10.7	5.3	1.6	92.3	タ	
91	打製石斧	タ	X 91・Y177	11.3	5.8	2.1	129.3	タ	
92	タ	タ	X 89・Y165	10.7	6.6	1.0	97.6	タ	
93	タ	タ	X 88・Y165	10.3	6.5	1.5	102.2	タ	
94	タ	タ	X 93・Y177	8.7	6.5	3.1	184.7	タ	
95	片刃形の石器未製品	タ	X 91・Y167	14.2	6.0	2.9	250.0	タ	
96	タ	タ	X 91・Y171	8.1	6.3	2.0	124.2	タ	
97	打製石斧	タ	X 92・Y168	11.2	6.0	2.2	139.4	タ	
98	タ	タ	X 90・Y173	14.9	7.7	1.7	180.7	タ	
99	四	石	安山岩	X 93・Y179	8.4	6.8	4.9	260.0	タ
100	四	石	安山岩	X 91・Y165	7.9	6.3	5.5	340.0	タ
101	四	石	安山岩	X 88・Y148	10.3	8.1	5.3	500.0	タ
102	タ	タ	X 90・Y166	8.5	9.7	4.5	460.0	タ	
103	タ	タ	X 90・Y165	10.2	7.4	4.6	470.0	タ	
104	タ	タ	X 89・Y164	11.1	8.5	4.8	420.0	タ	
105	タ	タ	X 89・Y161	5.9	5.0	3.5	114.7	タ	
106	四	石	磨石	X 91・Y165	9.5	8.5	4.2	510.0	タ
107	タ	タ	X 89・Y163	7.1	7.8	4.7	320.0	タ	
108	スタンプ形石器	タ	X 89・Y168	9.4	5.6	3.8	320.0	タ	
109	特殊磨石	タ	X 90・Y171	9.2	5.9	3.9	520.0	タ	
110	タ	タ	X 90・Y169	9.4	6.3	3.8	460.0	タ	
111	タ	タ	X 92・Y167	6.5	5.6	6.5	260.0	タ	
112	タ	タ	X 92・Y167	11.5	5.6	5.5	610.0	タ	
113	タ	タ	X 90・Y166	12.7	7.0	7.2	820.0	タ	
114	タ	タ	X 90・Y169	18.2	6.6	6.5	900.0	タ	
115	タ	タ	X 92・Y167	14.8	7.2	6.8	1220.0	タ	
116	タ	タ	X 90・Y168	14.0	7.0	6.9	860.0	タ	
117	四	石	磨石	X 92・Y174	8.7	6.9	4.0	250.0	タ
118	磨	石	石	X 90・Y165	11.3	10.1	4.4	610.0	タ
119	タ	タ	X 90・Y165	15.2	7.6	3.5	690.0	タ	
120	タ	タ	X 91・Y161	13.2	11.1	7.7	700.0	タ	
121	磨	石	石	X 90・Y161	14.3	8.4	5.0	520.0	タ
122	石	磨	石	X 93・Y179	3.5	2.3	0.8	7.6	先土器時代Fig. 7
123	鍬	刃	研磨貝	X 92・Y174	5.6	3.1	0.9	11.5	59E 2 * fig.34
124	剝	片	磨	X 87・Y117	9.6	5.6	3.7	193.9	fig.35
125	三角形磨石器	貝	研磨	表	1.4	1.5	0.3	0.5	*
126	石	磨	石	表	1.4	1.5	0.3	0.5	*
127	尖頭	磨	石	硬質貝	14.0	2.0	1.1	29.7	59E 6 先土器時代Fig.72
128	打製石斧	貝	研磨	W-1	14.3	7.1	4.2	440.0	*
129	三角形磨石器	*	研磨	X 125・Y70	8.5	8.2	6.6	660.0	*

tab. 10 土器観察表

## H-1号住居址

番号	器 形	寸 法	器 形 の 特 長	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調②焼成③現存 ④船土⑤備考
1	杯	11.6 5.8 4.3	平底の底部に最大厚さをもち、脚部は内側して立ち上がる。内斜口縁を呈す。	口縁部横ナギ。体部上半ヘラナギ。体部下半ハナゲ。底部ヘラケズリ。	口縁部横ナギ。体部ナギ。	①焼②ふつう ③焼成 ④船
2	甌	— — —	やや開げ直角底の底部から立ち上がり、脚部上半に最大厚さを有する扁平な甌形。	脚部横ナギ。脚上へ中部ナギ。脚下半～底部ヘラケズリ。	体部上半には、積み上げ痕を残し、指ナギ指オサエ。下半はヘラナギ。	①焼黄褐色 ②良好 ③焼成 ④現存⑤底
3	甌	(13.9) 17.5 4.2	やや開げ直角底の底部から立ち上がり、脚部上半に最大厚さを有する扁平な甌形。	口縁部、横ナギ。口凹部腹方向のハケ目。箇部、横方向のナギ。脚部中位から下位にかけて筋方向のミガキ。箇部から底部へ移行する部分に積み上げ痕を残す。	口凹部、横方向のハケ目。箇部、横方向のナギ。脚部から底部へ移行する部分に積み上げ痕を残す。	①焼黄褐色 ②良好 ③焼成 ④現存⑤底
4	高 瓶	(20.4) — —	ほぼ同一した厚みをもち、丸柱を持って立ち上がる。	口縁部、横ナギ。脚部、セザリの後腹方向のミガキ。	口縁部、横ナギ。体部、ナギの後腹方向のミガキ。	①焼黄褐色 ②良好 ③焼成 ④脚部のみ現存 ⑤底
5	高 瓶	20.8 — —	脚部はゆるやかに開き、下半にやや不規則ではあるが後を持つ。	口縁部横ナギ。脚中位から底まで横方向。それより下位は斜方向のヘラケズリ。	ハケ目以後、ナギ、後、暗文。	①焼褐色 ②良好 ③焼成 ④現存⑤底
6	高 瓶	— — —	脚柱部は、わずかに丸味を持って開き、腹部で急に広がる。	脚柱部上部に、溝切りを施し残す。茎部との接合部を残す。		①にぶい褐色 ②良好 ③脚柱部のみ現存④底
7	高 瓶	— — —	脚柱部は、わずかに丸味を持って開く。	脚柱部ナギ。	脚柱部上半は弱い絞り。下半は横方向へク崩り。	①にぶい褐色 ②ふつう ③脚柱部及び現存④底
8	高 瓶	— — —	脚柱部は細く上部の継った円柱状を呈す。	脚柱部、ナギ。	横方向の難な土台。脚部と接合部を残す。	①焼椎 ②ふつう ③脚柱部及び現存④底
9	高 瓶	— — —	脚柱部は、わずかに丸味を持って「ノ」の字形に開き。腹部で急に広がる。	ナギ。	強い溝切りの後、絞り。	①にぶい褐色 ②良好 ③脚柱部及び現存④やや厚
10	高 瓶	— — (22.3)	瓶部で大きく開く。	横ナギ。 —	横ナギ。	①焼褐色 ②良好 ③瓶部のみ現存 ⑤底
11	甌	18.8 28.3 6.6	小さな平底から立ち上がる脚部は、中位に最大厚さをもち、口底部は「く」の字形に外傾する。	底部、ケズリ。脚部は、ケズリの後、ナギ。口縁部、横ナギ。	口凹部、横ナギ。脚上半横方向へラケズリ。わずかに積み上げ痕を残す。	①焼褐色 ②良好 ③焼成 ④現存⑤底

記) 法量については、口径、高さ、底径の順で記載した。( )は推定を表わし、不明を示す。以下についても同様である。

## H-2号住居址

番号	器 形	寸 法	器 形 の 特 長	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調②焼成③現存 ④船土⑤備考
1	高 瓶	— — —		底部、ナギ。	底部、ナギ。	①焼 ②良好 ③脚部 及び現存 ④底
2	高 瓶	15.7 — —	脚部間に弱い縦を有し、外反ぎみに立ちあがる。脚部との接合はホゾによる。	脚部脚下半、ヘラケズリ後ナギ。口縁部、横ナギ。	脚部、ナギ。口縁部、横ナギ。	①焼 ②良好 ③脚部 及び現存 ④やや厚
3	高 瓶	18.4 — —	脚部間に弱い縦を有し、そこからやや外反ぎみに立ちあがる。脚部との接合はホゾによる。内面底部は丸みを呈する。	口縁部、横ナギ。脚部、ヘラケズリ。	口縁部、横ナギ。脚部、ナギ。	①焼 ②きわめて良好 ③脚部の丸みほぞ完形 ④脚及
4	高 瓶	18.4 — —	脚部下面にやや縦の縦を有し、直線的に立ちあがる。脚部との接合はホゾによる。内面底部は丸みを呈する。	口縁部、横ナギ。脚部上半ヘラケズリ。脚部下半ヘラケズリ後ナギ。	底部、ヘラナギ。脚部、ナギ。口縁部、横ナギ。	①にぶい褐色 ②良好 ③外縫には光沢 ④底
5	高 瓶	16.7 14.4 12.1	脚部間に弱い縦を有し、やや外反ぎ。脚柱部は、ややハサ形に立ちあがる。脚部はやや偏んで開く。	脚部上位、横ナギ。脚部下位ヘラケズリ後ナギ。脚部後部ヘラケズリ後ナギ。脚部、横ナギ。	脚部上位、横ナギ。脚部下位ヘラケズリ後ナギ。脚部、横ナギ。	①にぶい褐色 ②きわめて 良好 ③脚部及び底 ④底

6	高 杯	— — —	脚柱部は「ハ」の字状を呈す。	脚柱部ナダ。	脚柱部上位に絞り目。 脚柱部下位に絞り目。	①浅黄緑 ②良好 ③脚柱部のみ残存 ④やや粗
7	高 杯	— — —	脚柱部は円筒形を呈する。杯部と脚部の接合は独立するホゾによる。	脚柱部ナダ。	脚柱部上位に弱い絞り目。下位ナダ。横み上げ底を有する。	①椎 ②良好 ③脚柱部のみ残存 ④密
8	高 杯	— — —	脚柱部は、円錐状に立ちあがり、脚部はゆるやかに聞く。	脚柱部。縦方向のミガキ部、横ナダ。	脚柱部上位に絞り目。脚柱部と脚部との接合底を有する。	①によい椎 ②きわめて良好 ③脚柱部のみ残存 ④密
9	増	13.8 11.8 3.0	口縁部に最大径をもち底部は中央部に内凹の凹みをもつ。	口縁部は脚ナダの後、縦方向のヘラケズリ。脚部、ナダ。	口縁部、ヘラケズリ。脚部、ナダ。	①によい椎 ②良好 ③脚柱部のみ残存 ④やや粗

H-3号住居址

番号	器 形	寸 法	器 形 の 特 良	外 面 調 査	内 面 調 査	①色調②成形③残存 ④施土⑤備考
1	鉢	11.1 6.8 4.5	脚柱部の底部は、中央に凹みを有する。脚部は、中央からやや内凹ぎみに立ちあがる。	口縁部、横ナダ。脚上半に縦方向のハケズリ。脚下半、横方向のヘラケズリ。	口辺部、横ナダ。脚部、ヘラケズリ。脚上半に横み上げ底を有す。	①によい椎 ②良好 ③口縁部の一部欠損 ④密
2	高 杯	16.8	脚柱部に接合を有する脚部。脚部と脚部の接合は独立するホゾによる。	口縁部、横ナダ。脚上部にナダ。脚下部にヘラケズリを施した後に細文風のヘラミガキ。	口辺部ココナダ、脚部ヘラナダの後、細文風のヘラミガキ。	①椎 ②きわめて良好 ③杯部のみ残存 ④密
3	高 杯	— — —	杯部と脚部の接合は独立するホゾによる。	脚上半、縦方向のヘラケズリの後にハケズリ。脚下部ナダ。	脚上半に溝切底の後、絞り。脚下半、角によるナダ。	①によい椎 ②良好 ③脚柱部のみ残存 ④密
4	鉢	— — (5.6)	脚部は平底の底部から内凹ぎみに立ちあがる。	脚部に横み上げ底を有する。脚部、ナダ。	脚部、横ナダ。指オサニ。	①によい椎 ②良好 ③脚柱部下位に残存 ④密
5	盤	— — 3.8	脚部は平底の底部からゆるやかに立ちあがる。	脚部、斜方向のヘラケズリの後ナダ。	脚部、ハケ目。脚部ナダ、脚部下位に横み上げ成形底。	①によい椎 ②良好 ③脚柱部下位に残存 ④密
6	盤	18.6 — 4.5	脚部中央に最大径をもち、口縁部は「く」の字状に外張する。	口縁部、横ナダ。脚部、ハケ目。脚部、ヘラケズリ、ナダ。	口辺部、ハケ目。脚部ヘラナダ、底部ハケ目。	①によい椎 ②良好 ③脚柱部 ④密

H-4号住居址

番号	器 形	寸 法	器 形 の 特 良	外 面 調 査	内 面 調 査	①色調②成形③残存 ④施土⑤備考
1	高 杯	18.1	杯脚部中位に倒し縫を有し、ゆるやかに外張して立ちあがる。脚部と脚部の接合は独立するホゾによる。	杯脚部下位、ヘラケズリ。口縁部、横ナダ。脚部上位に斜方向の縫文。	口縁部、横ナダ。脚上半部ハケ目。底部中央により放射状に縫文。	①によい赤褐色 ②良好 ③脚柱部残存 ④密
2	高 杯	19.1	杯脚部下位に倒し縫を有し、やや内持気味に立ちあがる。	杯脚部下位、ヘラケズリ。口縁部、横ナダ。上位ナダ後ミガキ。	口縁部、横ナダ。脚から脚部ナダ後ミガキ。	①によい褐色 ②良好 ③杯部残存 ④密
3	高 杯	21.6	杯部上位と下位の接縫部分に段をもち、大きく外反する。脚部と脚部の接合は独立するホゾによる。	下部、ナダ。上半部、横ナダ。	横ナダの後、縦方向の縫文。	①によい赤褐色 ②きわめて良好 ③杯部残存 ④粗
4	高 杯	29.2	杯脚部下位に倒し縫を有し、ゆるやかに立ちあがる。	脚部下位、ハケ目後ナダ。上半部、ハケ目。	脚部下位、ハケ目後ナダ。	①によい椎 ②やや不良 ③脚柱部残存 ④やや粗
5	高 杯	— — —	脚部と脚部の接合は、独立するホゾによる。	ナダ	脚柱部上位に絞り目。脚柱部下位に脚部の接合底。	①によい椎 ②良好 ③脚柱部のみ ④密
6	高 杯	36.4 37.8 32.2	脚部は内凹ぎみに立ちあがり、口縁部で強く外反する。脚柱部は大きく開き縫合部は短い。	口縁部、横ナダ。脚部下位ヘラケズリ。脚部ナダ。脚部、横ナダ。	脚部、横ナダ。脚部下位に横み上げ底。放り目を上位に有する。	①椎 ②良好 ③脚柱部 ④密
7	増	13.3 34.1	丸底の底部中央に内凹の凹みをもつ。脚部は扁平で、脚柱部は「く」の字を呈し、大きく外張して細かく内凹する。	脚部、ヘラケズリ。口縁部、横ナダ。	脚部、底部ヘラケズリ後ナダ。口縁部、横ナダ。	①によい椎 ②良好 ③X ④密

8	便	— 5.5	胸部下位は直線的に開き、内側して立ち上がる。底部は平底。	胸部下位へラケズリ。胸部中位ナダ。	胸部、底部へラケズリ。	①横 ②良好 ③胸 部ナダ存 ④密
9	便	15.8 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、最大径を胸部中位にもつ。	口縁部、横ナダ。胸部、ヘラケズリの後ナダ。	口縁部、ナダ。胸部ナダ。	①によい ②良好 ③上位 部ナダ存 ④密
10	便	8.7 7.1 3.2	丸底の底部中央に円形の凹をもつ。胸部は扁平で、口縁部は「く」の字状に外反し、先端でやや内湾する。	口縁部、横ナダ。胸部上位。ハケ目。胸部下位。ヘラケズリ。	胸部、底部へラケズリ後ナ ダ。口縁部、横ナダ。	①横 ②良好 ③光形 ④密
11	便	12.4 6.3 (4.4)	体部は、平底の底部から直線的に立ち上がり上位まで直立ぎみになる。口縁部は短く外反する。	底部・胸部下位へラケズリ。上位ナダ。口縁部横ナダ。	胸部、底部へラケズリ後ナ ダ。口縁部横ナダ。	①横 ②良好 ③光形 ④密
12	小 築	13.4 11.9 5.2	口縁部は「く」の字状に外反し、最大径を胸部上位にもつ。底部はあげ直しがみである。	口縁部、横ナダ。胸部・底部へラケズリ。胸部上半はヘラケズリ後ナダ。	胸部、底部へラケズリ後ナ ダ。口縁部横ナダ。	①明黄色台 ②やや不 良 ③光形存 ④やや 粗

H-5号住居址

番号	器 形	寸 法	器 形 の 特 徴	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調②構成③形状 ④施上⑤備考	
1	高 杯	(18.2) — —	かなり不明瞭な模を持つ。	口縁部、ナダ。体部、ハケ目の後ナダ。	口縁部横ナダ。底部へラケ ズリ。	①横 ②良好 ③杯 部ナダ存 ④やや粗	
2	高 杯	(22.5) — —	胸部上位は外傾し、下位内面は平底。 やや不整な模を持つ。	口縁部横ナダ。胸部中位から下位にかけハケ目。	口縁部ヨコナダ。底部ナダ。 ①透黄地、②良好 ③ 杯部ナダ存 ④密	①透黄地、②良好 ③ 杯部ナダ存 ④密	
3	高 杯	18.9 15.3 13.0	杯底部から立上りして後外傾する。胸 部から底部へは一度斜めに開いて から横に広がる。	杯部は瓶方向ハケ目の後口縁横ナダ。 胸部ナダの後縮め、瓶下部横方向ナ ダ。底部は瓶方向ハケ目の後、瓶 横ナダ。底部ナダ。できに粒状 を施す。	杯部、横方向のハケ目。瓶 部、横ナダ。底部上位に 溝切り後続り。	①によい赤色 ②良 好 ③杯部ナダ存 ④密	
4	高 杯	— — 34.8	瓶部は、一度斜めに開いてから横に 広がる。	瓶部、横ナダ。脚柱部上位 に溝切り後続り。瓶部との 接合部を残す。	①によい青色 ②良 好 ③脚柱部ナダ存 ④密	①によい青色 ②良 好 ③脚柱部ナダ存 ④密	
5	高 杯	— — 34.8	瓶部は、一度斜めに開いてから横に 広がる。	脚柱部ナダ。瓶部、横ナダ。	瓶部、横ナダ。脚柱部上位、 溝切り後続り。	①によい ②良好 ③ 脚柱部ナダ存 ④密	①によい ②良好 ③ 脚柱部ナダ存 ④密
6	高 杯	— — —	脚柱部は円錐形に近い。	ナダ。	ナダ。脚柱部上位に、弱い 続り。	①によい 横 ②ふつう ③脚柱部ナダ存 ④密	①によい 横 ②ふつう ③脚柱部のみ ④密
7	高 杯	— — —	脚柱部は、円錐形に近い。	ナダ。	脚柱部上位、絞り目瓶。脚 柱部下位、横み上げ成形痕。	①によい 横 ②良好 ③脚柱部のみ ④密	①によい 横 ②良好 ③脚柱部のみ ④密
8	高 杯	— — —	腹は不明瞭ではあるが直線的な腹部 からかなり急に外傾する。	杯部上位ナダ。杯部下位瓶方向ハケ目。	口縁部ヨコナダ。胸部横方 向ハケ目。	①によい 横 ②やや不 良 ③杯部ナダ存 ④密	①によい 横 ②やや不 良 ③杯部ナダ存 ④密
9	碗	12.0 5.8 4.8	裏げ底気味の瓶部から内湾ぎみに立 ち上がり、口縁部で短く外反する。	口縁部、横ナダ。底部上位ナダ。胸部 下位へラケズリ。底部へラケズリ強 ナダ。	口縁部、横ナダ。底部から 底部にかけてヘラナダ。	①横 ②やや不良 ③杯部ナダ存 ④やや粗	①によい赤色 ②良 好 ③杯部のみ ④密
10	碗	12.5 13.8 8.8	丸底ぎみの底部から、内湾ぎみに立 ち上がり、口縁部も、内湾ぎみに開 く。	口縁部、横ナダ。底部ナダ。脚柱斜 め方向へラケズリ。瓶部下半ナダ。瓶 部へラケズリ。	口縁部、横方向ハケ目の後 横ナダ。底部から底部へラ ケズリ。	①によい赤色 ②良 好 ③光形存 ④密	①によい赤色 ②良 好 ③光形存 ④密
11	碗	20.8 — —	口部は、かなり強く「く」の字状に 外傾する。	横ナダ。	横ナダ。	①強 ②良好 ③口縁 部のみ ④やや粗	①強 ②良好 ③口縁 部のみ ④やや粗
12	碗	17.5 — —	胸部中位に最大径をもち、口辺部は ややゆるやかな「く」の字状に外反す。	口縁部、横ナダ。瓶部、瓶方向へラ ケズリ。	口縁部、横ナダ。胸部、ハ ラケズリ。	①強 ②良好 ③光形 存 ④密	①強 ②良好 ③光形 存 ④密
13	碗	15.4 21.5	底部中位に最大径をもち、口辺部は ゆるやかに外反する。	口縁部、横ナダ。瓶部、ヘラケズリの 後ナダ。	口縁部、横ナダ。底部、指 押えナダ。底部上半、横 み上げ成形痕。	①横 ②良好 ③はば 光形 ④密	①横 ②良好 ③はば 光形 ④密

14	変	29.8 — —	脚部中位に最大径をもち、口辺部は、側屈曲で立ち上がる。	口辺部、横ナデ。脚部上位。ハケ目。 脚部はヘラケズリの後ナデ。	口辺部、横ナデ。脚部、横方向へナデ。	①横 ②良好 ③上半部 既存 ④横直
15	跡	(31.0) — —	口辺部に最大径をもち「く」の字状に外反する。	口辺部、横ナデ。脚部、ヘラケズリ後、 横ナデ。	口辺から頭部にかけて横ナデ。 脚部はかなり丁寧なヘラナデ。	①によい性 ②良好 ③上半部既存 ④横
16	増	19.6 12.4 3.5	頭部は平底。脚上部に最大径を持ち 脚部・下部は張りを持たない。	口辺部、横ナデ。下位。ヘラケズリ。 脚部上位ナデ。	口辺部、横ナデ。脚部、ナ デ。	①によい性 ②良好 ③片残存 ④横
17	増	9.5 8.7 3.4	口辺部は、ゆるやかに外反する。脚 上部に最大径を持ち頭部は張りを持 たない。底は凹みを持つ。	口辺部、横ナデ。脚部横方向ハケ目後 ナデ。それ以下ヘラケズリを施し、3 点にやや横ナデ。	口辺部横ナデ。脚部から底 までヘラナデ。脚部横伸 き。	①浅黄褐色 ②良好 ③ ②口辺部一部欠損 ④や や粗
18	増	— — —		ヘラケズリの後ナデ。	脚伸き後横ナデ。	①によい性 ②良好 ③脚部上半部既存 ④横 ⑤脚部一部スス 付着
19	増	— — 3.5	脚部は、ツラミン形状を呈す。底部 は平底。	脚部下部、ヘラケズリ。脚部上位ナデ。	脚部下部、ヘラナデ。	①明黄褐色 ②良好 ③脚部既存 ④底

### 集中区

番号	脚 形	寸 法	基 形 の 特 長	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調②機械既存 ③脚部④備考
1	高 杯	18.4 — —	杯部下位に不明瞭な縦をなしてい る。	口辺部、横ナデ。脚部、ハケメ、後ヘ ラケズリを加え、ヘラナデ。	ハテメ後、増文を施す。	①によい性 ②良好 ③杯部既存 ④やや粗
2	高 杯	— — 16.2	脚部中位に円形の単孔。頭部は急 に聞く。杯は黒縫口面を見る。	杯口辺部ヨコナデ。脚上半ナデ。下半 ヘラミガキ。脚～脚部横方向のヘラミ ガキ。脚部、横ナデ。	杯口辺部、ヨコナデ。杯脚 ～脚部ミガキ。脚は横 方向へヘラケズリ。脚部ヨ コナデ。	①横 ②良好 ③杯部 の一部と脚部既存 ④横
3	高 杯	(18.3) 14.8 13.1	杯部、上位と下位の間に縦をもつ。 脚部はラバ底に聞く。	杯口辺、横ナデ。脚上部、ハケメの後ナ デ。脚部、横ナデ。脚部、横方向のハケメの後ナ デ。	杯口辺、横ナデ。脚～脚部、 ヘラミガキ。脚部、横切り の後、絞り。脚部、横ナデ。	①横 ②良好 ③片残 存 ④底
4	高 杯	(21.1) — —	杯部は下位に縦をなすが、刃際には 作出されていない。脚は円筒を呈す。	口辺部、横ナデ。脚部ハケメの後ナ デ。脚部、横ナデ。	杯部、横ナデの後端文。	①横 ②良好 ③片残 存 ④底
5	高 杯	(19.2) — —	杯部下平にわずかに縦の作出がみら れ、丸く立ち上がる。	口辺部、横ナデ。脚部、ナデ。	口辺部、横ナデ。脚部、ナ デ。	①横 ②良好 ③杯 部既存 ④底
6	高 杯	19.5 — —	杯部上位は直線の開き、下位に縦 を作出する。杯部と脚部の接合は独立 するホリによる。	口辺部、横ナデ。脚部、ハケメの後ナ デ。脚部、横ナデ。	口辺部、横ナデ。脚部、ハ ケメの後ナデ。脚部、横 切りの後、絞り。接合部を 施す。	①によい性 ②やや不 良 ③杯部既存 ④横 や粗
7	高 杯	(17.4) — —	脚部は、下位に明顯な縦を有する。 脚と頭部の境界は明瞭に屈曲してい る。	口辺部、横ナデ。口辺～底部、ナデ。 脚部、横ナデ。	杯口辺、横ナデ。脚上位、 横切の後、縫文を加え る。脚部、縫み上げ底を 施し、横方向のナデ。	①明赤褐色 ②良好 ③片残存 ④底
8	高 杯	20.8 14.8 13.5	杯部は脚下平に明顯な外縫を有す る。頭部はラバ底を呈する。杯と 脚の接合は独立したホリによる。	杯口辺、横ナデ。脚部上半ハケメの後 ナデ。脚下平へヘラケズリの後ヘラナデ。 ハケメの後ナデ。脚部、ヨコナ デの後、縫文風のヘラミガキ。	杯口辺、横ナデ。脚部、横 方向へのナデ。底部ハケメ の後、ナデ。脚部、縫み上げ の後、横ナデ。	①横 ②良好 ③片残 存 ④底
9	高 杯	— — —	杯部、下平に縫をもつ	段部、ヨコナデ。脚部、ナデ。	ナデ。	①横 ②良好 ③杯部 下位既存 ④底
10	高 杯	(19.9) — —	大きく口辺が外傾し、縫が作出され る。	口辺部、横ナデ。脚部、ナデ。	口辺部、横ナデ。脚部、ハ ケメ。	①横 ②やや不良 ③ 杯部既存 ④底
11	高 杯	19.5 — —	杯部上位と下位の間に縫をもつ。	杯口辺、横ナデ。段、ヨコナデ。脚部、 横方向のハケメ。脚部、ハケメの後ナ デ。	杯部、横ナデの後、縫方 向の段。脚部下平、縫み 上げ底を施し、縫い絞りを 加わせる。	①横 ②やや不良 ③ 杯部既存 ④底

12	高 杯	—	被端部の仕上げは、端整である。	脚～脚部、ハケメの後、ナデ、面部、ヨコナデ。	脚部、ハケメ。被部、横ナデ。	①によい褐色 ②良好 ③被部に残存 ④密
13	高 杯	—	脚柱部は「ハ」の字状を呈し、脚部は急に開く。	脚～脚部、脚方向へのラミガキ。脚部はヘラミガキの前に横ナデ。	脚部、接合部を残し、ハケメ、ナデ、面部、横ナデ。	①褐色 ②極めて良好 ③脚柱部が、被部に残存 ④密
14	小 脚	9.2 6.9 4.3	内斜口凹を有し、脚上位に最大径を持つ。	口辺部、横ナデ。脚上半、ナデ。脚下半、ヘラケズリ。	口辺部、横ナデ。脚部下半、ヘラナデ。	①明赤褐色 ②良好 ③内斜存 ④やや粗
15	毫	(21.4) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	口辺部ヨコナデ。脚部、ヘラナデ。	口辺部、ヨコナデ。脚上位、ハケメ。	①橙 ②やや不良 ③口縁部に残存 ④密

### 柳久保水田址

番号	器 形	寸 法	器 形 の 特 長	外 表 調 査	内 面 調 査	①色調 ②焼成 ③形状 ④胎土 ⑤参考
1	杯	12.6 4.4	厚い底盤から、外傾しながら立ち上がり、口邊はやや直立気味に屈曲する。	口辺部、横ナデ。脚部、指オサエ。脚部下位は横方向へのラケズリ。脚部ヘラケズリ。	横ナデ。	①灰褐色 ②やや不良 ③内斜存 ④密 ⑤内黒化粧
2	杯	(12.5) 4.4 5.9	#	#	#	①に近い褐色 ②やや不良 ③内斜存 ④密 ⑤内黒化粧
3	杯	(12.4) 4.4 5.8	#	#	#	①灰褐色 ②良好 ③内斜存 ④密 ⑤内黒化粧
4	杯	(13.3) 4.4 5.8	#	#	#	①灰褐色 ②良好 ③内斜存 ④密
5	杯	(12.6) 4.4 (5.9)	#	#	#	①明赤褐色 ②良好 ③内斜存 ④密
6	杯	(12.1) (4.5) (5.3)	#	#	#	①に近い褐色 ②やや不良 ③内斜存 ④密 ⑤基盤土器
7	杯	(13.3) 5.0 (5.7)	脚部は内斜ぎみに立ち、口縁部は直立ぎみに立つ。	口縁部、横ナデ。体部、指押え。	#	①によい褐色 ②やや不良 ③内斜存 ④密 ⑤内黒化粧
8	杯	13.2 4.7 (5.5)	底盤に最大厚をもつ。平坦な底部から、脚部は外傾し、口縁部は直立ぎみに立つ。	口縁部、横ナデ。体部、指押え。体部下位、ヘラケズリ。脚部、ヘラケズリ。	#	①によい褐色 ②やや不良 ③内斜存 ④密 ⑤内黒化粧
9	杯	11.8 4.4 5.6	#	#	#	①に近い褐色 ②良好 ③内斜存 ④密
10	杯	12.3 4.4 5.0	底盤に最大厚をもつ。平坦な底部から、脚部は外反し、口縁部は直立ぎみに立つ。	#	横ナデ。内面口辺に墨書きをするが判読できない。	①灰白色 ②良好 ③内斜存 ④密 ⑤墨書き土器
11	杯	12.1 3.1	平坦な底盤から、外傾ぎみに立ち上がる。	口縁部、横ナデ。体部、指押え。底部、ヘラケズリ。外面中央に墨書きをするあるいは「下向」の墨書きをする。	横ナデ。内面中央に「下向」の墨書きをする。	①によい褐色 ②良好 ③内斜存 ④密 ⑤墨書き土器
12	杯	12.5 —	平坦な底盤から、外傾しながら、直線的に立ち上がる口邊を有する。	口縁部、ヨコナデ。脚部指ナデ。脚部、ヘラケズリ。	横ナデ。	①によい褐色 ②良好 ③口縁部に残存 ④密
13	杯	(13.4)	ほぼ平坦な底盤から。脚は外傾して立ち上がる。	口辺部、横ナデ。脚部、指ナデ。底部、ヘラケズリ。	#	①に近い褐色 ②良好 ③内斜存 ④密
14	杯 (裏底)	(12.4) 4.2 (7.2)	平坦な底盤から。脚部は直線的に立ち、口辺部はやや厚壁し外傾する。	体部、横ナデ。脚部、口輪部切り。	回転横ナデ。	①灰白色 ②良好 ③内斜存 ④密
15	杯 (裏底)	(13.0) —	平坦な底盤から。体部は直線的に立つ。	体部、横ナデ。底部、回転部切り。	#	①灰白色 ②良好 ③内斜存 ④密

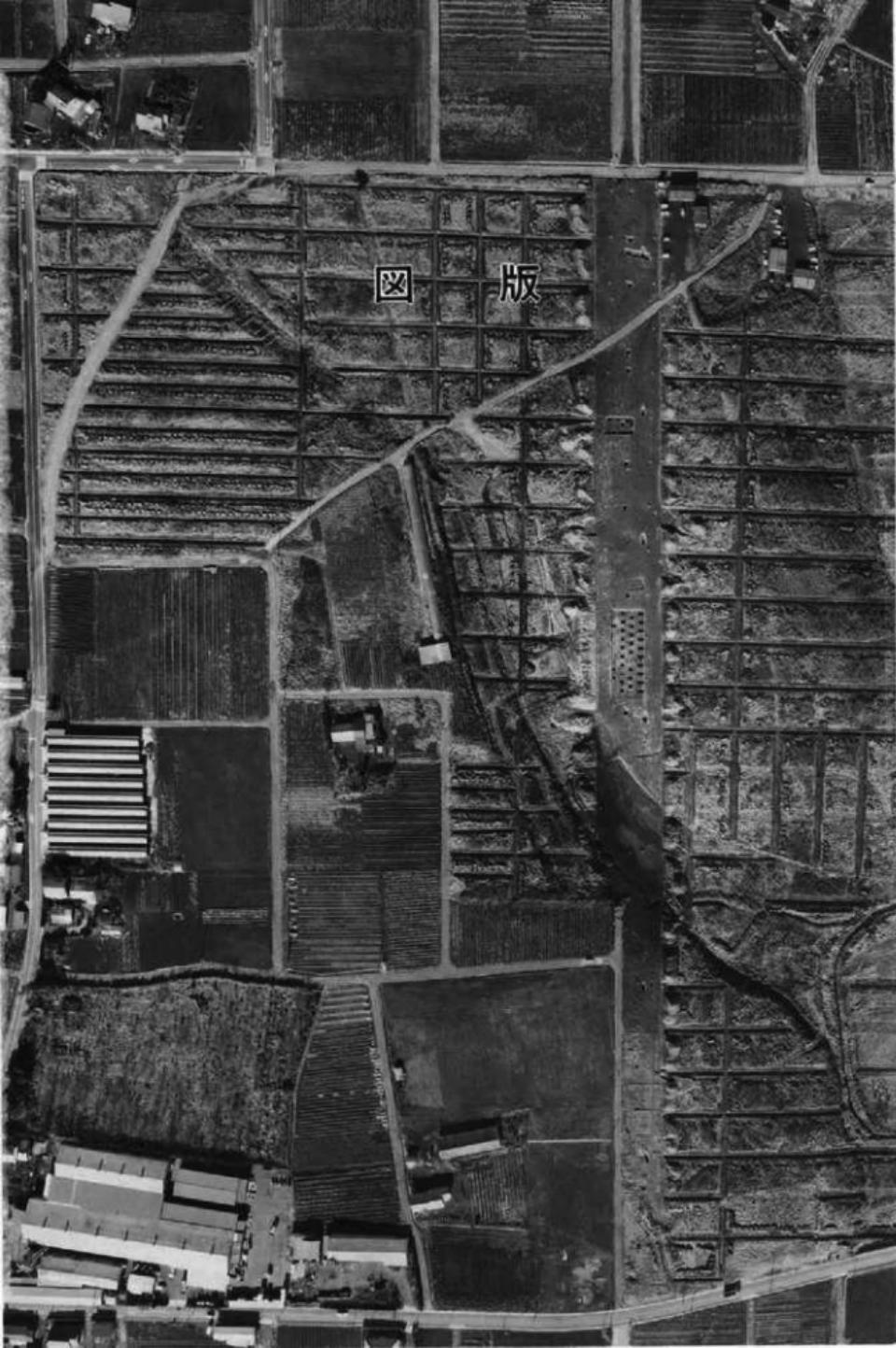
16	杯 (直腹)	12.2 3.0 6.3	やや開け底の底部から外反ぎみに立ち上がり、口縁部でさらに外反する。	体部、横ナデ。底部、回転あ切り。	フ	①灰白色 ②良好 ③片残存 ④やや粗
17	杯 (直腹)	— — 5.7	やや開け底の底部から、内湾ぎみに立ち上がる。	横ナデ。底部、回転あ切り。	フ	①灰白色 ②良好 ③片残存 ④やや粗
18	杯	— — 8.2	底部、平底。	底部、回転ヘラ切り。	フ	①明褐色灰色 ②やや不良 ③底部のみ ④滑
19	杯	13.6 3.7 8.7	平底の底部から、体型は内湾ぎみに立ち、口縁部でやや外反する。	体部、横ナデ。底部、回転へタ切り。	フ	①において黄色 ②良好 ③片残存 ④滑
20	杯	13.6 3.7 8.8	平底。	底部回転ヘラ切り。	フ	①灰褐色 ②やや不良 ③底部片残存 ④滑

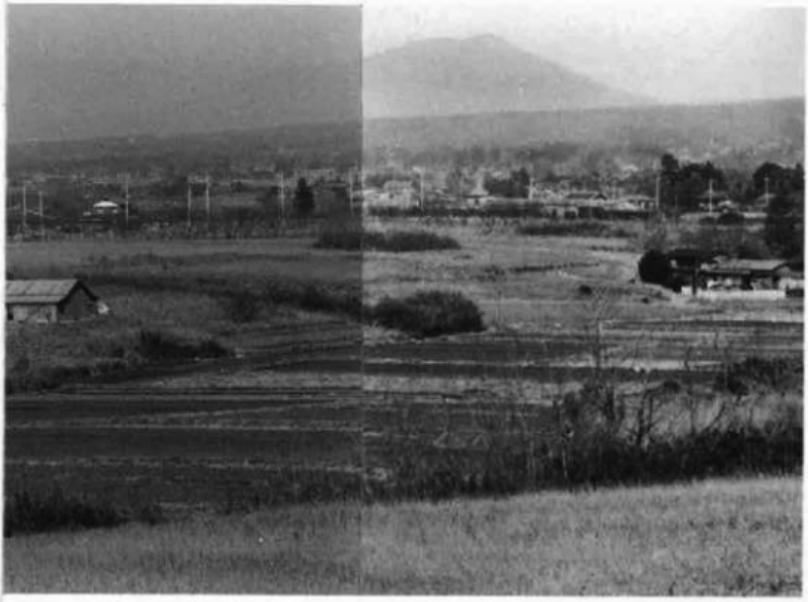
## 調査要項

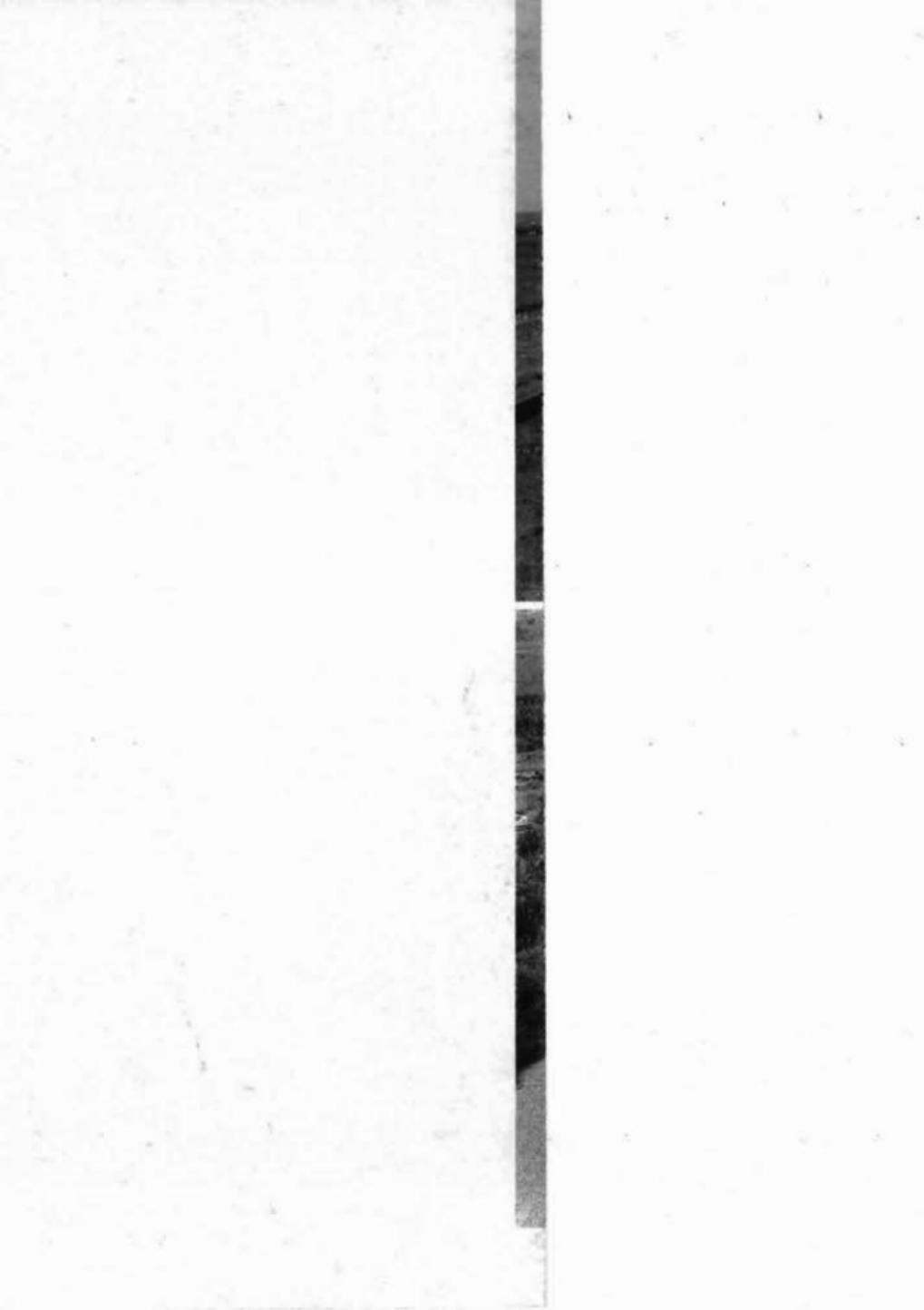
遺跡名称	柳久保遺跡群(やなぎくぼいせきぐん)
	下鶴谷遺跡…E 1 柳久保遺跡…E 2 舞鶴谷遺跡…E 3 中鶴谷遺跡…E 4 頭無遺跡…E 5 頭久保水田址…E 6
遺跡所在地	群馬県前橋市荒口町舞鶴谷741-1-2-4-7-9, 748-1, 753-1-5-6-8-9, 756-20 荒口町550-1-3, 552-1, 554-1-3-8, 555 荒子町頭無1326-1, 1327-2-6-7-11-12, 1328-1, 1331, 1332-3, 1333-4-5, 1334-1 荒子町柳久保1502, 1503, 1503-2-5, 1504, 1504-1-6, 1505, 1507~1509, 1510, 1511-1-2, 1513~1515, 1516-1~16, 1517, 1518, 1520~1522, 1523-1~3, 1524, 1525, 1526-1-2, 1527, 1528, 1529-3-6, 1530-7-8, 1531, 1531-1-2, 1533-2, 1533, 1534-1, 1535 荒子町大久保1277-2-3, 1278, 1279-10 荒子町下鶴谷1480-2-4, 1484-2, 1492-2, 1493-2, 1494, 1496, 1498, 1499, 1450 荒子町中鶴谷1280~1290, 1293-1~5, 1297, 1298-1-2, 1299~1302, 1303-1-2-4, 1304, 1305-1- 2, 1306~1310, 1312, 1313, 1314-2-11
調査期間	昭和59(1984)年7月14日~昭和59年12月27日
発堀面積	13, 344m <sup>2</sup>
調査原因	住宅団地造成
調査主体者	前橋市教育委員会 教育長 金井博之
事務局	教育次長 奉良三郎 社会教育課長 小野塚智勇 社会教育課次長 小沢幸夫 社会教育係長 鈴木幸三 文化財保護係長 福田紀雄 文化財保護係主事 町田信之 中野和夫
教育委員会社会教育課文化財保護係	係長 福田紀雄 主任 前原照子 浜田博一 林喜久夫 井野修二 唐沢保之 前原 照 主 事 桑原 昭 木暮 誠 町田信之 中野 寛 中野和夫 福田瑞穂 原田和博 近藤昭一
前橋市埋蔵文化財発堀調査団	
顧問	阿部正六(助役) 金井博之(教育長) 森田誠一(總務企画部長) 平松 弘(財政部長) 大藏 清(商工部長) 小畠道輝(農政部長) 宮田勝巳(都市計画部長) 高橋晴人(指導担当参考)
団長	奉良三郎
副団長	小野塚智勇
事務局	局長 小野塚智勇 次長 小沢幸夫 局員 鈴木幸三 福田紀雄 清田陽子
発堀担当者	社会教育課文化財保護係職員14名 調査補助員 加藤二生 黒澤なつ美
柳久保遺跡群担当者	前原照子 浜田博一 前原 照
調査参加者	天沼キヨノ 阿部うし子 阿部シゲ子 阿部幸恵 葦間エミ子 飯島まさみ 石川忠三 石岡秀男 石崎信雄 岩木操 大川きよ 落合高男 女屋太一郎 女屋たま 小瀬丑子 斎藤和代 鹿沼さとみ 加部二生 木村よね子 黒沢なつ美 高坂キヨ子 高坂亨太郎 高坂とも 小島勝雄 小沼ミキ 小尾政雄 斎藤まき子 柴崎富子 柴崎まさき 下山岩子 須藤麻宏 高島 康 高橋正彦 武井美枝子 竹内敏江 田村幹子 田村愛子 田村よし子 田村よしの 千明徳至 中川 保 長岡徳治 浜岡秋信 藤倉ヒミ 藤原チエ子 藤原ちか子 望野なか 堀越うめ子 堀越しん 松本保 宮川いち子 村山君江 村山松子 本木みのる 谷田鶴子 矢内三千代 山口さく枝 湯浅たま江 湯浅道子 吉田まち 吉田松江 吉田やす江 久保田義一郎



版









調査前の柳久保遺跡群近景









1. 繩文包含層  
南から



2. 同 上  
南から



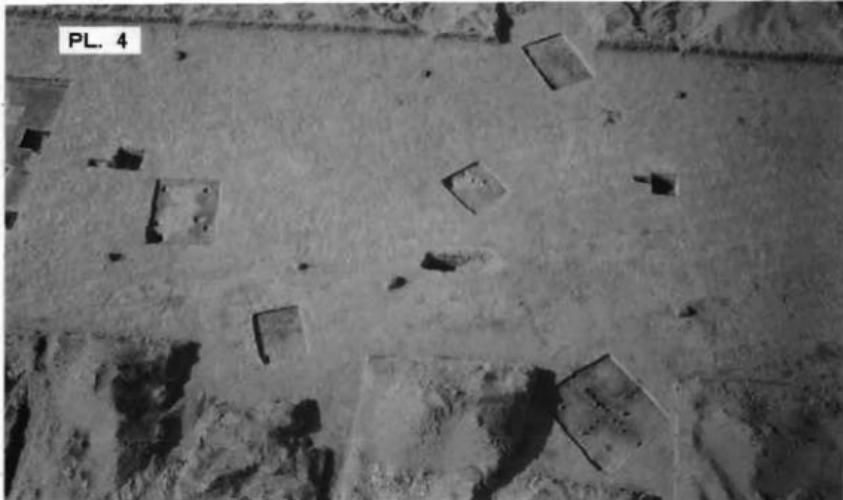
1. 縄文包含層  
東から



2. 集石  
北から



3. 発掘風景  
南から



1. 住居址全景  
上空から



2. 先土器調査区  
北から



3. 発掘風景  
南東から



1. 先土器時代の  
石器と土層  
南から

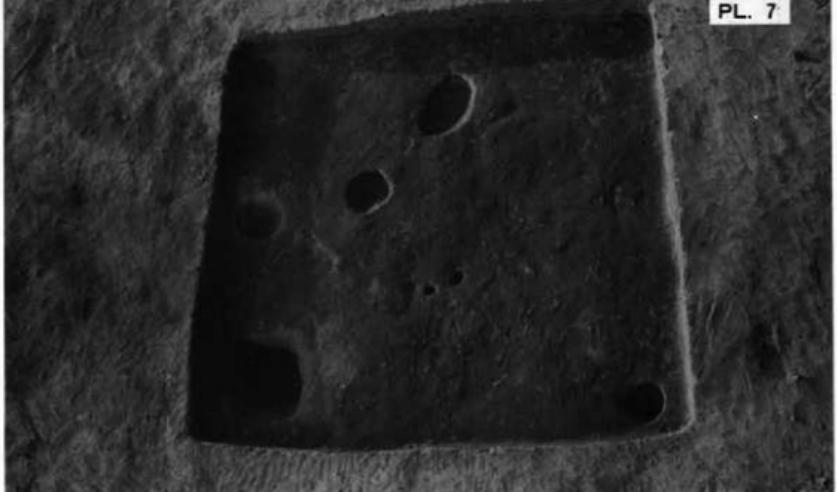


2. 見学風景  
東から

1. 全 景  
上から2. 造物出土状態  
東から3. 同 上  
東から

柳久保遺跡  
H-2号住居址

1. 全 景  
上から



2. 遺物出土状態  
西から



3. 同 上  
南から





1. 使用面  
西から



2. 掘り方  
東から  
3. 遺物出土状態  
南から  
4. 鉄錠出土状態  
南から



1. 使用面  
東から



2. 掘り方  
東から



3. 造物出土状態  
西から



4. 同 上  
南から





1. 全 景  
西から



2. 造物出土状態  
東から



3. 同 上  
西から

1. 遺物集中区

南から



1

2. 地割れ

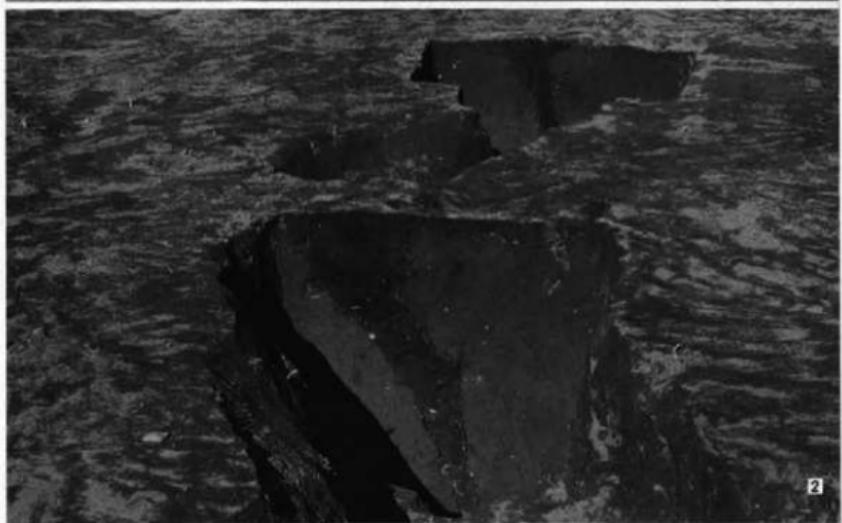
南から

3. 1号土坑

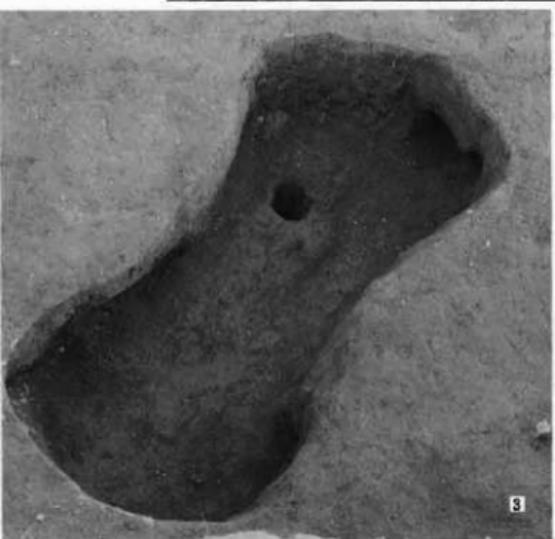
北西から

4. 3号土坑

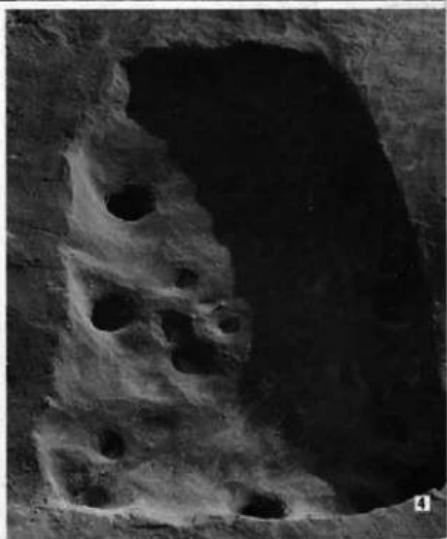
南から



2



3



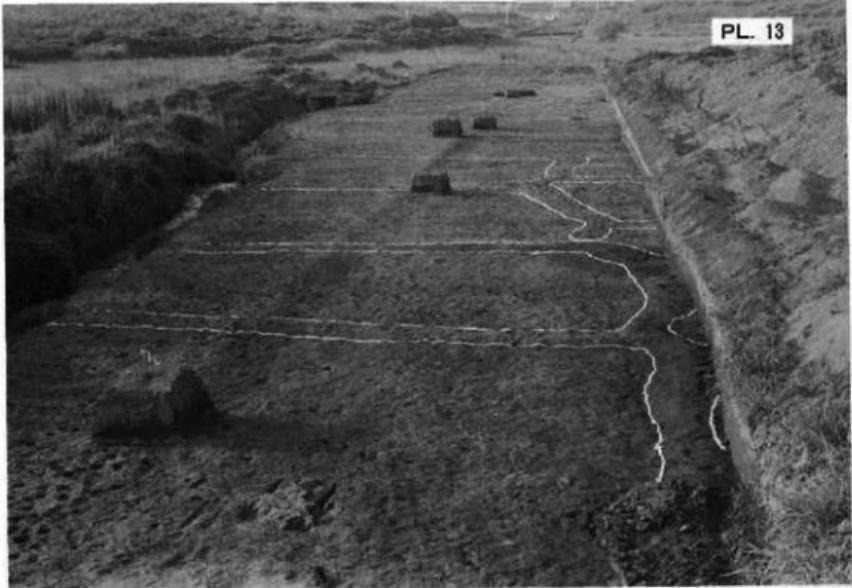
4



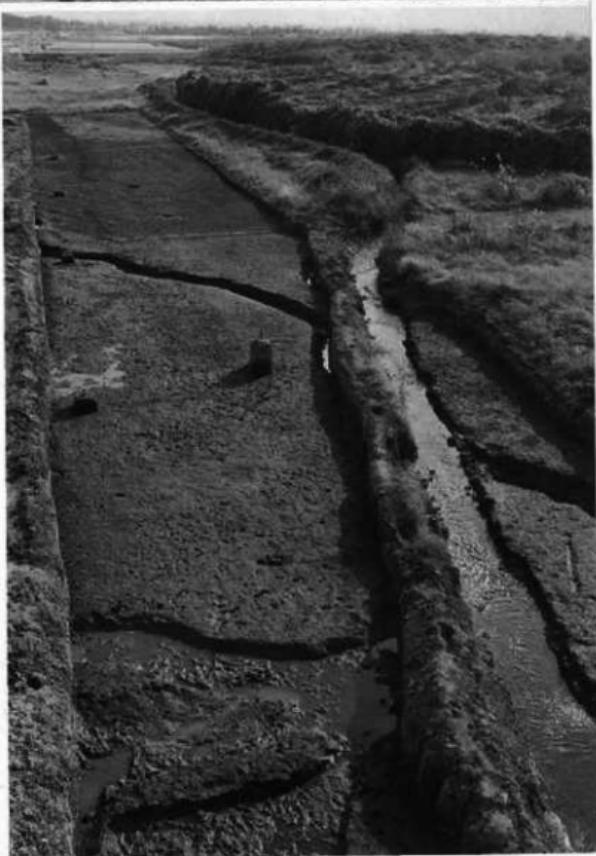
1. 水田址  
南から



2. 同上  
北から



1. 水田址  
南から



2. 水田址  
北から



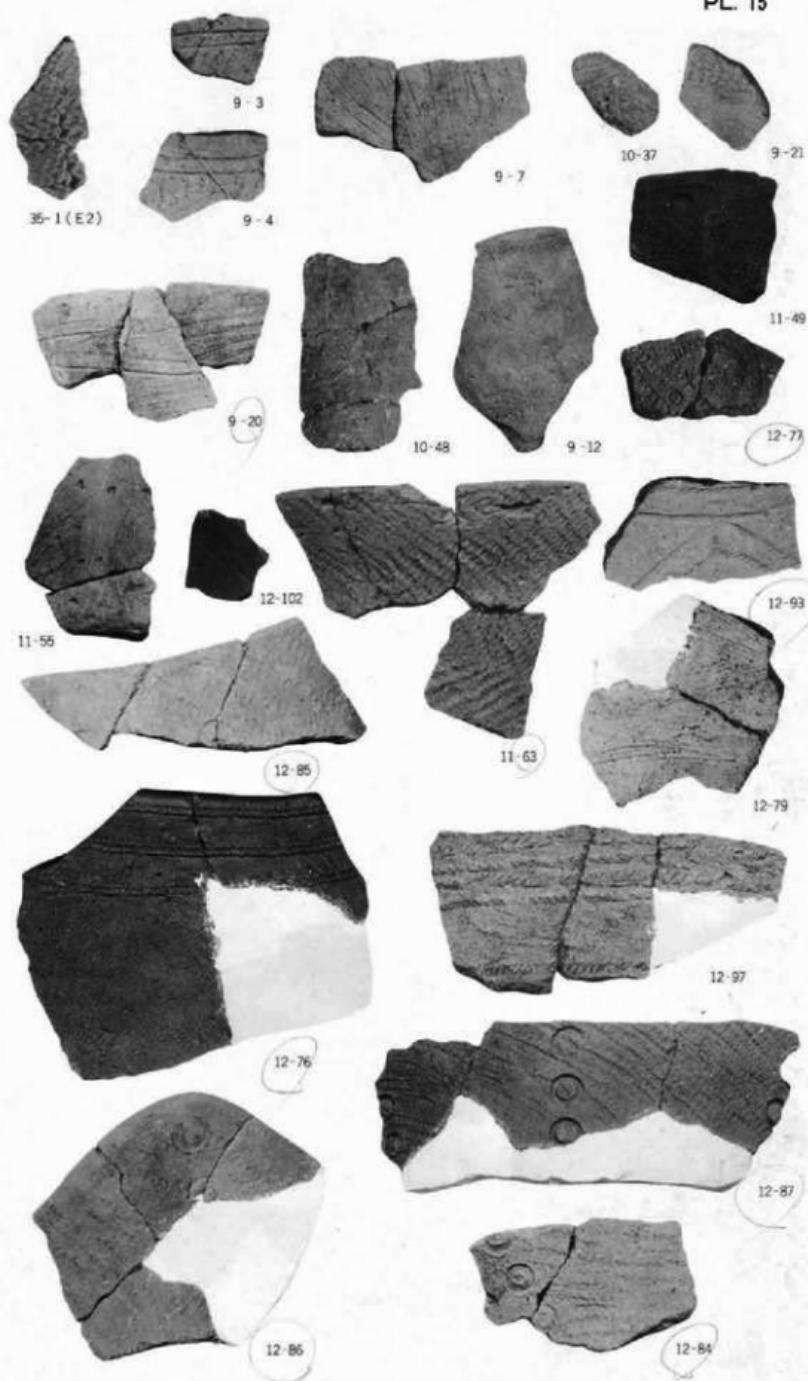
1. 土層断面  
東から

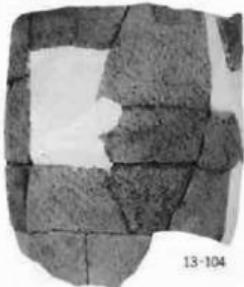


2. 遺物出土状況  
西から



3. 同 上  
北から





13-104



13-108



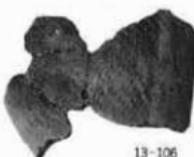
13-103



13-106



13-107



13-106



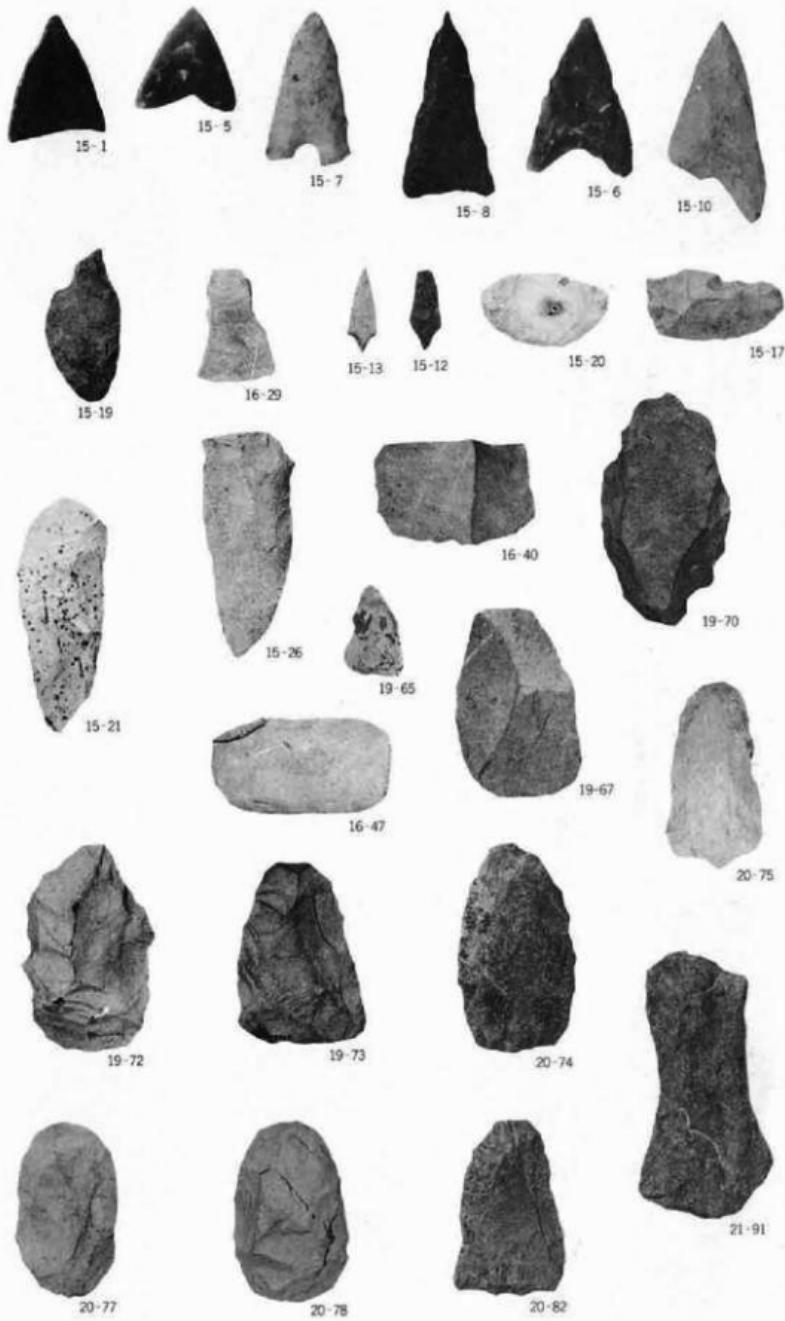
13-110

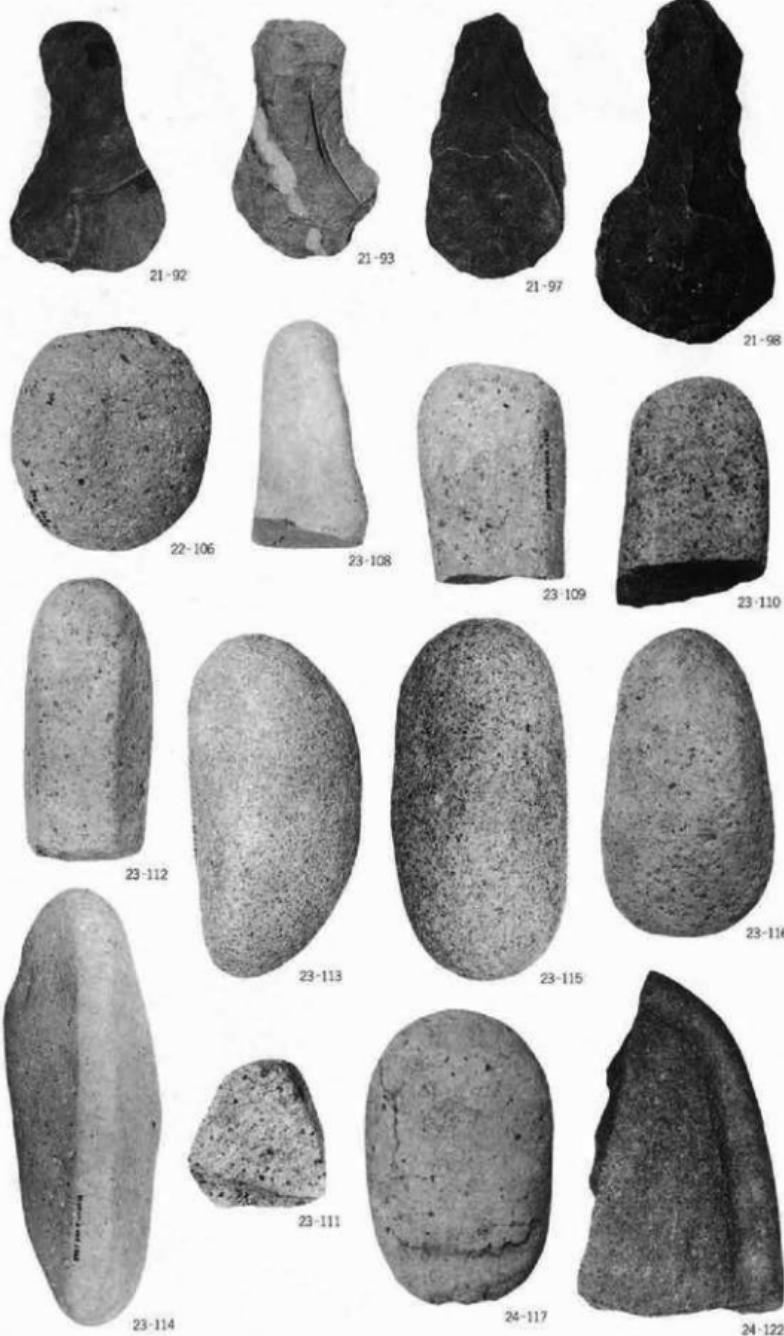


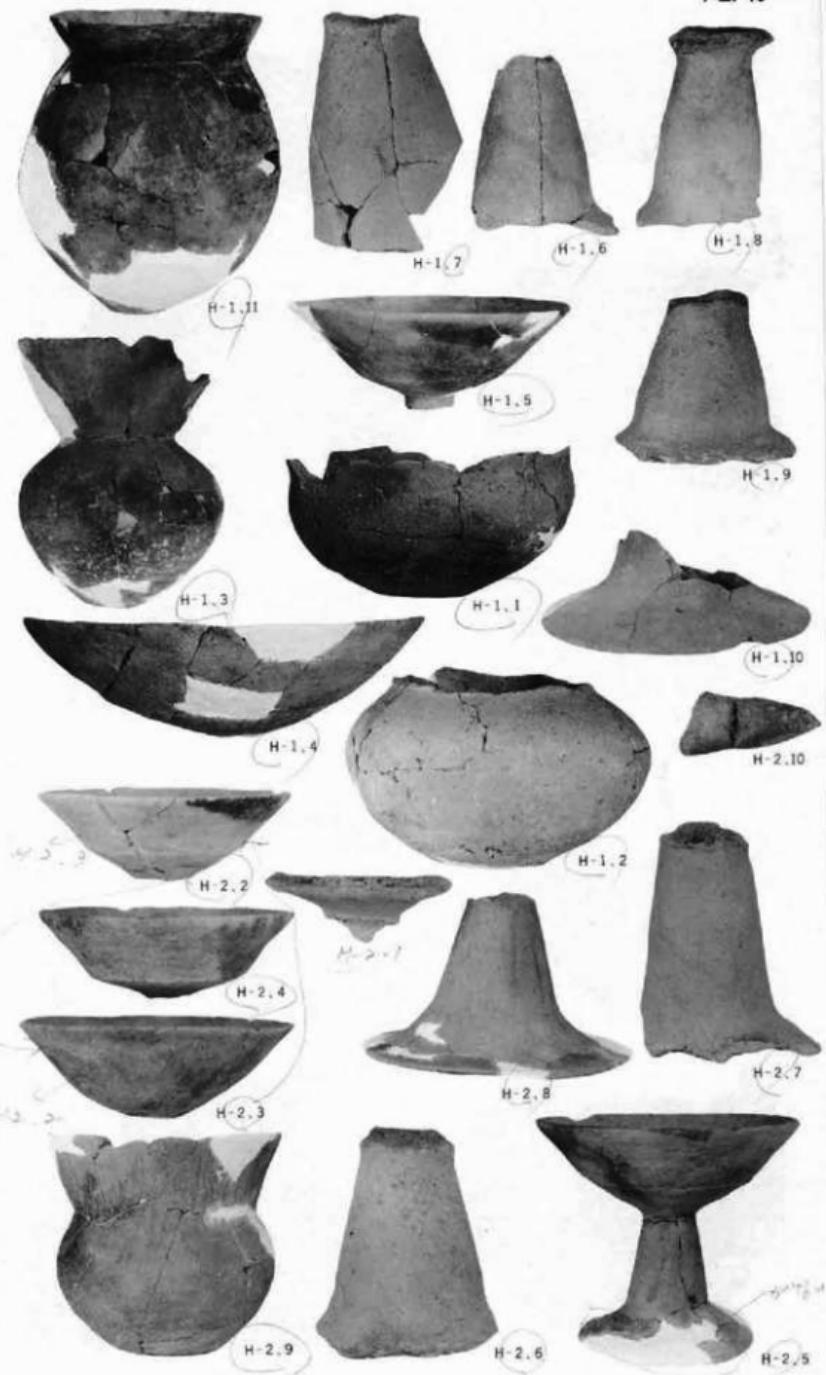
13-130



14-112









H-3.2



H-3.1



H-3.3



H-3.4



H-3.5



H-3.6



H-3.11



H-3.7



H-3.8



H-3.9

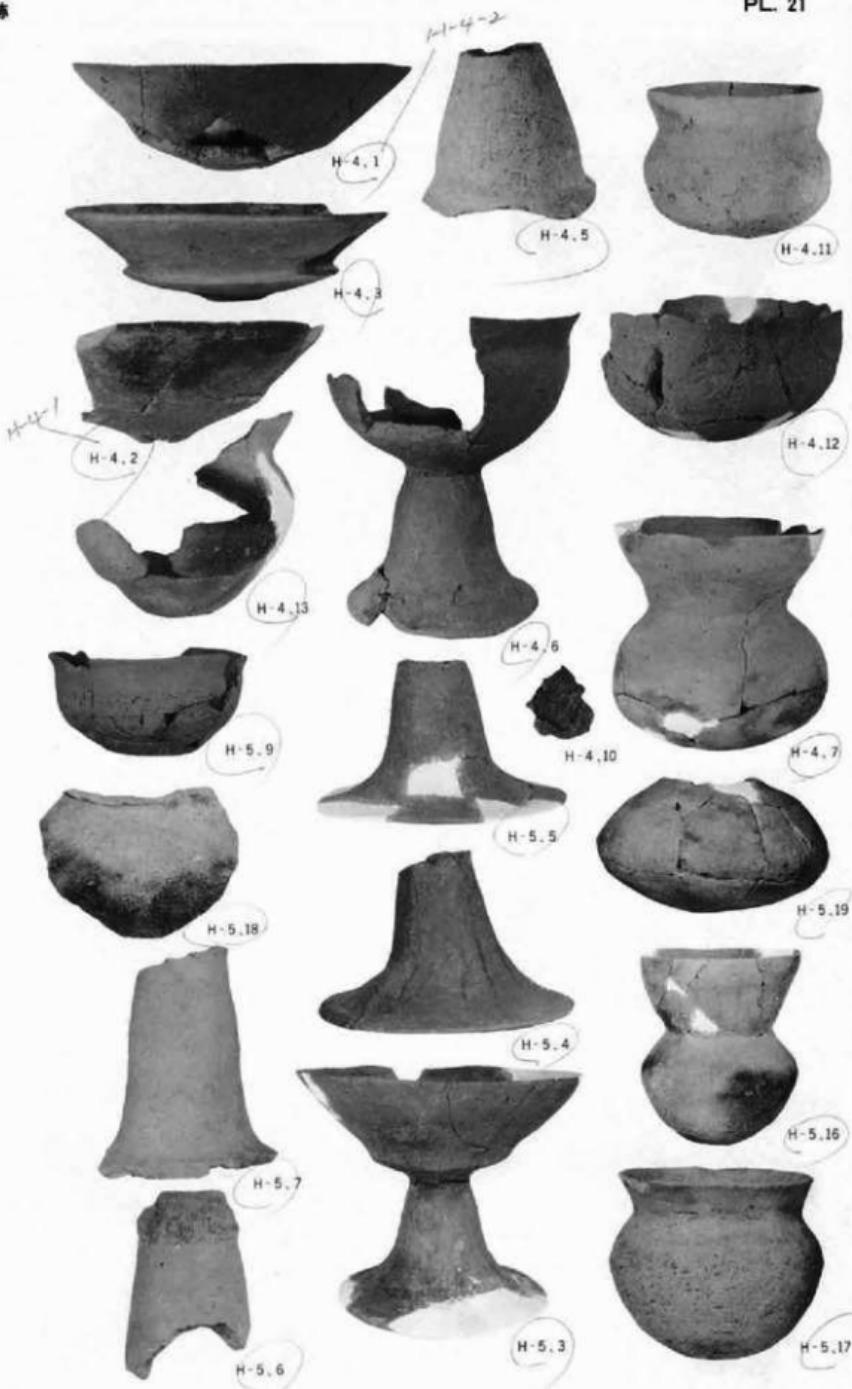


H-4.8

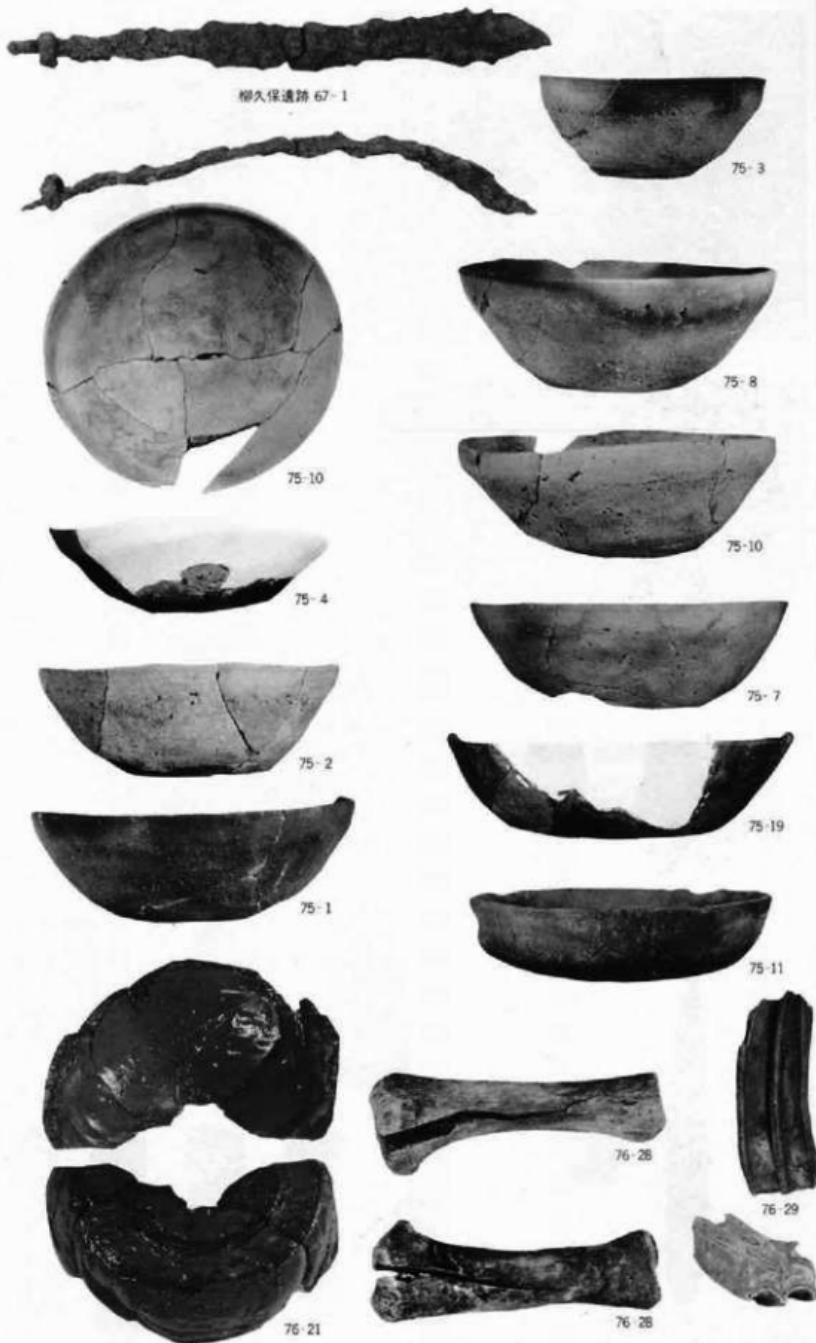
H-4.9



H-3.10





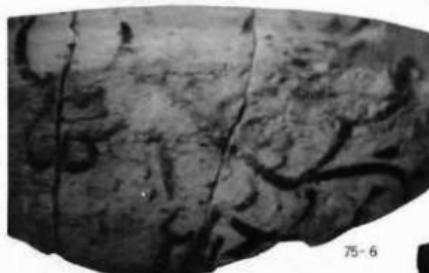




75-10



75-11



75-6



75-6



柳久保遺跡34-1



72-1



72-2



36-1



72-3

現生  
イノシシ本遺跡  
出土のブタ

現生ブタの椎骨

現生ブタの椎骨

---

## 柳久保遺跡群 I 昭和59年度調査概要

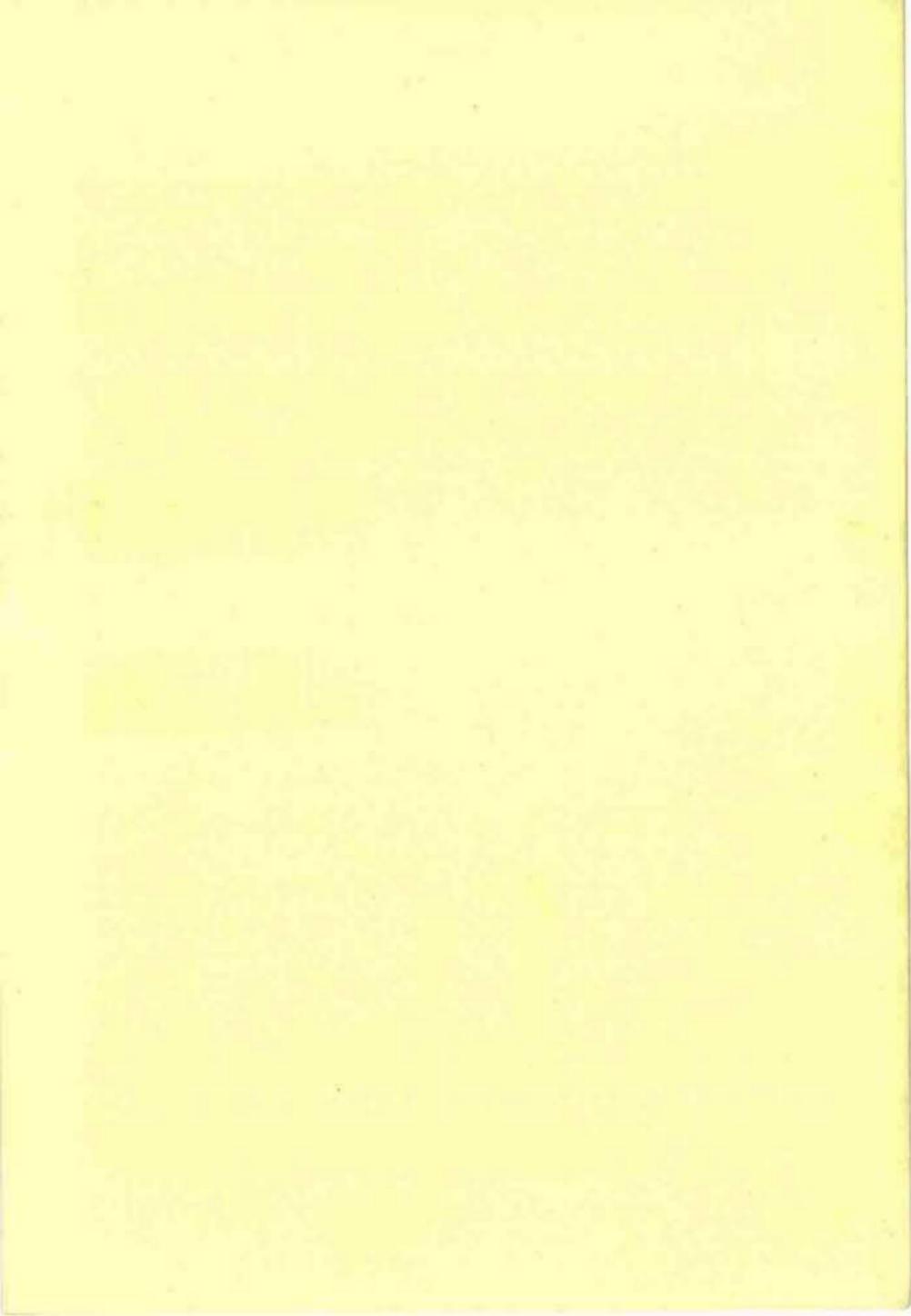
---

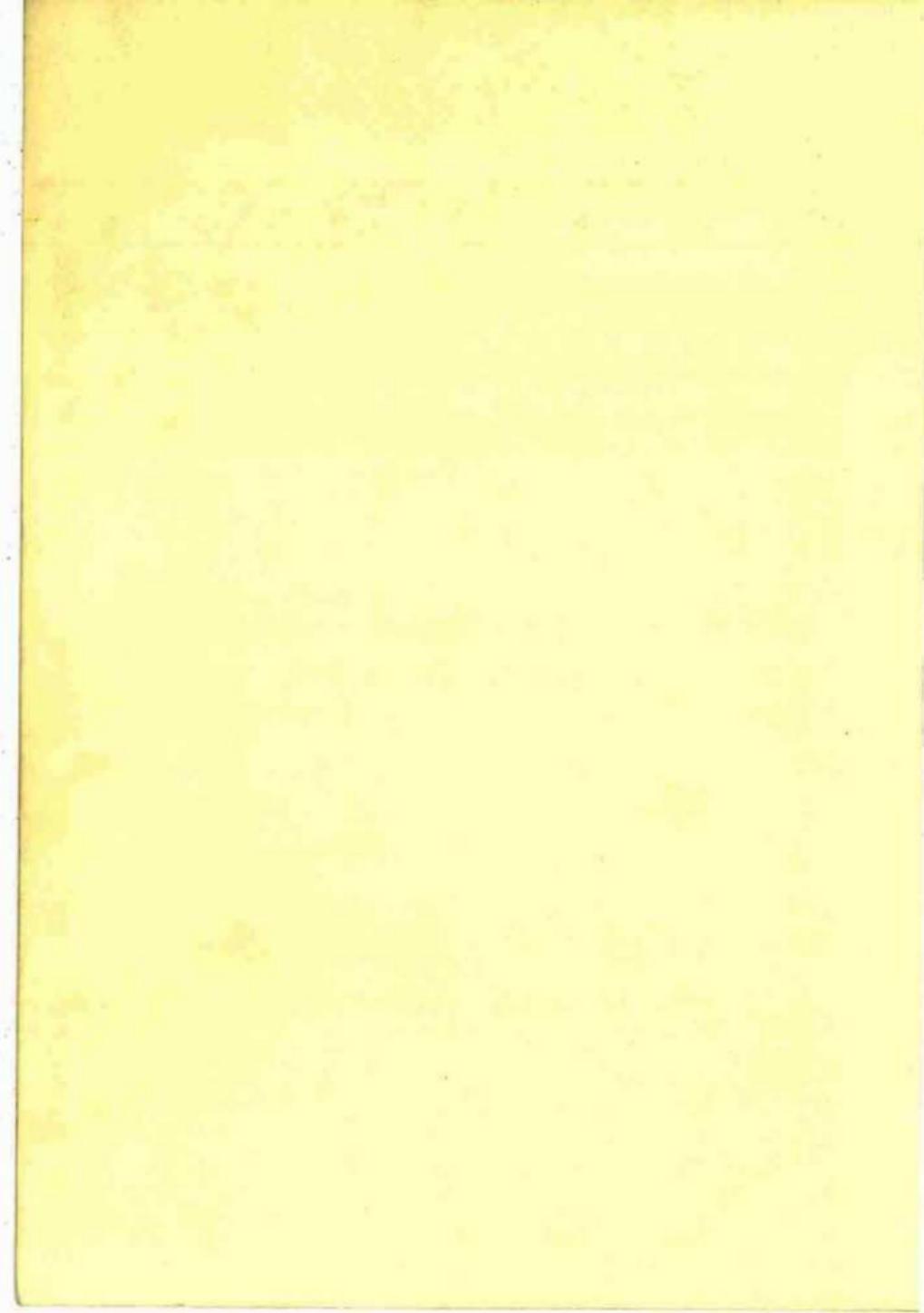
昭和60年3月25日 印刷  
昭和60年3月31日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前橋市大手町2丁目12-1  
TEL 0272-24-1111  
印 刷 朝日印刷工業株式会社

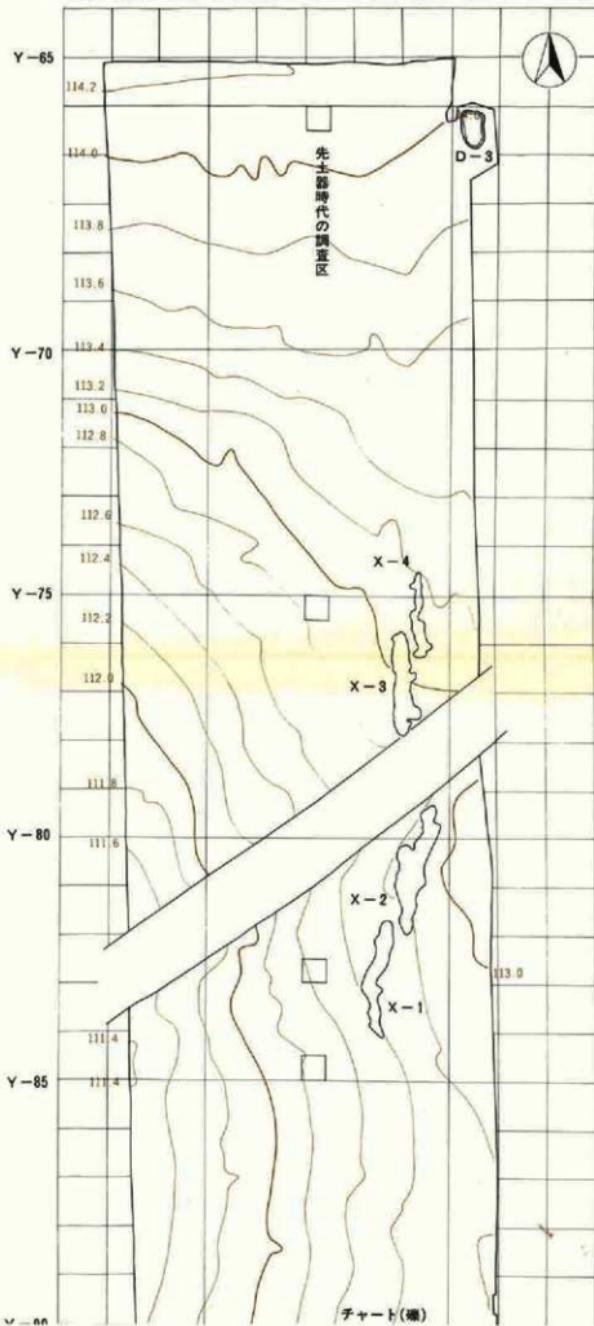
---

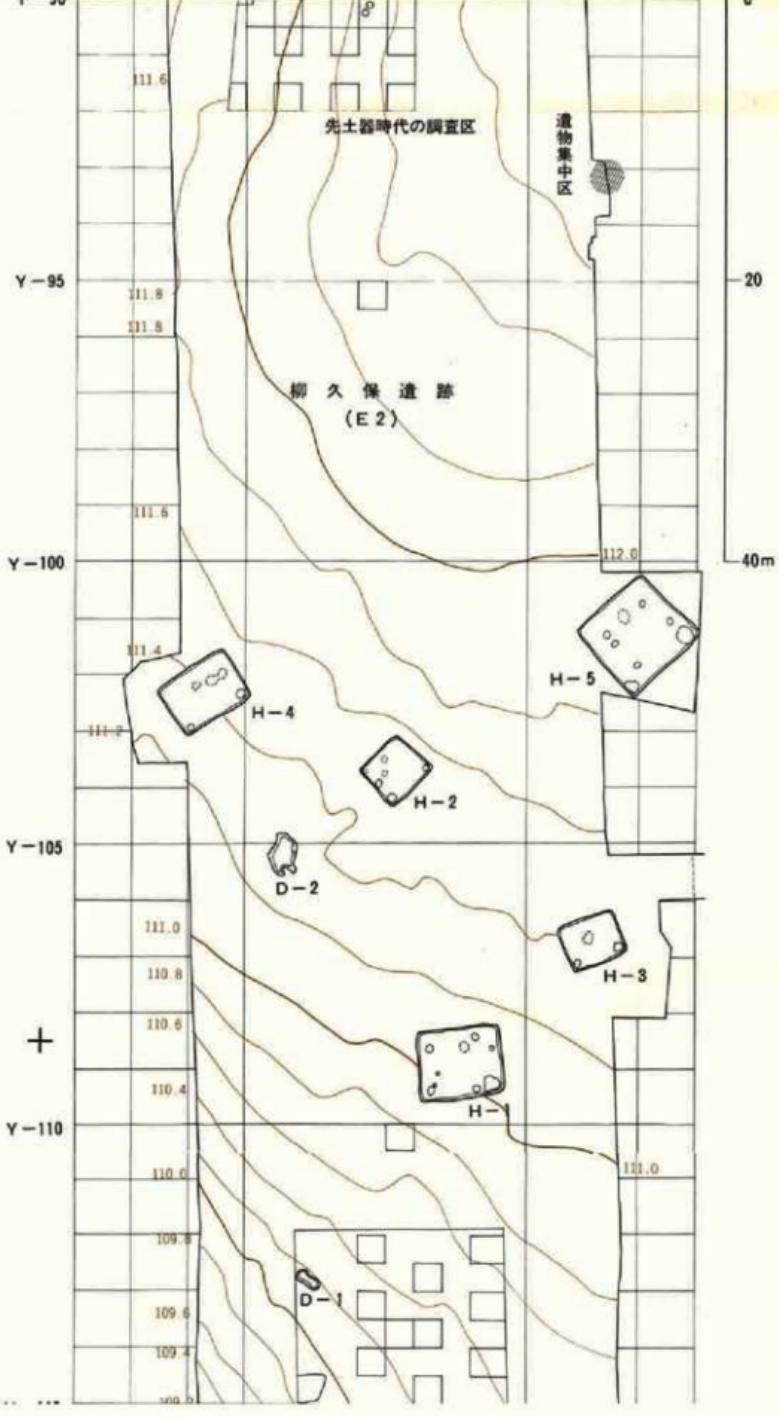


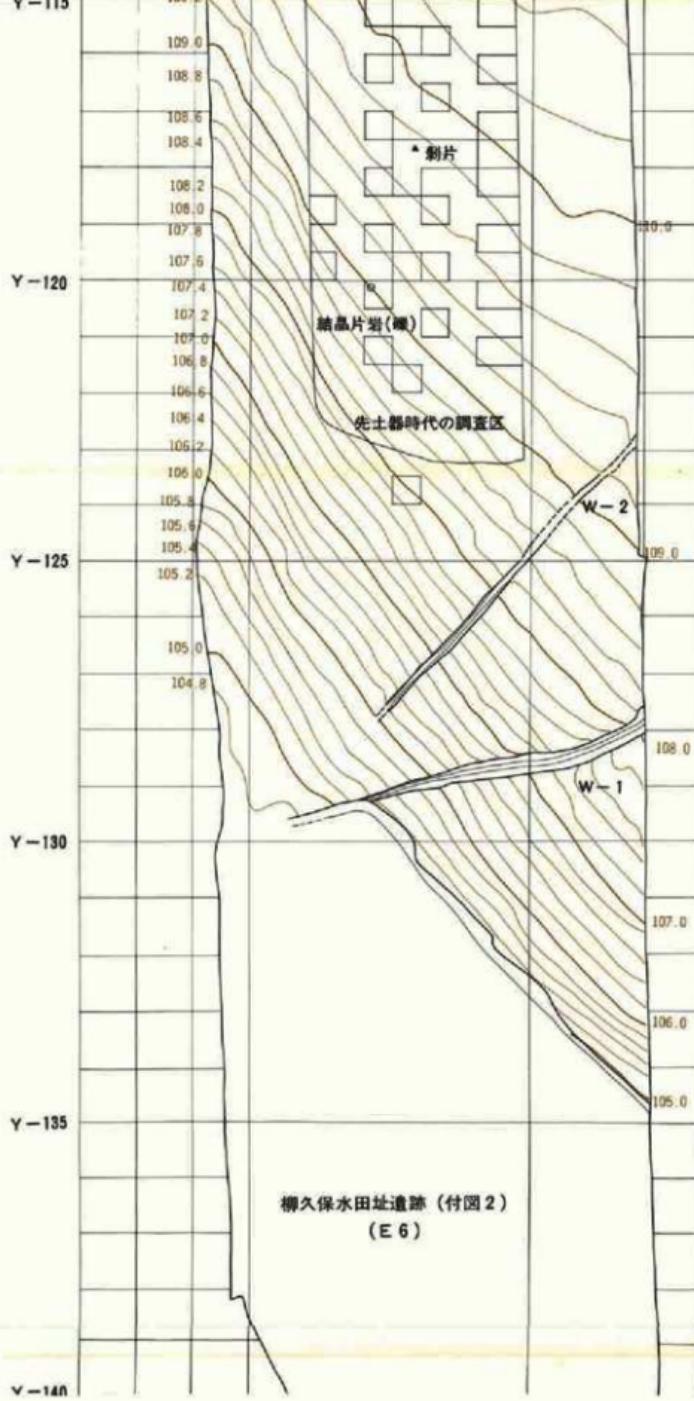


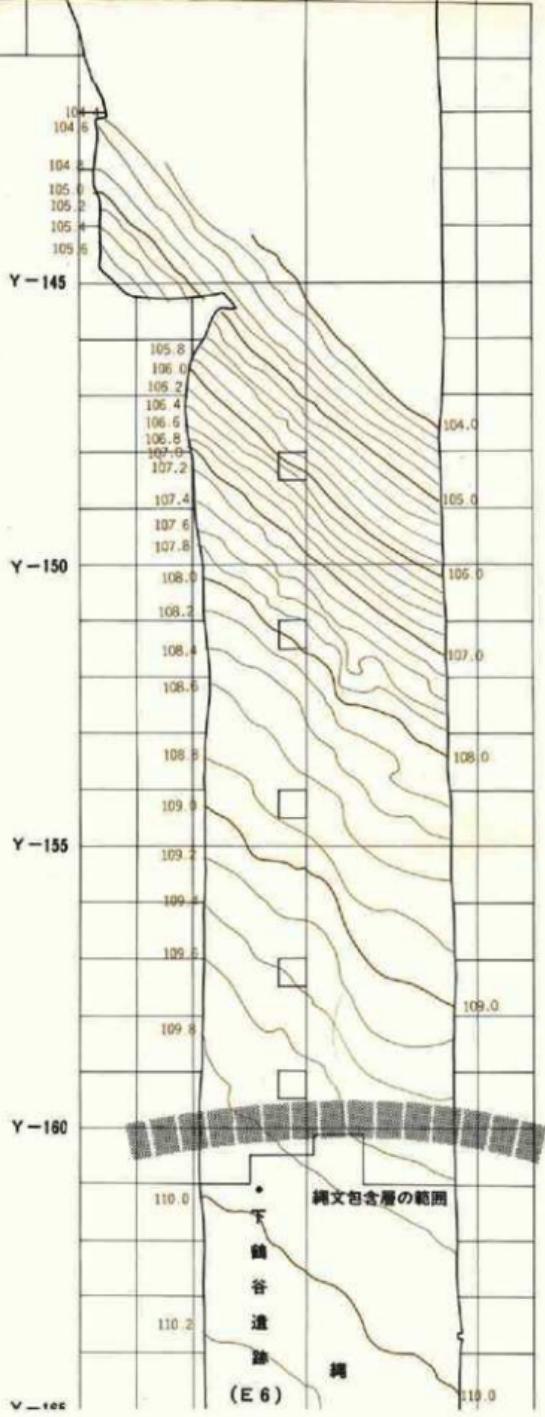


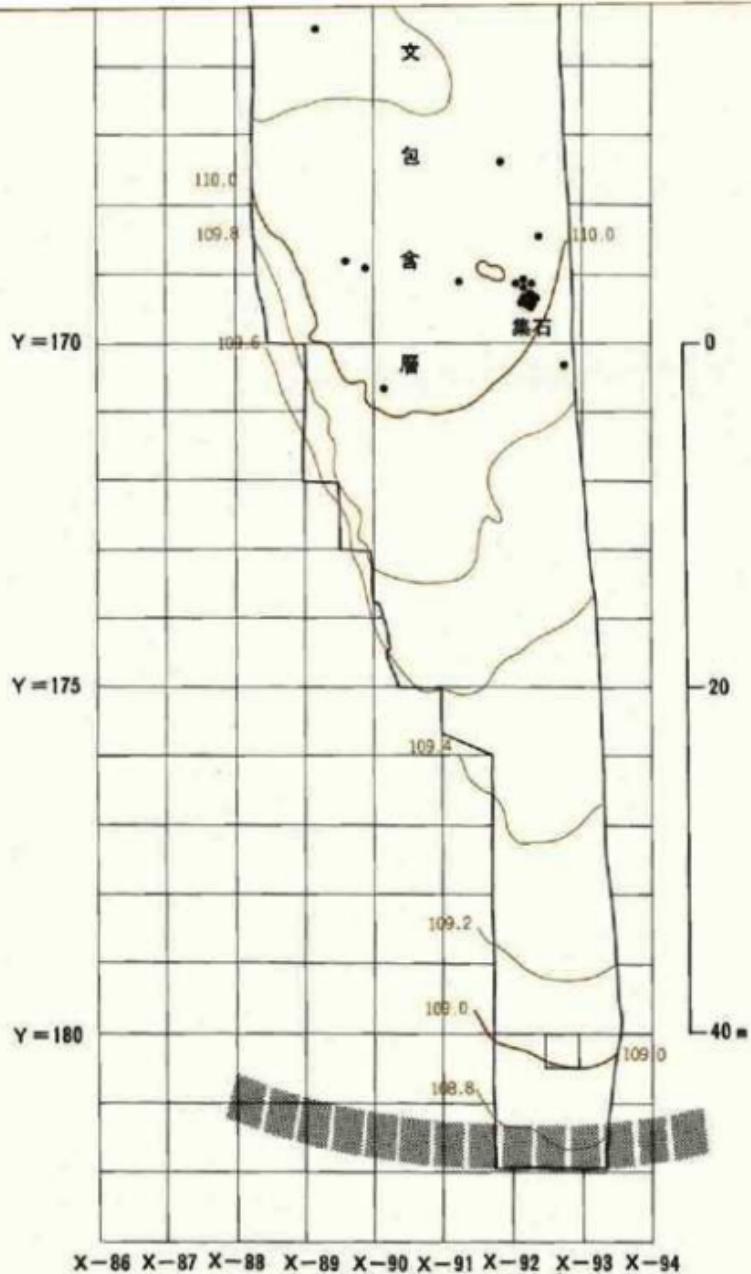
X-82 X-83 X-84 X-85 X-86 X-87 X-88 X-89 X-90 X-91 X-92 X-93





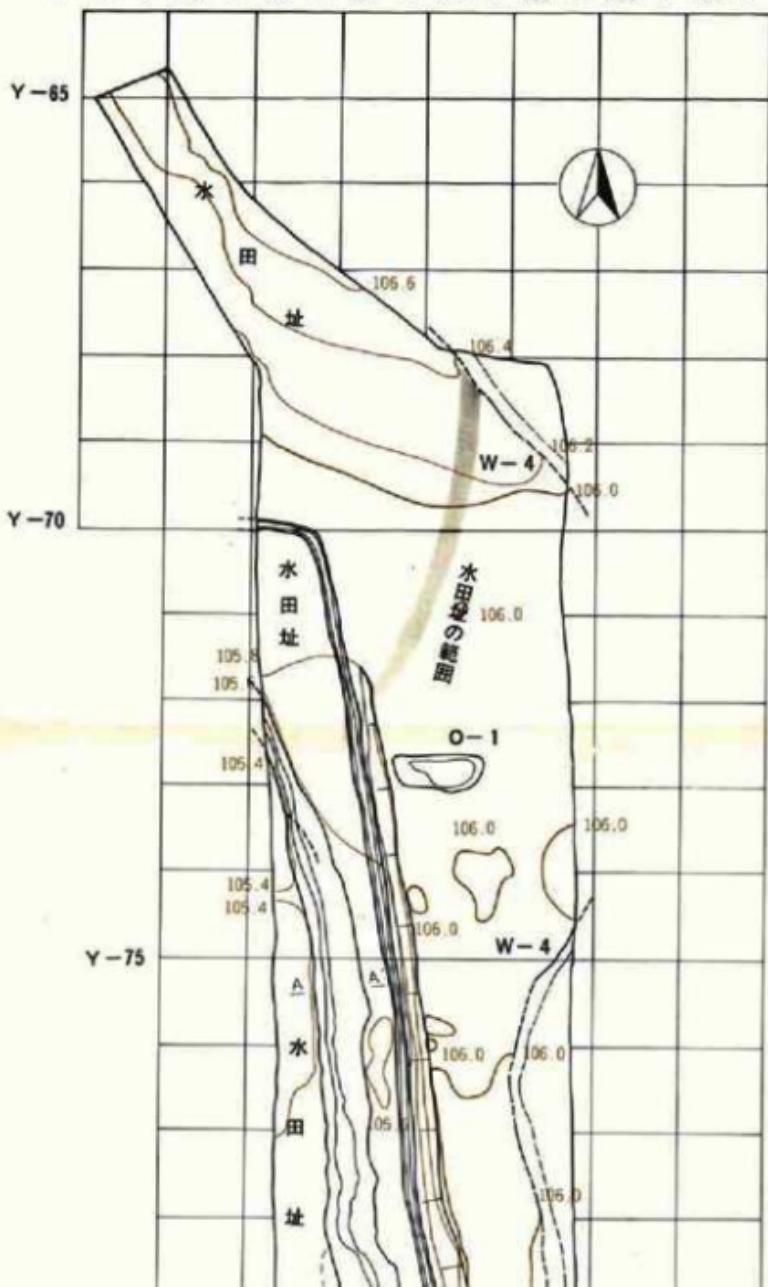


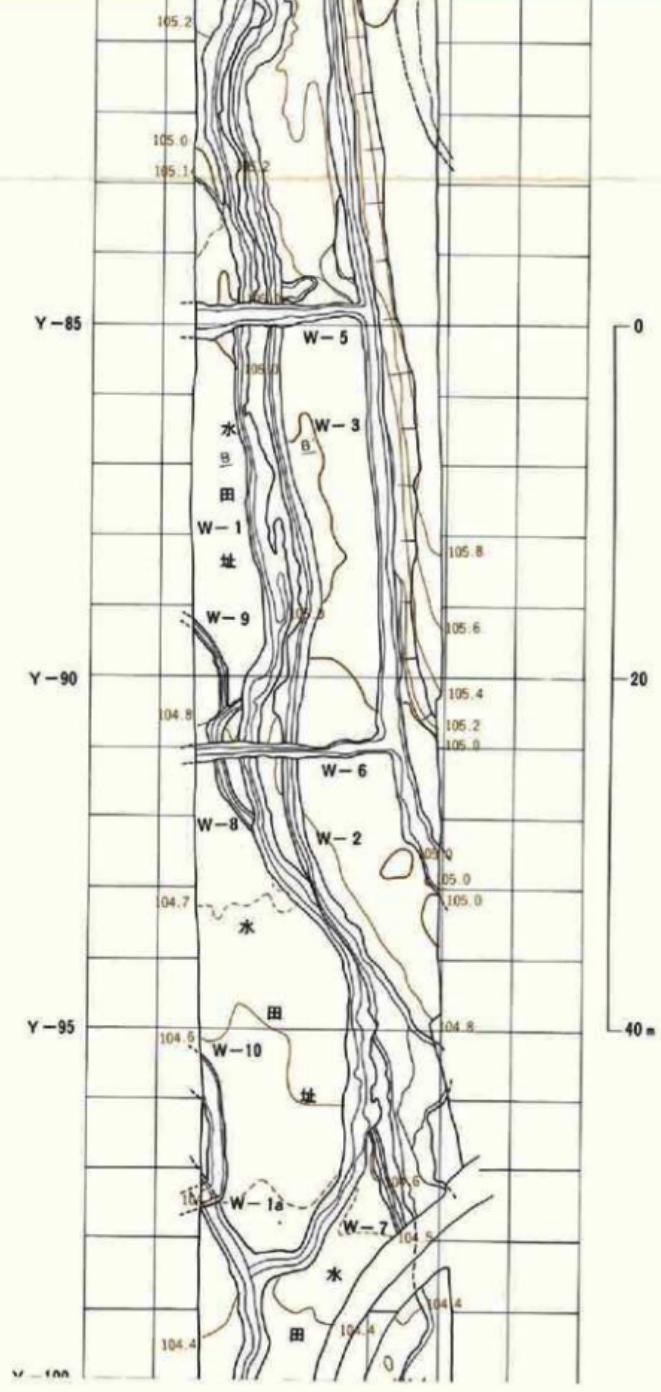


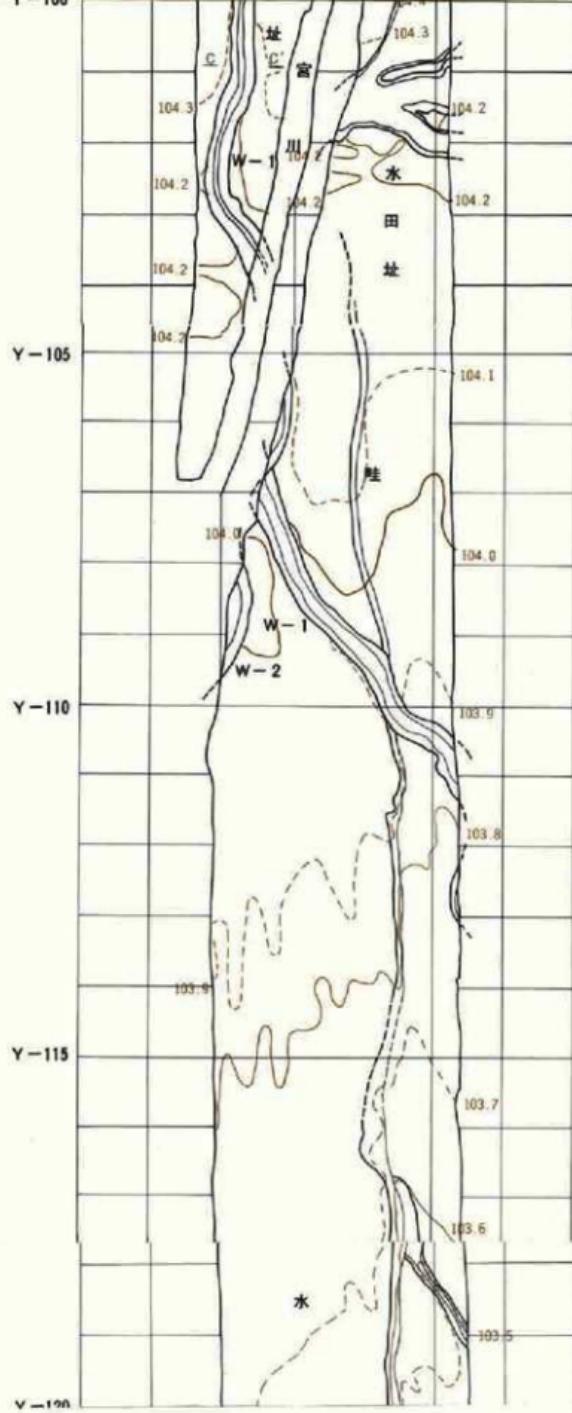


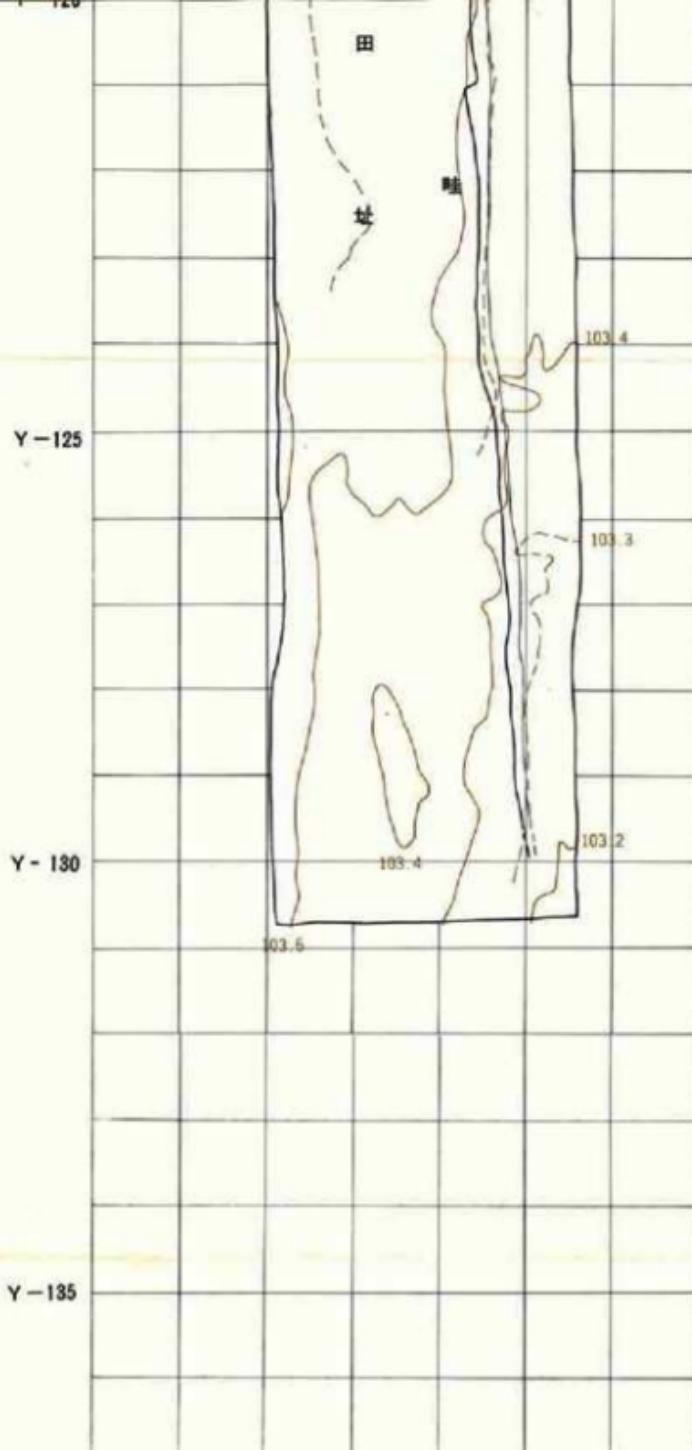
付図1 柳久保遺跡群（柳久保・柳久保水田址・下鶴谷遺跡）全体図（1/400）

X-124 X-125 X-126 X-127 X-128 X-129 X-130 X-131 X-132









Y-145

B

軽

石

層

下

ま

で

掘

-

削

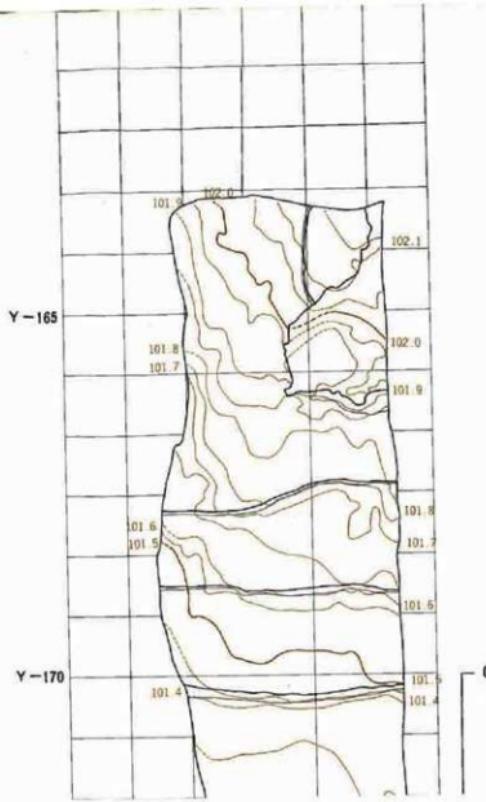
Y-150

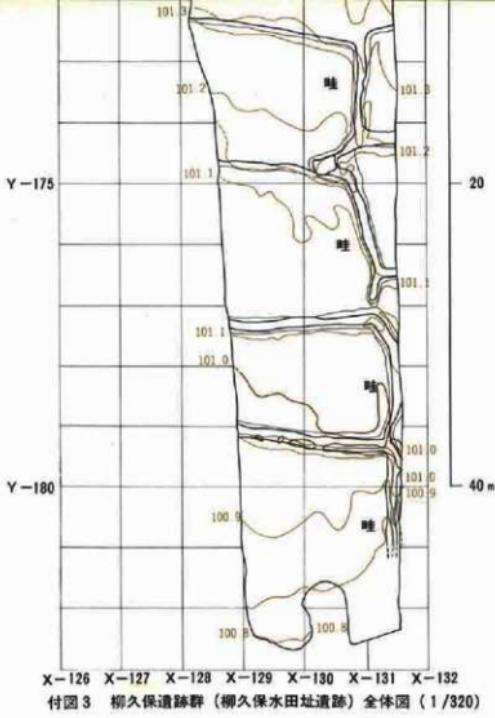
す

み

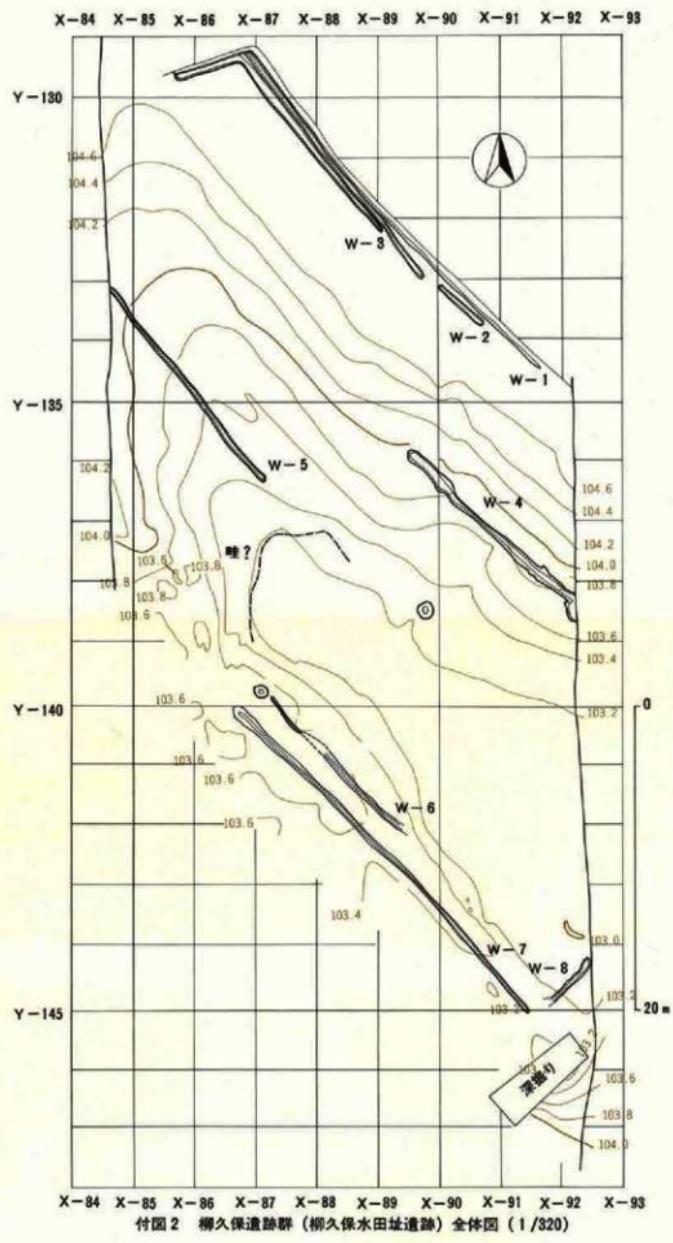
Y-155

Y-160





付図3 柳久保遺跡群(柳久保水田址遺跡)全体図(1/320)



付図2 柳久保遺跡群（柳久保水田址遺跡）全体図（1/320）